

下小鳥神戸遺跡

北 陸 新 幹 線 地 域
埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

1997

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

下小鳥神戸遺跡

北 陸 新 幹 線 地 域
埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

1997

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団



遺跡周辺航空写真

序

北陸新幹線建設事業は、本年10月1日長野行新幹線として東京—長野間に開通しました。この建設工事に伴う事前の埋蔵文化財調査は35ヵ所におよび、平成3年～7年の間、県教育委員会から委託を受け、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査しました。本書は、高崎市の北部に位置し上越新幹線との分岐地点にあたる下小鳥神戸遺跡です。平成4年～5年まで発掘調査、平成9年まで整理、報告書作成作業を実施しました。

遺跡調査の特徴は、中世から古墳時代に至る4面の文化面からなるが弥生時代後期および縄文時代の遺物が少量ながら出土しました。その中でも中世の城館跡にかかわる遺構群は、掘立柱建物群、柵、井戸などが多く見つかりました。

そうした中でも寝殿造りと推定される建物遺構は特筆にあたり、めざましい成果を上げることが出来ました。

お世話になった日本鉄道建設公団、県教育委員会、高崎市教育委員会には深甚の謝意を表し、本書の刊行が地域の歴史理解の一助となることを念じつつ序の言葉といたします。

平成9年9月


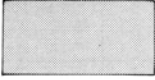
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、北陸新幹線建設工事に伴う事前調査として、平成4年度に実施した「下小鳥神戸遺跡」の発掘調査報告書である。なお、発掘調査に際しては事業名の「融通寺遺跡」として実施した。
2. 下小鳥神戸遺跡は、群馬県高崎市下小鳥町265-1・265-4・268-8・271-1・371-2・272-2・272-3・272-4・272-5・272-6・275-1・276・277・278-1・279-1・280-1・381・283-4・284-1・384-2番地にかけて所在する。小字名は「神戸」である。
3. 下小鳥神戸遺跡の発掘調査及び整理事業は、日本鉄道建設公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施した。
4. 調査対象地は、日本鉄道建設公団の起点（高崎駅）距離程4.05～4.28km地点にあたる新幹線の路線及び側道部分の合わせて5,582㎡である。また、起点距離程4.05kmは上越新幹線との分岐点にあたる。
5. 調査期間及び調査担当者
 - (1)発掘調査
期 間 平成4年4月1日～平成5年3月31日
調査担当者 女屋和志雄・谷藤保彦・小島敦子・志塚雅美・深沢敦仁・黒沢はる美・綿貫邦男
 - (2)整理事業
期 間 平成9年4月1日～平成9年9月30日
担 当 者 綿貫邦男
 - (3)事務
邊見長雄、菅野 清、近藤 功、原田恒弘、赤山容造、佐藤 勉、渡辺 建、神保侑史、斉藤俊一、小 淵 淳、真下高幸、国定 均、笠原秀樹、井上 剛、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡嶋伸昌、船津 茂、高橋定義、宮崎忠司、松下 登、大澤友治、吉田恵子、並木綾子、今井とも子、角田みずほ、松井 美智代、塩浦ひろみ、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、安藤友美
6. 報告書作成関係者
 - (1)本文執筆 綿貫邦男
 - (2)遺構写真 発掘担当者
 - (3)遺物写真 佐藤元彦
 - (4)遺物保存処理 関 邦一、土橋まり子、小材浩一、萩原妙子、高橋真樹子、田中富子、田中のぶ子
 - (5)整理補助員 高橋とし子、黒田紀子、渡部あい子、立川千栄子、堀米弘美、原 由美、伊藤幸代
7. 出土遺物、図面、写真等史資料は、一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 発掘調査及び報告書作成については、高崎市教育委員会はじめ関係各機関、及び地元関係者各位に多大な御支援、御協力をいただいた。また、多くの方々に御指導をいただき、記して謝意を表する。
(50音順、敬称略)
石井榮一、鬼形芳夫、川原秀夫、指出朋一(あかりの資料館)、志田 登、関口 修、田村 孝、中野秦裕、昼間孝志、松本浩一、茂木 涉、山下歳信
9. 本書の編集は綿貫が行った。

凡 例

1. 本書における遺構名称は、遺構種各に算用数字を用いて表す。数字は調査の進行に伴って付与してあるため、数字そのものはいかなる順位を示すものではない。
2. 本書における遺構図版には各々に比例尺を付したが、基本的には次のようである。
溝跡 1/80、掘立柱建物跡 1/80、柵柱列 1/80、竪穴状遺構・井戸・土坑 1/40、土壌墓・火葬跡 1/20、但し遺構によってはその限りではない。
3. 本書における遺物図版には各々に比例尺を付したが、基本的には次のようである。
小型土器・陶器・磁器・石器類 1/3、大型土器・陶器類 1/4、木器類 1/3、石臼・石鉢・石造物 1/4、金属製品 1/2、古銭 1/1、但し遺物によってはその限りではない。
4. 本書に使用した Screen-Tone は次のことを示す。
 灰・炭化層  焼土層
5. 本書における遺構図版中の断面基準は標高値でこれを表した。単位はmである。
6. 遺物図版中の番号は遺物写真番号と同一である。
7. 土器の色調は「標準土色張」農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修によった。
8. 土器の実測図は原則として四分画法をとった。残存量が二分の一以下の場合には180°展開して図上復元とし、中心線は点線で示した。
9. 遺物の撮影及び展開・断面は基本的に一角法で示した。
10. 本報告で使用する浅間山及び榛名山噴火による降下テフラ及び泥流堆積物の呼称については、以下のよう表記する。
As-B : 浅間山噴出 (天明三年)
F P : 榛名山二ツ岳噴出 (六世紀中頃)
F P 泥流: 榛名山二ツ岳噴火に伴う洪水堆積物
F A : 榛名山二ツ岳噴出 (六世紀初頃)
F A 泥流: 榛名山二ツ岳噴火に伴う洪水堆積物
As-C : 浅間山噴出 (四世紀初頃)

下小鳥神戸遺跡調査報告目次

序
例言
凡例
目次

第1章 発掘調査の概要	9
第1節 調査に至る経緯	10
第2節 調査の方法	11
第3節 調査の経過	12
第2章 下小鳥神戸遺跡の立地と歴史的環境	14
第1節 立地	14
第2節 歴史的環境	15
第3章 遺跡の概要	17
第1節 中世の遺構と遺物	22
1. 遺構各説	22
(1) 溝	22
(2) 掘立柱建物跡	23
(3) 柵柱列	31
(4) 竪穴状遺構	32
(5) 井戸	34
(6) 土坑	36
(7) 墓跡及び火葬跡	41
2. 出土遺物	93
第2節 歴史時代の遺構と遺物	131
1. 遺構各説	131
(1) 溝	131
(2) 水田	131
2. 出土遺物	135
第3節 古墳時代の遺構と遺物	144
1. 遺構各説	144
(1) 古墳時代後期の溝	144
(2) 古墳時代後期の水田	145
(3) 古墳時代前期の溝	146
(4) 古墳時代前期の水田	147
2. 出土遺物	147
第4節 その他の遺構と遺物	157
第4章 まとめ	160

挿 図 目 次

第1図	北陸新幹線と遺跡位置図	9	第56図	小穴出土遺物位置図	95
第2図	下小鳥神戸遺跡方眼設定図	11	第57図	1号溝出土遺物	105
第3図	下小鳥神戸遺跡基本土層図	14	第58図	1号溝出土遺物	106
第4図	周辺の遺跡	16	第59図	2号・6号溝出土遺物	107
第5図	中世全体図	18	第60図	6号・7号・8号溝出土遺物	108
第6図	歴史時代全体図	19	第61図	53号溝出土遺物	109
第7図	古墳時代後期全体図	20	第62図	53号溝・1号竪穴状遺構出土遺物	110
第8図	古墳時代前期全体図	21	第63図	小穴出土遺物	111
第9図	柵柱列位置図	31	第64図	小穴出土遺物	112
第10図	中世割付位置図	46	第65図	1号・2号・4号・6号井戸出土遺物	113
第11図	中世割付図(1)	47	第66図	6号・7号井戸出土遺物	114
第12図	中世割付図(2)	48	第67図	2号・6号井戸出土遺物(木器)	115
第13図	中世割付図(3)	49	第68図	7号井戸出土遺物(木器)	116
第14図	中世割付図(4)	50	第69図	6号・28号・29号・30号・56号土坑出土遺物	117
第15図	中世割付図(5)	51	第70図	6号・9号・10号・11号・14号土墳墓出土遺物	118
第16図	中世遺構位置図	52	第71図	小区及び表採遺物	119
第17図	1号・2号溝	53	第72図	小区及び表採遺物	120
第18図	6号・7号溝	54	第73図	小区及び表採遺物	121
第19図	8号・52号・53号・57号溝	55	第74図	出土古銭拓影	122
第20図	1号・2号・3号掘立柱建物跡	56	第75図	出土古銭拓影	123
第21図	5号・6号・7号掘立柱建物跡	57	第76図	出土古銭拓影	124
第22図	8号・9号・14号掘立柱建物跡	58	第77図	出土古銭拓影	126
第23図	4号・10号掘立柱建物跡	59	第78図	移転宅地内出土遺物	127
第24図	11号・12号掘立柱建物跡	60	第79図	移転宅地内出土遺物	128
第25図	16号・17号掘立柱建物跡	61	第80図	移転宅地内出土遺物	129
第26図	18号・19号掘立柱建物跡	62	第81図	移転宅地内出土遺物(木器)	130
第27図	20号掘立柱建物跡	63	第82図	歴史時代遺構全体図	131
第28図	21号・22号掘立柱建物跡	64	第83図	3号溝	132
第29図	24号・25C号掘立柱建物跡	65	第84図	歴史時代水田及び57区溝群	133
第30図	25A号・26号掘立柱建物跡	66	第85図	歴史時代水田	134
第31図	25B号・28号掘立柱建物跡	67	第86図	3号溝出土遺物	139
第32図	27A号掘立柱建物跡	68	第87図	包含層出土及び表採遺物	140
第33図	27B号・30号掘立柱建物跡	69	第88図	包含層出土及び表採遺物	141
第34図	31号・32号掘立柱建物跡	70	第89図	包含層出土及び表採遺物	142
第35図	33号・34号掘立柱建物跡	71	第90図	包含層出土及び表採遺物	143
第36図	36号・37号掘立柱建物跡	72	第91図	古墳時代後期小区画水田面積表示図	146
第37図	38号・40号掘立柱建物跡	73	第92図	古墳時代前期面出土遺物	147
第38図	1号・2号・3号・4号・5号・6号・7号・8号・ 9号柵柱列	74	第93図	古墳時代全体図	148
第39図	1号・2号竪穴状遺構	76	第94図	古墳時代後期小区画水田	149
第40図	3号・4号・5号竪穴状遺構	77	第95図	古墳時代前期水田	151
第41図	6号・7号竪穴状遺構・1号井戸	78	第96図	古墳時代前期・後期の水田・水路	153
第42図	2号・3号井戸	79	第97図	古墳時代後期溝跡	154
第43図	4号・5号・6号・8号井戸	80	第98図	古墳時代後期溝跡	155
第44図	7号井戸	81	第99図	古墳時代前期溝跡	156
第45図	3号・4号・5号・6号・10号・14号・15号土坑	82	第100図	倒木痕位置図	157
第46図	16号・17号・18号・19号・21号・24号・28号・29号 土坑	83	第101図	弥生・縄文時代遺物	158
第47図	30号・31号・32号・40号・41号・42号・43号土坑	84	第102図	土層堆積状況	159
第48図	44号・45号・46号・47号・48号・49号土坑	85	第103図	下小鳥神戸遺跡中世建物の変遷	161
第49図	50号・51号・52号・53号・54号・56号・57号・ 58号・59号土坑	86			
第50図	61号・62号・63号・64号・65号土坑	87			
第51図	66号・67号・68号・69号土坑	88			
第52図	70号・71号・75号土坑	89			
第53図	1号・2号・4号・5号・6号・9号土墳墓	90			
第54図	10号・11号・12号・14号・15号・16号・17号土墳墓	91			
第55図	1号・2号・3号火葬跡	92			

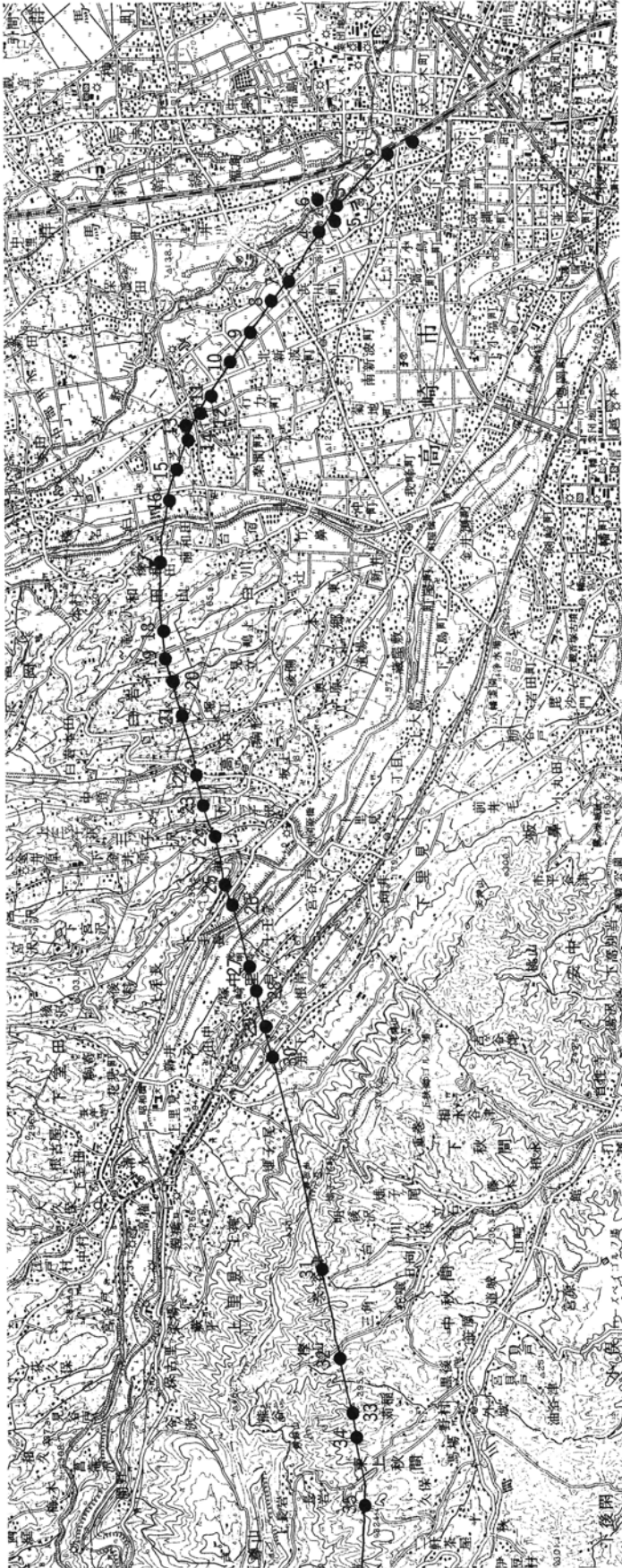
写真図版目次

PL 1	遺跡周辺航空写真	4	5号土壌墓
PL 2	調査区全景	5	6号土壌墓
PL 3	1 調査区南半	6	9号土壌墓
	2 調査区北半	7	10号土壌墓
PL 4	1 調査区南半中世面	8	11号土壌墓
	2 調査区南半中世遺構	PL14	1 12号土壌墓
PL 5	1 1号溝	2	14号土壌墓
	2 6号溝	3	15号土壌墓
	3 7号溝	4	16号土壌墓
	4 53号溝遺物出土状況	5	1号火葬跡
	5 8号・53号溝	6	1号火葬跡検出状況
	6 6号・57号溝	7	1号火葬跡石組状況
PL 6	1 2号・3号掘立柱建物跡	PL15	1 2号火葬跡
	2 5号・6号・7号掘立柱建物跡	2	2号火葬跡石組状況
	3 8号掘立柱建物跡	3	3号火葬跡
	4 9号掘立柱建物跡	4	3号火葬跡掘形
	5 4号掘立柱建物跡	5	中世小穴群及び歴史時代水田畦畔
	6 10号掘立柱建物跡	PL16	1 歴史時代水田及び溝群 (57区)
	7 11号掘立柱建物跡	2	3号溝
	8 12号掘立柱建物跡	3	3号溝埋土堆積状況
PL 7	1 14号掘立柱建物跡	4	歴史時代水田畦畔 (68区)
	2 16号掘立柱建物跡	5	歴史時代水田畦畔及び水口 (68区)
	3 17号掘立柱建物跡	PL17	1 26号溝
	4 18号掘立柱建物跡	2	26号溝
	5 19号掘立柱建物跡	3	68区古墳時代後期水田・54号・55号溝
	6 20号掘立柱建物跡	4	68区古墳時代後期水田
	7 21号掘立柱建物跡	5	68区古墳時代後期水田
	8 22号掘立柱建物跡	6	68区古墳時代後期水田
PL 8	1 24号掘立柱建物跡	7	68区古墳時代後期水田
	2 25A・B・C号掘立柱建物跡	8	68区古墳時代後期水田
	3 26号掘立柱建物跡	PL18	1 57・67区古墳時代後期水田・水路・畦畔
	4 27A・B・C号掘立柱建物跡	2	同上
	5 28号掘立柱建物跡	PL19	1 57・67区古墳時代前期水田・水路
	6 30号掘立柱建物跡	2	同上
	7 31号掘立柱建物跡	3	古墳時代前期水路 (36号溝)
	8 32号掘立柱建物跡	4	古墳時代前期水路 (32・36号溝交差部)
PL 9	1 33号掘立柱建物跡	5	34号溝
	2 34号掘立柱建物跡	PL20	1 56号溝
	3 36号掘立柱建物跡	2	68区古墳時代前期水田
	4 1号竪穴状遺構	3	34号溝
	5 4号竪穴状遺構	4	68区古墳時代前期水田
	6 5号竪穴状遺構	5	68区古墳時代前期水田畦畔
	7 7号竪穴状遺構	6	68区古墳時代後期・前期水田土層断面
PL10	1 1号井戸	PL21	1号溝出土遺物
	2 2号井戸	PL22	1号・2号溝出土遺物
	3 5号井戸	PL23	2号・6号溝出土遺物
	4 6号井戸	PL24	7号・8号・53号溝出土遺物
	5 7号井戸	PL25	53号溝・1号竪穴状遺構出土遺物
	6 8号井戸	PL26	小穴出土遺物
	7 6号土坑	PL27	小穴・1号・2号・4号・6号井戸出土遺物
	8 10号土坑	PL28	6号・7号井戸出土遺物
PL11	1 21号土坑	PL29	2号・6号・7号井戸出土遺物 (木器)
	2 24号土坑	PL30	6号・28号・29号・30号・56号土坑出土遺物
	3 6号竪穴状遺構	PL31	6号・9号・10号・11号・14号土壌墓・小区出土及び表探遺物
	4 29号土坑	PL32	小区出土及び表探遺物
	5 30号土坑	PL33	小区出土及び表探遺物
	6 30号土坑遺物出土状況	PL34	小区出土及び表探・移転宅地内出土遺物
	7 31号土坑	PL35	移転宅地内出土遺物
	8 61号土坑	PL36	移転宅地内出土遺物
PL12	1 62号土坑	PL37	移転宅地内出土遺物
	2 63号土坑	PL38	出土古銭
	3 65号土坑	PL39	出土古銭
	4 66号土坑	PL40	3号溝出土遺物
	5 67号土坑	PL41	3号溝・包含層出土及び表探遺物
	6 68号土坑	PL42	包含層出土及び表探遺物
	7 69号土坑	PL43	同上
	8 74号土坑	PL44	同上
PL13	1 1号土壌墓	PL45	包含層出土及び表探遺物・古墳・弥生・縄文時代遺物
	2 2号土壌墓	PL46	縄文時代の遺物
	3 4号土壌墓		

発掘調査報告書抄録

ふりがな	しもことりごうど							
書名	下小鳥神戸遺跡							
副書名	北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書							
シリーズ番号	第239集							
編集者名	綿貫邦男							
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 TEL0279(52)2511							
発行年月日	西暦1997年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃〃	東経 〃〃〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもことりごうど 下小鳥神戸	群馬県高崎市 下小鳥町神戸	10202		36度 21分 15秒	138度 59分 57秒	19920401～ 19930331	5,582	鉄道（北陸新 幹線）建設に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
下小鳥神戸	館址	中世	掘立柱建物跡・溝・井戸・ 墓・火葬跡・土坑		陶磁器・土器・内耳鍋・ 焼締陶器・古銭・木製品		大溝に区画さ れた館跡内部	
	生産	奈良・平安 時代	水田・溝		土師器・須恵器・灰釉陶器		集落跡に隣接 する生産地	
	生産	古墳時代 後期	水田・溝		白玉		大・小区画水 田	
	生産	古墳時代 前期	水田・溝		白玉		大区画水田	

第1章 発掘調査の概要



第1図 北陸新幹線路線と遺跡位置図

- 1 下小鳥神戸遺跡 2 大八木屋敷遺跡 3 芦田貝戸遺跡 4 御布呂遺跡 5 芦田貝戸遺跡 6 西下井出遺跡 7 餅井貝戸遺跡 8 浜川館遺跡
- 9 高木屋敷遺跡 10 浜川長町遺跡 11 行力春名遺跡 12 下芝清水遺跡 13 下芝五反田 I 遺跡 14 下芝五反田 II 遺跡 15 下芝五反田 III 遺跡
- 16 下芝五反田 IV 遺跡 17 和田山古墳群遺跡 18 白川傘松遺跡 19 白川笹塚遺跡 20 白岩浦久保遺跡 21 白岩民部遺跡 22 高浜広神遺跡
- 23 高浜向原遺跡 24 三ツ子沢中遺跡 25 神戸宮山遺跡 26 神戸岩下遺跡 27 中里見中川遺跡 28 泉福寺古墳群遺跡 29 中里見原遺跡
- 30 上里見井ノ下遺跡 31 中秋間甲木ノ巣谷津 I 遺跡 32 中秋間中島遺跡 33 東上秋間稲貝戸遺跡 34 東上秋間笹田遺跡 35 東上秋間神水遺跡

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

北陸新幹線の建設は、全国新幹線鉄道設備法（昭和45年）に基づいて、昭和47年に基本計画が決定された。昭和57年には、群馬県高崎市から石川県小松市を結ぶ総延長373kmの建設経路の概要が公表された。群馬県内では、高崎－軽井沢間42.1kmで高崎市・箕郷町・榛名町・倉渕村・安中市・松井田町が通過経路となっている。

群馬県における文化財調査は新幹線ルート公表に先立ち、昭和55年には建設計画地域内の分布調査が県教育委員会あてに日本鉄道建設公団東京支社より依頼されたことに始まる。昭和56年、調査結果は「北陸新幹線地域環境調査報告書（文化財）」としてまとめられ、埋蔵文化財包蔵地をはじめとする35ヶ所の文化財が対象である県西平野部から丘陵地帯で確認・報告された。（第1図）

建設ルート公表後、関係市町より駅新設の要望があり、昭和61年、新安中駅設置等に伴って環境評価報告書案が提出された。同報告書による11ヶ所の文化財保護保存については関係機関と協議して設置することが示された。この報告書案に対してトンネル掘削の土捨場・工事用道路・工事用施設についても分布調査の実施など、路線と同様な設置を講じるよう県知事意見書は求めた。

平成元年、日本鉄道建設公団と県教育委員会によって文化財に関する協議が始まり、公団高崎建設局と文化財保護課との調整会議において、

- (1)発掘に関しては、日本鉄道建設公団と文化財保護委員会が昭和41年に取り交わした覚書に基づくこと。
 - (2)埋蔵文化財の重要度・規模等に応じた調査体制を確保すること。
 - (3)今後、沿線の分布調査を実施すること。
 - (4)発掘調査は、公団と県教育委員会が委託契約を結び、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団と再委託して実施すること。
 - (5)公団と県教育委員会との協定書は、発掘調査と整理事業について各々別途に結ぶこと。
- 等が協議された。

平成2年、県教育委員会は北陸新幹線建設予定地域内の埋蔵文化財調査を実施し、「北陸新幹線（群馬県内）地域埋蔵文化財一覧表（付地図）」を公団高崎建設局長あてに回答した。同じ年、日本鉄道建設公団高崎建設局長と県教育委員会教育長との間で、発掘対象24遺跡とし、調査期間・整理事業・委託契約方法・調査経費等に関する「北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の実施に関する協定書」が締結された。翌平成3年晩冬の2月、北陸新幹線関連で最初の調査となる行力榛名社遺跡の発掘が開始された。

下小鳥神戸遺跡は、北陸新幹線へ建設工事高崎起点の最初の遺跡である。高崎駅よりおよそ4km上越新幹線と併走する北陸新幹線は高崎市下小鳥町が分岐点となり、大きく西へ進行方向を変えるが、本遺跡はまさにこの分岐点にあたる。市道0238号線を境に北側には大八木屋敷遺跡が続き、また東側は昭和50年から昭和58年にかけて三次の調査が行われた上越新幹線融通寺遺跡と接している。このため、両遺跡で検出された諸遺構との関連が注目されていた。とくに融通寺遺跡からは300軒を越える奈良・平安時代の竪穴住居群が知られており、本遺跡にあっても当該期の居住空間として遺跡の性格を想定していた。しかし、調査では古墳から歴史時代にかけては水田跡が、また中世に至り、多数の掘立柱建物跡をもつ中世館址が形成され、調査前の予想とは異なった遺跡となった。発掘調査は平成4年4月1日より開始し、平成5年3月31日をもって終了した。

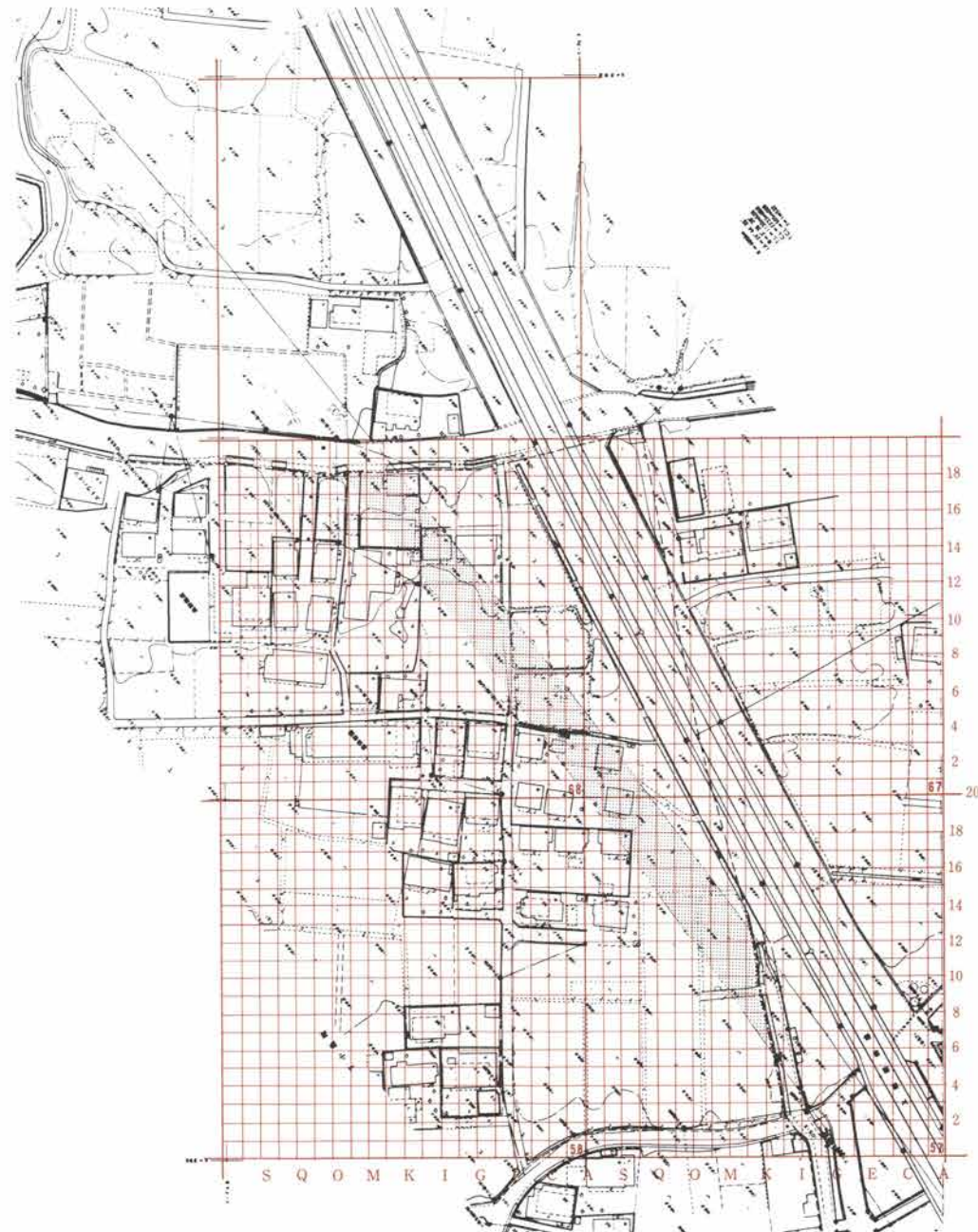
第2節 調査の方法

北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査対象地に対し、国土座標に基づき統一した区画設定する方法を用いた。これは調査対象全遺跡の地点が地図上で特定できるためである。

区画設定は、北陸新幹線の建設工事が高崎駅を起点とすることから、高崎駅南東の国土座標(X = +35,000.0・Y = -73,000.0m)の座標値をもって区画起点とした。区画は1km四方を「地区」とし高崎から安中市方面に向かう路線調査対象地域に沿って順次25ヶ所に設定した。各々の「地区」は100m方眼をもって「区」とし、南東隅を起点に東から西を優先に南から北の順に1から100区まで設定した。さらに「区」は400等分して一辺5mの方眼を配した。調査においては、この方眼が最小で最も基本となる単位である。5m方眼は「区」と同様に南東隅を起点として、X軸に東から西へ Alphabet を用いAからTまでを、Y軸には数字で南から北へ1から20までを付した。各方眼は南東隅の交点により、A-1・T-20などと称した。下小鳥神戸遺跡の範囲は「6地区」にあり、「区」では57・58・67・68の4つの区にまたがる。5m方眼を呼称する場合は「6

-68-A-1」などと表現される。

発掘調査に際して、表土掘削には掘削重機（バックフォア）を用い、遺構検出のための精査は人力で行った。また本遺跡は中世から古墳時代に至るまでおよそ4つの文化層からなり、各文化層間に介在する層厚に応じて、各時代の遺構検出には、掘削重機と人力を使い分けた。遺構名称については「区」別・文化層別などの名称は用いず、各遺構種ごとに数字と遺構種名を付した。例えば、1号井戸・2号土壌墓である。



第2図 下小鳥神戸遺跡方眼設定図

第3節 調査の経過

下小鳥神戸遺跡の調査は平成4年4月1日から平成5年3月31日まで1年間にわたって実施された。調査対象面積は5,582㎡である。北陸新幹線が上越新幹線と分かれる分岐点にあたり、北陸新幹線建設関連の遺跡としては最南端に位置する。本遺跡の東縁は上越新幹線の建設に伴って調査された融通寺遺跡が沿い、北には本遺跡発掘調査と同事業の大八木屋敷遺跡が平成3年度より継続して調査が行われていた。

本遺跡の調査に際しては、上記両遺跡の調査結果・所見がおおいに参考になると考えていた。大八木屋敷遺跡はその名称が示すように、中世の居館跡として周知の遺跡であり、本遺跡と接しており位置的には深い関わりがあると考えられていた。しかし地勢的には大八木屋敷遺跡の南縁は井野川あるいは早瀬川の旧河道を示すような低地となっており、本遺跡とは分断されている。このため、遺跡の内容や性格については、より融通寺遺跡に近くむしろその延長遺跡とした見方が有力である。すなわち、融通寺遺跡で検出された300余軒の歴史時代住居群や大八木屋敷遺跡の台地部分においても歴史時代の集落・官衛が中心となるため本遺跡もまた、主には同時代的居住空間であろうとする見解であった。

本遺跡の発掘調査が進むにつれて、上述した予測とはまったく異なる結果となった。融通寺遺跡の南半で群在していた住居群は、本遺跡では1軒の住居跡も検出されず、歴史時代から古墳時代にかけては、水田跡を中心とした生産空間、あるいは閑地となっている。また、調査区の北半には中世に属する多数の掘立柱群・井戸・墓跡などが検出され、館跡を形成していることが判明した。大八木屋敷遺跡との関連が大きく浮上してきたが、館の形態・形状や位置から存続期間など年代的な検討が必要となった。

平成4年下小鳥神戸遺跡発掘調査抄録

- 4月 調査事務所等施設建設、発掘機材等搬入、調査準備。調査は中旬頃に着手。4月16日、調査開始。調査対象地には移動予定の民家・現有の水路・生活道があり調査の実施にあたっては、これを考慮して57区と67・68区の南端までの範囲を表土掘削する。旧地形は中央部付近で東西に段差があり、西側が低い。これによって、後世の削平・盛土の程度が異なり、遺構検出面が東半ではFP層、西半はAs-B軽石層である。検出遺構は中世の溝・井戸・墓・柱穴、歴史時代は溝・水田など多種にわたる。
- 5月 57区南半でFP及びFAの堆積から水田・集落などの検出が見込まれたが確認できず。北半はAs-B軽石が数センチの層厚で残り、軽石下の水田畦跡がかろうじて認められるが検出に困難をきたす。中世柱穴は建物跡・柱列となることを確認。中世の井戸・墓は切り合い関係から、居住空間から墓域へ変遷したと考えられる。68区を東西に分ける現生活道の迂回路を東に移動するため東縁を選考調査で表土掘削開始。
- 6月 68区東部（迂回路部分）As-B軽石・FAは残らず。中世小穴群・竪穴状遺構を調査。小穴群は掘立柱建物となる可能性があり、小穴の組み合わせを行う。当地区北側でFA下水田確認。
- 7月 68区東部FA下水田の耕土（As-C軽石混土層）除去。畦状の高まり検出。As-C軽石下水田検出。57区中央部でAs-C軽石混土が弧を描き帯状に検出。外縁にはこれに沿って溝が巡る。帯状の高まりの内側は一段低くFAの薄層が堆積する。FA除去の結果、小区画されないFA下水田及び畦畔・水路と判明。68区東部へ迂回路移設。現生活道を含む68区西側表土掘削開始。
- 8月 68区西側は多数の中世小穴群・井戸・墓跡・土坑を確認。検出面はAs-B軽石層上。小穴群はかなりの掘立柱建物を形成すると考えられる。As-B軽石層上での柱穴検出は困難を極め、部分的にはAs-B軽石下水田畦畔が検出されていた。掘立柱建物をより明確に認定するためAs-B軽石を除去して

検出。1・2・6・7号井戸は深さ3m以上の予測から掘削委託を計画。

- 9月 掘立柱建物跡実測開始。総数40余棟を確認。1・2・6・7号井戸は深さ3m以上と考えられ、安全を期すため委託掘削。6号井戸より獣骨出土。狸の頭蓋と鑑定。中世の狸骨は希少。下旬、掘立柱建物跡ほぼ全容が確定し、バルーンによる空中撮影実施。
- 10月 掘立柱建物跡実測継続。個別写真撮影をハイライザーで実施。建物跡実測・写真終了のものから、柱穴の断割調査を開始。68区As-B軽石下水田検出作業。57区・58区井野川泥流面倒木痕約30痕の調査。
- 11月 68区柱穴断割調査終了部分よりFA面検出作業を開始。同区北部に畦畔を確認。FA下水田検出作業。57・58区調査終了。
- 12月 68区北西部の民家移転。掘削に入る。宅地化による攪乱・削平著しく軽石・火山灰等は残らず遺構の遺存は望めない。中世小穴群の調査終了。

平成5年

- 1月 68区最後に残った民家移転終了。68区南半はFA下水田検出されず、下位層の粘性黒色土に至る。68区北西部（道路・畑地）表土掘削。FA下水田検出。下位よりAs-C軽石混土層下水田検出。
- 2月 2月井野川泥流面検出のため掘削。多数の倒木痕検出。（総数84痕）
- 3月 68区北西部調査終了。3月23日をもって現場での発掘調査終了。

第2章 下小鳥神戸遺跡の立地と歴史的環境

第1節 立地

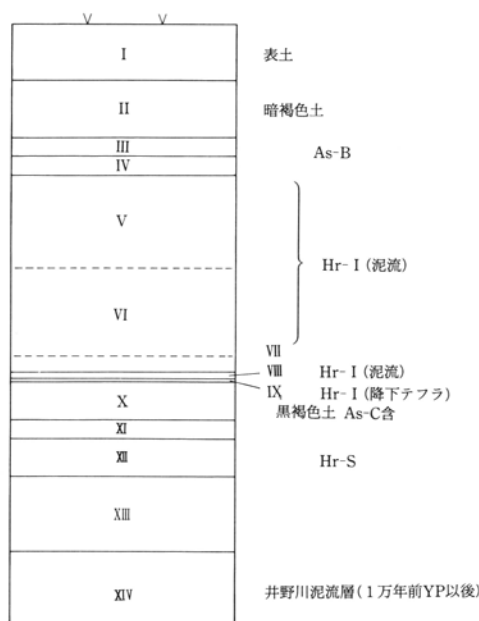
下小鳥神戸遺跡は高崎市下小鳥町字神戸に所在する。高崎市の北方約4kmに位置し、北に望む榛名山に向かい耕地が扇状に広がる田園地帯の要にあたる景観位置にある。周辺は古来から農村地帯であったが、近年では急激な宅地化が進み地形とは逆に遺跡東縁は狭少な水路を地境となし、昭和50年から58年にかけて上越新幹線建設に伴って調査がなされた融通寺遺跡がある。(以後上越融通寺)

下小鳥神戸遺跡が立地する地域は大きくは「前橋台地」と呼ばれる共積層台地で、標高はおよそ107mである。前橋台地は浅間山起源の山体崩落によって形成されたと考えられており、その基盤層は火山を起源とする堆積物でいわゆる「前橋泥流」の堆積面である。台地中央は、赤城・榛名山の両山麓の間を南へ流れている利根川によって分けられる。前橋泥流による台地形成後、利根川右岸の榛名山東南麓に広がる相馬ヶ原扇状地である。下小鳥神戸遺跡はこの相馬ヶ原扇状地形がその傾斜を減じて、扇状地形と台地地形の変換地帯にあたる。

榛名山東南麓扇状地にはこれを源として、榛名白川・井野川・唐沢川など中小の河川が東西方向へ流れ下る。これらの河川のうち井野川・唐沢川・早瀬川が大八木町北方で合流する。下小鳥神戸遺跡は三河川合流点近く右岸にあり、北に接する大八木屋敷遺跡とは、井野川あるいは早瀬川の氾濫によると考えられる谷地地形で画されている。微地形的には、上記河川による自然堤防とこれに伴う後背湿地として見られよう。上越融通寺遺跡では奈良時代後半より竪穴住居跡を中心とする居住空間としての土地利用が始まっていることから自然堤防上の占地である。調査の所見では、西方に向かい地形が僅かながら低くなり遺構の密度が薄くなっている結果となっている。本遺跡の調査では住居などの生活跡はなく、水田や数条の溝が検出され、生産跡ないしは閑地的空間の状況を呈している。また、堆積土層の状態からも、粘性の黒色土の形成が見られ、自然堤防とそれに続く後背湿地の縁辺地形的様相が窺われる。

南北に延びる調査区では、古墳時代以降の土層堆積状況に南半部・北半部両者に若干の相違が見られる。南半部においては、FAの上位層は薄層を介在し、FP二次堆積層と複数層のFP泥流層が形成される。北半部

は、FP泥流層の顕著な成層はなく有機土壌化した暗褐色土がある。この直上には降下単位を示すAs-B層が堆積し南・北の大きな相違となっている。検出の遺構より、南半部は数条の溝跡での近・現代にほど近くまで閑地的な相様である。北半部はFP泥流堆積後、おそくとも平安期には水田として開作され、中世に至っては居住地域となり、その都度かなりの土地改変が行われたであろう。調査区における堆積層の違いは土地利用の差によって生じたものである。(第102図)



第3図 下小鳥神戸遺跡基本土層

第2節 歴史的環境

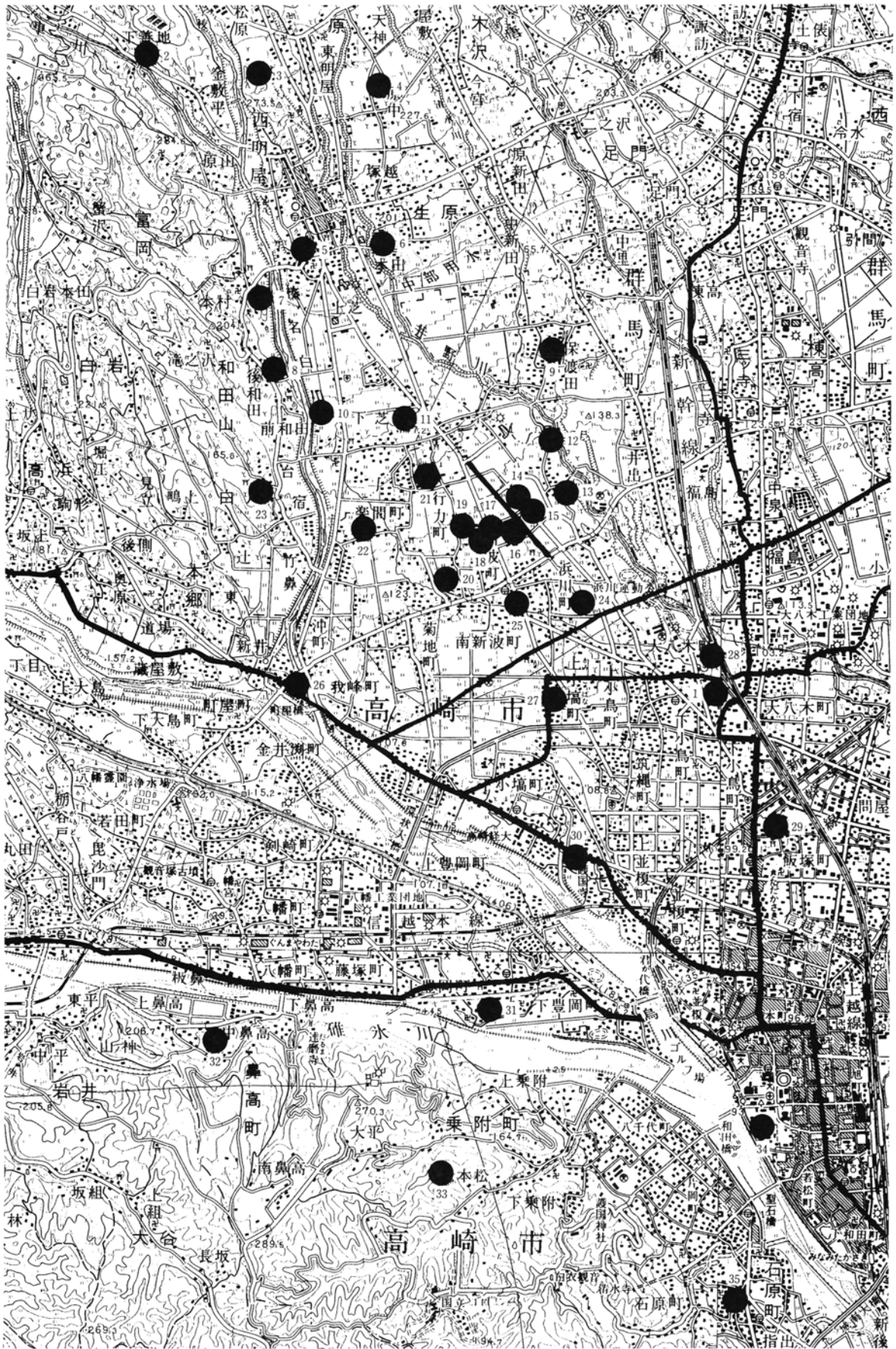
下小鳥神戸遺跡の位置する高崎市域北部は井野川流域に弥生時代以来、古墳・歴史時代と水田を中心とする生産跡が知られている。中でも古墳時代の水田跡は、浅間山噴火によるAs-C軽石の降下や榛名山噴火のFA・FP及びおびただしい泥流によって、その堆積層下には明瞭な痕跡を残している。本遺跡においても、浅間山As-B軽石下・榛名山FA下水田跡をはじめ、浅間山As-C軽石に埋没した溝など生産跡のかかわる遺構が検出されている。下小鳥神戸遺跡と同様に北陸新幹線建設に伴って発掘調査された諸遺跡、特に浜川地区においては、中世から古墳時代に至る3面ないしは4面に及ぶ水田跡を中心とした生産跡の良好な調査結果が得られている。本遺跡では中世期が最も遺構の遺存状況が良好で密度濃く残されていた。

高崎市浜川町を中心とした市域北部には多くの中世居館・砦跡が知られている。南北朝の動乱の中、上野国には一元的に領国支配をなし得る勢力はなく、中小の在地武士は国人一揆を形成してその存続を計ったとされる。常陸太田城・武蔵鉢形城とともに関東三古城に数えられる箕輪城（群馬郡箕輪町所在）は、これら西上州在地武士団の中で頭角を現した長野氏の居城である。長野氏は出自を在原業平を祖と伝えるが、上野国府に関わる在庁官人に連なっていると考えられている。長野氏一族は浜川の地を本拠とし、浜川町を中心とした周辺域には数々の居館が地名で、いくつかは地割地形として現在に残されている。また、長野氏菩提と伝わる浜川町来迎寺には長野氏代々の墓石があり、浜川地域を長野氏の本拠地として位置付けている。

中世館・砦跡は本遺跡北西方の浜川地域に多く、井野川と早瀬川に挟まれた比較的狭少な範囲に集中する。主な館跡には大八木屋敷・寺ノ内館・北新波の砦・矢島館跡・浜川館（館遺跡）・浜川北遺跡・高田屋敷・与平屋敷・乙業館（道場遺跡）などがある。また北爪砦・長野屋敷・行力上屋敷・中屋敷・下屋敷等の存在が伝えられる。これら館跡の多くは和田城（のちの高崎城）から箕輪城に通ずるいわゆる箕輪道沿線にあり、箕輪城を頂点とするこれら館・砦跡は長野氏の発生とその後の展開にとって重要な遺跡群となっている。

遺跡周辺中世城館跡

1. 下小鳥神戸遺跡
2. 下善地の内出遺跡
3. 箕輪城遺跡
4. 原中の内出遺跡
5. 下田屋敷遺跡
6. 生原の内出遺跡
7. 富田の砦遺跡
8. 和田山領遺跡
9. 保渡田城遺跡
10. 青柳屋敷遺跡
11. 下芝の砦遺跡
12. 乙業館遺跡
13. 浜川館遺跡
14. 与平屋敷遺跡
15. 高田屋敷遺跡
16. 矢島館遺跡
17. 長町屋敷遺跡
18. 行力下屋敷遺跡
19. 行力中屋敷遺跡
20. 北新波の砦遺跡
21. 行力上屋敷遺跡
22. 井野屋敷遺跡
23. 白川の砦遺跡
24. 寺ノ内館遺跡
25. 北爪の砦遺跡
26. 住吉城遺跡
27. 八木屋敷遺跡
28. 大八木屋敷遺跡
29. 上飯塚城遺跡
30. 並榎城遺跡
31. 峰岸屋敷遺跡
32. 鼻高の砦遺跡
33. 寺尾上城遺跡
34. 和田城遺跡
35. 石原屋敷遺跡



第4図 周辺の遺跡(中世関連)

第3章 遺跡の概要

検出された遺構は土層堆積の層序に従い中世から古墳時代に至る4つの文化面として調査した。また、歴史時代の遺物包含層として古墳時代後半に比定されているEP泥流層榛名山二ツ岳噴火起源の泥流物洪水堆積層の二次堆積層。As-C（浅間C軽石）混入土層中には縄文時代石器・土器類や弥生後期土器が少量ながら出土している。

中世は、調査範囲の2/3北側に城館跡に係わる遺構群が検出された。とくに小穴の集中分布が著しく、検出数500余穴のうち、認定した建物跡あるいは構造物の量には過不足があろう。現状では掘立柱建物跡38棟、柵柱列11条である。その他竪穴状遺構7基、井戸8基、土坑50基、溝8条、土坑墓13基（うち1基は近世）、火葬跡3基、小穴481穴である。掘立柱建物跡は、遺跡中央部を東西走する大溝を境に南北二分される。掘立柱建物跡の規模・形態からすれば、城館の主郭部分は溝の北側にあり、この大溝は城館跡の南面を区切る堀跡であろう。

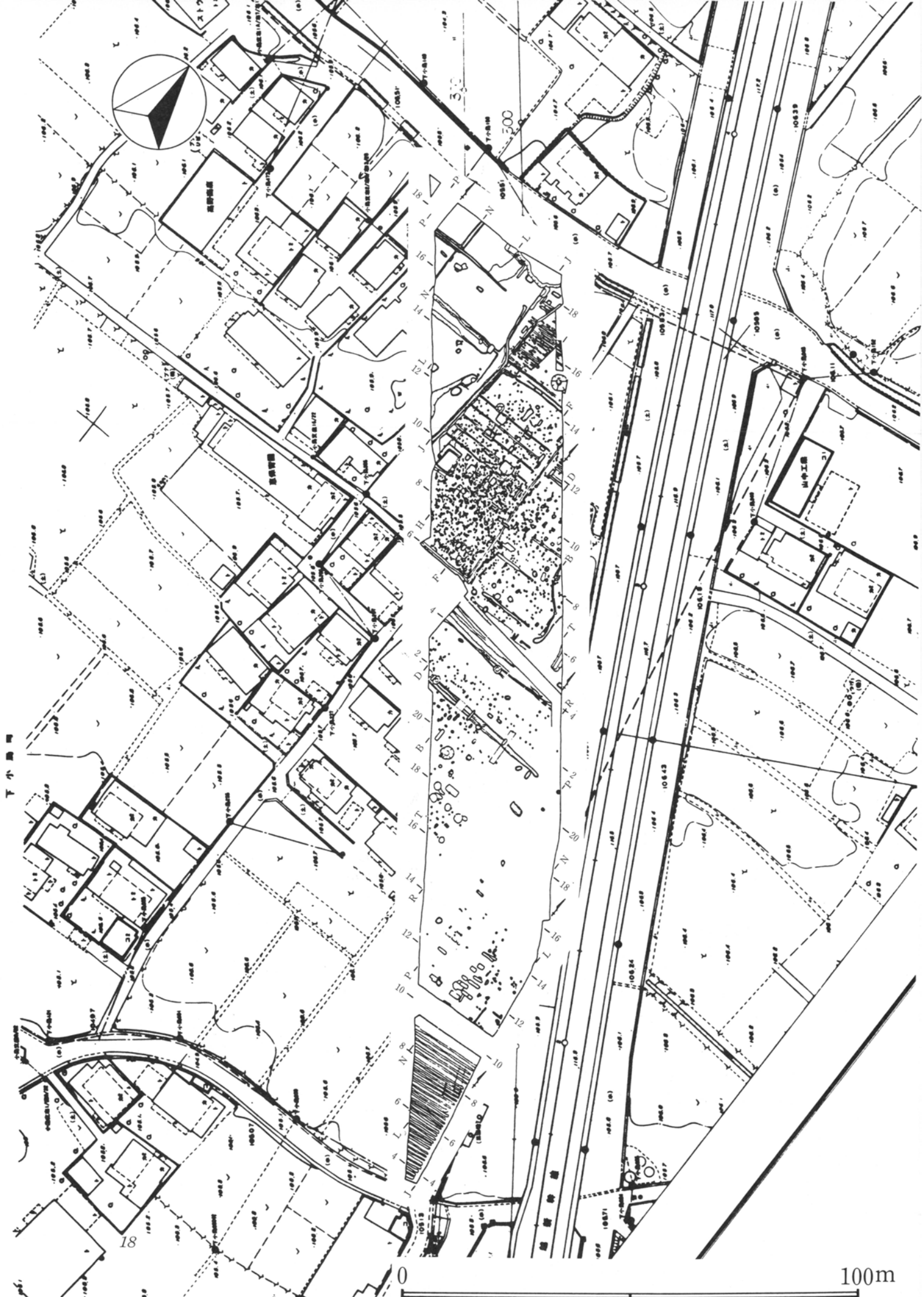
奈良・平安時代の遺構は、1108年（天仁元年）に発生したと考えられている、浅間山噴火による降下火山灰As-B軽石層下より検出された水田跡がある。水田跡は、中世館跡の造営や近・現代に施された削平等の改変で依存状態は不良である。検出は調査区の中央部で、57区と67・68区のほぼ中世館跡の範囲内に限定される。その他当該期の遺構には溝跡がある。57区西側の数条の溝は浅間As-B軽石で埋まり、水田跡と同時あるいは近接した時期と考えられる。水田に対する水路であろうか。浅間As-B軽石と直接関わらない3号溝は砂・小礫層で埋まり、水田跡以前の所産であろう。出土遺物には土師器・須恵器などがある。土器類から窺われる年代は大旨八世期前半である。当遺跡では当該期の遺構は他に検出されていないことから、東側に近接する上越新幹線融通寺遺跡にその本源がある溝であろう。

古墳時代では、調査区全体にFA（榛名山二ツ岳降下火山灰層）が見られる直下に小区画水田と弧状に巡る大畦・水路を伴う水田が検出された。FA層の降下は6世紀前半に比定されているもので、直下より検出された水田跡の耕土は4世紀初頭に比定されている浅間As-C軽石の混土層となっている。同じく6世紀中頃になる、FP（榛名山二ツ岳降下火山灰）層の堆積も主に調査区南側に分布していたが、この直下からは明確な遺構を検出していない。

先の弧状に巡る大畦・水路を伴う水田跡については、やや軌道を違えて、浅間As-C軽石粒に埋もれた溝が存在しており、As-C軽石混土を耕土とするFA直下の水田はAs-C軽石降下以前から継続して耕作されていたことが知れる。また、この溝から分支・分流する数条の溝も検出され、As-C軽石降下以前の水田開削がなされた蓋然性を示している。しかし弥生時代後期と考えられる土器片の検出もあるが、その数量は数点のもので遺構の初源が弥生時代に上限を示める確証は得られていない。

なお古墳時代の水田跡および関連遺構については前期・後期のように記述したが、これは水田等の開始時期を示すものではなく、As-C・FAに覆われていることからあくまで耕作の停止時期を意味する。またAs-Bに埋まる歴史時代水田跡も同様である。

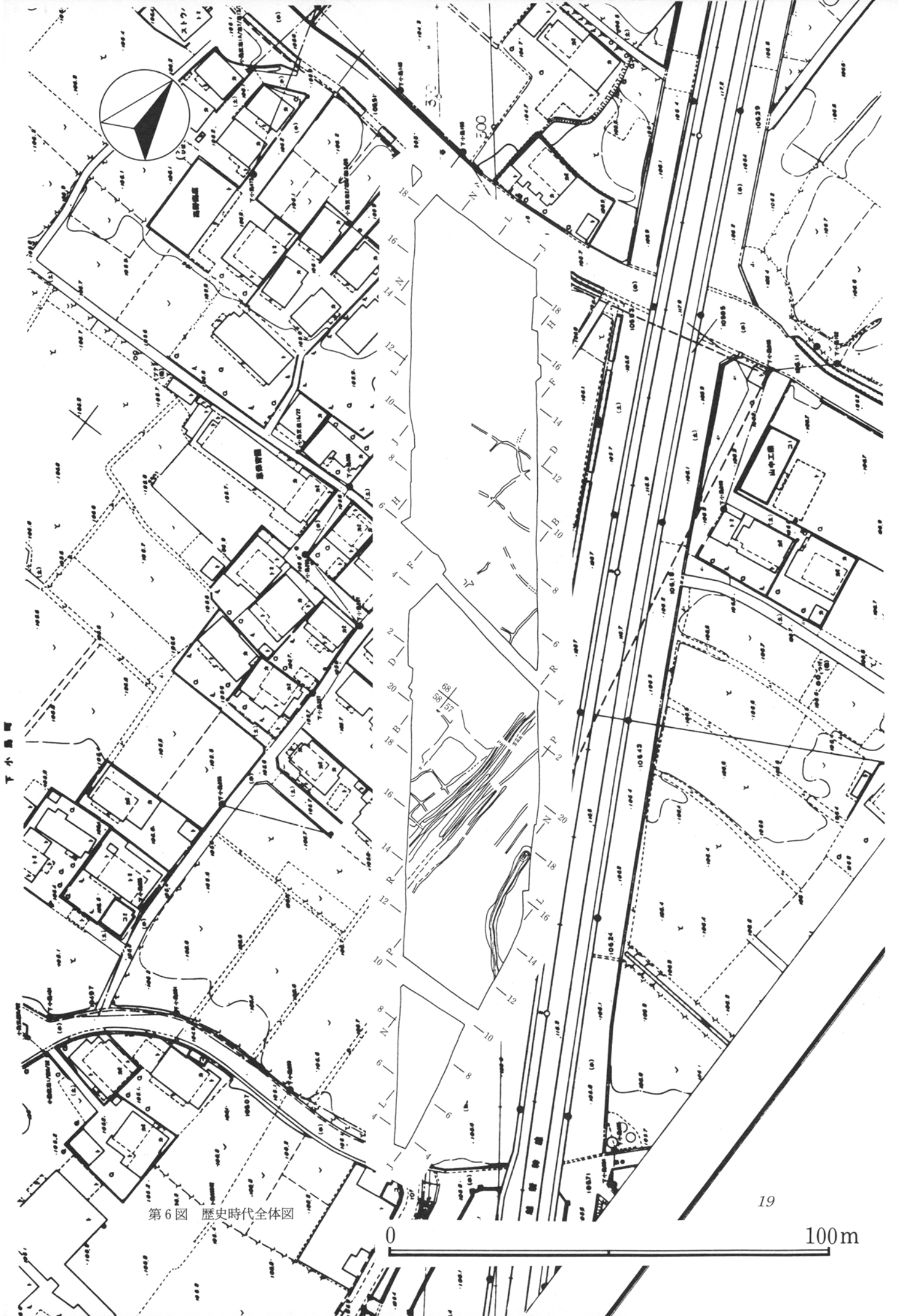
縄文時代では明瞭な遺構は検出されていない。前述したように少量の土器・石器片が出土する包含層として確認した。



下小島町

第5図 中世全体図

100m



第6図 歴史時代全体図



第7図 古墳時代後期全体図

100m



第8図 古墳時代前期全体図

第1節 中世の遺構と遺物

1. 遺構各説

(1) 溝

中世に属する溝は、1号・2号・6号・7号・8号・53号・57号溝の7条である。走向はほぼ東西と南北方向に走るもので、掘立柱建物群を中心とする館跡主郭となる住居空間と、これに付随する空間境界を区切る機能をもつ溝であろう。とくに1号溝は、館跡主郭部（北部掘立柱建物群）の南限を区切り南側に検出された最大規模の溝でこの南側に検出された掘立柱建物群と一線を画すものである。館跡内における区割以上の機能を有す堀的遺構である。この1号溝を区切りに掘立柱建物跡はおおよそ南北に分かれる。1号溝は、昭和49年から昭和59年にかけての調査になる上越新幹線融通寺遺検出の2区18号溝に続くと考えられる。2区18号溝は南北走することから、館跡主郭の東限が捉えられる。6号溝は主郭部の西を、またこれに直行する7号溝は北を画している。6号溝は7号溝との合流部以北で小さく屈曲するが、東西走する57号溝に接線すると考えられる。主郭内における西区画となろうか。

1号溝（第17図 PL5-1）

調査区ほぼ中央を東西走する溝で、現有水路にほぼ重なっている。この為、溝の南縁を検出したのみで、北縁は不明である。1号井戸と重複し、これより古い。走方向は東西走し、 $N-87^{\circ}-W$ を示す。検出全長33m、深さ1.4mである。上面幅は西端の溝底面を中心とした折り返し寸法で、8m程になろう。底面は幅1mで箱堀形態をもつが壁面の立ち上がりは緩やかである。掘立柱建物跡との重複はなく、南側を区切る位置的な面からも当館跡の形成にとって、中心的な遺構としてよいであろう。埋土は、中位より薄い粘土質層が多く、最下層は締まりのない暗褐色土である。薄い粘土質層の生成は水滞によると考えられ、水堀であった可能性が高い。出土遺物には内耳鍋片、軟質陶鉢片、常滑甕片、火鉢脚部、砥石、板碑片などがある。

2号溝（第17図 PL4-2）

1号溝の南、約10mの間隔をもってほぼ同一走向をとる。1号溝と比較して、館跡構成施設としては明らかではないが、館跡成立や変遷のあり方を示す遺構とも考えられる。3号・10号土坑と重複し、これらより古い。走方向は $N-86^{\circ}-E$ を示す。西側は調査区域外にかかる。検出全長は33.2mで東は終結する。上端幅は西に広く東へ狭く、1.75m～0.8m、深さは40cmである。緩い壁面からそのまま底面に至る。埋土は浅間As-B軽石粒主体の暗褐色土。出土遺物には、内耳鍋小片のほか、石臼（上臼）片がある。

6号溝（第18図 PL5-2・6）

北部掘立柱建物群の西縁を区切り、ほぼ南北走する溝である。南側は調査区域外に入るが端部は分支して東へ約 45° の角度で屈曲する。この屈曲は、建物群の東側で検出している8号溝の折れに対応する可能性がある。ただし8号溝の屈曲角はやや大きい。南端から23m北進し、7号溝との合流地点で小さく西へ屈して再び北進する。主には、 $N-5^{\circ}-E$ を、北側は $N-10^{\circ}-W$ 走向である。北側は削平によって深さを減じ、その端部は西へ直角気味に折れる様相を見せて消滅する。この延長上には西より東進する57号溝があり、同一の溝と考えられる。総延長37.5m、上端幅は南で1.4m、北で0.6mである。深さ40cmの断面箱形である。埋土は浅間As-B軽石粒主体砂質の暗褐色土。出土遺物には、軟質陶鉢、内耳鍋片、常滑甕片、砥石などがある。

7号溝（第18図 PL5-3）

北部掘立柱建物群の北縁を区切る東西走する溝である。西は6号溝に合し、東は調査区域外へ延びる。僅

か北へ弧状に張るが、走方向はおよそN-88°-Eを示す。検出全長16m、幅0.8~1m、深さ20~30cmの断面箱形である。埋土は砂質暗褐色土。出土遺物には内耳鍋片がある。

8号溝 (第19図 PL5-5)

北部掘立柱建物群の東縁を区切り、南北走する溝である。北端は調査区域外に入り、南端は西方向に折れる様相を見せるが消失する。北側での走方向はN-10°-Wを示し、検出範囲の中位でおよそ30°の角度で東へ屈曲した後再び北側と同一方向に戻る。当溝の走向は建物群の西縁に検出した6号溝と類似する。検出全長17m、幅70cm、深さ55cmを測る。出土遺物には、埋土より石鉢・石臼の小片がある。

53号溝 (第19図 PL5-4・5)

67区南西にあり、調査区の東縁で検出した南北走向の溝である。南は終結し、北は調査区域外に延びる。検出全長5.4m、上面幅1.95m、深さ75cmの断面箱堀形である。埋土は砂質暗褐色土。埋土上位には小石から拳大の石及び多量の土器類が集中する。出土遺物には、土器、内耳鍋大形破片がある。土器には2枚重ねて燈明皿として使用されたものがある。

57号溝 (第19図 PL5-6)

68区北西にあり、東西走向の溝である。走方向はN-88°-Wを示す。東半は後世の削平が1mほども及び溝幅は著しく減少する。検出全長は20.7mで、西側は調査区域外に延びる。西半での上面幅は1.55m、深さ75cmである。断面形はU字状を呈する。東端は終結するが削平による消失であろう。本来は6号溝に繋がり、掘立柱建物群の主郭に対して西郭を形成すると考えられる。埋土は締まりのない砂質茶褐色土で自然埋没であろう。出土遺物無し。

(2) 掘立柱建物跡

下小鳥神戸遺跡における中世掘立柱建物跡及び柵柱列は、調査区のほぼ中央部で東西走する1号溝を境として南と北に二分される。本稿では南部掘立柱建物群と北部掘立柱建物群に分離して記載する。南部掘立柱建物群は限定された調査範囲に一因もあろうが、北部掘立柱建物群に比べ小規模・少数・散在的である。建物跡は8棟を検出したが、全て梁行1間の東西棟建物跡である。北部掘立柱建物跡群との関係からすれば、主郭に対する南郭的な位置付けが妥当である。

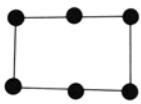
北部掘立柱建物跡群は館跡の中心部である主郭的な区域である。著しい小穴群とともに検出され、掘立柱穴と小穴群は単体としての識別は不可能であった。このため建物跡の認識は柱穴の配置に重点を置いた。建物跡は30棟を検出したが、建物間の重複は著しい。北部掘立柱建物跡群内において、建物構造の相違からくる配置や密度、竪穴状遺構・井戸跡などの分布から主郭内での空間利用が窺われる。概略では、主屋的な20号掘立柱建物跡を中心とする東側の起居空間、大小の建物と竪穴状遺構が集中する西側の付属施設空間、1号溝と建物群の間に広がる南側の広場空間、井戸などが配される北側の裏庭的空間などから構成されていると考えられる。

南部掘立柱建物群

1号掘立柱建物跡 (第20図)

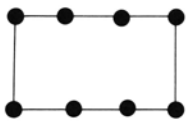
東西2間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。1号柵柱列と重複する。梁行方向はN-7°-Eを示す。

第3章 遺跡の概要



桁行全長は4.6m、南側柱間が西から2.5m・2.1m。北側が2.3mの等間である。梁行は西側が2.7m、東側が2.9mを測る。柱穴掘形は円形で径25~30cm、深さは最も浅い柱穴で12cmで最深は30cmである。

2号掘立柱建物跡 (第20図 PL 6-1)

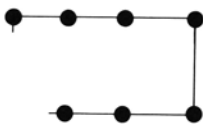


東西3間、南北1間の東西棟の掘立柱建物跡である。3号掘立柱建物跡及び2号土壌墓と重複する。

梁行方向はN-3°-Eを示す。桁行総長は6.4mで柱間は2.0mから2.2mの幅がある。梁行は3.7mと柱間はほぼ一定している。

柱穴の掘形は総じて長方形に近く30~60cmで深さは34~68cmである。柱穴底面に残された幾つかの柱痕から柱径は20cm程度と推定される。

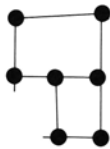
3号掘立柱建物跡 (第20図 PL 6-1)



南西隅が発掘区域外のため、柱穴1個は不明であるが、東西3間、南北1間の東西棟の掘立柱建物跡であろう。2号掘立柱建物跡及び2号土壌墓と重複する。梁行方向はほぼ真北を示す。桁行総長7.3m、柱間は西より二間分は2.2m、東側一間のみ2.8mである。

梁行は3.7mで柱間は一定している。柱穴の掘形は方形に近いものが多く一辺約40cm、深さは北西隅の1穴が25cmと他より浅いが総じて40~60cmの掘り込みである。桁行規模や柱間寸法の一部に若干差があるものの、構造的には2号掘立柱建物と類似する。前後関係は定かでないが、両者同類の機能を有する建物跡であろう。

5号掘立柱建物跡 (第21図 PL 6-2)

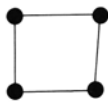


東西隅の1穴は発掘区域外のため不明である。6号・7号掘立柱建物跡と重複している。東西2間・南北2間の掘立柱建物であるが、柱配置から南北棟になる。

建物方位は南と北側の柱筋で若干異なるが、身舎的柱間のある南側桁行方位でN-5°30'-Eを示す。北側柱列は身舎に対し5°ほどの偏りがある。桁行総長は4.9m、東側柱列柱間は南から2.4mと2.5m、西側柱列の北柱間は2.25mである。梁行総長は北側柱列で3.5m、中央柱間は東より1.7mと1.6mを測る。柱間に統一性がなく、とくに北側柱列による平面形の歪みが見られる。

柱穴掘形は方形に近く、1辺25cm前後である。深さは24~50cmで北面の2柱穴が他より深く、38cm・50cmである。

6号掘立柱建物跡 (第21図 PL 6-2)



東西1間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。5号・7号掘立柱建物跡と重複する。

柱間の桁行は北側が3.4m、南側で3.1mと建物の平面形は歪む。梁行は3.0mである。東側・南側柱間に間柱と考えられる柱穴を検出したが、東側の間柱は北に大きく偏り、南側のそれは柱線より僅か外れる。梁行方向はほぼ真北を示す。

柱穴の掘形は略円で径30cm前後、深さは40~58cmで、南側の間柱は浅く25cmである。柱痕は明らかにできなかったが、柱穴底面の観察から径10~15cmと考えられる。

7号掘立柱建物跡 (第21図 PL 6-2)



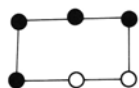
東西2間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡であるが、西側は発掘区域外になり南西隅の柱穴は未検出で、東西柱間は更に延びる可能性もある。5号・6号掘立柱建物跡と重複する。

桁行総長は4.0m、柱間は2.0mである。北側柱筋の中央柱穴は僅か内側へ外れる。梁行は

2.8mで梁行方向は $N-2^{\circ}-E$ を示す。

柱穴掘形は円形と方形があり、径25~30cm、深さは柱穴各に差が大きく16~55cmである。柱痕は不明だが、柱穴底の観察から径10cm前後となろう。

8号掘立柱建物跡 (第22図 PL 6-3)

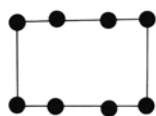


東西2間、南北1間の東西棟の掘立柱建物跡であろう。南側中央及び東の柱穴は検出できず不明である。

桁行総長4.3m、北側柱間は西から2.2m・2.1mである。梁行は2.3mを測り、梁行方位は $N-0^{\circ}-E$ を示す。

柱穴掘形は楕円ないし円形で、径20~30cm、深さ30~42cmである。柱痕は底面の観察から10cm前後となろう。

9号掘立柱建物跡 (第22図 PL 6-4)



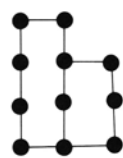
東西3間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。1号柵柱列と重複する。

桁行全長は5.1mで、南・北側とも柱間は中央の柱間が大きく、西より1.5m・2.1m・1.5mである。梁行は3.4mで、梁行方向は $N-1^{\circ}-E$ を示す。

柱穴掘形は方形や楕円形で1辺30~38cm、深さは24~40cmである。柱痕は不明である。

北部掘立柱建物群

4号掘立柱建物跡 (第23図 PL 6-5)

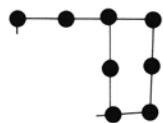


建物群の南西に位置し、東西2間、南北2間に北面の西側に突出部の付く南北棟掘立柱建物跡になろうか。西側で10号掘立柱建物跡と、東側で31号掘立柱建物跡に重複する。

梁行方位は $N-7^{\circ}-E$ を示す。突出部を加えた桁行全長は5m、柱間は北から1.6m・1.7m・1.7mである。梁行全長は3.7mで、柱間は2m・1.7mである。

柱穴掘形は方形気味の円形が多く、1辺50~70cm、深さ50~80cmを測るが、北東隅の1穴は掘形が浅く、突出部の2穴と中央の東柱穴は径30cm前後と他よりは小径である。

10号掘立柱建物跡 (第23図 PL 6-6)



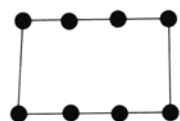
建物群の南西に位置し、一部発掘域外に延びるため建物南西の推定3柱穴は不明である。

北西の柱穴のみ規模が小さく不均合いであるが、東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡であろう。東側で4号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位は $N-5^{\circ}-E$ を示す。桁行全長は5.3m、柱間は西から1.9m・1.7m・1.7mである。梁行全長3.7m、柱間は2間ともに1.8mである。

柱穴掘形は平面が方形ないしは円形が多く一辺30~40cm、深さ40~60cmを測るが、北西の1穴のみ径・深さとも20cm前後である。

11号掘立柱建物跡 (第24図 PL 6-7)



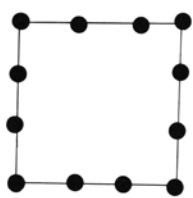
建物群西部に位置し、東西3間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。12号・27号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位は $N-1^{\circ}-E$ を示すが、北西隅の1穴は梁行筋線より 15° ほど東に歪む。桁行全長は北面で5.8m、南で6mを測り、北面柱間は西から1.8m・2m・2m、南面柱間は2mの等間である。梁行柱間は3.7mを測る。

第3章 遺跡の概要

柱穴掘形は総て1辺30cm前後の方形で、深さは35~70cmである。柱痕は底面と断割土層観察から15cm前後である。

12号掘立柱建物跡 (第24図 PL 6-8)



建物群西部に位置し、東西3間、南北3間の方形棟掘立柱建物跡であるが、南北行が若干長く東西棟になろうか。11号・27号掘立柱建物跡と重複する。

北を基軸にする方位は $N-2^{\circ}-E$ を示す。桁行柱筋の北側柱列は東へずれて、南側柱列とは柱筋としては対応しない。桁行全長の東側柱列は6.4m、柱間は北から2.0m・2.1m・2.2mである。西側柱列は6.1m、柱間は北から2.0・2.0m・2.2mである。梁行全長は南側柱列で6.0m、柱間は2.0mの等間、北側柱列で西から2.0m・2.1m・1.7mである。

柱穴の掘形は70×40cmから1片まで長方形ないしは方形が多い。深さは40~80cmを測る。柱痕は一部断割による観察によれば径20cm前後である。

14号掘立柱建物跡 (第22図 PL 7-1)

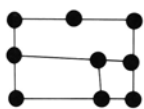


建物群の最南に位置し、近接した建物はない。東西2間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡で、検出掘立柱建物では最小である。

梁行方位は $N-0^{\circ}-E$ を示す。桁行全長2.5mで、南側柱間は西から1.3m・1.2m、北側柱間は1.2m・1.3mである。梁行全長は1.7mで、東側柱間は北から0.7m・1.0m、西側柱間は0.9m・0.8mである。

柱穴掘形は径25~30cmの円形で、深さは15~25cmである。柱痕は一部断割土層観察により径10cm前後である。

16号掘立柱建物跡 (第25図 PL 7-2)

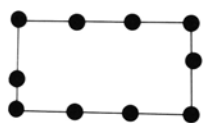


建物群の南東に位置し、東西2間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。南側で15号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位は $N-0^{\circ}-E$ を示す。桁筋南側には中間の柱穴はなく、建物の南東部に片寄って柱穴がある。これと対応して桁行中央柱筋に1穴が位置し、小間切りが設けられる。桁行全長4.7m、北側柱間は西から2.3m・2.4m、南側柱間は3.4m・1.3mである。梁行全長は3.1m、東側柱間は北から1.6m・1.5m、西側柱間は1.5m・1.6mである。

柱穴掘形は方形ないしは円形で径30~50cm、深さ20~25cmである。柱痕は底面観察より15cm前後である。

17号掘立柱建物跡 (第25図 PL 7-3)

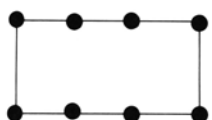


建物群中にあり、東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。18号・19号・20号・22号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位は $N-9^{\circ}-E$ を示す。桁行全長は6.9m、南側柱間は西から2.3m・2.2m・2.4m、北側柱間は2.3m・2.2m・2.3mである。梁行全長は東・西で異なり東側は3.4m、柱間は北から1.6m・1.8m、西側は3.6m、柱間は1.4m・2.2mである。

柱穴掘形は1辺30~40cmの方形が多い。深さは35~58cmを測る。柱痕は断割土層観察から径10~15cmである。

18号掘立柱建物跡 (第26図 PL 7-4)

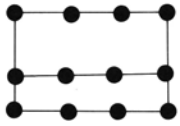


建物群中にあり、東西3間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。17号・19号・20号・36号掘立柱建物跡と重複する。また北東隅の柱穴は60号土坑によって一部消失している。

梁行方位は $N-0^{\circ}-E$ を示す。桁行全長は7.3mで、東側1間の間尺が大きい。柱間は西から2.3m・2.3m・2.7mである。梁行全長は3.6mを測る。

柱穴掘形平面形状は東西長軸に統一された長方形で、55～65cm×45～55cmの大きさである。深さも50cm前後にまとまっている。柱痕は柱穴検出時に多くは確認できた。断割による土層観察によれば、径15cm前後である。柱痕及び柱間、柱穴掘形形状などかなり規格性の高い建物跡である。

19号掘立柱建物跡 (第26図 PL 7-5)



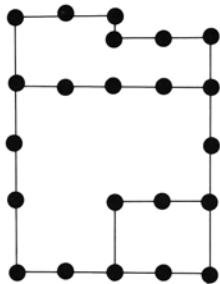
建物群中にあり、東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。17号・18号・20号・22号・36号掘立柱建物跡と重複する。梁行南側は間尺が短く身舎に付く庇になろうか。

梁行方位はN-5°-Eを示す。桁行全長は南側柱列で6.1m、北側は6.0mである。南側柱間は西から2.1m・2.0m・2.0m、北側柱間は西から2.2m・2.0m・1.8mである。

梁行全長は3.9m、柱間は東側柱列が北から2.4m・1.5m、西側は2.6m・1.3mである。

柱穴掘形は方形あるいは長方形で、1辺が30～45cm×25～35cmと18号掘立柱建物跡より小さいが、統一的な形状である。深さは25～35cmの間にある。柱痕は平面及び断割土層の観察から径12～13cmであろう。

20号掘立柱建物跡 (第27図 PL 7-6)

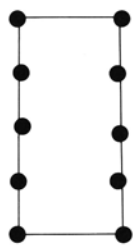


建物群中にあり、南北4間、東西4間の南北棟掘立柱建物跡である。17号・18号・22号・36号掘立柱建物跡と重複する。桁行中央の2間は柱間が等間となるが南と北の1間はこれより長く、なお北側の東半はおよそ1/3間分が減尺される。

桁行方位はN-4°-Wを示す。桁行全長は西半で10.0m、東半は9.3mである。柱間は西側柱列で北から2.9m・2.3m・2.3m・2.8m、東側柱列で2.0m・2.3m・2.3m・2.8mである。梁行全長は7.8mで、柱間はほぼ1.9mの等間である。

柱穴掘形は長方形で規格性が高い。桁行中央2間分及び、梁行中央4間分の柱穴は他より掘形規模が大きめで、1辺50～70cm、深さ50cm前後が多い。これに対し南・北側の柱穴は掘形も1辺30～45cm、深さ30cm前後である。柱痕も前者は径20～25cm、後者は15～20cmである。この柱穴規模は、身舎とそれに付随する縁・下屋などの構造差と考えられようか。

21号掘立柱建物跡 (第28図 PL 7-7)

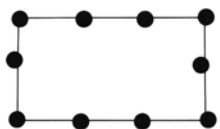


建物群中にあり、南北4間、東西1間の南北棟掘立柱建物跡である。17号・18号・19号・22号・25B号・36号掘立柱建物跡と重複する。

桁行方位はN-2°-Wを示す。桁行全長8.6m、柱間は北から2.2m・2.0m・2.2m・2.2mである。梁行は4.0mを測る。

柱穴掘形は大きく、1辺60～70cmで概略長方形を呈する。深さは40cm前後である。

22号掘立柱建物跡 (第28図 PL 7-8)



建物群中にあり、東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。17号・19号・21号・25A号・25B号・26号・32号掘立柱建物跡と重複する。

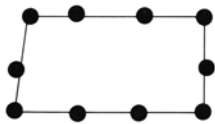
梁行方位はN-3°-Eを示す。桁行全長は7.5m、南側柱列の柱間は西から2.5m・2.4m・2.6m、北側柱間は2.6m・2.5m・2.4mで中央で相対する梁行柱筋には2°-30°

程度の振れがある。梁行全長4m、東側柱列柱間は南から2.2m・1.8m、西側は2.5m・1.5mで、中央桁行柱筋には2°の振れがある。また東側梁行の中央柱穴は柱筋より内側に位置する。

柱穴掘形は40×30cm規模の長方形が多く、深さは50～60cmである。柱痕は断割土層観察から10cm程度であろう。

24号掘立柱建物跡 (第29図 PL 8-1)

第3章 遺跡の概要

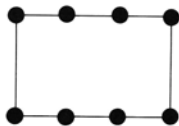


建物群の北西部に位置し、東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。27号・38号・40号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位は $N-5^{\circ}-E$ を示すが、北西隅の柱穴が西側梁行柱筋からずれて、 17° 前後に振れて歪む。桁行全長は南側柱列で7.5m、柱間は2.5mで等間である。北側柱列は全長7.0m、柱間は1.9m・2.7m・2.4mである。梁行全長は3.8m、柱間は東側柱列が南から1.8m・2.0m、西側は1.6m・2.2mである。

柱穴掘形は 20×30 cm程度の長方形が多く、深さは30~50cmである。柱痕は10cm前後であろう。

25A号掘立柱建物跡 (第30図 PL 8-2)

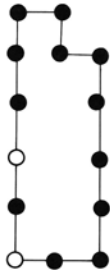


建物群中にあり、東西3間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。26号・27A号・27B号・29号・30号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位は $N-3^{\circ}-E$ を示す。桁行全長は6.2m、柱間は2.0mで等間である。梁行は4.0mを測る。

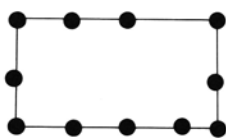
柱穴掘形は 20×30 cm・ 30×30 cm大の長方形・方形で、深さは60cm前後が多い。柱痕は10cm程度である。

25B号掘立柱建物跡 (第31図 PL 8-2)



建物群中にあり、南北4間、東西2間の南北棟掘立柱建物跡で、北妻中央及び西側柱穴より1間弱北へ張り出しをもつ。17号・19号・21号・22号・36号掘立柱建物跡と重複する。桁行方位は $N-3^{\circ}-E$ を示す。桁行西側柱列の全長は南西隅柱穴が不明の為推定9.8m、柱間は南から2.1m・2.0m・2.1m・1.9m・1.6m、東側全長8.0mで、柱間は2.0m・1.9m・2.1m・2.0mである。梁行全長は3.4m、柱間は南側が東から1.8m・1.5m・1.9m、北側が1.6m・1.7mである。柱穴掘形は 25×30 cm・ 50×30 cm大の長方形が多く、深さは40~60cmである。柱痕は断割断面が10~15cmであろう。

25C号掘立柱建物跡 (第29図 PL 8-2)

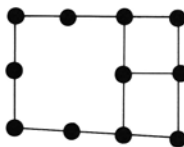


建物群中にあり、東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。26号・27A号・27B号・29号・30号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位は $N-5^{\circ}-E$ を示す。桁行全長は8.0m、柱間は西から2.2m・2.2m・3.6mである。梁行全長は4.3m、柱間は南から2.0m・2.3mである。

柱穴掘形は 20×30 cm大の長方形が多く、深さは50~60cmである。柱痕は断割土層観察より10cm程度と推定される。

26号掘立柱建物跡 (第30図 PL 8-5)



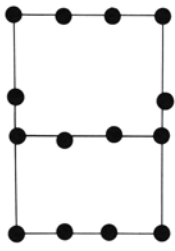
建物群中にあり、東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。25C号・27A号・27B号・29号・30号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位は $N-3^{\circ}30''-E$ を示すが、南側柱列は 4° ほど柱筋が北へ振れる。桁行全長は6.5m、柱間は南側柱列で西から2.3m・2.1m・2.1m、北側柱間は2.2m・2.2m・2.1mである。梁行西妻は4.4m、柱間は南から2.3m・2.1m、東妻は全長4.8m、柱間は2.6m・2.2mである。

柱穴掘形は 20×30 cm・ 40×50 cmの長方形を呈するものが多い。深さは25~40cmである。柱痕は断割土層観察より10cm前後と推定される。

27A号掘立柱建物跡 (第32図 PL 8-4)

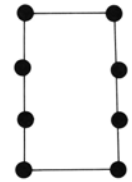
建物群の西端に位置し、南北2間、東西3間の南北棟掘立柱建物跡である。24号・25A号・25C号・33号・



38号掘立柱建物跡と重複する。

桁行方位は $N-2^{\circ}-E$ を示すが、西側桁柱筋は $1^{\circ}30'$ ほど東へ歪む。桁行全長は8.6m、柱間は南から3.8m・4.8mである。梁行全長は南側柱列で5.8m、柱間は東から2.0m・1.8m・2.0m、北側柱列全長は6.0m、柱間は2.0mの等間である。

柱穴掘形は20~30cm×30~40cmの長方形で、深さは40cm前後である。柱痕は断割土層観察から15cmになろうか。



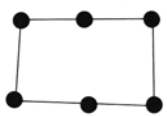
27B号掘立柱建物跡（第33図 PL 8-4）

建物群の南西に位置し、南北3間、東西1間の南北棟掘立柱建物跡である。25C号・26号・29号掘立柱建物跡と重複する。

桁行方位は $N-2^{\circ}-E$ を示す。桁行全長は6.2m、柱間は東・西側柱列とも南から2.0m・2.0m・2.3mである。梁行は3.7mを測る。

柱穴掘形は長方形に掘られるものが多く25~30cm×35~40cm大で、深さは60~70cmである。柱痕は断割によって幾本か確認されたが径15cm前後であろう。

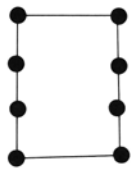
28号掘立柱建物跡（第31図 PL 8-5）



建物群の西側中央部に位置し、東西2間、南北1間の東西棟の掘立柱建物跡である。25・26・27・32・38号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方向はほぼ北で、 $N-0^{\circ}30'-E$ を示す。桁行全長5.2m、梁行は3.3mを測る。桁柱間は約2.5mを測るが、南側柱列の西端の柱穴が僅か西へ偏る。柱穴の掘形はおよそ50×60cmの方形を呈し、深さは30cm前後である。柱痕は、平面確認と柱穴底面の痕跡から径15~20cmと考えられる。

30号掘立柱建物跡（第33図 PL 8-6）

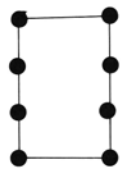


建物群中の南西に位置し、南北3間、東西1間の南北棟掘立柱建物跡である。25C号・26号・29号掘立柱建物跡と重複する。

桁行方位は $N-1^{\circ}-W$ を示す。桁行全長は5.6m、柱間は東・西側柱列とも南から1.8m・1.8m・2.0mである。梁行は4.0mを測る。

柱穴掘形は30×40cm大の長方形が多く、深さは50~60cmである。柱痕は平面・断割による観察から径12~13cmであろう。

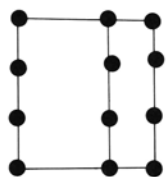
31号掘立柱建物跡（第34図 PL 8-7）



建物群の南西に位置し、南北3間、東西1間の南北棟掘立柱建物跡である。建物跡との重複はないが、縄張り内には49・50号土坑などがある。

桁行方位は $N-1^{\circ}-W$ を示す。桁行全長は5.4~5.5mで、東・西側柱列の柱間は1.8mの等間である。梁行は3.6mを測る。

柱穴掘形は1辺30×40cmの方形・長方形が多い。深さは約60cmと比較的均一性がある。柱痕は断割や柱穴底面の観察から径15cm程度であろう。



32号掘立柱建物跡（第34図 PL 8-8）

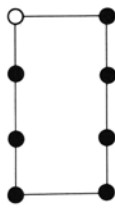
建物群中にあり、南北3間、東西1間の東西棟の東側に縁あるいは軒が付く掘立柱建物跡である。22号・25A号・25C号・26号・27A号・38号掘立柱建物跡と重複する。

桁行方位は $N-2^{\circ}-E$ を示す。桁行全長は6mで、柱間は2mの等間である。梁行は3.6mで、東側柱列より縁あるいは軒柱穴は1.8mを測る。

第3章 遺跡の概要

柱穴掘形は1辺20~30cm大の方形ないしは長方形で、深さは50cmである。柱痕は径10~15cmになろうか。

33号掘立柱建物跡 (第35図 PL9-1)

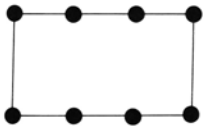


建物群の北西に位置し、南北3間、東西1間の南北棟掘立柱建物跡である。5号・7号竪穴状遺構とまた、北西隅で6号井戸跡と重複し、柱穴の1つは失われている。

桁行方位はN-9°-Eを示す。桁行全長7mで、東・西側柱列はともに南から2.2m・2.5m・2.3mである。梁行は3.6mを測る。

柱穴掘形は20×30cm大の長方形が多い。深さは約40cmと均一である。

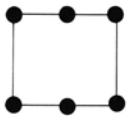
34号掘立柱建物跡 (第35図 PL9-2)



建物群の北部に位置し、東西3間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。縄張り内に30・40号土坑が収まり、当跡に付随する可能性がある。

梁行方位はN-1°-Eを示す。桁行全長は7.1mで、柱間は西から2.4m・2.4m・2.3mである。梁行は4mである。柱穴掘形は小さく1辺20cm前後の方形あるいは長方形をなす。深さは20~40cmである。柱痕は断割及び底面の観察から10cm前後の比較的細身の柱材と考えられる。

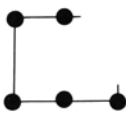
36号掘立柱建物跡 (第36図 PL9-3)



建物群中にあり、東西3間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡に、西側に南北4間の下屋あるいは土間と考えられる施設が付随し、南面の西側に張り出す。17号~22号・25B号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位はN-5°-Eを示す。桁行全長は10.2m、柱間は2mの等間で、北側柱列の西1間は4.1mである。南側柱列は主屋の西端柱穴から80cmの位置に1穴を設ける。付随施設の西側柱列は全長7m、柱間は北から1.6m・1.9m・1.9m・1.5mで、主屋南面から3.4m張り出す。張り出し部南面の柱間は3.3mを測る。柱穴掘形は方形か長方形で、1辺30~40cmである。柱痕は12~13cmであろう。

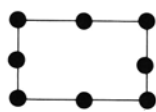
37号掘立柱建物跡 (第36図)



建物群の北端に位置し、東は調査区域外に及び全容は不明である。現状では東西2間以上、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。

梁行方位はN-1°-Wを示す。桁行全長は南側柱列で4.1m、柱間は西から2.0m・2.1mである。梁行は3.3mを測る。柱穴掘形は方形あるいは円形で、1辺25cm前後、深さは25~50cmである。柱痕は柱穴底面の痕跡から10cm程度である。

38号掘立柱建物跡 (第37図)

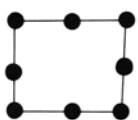


建物群中の北西に位置し、東西2間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。24号・25A号・27A号・32号掘立柱建物跡と重複する。

梁行方位はN-2°-Eを示す。桁行全長は5.1m、柱間は西から2.6m・2.5mである。

桁行全長は3.1m、東側柱列柱間は南から1.4m・1.7m、西側は1.5m・1.6mである。柱穴掘形は1辺35×40cm大の長方形が多く、深さは30~40cmである。柱痕は10cm前後であろう。

40号掘立柱建物跡 (第37図)



建物群中北西部に位置し、東西2間、南北2間の東西棟建物跡である。24号・27A号・38号掘立柱建物跡と重複する。

桁行方向はN-4°-Eを示す。桁行全長は北柱列で4.4m、南柱列で4.3m。柱間は西から2.3m・2.1mと2.3m・2.0m。梁行全長は3.6m。柱間は1.8mの等間である。

柱穴掘形はほぼ長方形ないしは方形を呈し、一辺20~30cm、深さは25~40cm、柱痕径は10~15cmである。24号掘立柱建物跡とは建跡が同調して、同質建物の拡張・縮小などに関係する可能性もある。

(3) 柵柱列 (第9図)

柵列と考えられる柱穴列には、9の単位が認められる。建物群の建物方位と大きく異なる走向はなく、多くは館跡内部における機能別空間を区別するものであろう。ただし、1号柵柱列は、その位置あるいは走向長の規模からみて館跡への外防衛的な柵柱列であろう。4号・5号柵柱列は柱間寸法に差があるものの、一連の柵施設と考えたい。また前二者の西に南北走る7号柵柱列とともに通路的あるいは館内部への導線的な機能もあろうか。8号・9号柵柱列は7尺等間で平行走行する。同時併設の可能性もある。

1号柵柱列 (第38図)

南部掘立柱建物跡群にあり、1号・9号掘立柱建物の縄張りとは重なる。北部建物群の南を区切る1号溝のさらに南に位置する。

東西走向で $N-85^{\circ}-W$ 。柱穴数11穴、総延長24.5m。柱穴間は西より $2.8 \cdot 2.7 \cdot 2.4 \cdot 1.9 \cdot 3.1 \cdot 2.7 \cdot 2.5m$ 、東側4穴は2.3mで等間である。

柱穴掘形は径30cm前後の円形または楕円形で、深さ30~50cmが多く浅いもので20cmである。

2号柵柱列 (第38図)

北部建物跡群のうち西群南に位置する。

東西走向で $N-90^{\circ}-W$ 。柱穴数5穴、総延長6.0m。柱穴間は西より $1.3 \cdot 1.3 \cdot 1.5 \cdot 1.7m$ である。

柱穴掘形は1辺30cm前後の方形ないしは円形に近く、深さ40~50cmである。

3号柵柱列 (第38図)

北部建物跡群の西群北に位置する。34号掘立柱建物跡の縄張りとは重なる。

東西走向で $N-89^{\circ}-W$ 。柱穴数8穴、総延長12.5m。柱穴間は1.8m(6尺)で等間である。

柱穴掘形は1辺20~30cmの方形が多く、深さ25~30cmと比較的均一である。

4号柵柱列 (第38図)

北部建物跡群の南東広場空間に位置する。



第9図 柵柱列位置図

第3章 遺跡の概要

南北走向で $N-2^{\circ}-E$ 。柱穴数は7～8穴になろうか。総延長7.7mで、最北端の柱穴より直角に折れ5号柵柱列に続くと考えられる。柱間は不揃いで1.3～2.0m。

5号柵柱列 (第38図)

4号柵柱列の最北端の柱穴を共有しようか。

東西走向で $N-90^{\circ}-W$ 。柱穴数は4号のものを入れ6穴、総延長5.0m。柱穴間は中央4穴が狭く0.7～0.6m、西側1.6m、東側1.3mである。

柱穴掘形は径20cm程度の円形、深さは10cm前後で総じて浅い。

6号柵柱列 (第38図)

北部建物跡群の西群中に位置する。

南北走向で $N-0^{\circ}-E$ 。柱穴数7穴、総延長約11.0mで、柱穴尺はほぼ6尺である。

柱穴掘形は 30×35 cmの長方形が多く、深さ30～60cmである。

7号柵柱列 (第38図)

北部建物群を東西に分けるごとく位置する。

南北走向で $N-3^{\circ}-E$ 。柱穴数は11穴。総延長は約22.5mで、南より1.6m (4間分)・1.4m・1.6m・1.8m・1.0m・1.6m (3間分)・1.8mである。

柱穴掘形は方形が多く、一辺25～30cm、深さは50cm前後である。柱痕は10～13cm前後であろう。北端では、東西走る8号・9号柵柱列と近接し、これらとは直角に近い走向となる。

8号柵柱列 (第38図)

北部建物跡群のうち西側北に位置し、9号柵柱列とほぼ平行する。

東西走向で $N-87^{\circ}-W$ 。柱穴数は7～8穴、総延長10.8mで、柱間は約2.1mを測り7尺等間である。

柱穴掘形は1辺30cm前後の方形、深さ約40cmで比較的均一である。

9号柵柱列 (第38図)

8号柵柱列の南側で、1.1mの間隔をもって平行して走行する。

東西走向で $N-87^{\circ}-E$ 。柱穴数は7穴、総延長12.7m。柱間は約2.1mを測り、ほぼ7尺の等間である。8号柵柱列より西に1穴多いが、南北の柱穴筋は一致する。

柱穴掘形は1辺30～40cmの方形あるいは長方形で、深さ50～60cmである。

(4) 竪穴状遺構

竪穴状遺構は7基検出された。この遺構についてはその定義を明確にすることはできない。調査・研究の段階では形状・規模・内部の施設など一定の条件を満たす遺構についてのみ、この名称を用いている訳ではない。形状は、長方形・方形・不整長方形などがある。ただし、円形・楕円形状を竪穴状遺構にあてる例は現在のところ知見に上がらない。規模については大型の遺構で古代の竪穴住居に匹敵するものから、1mを多少上まわる程度の、土坑といかに一線を画するか判断に迷う小型がある。内部施設は炉や竈を伴わないのが一般的とされるが、当遺跡では炉と判断するには明瞭さを欠くが、浅い窪みに焼土が存在する遺構がある。また柱穴は位置・本数とも様々で規格性に乏しい。竪穴状遺構にはまったく柱穴を設けない例もある。

以上のごとく、竪穴状遺構なる遺構は、基準となるべき指標を見い出すことができない。これは、基本的には館跡ないしは掘立柱建物群中に存在し、居住域の中である機能を有するものであり、その機能も様々あるという理解に基づいている。そしてその存在は、館跡や建物群の変遷とともに必要に応じ出現・消滅する

主屋以外の副次的機能も合わせもつためでもあろう。具体的な機能としては、支配者に対する隷属者の居住施設・家内工業的工房施設・倉庫及び貯蔵施設・家畜小屋などが考えられている。当遺跡では北部掘立柱建物跡群中に存在し、掘立柱建物と顕著な重複関係にある。しかし、その分布は西側に偏在し、館跡の構造的変遷過程を示すとともに、内部施設の機能別配置が意図されていたことを窺わせる。

1号竪穴状遺構（第39図 PL9-4）

北部掘立柱建物群の西端にある。2号竪穴状遺構と重複し、これより新しい。11号・26号・27号掘立柱建物跡と接には重複しないが、東面で接する位置にあり前後関係はあろう。

平面形状は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、長軸4.7m、短軸3.3m、深さ20cmを測る。長軸方位はほぼ真北を示し、 $N-1^{\circ}30'-E$ である。底面は叩き締などの痕跡はないが適度な堅さを持ち、平坦である。壁面は比較的急傾斜で立ち上がる。底面北西の径20cm、深さ10cmの窪みに焼土面がある。硬化は弱く、範囲も小さく、直火ではなく二次的被熱によると考えられる。東壁沿いに2本の柱穴が検出されたが、当跡に付随するかは不明である。

出土遺物は埋土中より北宋銭景祐元宝(?)1枚、その他茶臼(下臼)等がある。

埋土は砂質土を主にしながら黒褐色・黄褐色の粘性土が多く塊状に混ざり人為的埋土の可能性はある。

2号竪穴状遺構（第39図）

1号竪穴状遺構と南東部分で重複している。大半はこれによって消失し、北・西の壁線と底面が残る。

平面形状は隅丸長方形を呈し、1辺4mの大きさになろう。深さは約10cmを測る。南北軸方位は $N-5^{\circ}-E$ を示す。底面は平坦で、特に締まっではない。南西隅に 50×35 cm、深さ30cmの柱穴状小穴が穿たれる。

埋土は1号竪穴状遺構の上位層と類似し、同様な埋土であろう。

出土遺物はない。

3号竪穴状遺構（第40図）

1号・2号竪穴状遺構の東近くに位置し、26号・27号掘立柱建物跡と重複する。

平面形状は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈するが、南壁線の東側が30cm程度張り出す。長軸2.3m、張り出し部を含む最大長は2.6m、短軸1.7m、深さ25cmを測る。長軸方位は真北を示す。底面は平坦で、壁面直立に近い。南東部で径90cm、深さ10cmの土坑状落込みが検出されているが、本体の張り出し部に照応しており当跡と一連のものであろう。

出土遺物はない。

4号竪穴状遺構（第40図 PL9-5）

掘立柱建物群中の西側中央に位置し、24号・32号掘立柱建物跡と重複する。

平面形状は東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈す。長軸3.0m、短軸2.5m、深さ30cmを測る。長軸方位は $N-90^{\circ}-E$ を示す。底面は平坦で、壁面は垂直に近く立ち上がる。底面南側の小穴は掘立柱建物跡に関わるものである。

埋土は1号竪穴状遺構と同質で砂質暗褐色土主体に粘性の黄褐色土・黒褐色土塊が多く混じり人為的な埋土の可能性はある。

出土遺物には埋土上位より北宋銭聖宋元宝1枚がある。

5号竪穴状遺構（第40図 PL9-6）

掘立柱建物群北西部に位置し、24号・33号・40号掘立柱建物跡と重複する。

第3章 遺跡の概要

平面形状は東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、南東隅部の壁線が僅かに乱れる。長軸2.55m、短軸1.7m、深さ12cmを測る。長軸方位はN-88°30'-Eを示す。底面は平坦で、強い締まりはない。3個の小穴が検出されているが、中央北寄り及び南東壁際の小穴は24号・33号掘立柱建物跡の柱穴である。

埋土は浅間As-B軽石粒を多く混じえる暗褐色土である。

出土遺物はない。

6号竪穴状遺構（第41図 PL11-3）

掘立柱建物群北部に位置する。建物跡は希薄になり、当跡以北には2棟の建物跡と一条の柵列がある。

平面形状は東西軸が僅かに長い不整隅丸長方形を呈する。南東隅部の壁線が僅かに乱れる。長軸1.85m、短軸1.62m、深さ12cmを測る。底面は北半に隅丸長方形の落込みがあり、15cmほど低くなる。土坑との重複の可能性もあるが、土層観察からは判断できなかった。小規模の為土坑の可能性もある。

出土遺物はない。

7号竪穴状遺構（第41図 PL9-7）

掘立柱建物群の北西に位置し、33号掘立柱建物跡・6号井戸跡と重複する。

北壁は後世の耕作溝で消失している。平面形状は1辺2.1mの隅丸方形を呈すであろう。検出面からの掘形は浅く10cmに満たない。軸方位はほぼ真北を示す。底面は平坦で締まりは弱い。

出土遺物はない。

(5) 井戸跡（第16図）

8本の井戸跡が検出されている。深・浅2形態があり、井戸から得られる水量や水質によって用途が区別されていたものであろう。2つの形態には建物群を中心に考えた場合、その配置にも歴然とした差が存在している。すなわち、6号・7号井戸跡はともに4m以上の深さを持ち、位置的には掘立柱建物跡の北ないしは北西部にあり、屋敷配置としては裏手に相当する。2～5号・8号は深さ2m前後で屋敷南側にある。前者は飲料を含めた生活水とし、後者は補助的な役割をもった井戸とすることができよう。井戸の構築は石組・木組などの痕跡はなく、いずれも素掘井戸である。時期的には出土遺物や埋没土の所見から、中世期を大きく逸脱するものはないと考える。

1号井戸（第41図 PL10-1）

北部掘立柱建物群の南を区切る1号溝の南縁と重複し、これより新しい時期の所産である。

平面形状は、南東方向に大きく開く楕円形を呈する。上面径1.7×1.9m、深さ2.8mを測る。検出面より約1mで径1m、底面付近で0.7mの筒状になる。深さ1.5m付近で方形の稜線が観察されるが、底面に続く楕円形状の掘形から見て井戸枠や底面付近の造作もなく、素掘りと考えられる。涌水層は約1.7m付近に拳大の石が多く混じる淡黄色粘質土層である。

埋土は黄褐色土と黒色粘質土の互層で土塊状態が続き、人為的な埋没と考えられる。底面近くでの泥土はなく、草木等の有機物も存在しなかった。埋土上位は浅間As-B軽石粒混じりの砂質土があり、12世紀初頭以降に属することは明らかである。

遺物は埋土中より土器・軟質陶器片がある。

2号井戸（第42図 PL10-2）

南部掘立柱建物群中にある。南東部で6号土壙墓と重複するが、これより古い時期の所産である。

平面形状は円形で、上半部は漏斗状に大きく開き径2.8m、下位部は約-1.7m付近より径90cm程度の円筒状になる。深さは3.4mを測る。壁面の荒れは少なく使用年数は短いと考えられる。木柵・石組などの痕跡もなく素掘り井戸である。

埋土は底面から約50cmの厚さで泥土化した砂質土が堆積し、木葉・クリや昆虫などの混入が見られ、自然堆積によるものであろう。同層より漆塗り木器片があり、他に上層より常滑産甕片がある。上位から中位にかけては黒色土・白黄色土が塊状に互層で堆積し、人為的埋戻しであろう。とくに、検出面には小礫じりの黄褐色土が約50cmの厚さで覆い、円礫の集中もあることから、6号墓を設けるにあたって完全な埋戻し作業を行ったと思われる。

3号井戸（第42図）

北部掘立柱建物群の南を区切る1号溝北縁に位置し、北には4号井戸がある。

平面形状は円形を呈する。上面径1.26m、下面径約50cm、深さ1.26mを測り、断面は弱い漏斗状を呈す。調査時に湧水はなく、掘形の浅さから井戸跡とするには疑問も残るが、近接する4号井戸の湧水点上限内にあり、水の確保が全く不可能ではないと思われる。

4号井戸（第43図）

3号井戸の北に位置する。

平面形状は円形を呈し、上面径1.45m、底部径65cm、深さ1.7mを測る。断面形は約80cmで円筒にすぼまる漏斗状である。壁面には深さ約80cm地点で帯水によると思われる抉りが見られる。ここより下位の堆積土は水分が多い。土層は塊状の土で埋まり、人為的な埋戻しが考えられる。

出土遺物は検出されていない。

5号井戸（第43図 PL10-3）

調査範囲の中で最も南に位置し、地形的には1～4号井戸より高所で湧水点は底面に近い。建物跡などの生活にかかわる中世関連の遺構は間近では検出されていない。

平面形状はほぼ円形を呈し、上面径1.4×1.3m、底面径50cm、深さ1.6mを測る。断面形は約80cmで円筒にすぼまる漏斗状である。

埋土は全体に締まりがなく、土塊状の堆積層も見られないことから大半は自然の埋没によると思われる。

出土遺物は検出されていない。

6号井戸（第43図 PL10-4）

北部掘立柱建物群の北西隅にあり、33号掘立柱建物跡と1部重複するが、これより新しい時期の所産である。検出井戸では7号井戸とともに最も深い井戸である。

平面形状はほぼ円形を呈するが、上縁はやや西に広がる。上面径2.0×1.85m、底面径65cm、深さ4.1mを測る。上位は大きく開き、約1mで筒状になり断面形は漏斗状を呈する。木柵などの痕跡はなく素掘りである。壁面は崩落などによる荒れは少ないが、使用年月の長さを思わせる涌・帯水による壁面の凹みがある。深さ1.5mで著しい湧水があり、最も貯水量のある井戸である。

埋土は底面から約1mより上位で塊状土層をなし、人為的埋没が行われている可能性が高い。

出土遺物はとくに最上位で投げ込まれたと考えられる板碑・石臼などのほか、拳大から20cm大の礫が多数検出されている。下位では、竹・葺などの植物遺体のほか昆虫・軟質陶器・曲物蓋板・棍棒状木製品・獣骨（タヌキ）上下顎骨などが出土している。底面近くは泥土化が進み自然堆積である。遺物は上位と下位に多く、中位からの出土はない。

第3章 遺跡の概要

7号井戸（第44図 PL10-5）

北部掘立柱建物群の北端にあり、一部は調査区域外にかかる。南に37号掘立柱建物跡が近接する。8基の井戸跡の中で最も上面開口部が大きい。

平面形状はやや西に大きく開口するが円形に近い。上面径4×3.4m、底面は1辺80cmの方形を思わせる掘形である。深さは4.1mを測り、6号井戸と同じ深度である。大きく開いた上位から約1.5mで筒形になり、断面漏斗状になる。木杵などの痕跡は認められず素掘井戸であろう。涌水点は深さ約2mから始まり複数あると思われる。壁面の崩落に凹凸も多く、使用年数の長さを思わせる。

埋土には人頭大から大小100個以上の礫が見られ人為的埋没と考えられる。

出土遺物は上位より軟質陶器片が出土しているが、礫が群中には石製品は見られない。下位には先端加工の杭状樹皮付木製品や青味の残る竹類が出土している。

8号井戸（第43図 PL10-6）

北部掘立柱建物群の南東に位置し、16号掘立柱建物跡と接してある。8号溝と重複し、これより古い時期の所産である。

平面形状はほぼ円形をなし、上面径1.1m、底面径80cm、深さ1.65を測る。上面開口と底面径の差は少なく円筒形素掘である。底面からの涌水は比較的多いが、底近くの泥土化は見られない。

埋土砂質土を主体にするが暗褐色土が塊状にあり、人為的埋没が窺われる。

出土遺物はなく、所属時期は不明確であるが、浅間As-B軽石粒などの混入から中世であろう。

(6) 土坑

3号土坑（第45図）

58区の北東端に位置し、2号・3号掘立柱建物跡縄張りとは重複するが、埋土からこれより新しい。長軸1.78m、短軸0.44m、深さ30cmの隅丸長方形で、長軸方向は南北である。埋土は浅間As-B軽石粒が攪拌状態で混じる砂質暗褐色土。中世または以降に属す。出土遺物なし。

4号土坑（第45図）

67区南西端に位置し、5号土坑に近接する。長軸1.2m、短軸0.72m、深さ20cmの隅丸長方形で、長軸方向は東西である。埋土は浅間As-B軽石粒を多く含む暗褐色土。中世または以降に属す。出土遺物なし。

5号土坑（第45図）

67区南西端に位置し、4号土坑と近接する。長軸1.2m、短軸0.64m、深さ20cmの隅丸長方形で、長軸方向は東西である。埋土は浅間As-B軽石粒を多く含む暗褐色土。中世または以降に属す。出土遺物なし。

6号土坑（第45図 PL10-7）

68区南東端に位置し、2号溝と重複するが、これより新しい。西に10号土坑と隣接する。西側は攪乱土坑により消失。径1.95mの円形になるか。深さ47cmで断面形状はすり鉢状をなす。埋土は上位層を含む粘性土が水平堆積する。人為的埋土であろう。出土遺物は中位から底面にかけて、板碑・土器小片・小礫^{かわらけ}などがある。中世に属する。

10号土坑（第45図 PL10-8）

68区南東端に位置し、2号溝と重複するが、これより新しい。東に6号土坑と隣接する。西半は調査区域外に及び、径1.5mの円形になるか。深さ20cmで掘形断面は皿状をなす。埋土は浅間As-B軽石粒を含む暗褐色土で自然埋没と考えられる。底面には大小15個（20～10cm）の角礫・円礫が南半部に組石状に置かれる。

中世または以降に属す。埋土上層より馬歯1本が出土。

14号土坑（第45図）

68区南東部に位置する。東西1.3m、南北1.2mの不整形土坑である。深さ20cmで断面皿状を呈する。埋土は炭化物・焼土粒を含む暗褐色土である。出土遺物なし。中世に属するか。

15号土坑（第45図）

68区北部建物群中西寄りに位置し、11号掘立柱建物跡の縄張り内にある。16号土坑と重複するが、新旧は不明。東西1.3m、南北1.35mの円形土坑である。深さ20cmで断面皿状を呈する。埋土中層は浅間As-B軽石粒を主体に、炭化物・焼土が塊状に混じる。壁・底面とも被熱の痕跡なく、燃焼施設の可能性は少ない。埋土2層上層より熙寧元宝（北宋銭）1点出土。中世に属する。

16号土坑（第46図）

68区北部建物群中西寄りに位置し、11号掘立柱建物跡の縄張り内にある。15号土坑と重複するが、新旧は不明。東西1.2m、南北1.1mの楕円形土坑である。深さ46cmを測る。埋土は下位に厚く、炭化物を多く含む粘性土塊を混じえる砂質暗褐色土で、人為的埋土であろう。埋土上位より天聖元宝（北宋銭）1点が出土する。中世に属する。

17号土坑（第46図）

68区南東部、建物群の南東端にある。南半は攪乱土坑によって消失している。径1mの円形土坑になろう。深さ75cmである。埋土には基盤層の暗褐色土・黄褐色土が塊状に入り、人為的埋土であろう。出土遺物はない。中世または以降に属する。

18号土坑（第46図）

68区南東部に位置する。16号掘立柱建物跡と重複し、これより新しい。東西1.3m、南北1.1mの楕円形土坑である。深さ32cm、底面は緩く波打つ。埋土は黒・灰色粘土塊を含む砂質土。出土遺物はない。中世または以降に属する。

19号土坑（第46図）

68区北部にあり、北部建物群の北端に位置する。南北0.9m、東西0.95、深さ15cmの略円形土坑である。埋土は締まりのよい砂質（浅間As-B軽石主体）土である。出土遺物はない。中世または以降に属する。

21号土坑（第46図 PL11-1）

67区南西部端に位置する。1辺1.2m、深さ70cmの隅丸方形土坑である。壁面の荒れはなく、底面中央部が僅かに窪む。埋土は混入物の異なる黒褐色土。出土遺物はない。中世または以降に属する。

24号土坑（第46図 PL11-2）

68区の東部に位置し、北部建物群中北側にある。長軸1m、短軸0.65m、深さ20cmの隅丸長方形で、長軸方向は南北である。埋土は砂質で浅間As-B軽石粒主体である。中世または以降に属す。出土遺物なし。

28号土坑（第46図）

68区やや東側、北部建物群中にある。南半は耕作溝により消失するが、1m弱の円形になろう。深さ10cmたらずの断面皿状になる。土坑中には15~20cmの角礫数個が検出された。埋土は締まりのない砂質土。出土遺物は礫に混じり石臼片がある。中世に属する。

29号土坑（第46図 PL11-4）

68区東側に、北部建物群中北寄りにある。長径1.53m、短径0.73m、深さ20cmの楕円形である。長径方向は南北。埋土は砂質で浅間As-B軽石粒主体である。出土遺物は埋土中より土器片、皇宋通宝（北宋銭）

第3章 遺跡の概要

1点がある。中世に属する。

30号土坑（第47図 PL11-5・6）

68区東側、北部建物群中北寄りにある。40号土坑とともに34号掘立柱建物の縄張り内にあり、建物に付随する施設の可能性がある。長軸3.05m、短軸0.9m、深さ34cmの隅丸長方形を呈するが、北半はやや膨らみをもつ。長軸方向は南北である。土坑内の南側には最大50cmの礫数個が埋まる。埋土は浅間As-B軽石粒主体砂質土に黄褐色粘質土塊が混じる。上・下層は水平堆積土で人為的埋土であろう。遺物は礫に混ざり、軟質陶器片口鉢が出土している。中世に属する。

31号土坑（第47図 PL11-7）

68区東側、北部建物群中にあり、24号掘立柱建物跡の縄張り内にある。南端は耕作溝で消失するが、長軸1.6m、短軸1.0m、深さ50cmの隅丸長方形の土坑になろう。長軸方向は南北である。埋土は浅間As-B軽石粒を主とした砂質土で単層。出土遺物なし。中世に属しよう。

32号土坑（第47図）

68区東側、北部建物群中にある。長軸1.65m、短軸1.15m、深さ30cmの長方形土坑である。長軸方向は南北である。埋土は浅間As-B軽石粒主体砂質土に黄褐色土塊が混じる人為的埋土であろう。出土遺物なし。中世に属しよう。

40号土坑（第47図）

68区東側、北部建物群中北寄りにある。30号土坑とともに34号掘立柱建物の縄張り内にあり、建物に付随する施設の可能性がある。長軸1.55m、短軸0.7m、深さ20cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世に属しよう。

41号土坑（第47図）

68区東側、北部建物群の北寄りにある。長軸1.45m、短軸0.85m、深さ30cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。底面は小さく凹凸がある。出土遺物はなし。中世に属しよう。

42号土坑（第47図）

68区東側、北部建物群北寄りにある。長軸2.1m、短軸0.76m、深さ30cmの長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世に属しよう。

43号土坑（第47図）

68区東側、北部建物群中にある。長軸2.3m、短軸0.46m、深さ40cmの長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世に属しよう。

44号土坑（第48図）

68区東側、北部建物群中にある。長軸1.65m、短軸0.56m、深さ45cmの長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世に属しよう。

45号土坑（第48図）

68区東側、北部建物群中にある。長軸2.0m、短軸0.56m、深さ38cmの長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世に属しよう。

46号土坑（第48図）

68区東側、北部建物群の南寄りにある。1辺0.9m、深さ30cmの隅丸長方形土坑である。埋土は浅間As-B軽石粒主体の単一砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

47号土坑 (第48図)

68区東側、北部建物群の南空間帯にある。長軸1.48m、短軸0.39m、深さ35cmの長方形土坑である。長軸方向は南北。底面は中央が緩く窪む。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

48号土坑 (第48図)

68区南東、北部建物群の南空間帯にある。1.1×1.05m略円形土坑である。底面は中央が落ち込み2段となる。上位面の深さ15cm、中央部は25cmである。埋土は粘性のある黒色土。出土遺物なし。時期不明。

49号土坑 (第48図)

68区南東、北部建物群中南寄りにある。長軸1.32m、短軸1.02m、深さ38cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は粘性暗褐色土で炭化粒の混入が多い。出土遺物なし。時期不明。

50号土坑 (第49図)

68区南東、北部建物群中南寄りにある。長軸1.46m、短軸0.92m、深さ28cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は49号土坑に類似する。出土遺物なし。時期不明。

51号土坑 (第49図)

68区東側、北部建物群中にある。32号・52号～54号土坑と重複するが、切り合い関係は不明。長軸1.48m、短軸0.82m、深さ20cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質単一土。出土遺物なし。中世または以降。

52号土坑 (第49図)

68区東側、北部建物群中にある。51号土坑と重複するが新旧は不明。西端の掘形は消失。長軸1.2m (推定)、短軸0.5m、深さ15cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質単一土。出土遺物なし。中世または以降。

53号土坑 (第49図)

68区東側、北部建物群中にある。51号・54号土坑と重複するが、新旧は不明。北西部は54号土坑との切り合いで消失。長軸0.95m、短軸0.7m、深さ20cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

54号土坑 (第49図)

68区東側、北部建物群中にある。53号土坑と重複するが新旧は不明。長軸1.1m、短軸0.67m、深さ14cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

56号土坑 (第49図)

68区東側、北部建物群の北寄りにある。42号土坑と重複し、これより古い。長軸1.47m、短軸0.47m、深さ24cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒塊・黒色粒質土塊を含む暗褐色。出土遺物は埋土中より土器片^{かわらけ}がある。中世に属しよう。

57号土坑 (第49図)

68区東側、北部建物群の北寄りにある。58号土坑と重複し、これより新しい。長軸2.05m、短軸0.7m、深さ30cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

58号土坑 (第49図)

68区東側、建物群の北寄りにある。57号土坑と重複するが、これより古い。長軸2.38m、短軸0.45m、深

第3章 遺跡の概要

さ23cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

59号土坑 (第49図)

68区南東、北部建物群中南寄りにある。長軸1.5m、短軸0.97m、深さ20cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。底面の小穴は付随しない。埋土は炭化物混入の粘性暗褐色土。出土遺物なし。時期不明。

61号土坑 (第50図 PL11-8)

67区南西部にあり、東半は調査区域外。長軸1.7m以上、短軸1.0m、深さ58cmの長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土にLoam塊が混ざる。出土遺物なし。中世または以降。

62号土坑 (第50図 PL12-1)

68区北西部にある。周辺は後世削平が著しく遺存状態は不良。長軸1.65m、短軸0.8m、深さ10cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

63号土坑 (第50図 PL12-2)

68区北西部にある。64号土坑と重複するが、これより古い。長軸は64号土坑によって大半は消失し、短軸1m、深さ22cmの長方形または方形土坑であろう。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

64号土坑 (第50図)

68区北西部にあり、63号土坑と重複し、これより新しい。北東隅は攪乱によって壁線の1部が消失。長軸1.8m、短軸1.0m、深さ28cmの長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は63号土坑と類似し、浅間As-B軽石粒主体の砂質土。出土遺物なし。中世または以降。

65号土坑 (第50図 PL12-3)

68区北部にある。長軸2.0m、短軸1.25m、深さ35cmで西壁線が緩く膨らむの長方形土坑である。長軸方向は南北。埋土は浅間As-B軽石粒主体の砂質土で締まりはない。上半部は後世土地改良時の盛土で締まりは強い。出土遺物なし。中世または以降。

66号土坑 (第51図 PL12-4)

68区中央部にある。筋状の落ち込みで西側が切られる。90×90cm、深さ20cmの歪んだ方形または円形土坑である。埋土は砂質暗褐色土。出土遺物なし。中世または以降。

67号土坑 (第51図 PL12-5)

68区中央にある。周辺の削平により遺存状態は不良。長径3.9m、短径2.0m、深さ20cmの楕円形土坑である。長径方向は南西-北東。底面は緩くすり鉢状に窪む。埋土は砂質暗褐色土で締まりがある。出土遺物なし。中世または以降。

68号土坑 (第51図 PL12-6)

68区中央にある。南西側は調査区域外に入る。長軸1.8m、短軸1.6mの隅丸長方形土坑になろうか。民家跡のため、削平が著しく深さは痕跡程度である。出土遺物なし。時期不明。

69号土坑 (第51図 PL12-7)

68区北部にある。長軸1.85m、短軸0.65m、深さ40cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は南北。南から東壁線は削平によって消失する。埋土は砂質暗褐色土。出土遺物なし。中世または以降。

70号土坑 (第52図)

68区北部にある。長軸1.05m、短軸0.9m、深さ35cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は砂

質暗褐色土で締まりなし。出土遺物なし。中世または以降。

71号土坑（第52図）

68区北西部にある。長軸1.72m、短軸0.5m、深さ20cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は砂質暗褐色土。出土遺物なし。中世または以降。

74号土坑（PL12-8）

68区北部にある。北・東の一部は攪乱により壁線が跡切れるが、長径2.5m、短軸2.0m、深さ27cmの楕円形土坑である。断面は緩く皿状で、底面には小さな凹凸がある。埋土は砂質暗褐色土。出土遺物なし。中世または以降。

75号土坑（第52図）

68区北部にある。長軸2.05m、短軸0.85m、深さ60cmの隅丸長方形土坑である。長軸方向は東西。埋土は砂質暗褐色土。出土遺物なし。中世または以降。

(7) 墓及び火葬跡（茶毘跡）（第16図）

墓制に関係する遺構は16基検出した。これらの多くは、1号溝を区切りとする北部掘立柱建物群と南部掘立柱建物群の周辺に分布し、土壙墓と火葬跡（茶毘跡）がある。調査結果から両者に時間的な前後関係があると考えられる。土壙墓の数例は、掘立柱建物跡や館跡に伴う遺跡・井戸跡など重複し、これらより新しいこと。火葬跡（茶毘跡）は、館跡の築造にあたって行われたと考えられる盛土下より検出されていることによる。火葬跡とした遺構は火葬＝火葬墓として捉えられる可能性もあり、検討を要する。

土壙墓

土壙墓は平面形から亜楕円形・隅丸長方形・円形の3種に分けられる。前二者の埋葬形態は横臥屈葬で、多くは長軸がほぼ南北にあり、頭部は北向きである。ただし1例のみ長軸が東西方向にある。棺が存在したような痕跡は認められなかったが、1号土壙墓の副葬銭に木質が付着しており、棺が使用された可能性がある。副葬品には例外なく渡来銭が、数例には土器とともに埋葬されている。いずれも中世的所産として大過ないと考える。9号土壙墓は唯一円形である。土壙縁辺には幅10cmでLoam塊が巡り座棺を埋設後に周縁を埋めたものであろう。座棺の使用は近世に多い埋葬形態である。副葬品には鉄製品・永楽通宝がある。永楽通宝については近世に至ってもある程度の量は流通していることから、9号土壙墓は近世の所産と考えられる。

土壙墓出土遺物のうち、副葬品と考えられる遺物のあり方はおおよそ3分類される。古銭は調査した土壙墓すべてに副葬される。①、古銭のみ副葬、②、古銭と土器を副葬、③、古銭と土器とその他（ここでは鉄器）である。①は1号・2号・4号～6号・9号・15号～17号土壙墓、②は10号・11号土壙墓、③は14号土壙墓である。ここではこれら副葬品種の相違に意味を見いだすことはできない。送葬儀礼の変遷を示すか、被葬者の社会的地位か、あるいは送葬施行者の恣意に帰すか、今後の検討課題である。副葬品としての古銭には埋納数に一定を欠くが、その出土位置は頭蓋部周辺ないしは胸部と法則的な厳密性が窺われる。送葬儀礼細事に関するが、民俗学からの援用・比較項目になろう。

1号土壙墓（第53図 PL13-1）

北部掘立柱建物群南東部の広場の空間にあり、西側には11号土壙墓がほぼ併置し、南東に近接して、10号土壙墓がある。

第3章 遺跡の概要

平面形状は当遺構が頭蓋骨の発見で判明したため、底面の観察から楕円形ないしは隅丸長方形を呈すと考えられる。長軸1.02m、短軸0.46mを測る。また掘込み深さは不明である。長軸方位はN-25°-Wを示す。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬である。頭蓋骨・脛骨・大腿骨が残存する。鑑定による被葬者は壮年期から熟年期前半の年令で小柄な女性が推定される。

副葬品には6枚の渡来銭があり、屍体胸部に置かれる。北宋銭の皇宋通宝・熙寧元宝・紹聖元宝で3枚は密着して判読不能である。なお3枚が密着した古銭には木質と布の付着があり、銭は埋納時には布に包まれていたと考えられる。また木質については棺の存在を窺わせる。

2号土墳墓(第53図 PL13-2)

南部の掘立柱建物群中にあり、2号・3号掘立柱建物跡と重複する。3号掘立柱建物跡の柱穴と切り合い、これより新しい時期の所産である。

平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.15m、短軸0.60m、深さ35cmを測る。長軸方位はほぼ真北を示す。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬である。頭蓋骨・脛骨・大腿骨が残存する。

副葬品には2枚の渡来銭があり、屍体の胸部あるいは腰部付近より出土している。北宋銭の天聖元宝・熙寧元宝(?)である。棺などの痕跡は認められなかった。3号掘立柱建物跡の柱穴の1つは頭蓋骨の下に検出され、新旧関係は2号墓の新しいことが判明している。

4号土墳墓(第53図 PL13-3)

南部の掘立柱建物群中にある。

平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.05m、短軸0.60m、検出面からの深さ20cmを測る。土坑掘形は2段になり、屍体部は約10cm低く掘り込まれる。長軸方位はN-4°-Wを示す。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬である。頭蓋骨・脛骨・大腿骨が残り、成人と鑑定される。

副葬品には渡来銭2枚があり、屍体の胸部あるいは腰部あたりから出土している。北宋銭祥符通宝(?)・明銭洪武通宝である。

5号土墳墓(第53図 PL13-4)

南部の掘立柱建物群中にある。

攪乱により南東半は消失するが、平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.05m、短軸0.60m、深さ20cmと推定される。長軸方位はN-8°-Eを示す。土坑掘形は壁面の傾斜が緩く、底面へなだらかに至る。埋葬形態は遺骨がほとんど残らず不明点が多いものの土坑の規模・形状から横臥屈葬、また土坑北側に頭蓋骨と思われる骨片が見られるところから頭部北向きであろう。

副葬品には渡来銭3枚が出土している。北宋銭の祥符元宝・嘉祐通宝・紹聖元宝である。

6号土墳墓(第53図 PL13-5)

南部掘立柱建物群中にあり、2号井戸と重複するが、これより新しい所産である。墓壙を設けるにあたっては、2号井戸の埋設が完全でなく埋土をして整えたと考えられる。なお2号井戸跡との重複のため形状確認が遅れ、北半の掘形を消失している。

底面の観察から、平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.02m、短軸0.55mほどで、確認壁高は約20cmを測る。長軸方位はN-2°-Wを示す。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬である。頭蓋骨周辺には人頭大の角閃石安山岩が置かれるが用途は不明である。頭蓋骨・大腿骨が遺存する。性別は男性と考えられている。

副葬品には古銭2枚が密着して出土するが、銭種の判読はできない。

9号土墳墓(第53図 PL13-6)

北部掘立柱建物群の南東部広場の空間に位置し、北に近接して2号火葬跡がある。

平面形状は、土壇墓中唯一の円形である。上半部は漏斗状に大きく開き、下半は筒状になる。上面径約1.1m、底面径45cm、深さ90cmを測る。土層観察からは中央部が陥没した状況を示し、多少の盛土がなされているようである。また土壇掘形縁周には幅10cm程度で黄褐色土（Loam 塊）が巡り、人為的な埋土がなされている。埋葬形態は棺などの痕跡は認められないが、掘形形状や陥没土層から座棺を使用の葬法であろう。頭蓋骨片・四肢骨などが残り、鑑定では成人と考えられている。

副葬品には4枚の渡来銭と柄状の木質が残る棒状鉄製品がある。古銭は北宋銭祥符（元 or 通）宝1枚と明銭永樂通宝3枚である。埋葬形態から近世の所産とも考えられる。

10号土壇墓（第54図 PL13-7）

北部掘立柱建物群の南東部広場の空間に位置し、8号溝と重複するが、これより新しい時期の所産である。また北西に近接して1号・11号墓がある。

平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.15m、短軸0.76m、深さ35cmを測る。長軸方位はN-2°-Eを示す。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬である。頭蓋骨・上腕骨・撓骨・脛骨・大腿骨などが遺り、鑑定によれば虫歯の多い30才以上の女性とされる。

副葬品には土器・渡来銭がある。古銭は8枚で頭部から胸部にかけて置かれている。北宋銭の皇宋通宝・至和通宝・元豊通宝・元祐通宝・政和通宝が各1枚、明銭の永樂通宝が3枚である。

11号土壇墓（第54図 PL13-8）

北部掘立柱建物群の南東広場の空間に位置し、1号・10号墓と近接している。

平面形状は長方形を呈し、長軸0.78m、短軸0.49m、深さ15cmを測り、土壇墓中最も小規模である。長軸方位はN-2°-Wを示している。土坑掘形は底面・壁面ともていねいである。埋葬形態は骨の残りが悪く不明であるが、歯が北側に検出され、また土坑の形状などから頭部北向きの横臥屈葬であろう。歯の鑑定によれば、被葬者は6~7才ぐらいの小児といわれる。他より掘形規模の小さいのと符合する。

副葬品には土坑南端の東・西隅に土器各1個が置かれ、頭部にあたる北側に渡来銭3枚がある。古銭は唐銭の開元通宝・北宋銭の天禧通宝・元祐通宝である。

12号土壇墓（第54図 PL14-1）

北部掘立柱建物群の南東部に位置し、15号掘立柱建物跡・1号火葬跡と近接する。

平面形状は長楕円形を呈し、長軸1.08m、短軸0.52m、深さ0.46mを測る。長軸方位はN-17°30'-Eを示す。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬である。頭蓋骨・上腕骨・脛骨・大腿骨等ほぼ前身が遺存する。鑑定によれば壮年の男性と考えられ、大腿骨が左右非対称で右の骨体が膨隆し骨の病気に起因する可能性があるという。

副葬品には北宋銭の祥符通宝・治平元宝・熙寧元宝、元銭の至大通宝、明銭の洪武通宝と判読不可な古銭1枚がある。

14号土壇墓（第54図 PL14-2）

南部掘立柱建物群の東、やや距離を置いて位置する。

平面形状は深い耕作溝の為明瞭ではないが、東側にやや突出する部分が不正楕円形を呈す。この突出部分が攪乱によるかは不明だが、骨及び副葬品の一部が本来の位置を示していない可能性もある。長軸1.0m、短軸0.95m、深さ0.20mを測り、長軸方位はN-9°30'-Wを示す。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬で、鉄釘1本が検出されL字に折れ曲がり棺止に用いたと考えられ、棺を用いた可能性がある。骨体は頭蓋骨をはじめ

第3章 遺跡の概要

めほぼ全身分が残る。鑑定によれば、性別は女性と考えられ、歯からは栄養失調気味な傾向も窺われるようである。

副葬品には鞘か柄部に木質の残る小刀・土器かわらけ小坏の他、9枚の古銭、北宋銭の天聖元宝・皇宋通宝・至和元宝?・熙寧元宝・元豊通宝・大観通宝・南宋銭の慶元通宝などがある。

15号土墳墓(第54図 PL14-3)

北部掘立柱建物群の南東部、調査区域際にある。

耕作等の攪乱の為平面形状は不明である。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬であろう。骨体は下顎骨・脛骨・大腿骨などの一部が残る。鑑定によれば、被葬者は歯の咬耗の進み具合から熟年期後半から老年期とされる。

副葬品には北宋銭3枚、嘉祐通宝・元祐通宝・聖宋元宝と明銭の洪武通宝がある。

16号土墳墓(第54図 PL12-4)

北部掘立柱建物群の北西側、やや距離を置いて位置する。

平面形状は当遺跡検出土墳墓中、やや特異な長・短軸の差の小さな長方形を呈する。長軸1.05m、短軸0.9m、深さ0.1mを測り、長軸方位はN-14°-Wを示す。当墓検出地点は調査前宅地となっており、削平と盛土がなされている。また近世には耕地として利用されていたと考えられるところから、墓墳自体の上部掘形はかなり破壊を受けている。埋葬形態は頭部北向きの横臥屈葬である。骨体は頭蓋骨・脛骨・大腿骨などが残り、鑑定では骨体が細みで女性の可能性が考えられている。

副葬品には渡来銭6枚があり、後周銭の唐国通宝・北宋銭の祥符元宝・元祐通宝・元銭の至元通宝・明銭の洪武通宝などである。

17号土墳墓(第54図)

南北の掘立柱建物群の中間に位置する。北半は検出が遅れ消失してしまったが、南半の形状から、楕円形を呈すると考えられる。長軸1.2m、短軸(0.7m)、深さ15cm程度の規模と思われる。長軸方位は、他の遺構と異なり東西方向にある。骨片などは検出されず、墓墳としての確証はないが、南側残存部より渡来銭の出土があり、平面形状と合わせ墓墳として扱う。出土銭は唐銭の開元通宝である。

火葬跡

火葬跡は3基検出されている。いずれも北部掘立柱建物群の周辺にあり、建物群の北東に1基、南東部の広場的空間の2基である。

火葬跡の平面形態は、隅丸方形ないしは隅丸長方形の土坑を本体とし、いずれも煙道と考えられる凸部を有している。土坑の短軸壁際には人頭大ないしはそれ以上大型の川原石を配してあり、土坑中央部はすり鉢状に窪む構造をもつ。配された石は、土坑壁面とともに火を受けており、土坑底面と遺体に空間をつくる燃焼方法で窯的な構造を作っている。

火葬跡では火葬された人骨は細かい骨片を除き、ほとんど取骨されるのが一般的であり、火葬骨は別に埋納されるようであるが、すくなくも当遺跡内での火葬骨墓は検出されていない。遺体の火葬について、主には火葬跡の規模的な側面から、死直後の火葬は考えにくい。燃焼部本体は長軸でも1m前後の大きさで、大人の場合はそのままで不可能である。また燃焼の強さ・時間の長さなど遺構各部位の焼土化の程度から肉體そのものを火葬するには不十分である。以上の点から、火葬に際して、遺体はすでに白骨化したものであることが想定される。

1号火葬跡（第55図 PL14-5・6・7）

北部掘立柱建物跡群の南東広場の空間に位置し、12号土壌墓・2号火葬跡と近接する。

平面形態は隅丸方形を呈し、東面に先細りの煙道凸部が付く。東西軸・南北軸ともに約1m、深さは中央部がすり鉢状に窪み約20cmを測る。煙道部は東壁より約45cm突出し、先端に向かい緩い傾斜で立ち上がる。煙道凸部を基軸にする方位はN-97°-Eを示す。

本体の北・南壁に沿って7～8個の人頭大川原石が配されるが、南壁沿いの石は北壁のものとは比べ内輪に置かれる。石配上面と土坑底面には約15cmの差がある。火葬にあたって燃焼効率を計ったものであろう。検出時には配石上面に火葬に用いた薪の炭化材が覆っており、薪材には竹が少量認められた。側壁・底面の被熱程度は壁上位を除いて弱く、著しい赤色硬化は認められない。

焼骨は細片化しており、底面に多く見られた。埋土上面でも骨片が散布し取骨が行われた痕跡があり、大多数の骨はこれにより採り出されているようである。鑑定では骨片の遺存は不良ながら、骨体部位のほとんどが認められ全身に及ぶようである。北側に歯が検出されており、火葬時には頭部北向きであった可能性がある。

副葬品には6枚の古銭があり、火葬時に供献されたものである。いずれも火を受け、変形ないしは破損が著しく判読はできない。

2号火葬跡（第55図 PL15-1・2）

北部掘立柱建物跡群の南東広場の空間に位置し、1号火葬跡・12号土壌墓と近接している。

平面形態は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、東面に大きな煙道凸部が付く。長軸1m、短軸0.45m、底面は緩いすり鉢状呈し、中央部で約20cmを測る。煙道部は東壁より約35cm突出し、幅30cmの半楕円形状で本体底部より傾斜をもって立ち上がる。煙道凸部を基軸にする方位はN-80°-Eを示す。

短軸の南壁際に大型の石1個・北壁に人頭大の石2個が配されるが、機能的には1号火葬跡と同じ目的であろう。壁面全体に焼土の形成を見るが、硬化の度合は弱く、継続的な使用はされていないであろう。

焼骨はほとんど細片化しているが、当跡はこの種の火葬跡としては比較的大きな骨片が残り、取骨がやや雑なようである。歯は北東部から検出されている。取骨に際しての移動も考えられるが、1号火葬跡の遺存位置とも符合するため、火葬時には頭部北向きであろう。鑑定によれば、焼骨は下顎骨・上腕骨・脛骨・大腿骨・腰椎・仙椎等が確認され、ほぼ全身の骨が見られる。歯の調査では被火葬者は女性の可能性があるという。

出土遺物には被熱の著しい銅製品残片が検出されている。供献品の古銭であろうか。6枚である。癒着した状態で銭種などの判読はできない。

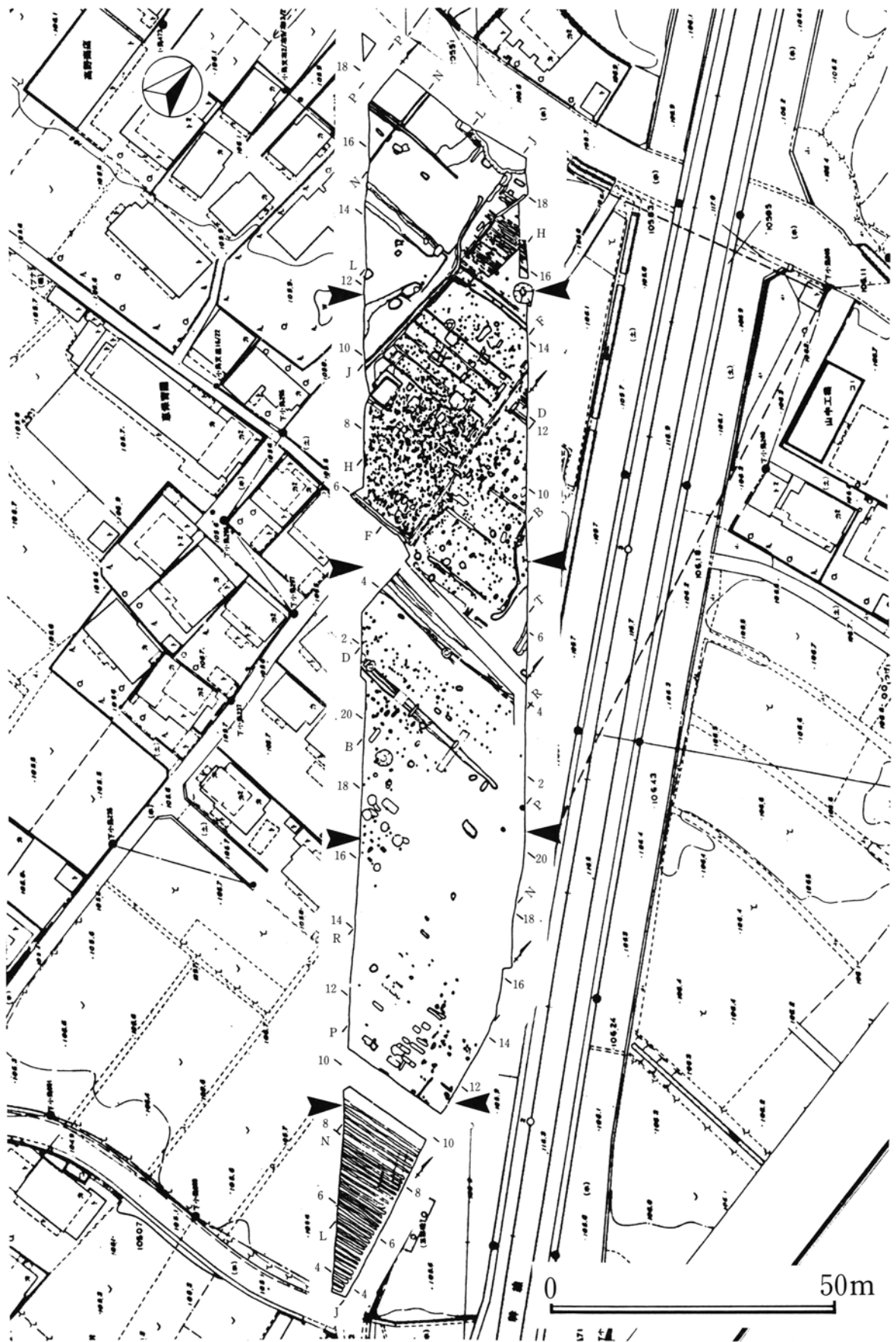
3号火葬跡（第55図 PL15-3・4）

北部掘立柱建物群の北東部に位置する。

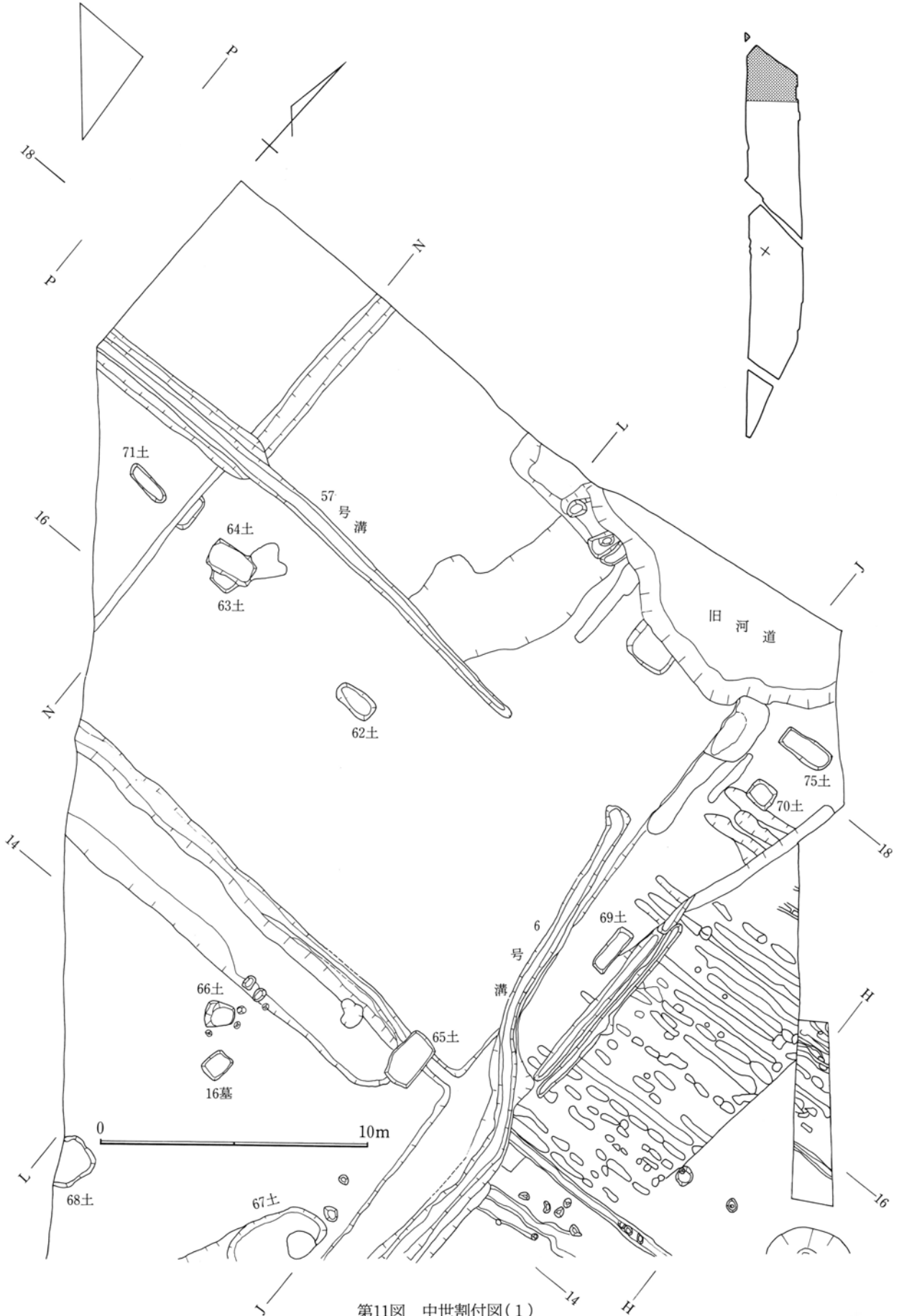
平面形態は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、東面に煙道凸部が付く。長軸0.95m、短軸0.50m、底面は平坦で深さ約20cmを測る。煙道部は東壁より約20cm突出し、幅13cmで短形である。本体底部とは約10cmの段をなし傾斜して立ち上がる。煙道凸部を基軸とする方位はN-90°-Eを示す。

短軸の南壁に1個・北壁に2個の石が配される。南壁の石は掘形いっぱいの大型である。火葬跡として現状での掘り込み面が判明した唯一の例である。掘り込み面は、浅間As-B軽石純堆積上に形成されたAs-B軽石混じり暗褐色土である。この土層は表土層直下にあり、検出面としては他の中世諸遺構と変わるところはない。しかし前述したように、掘立柱建物群の形成に伴うと推定される整地土下にあり、当遺跡における中世期でも比較的早期の遺構に属するものである。

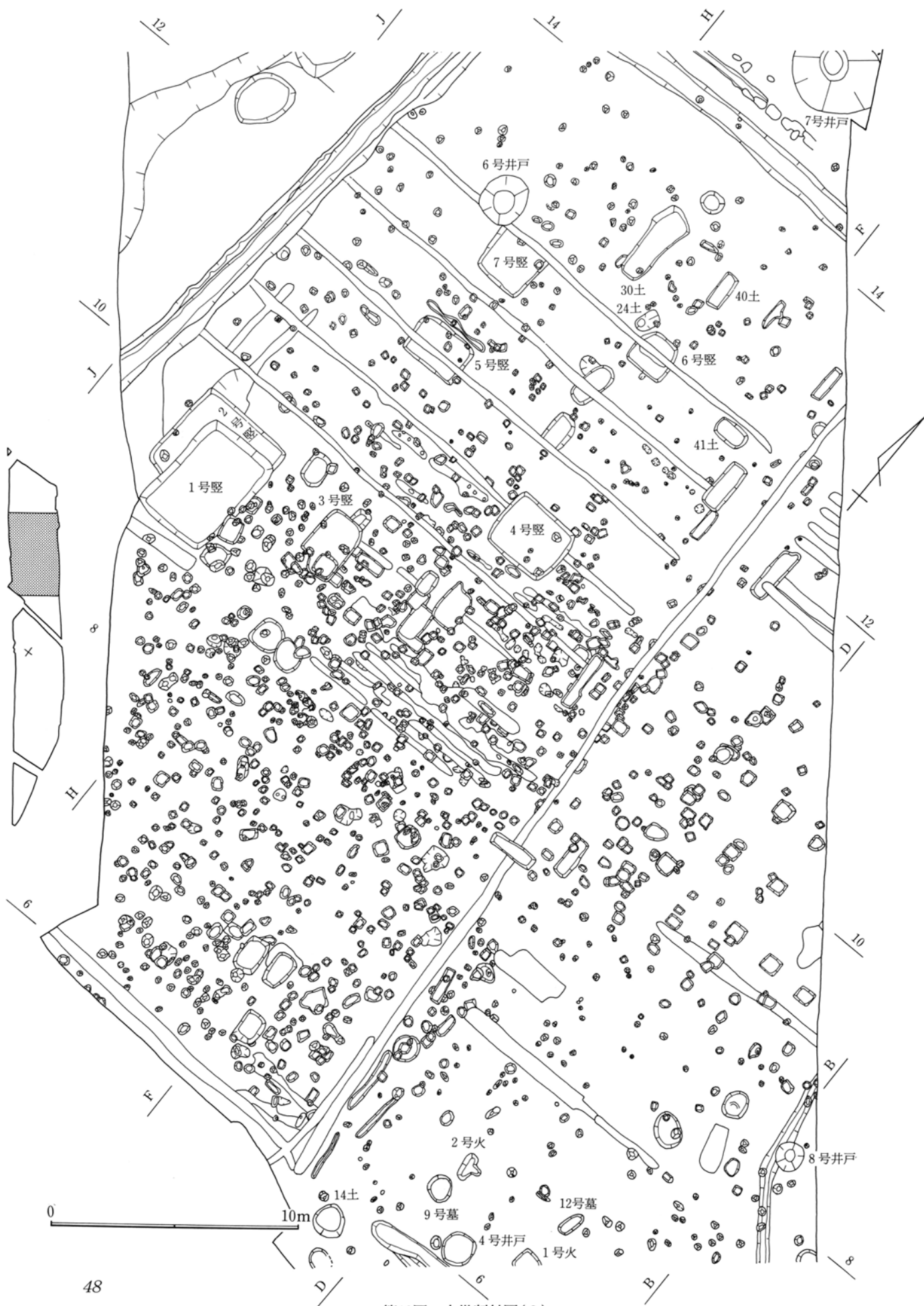
焼骨は西壁際に多く残され、取骨は雑な感じがある。供献品などは検出されていない。



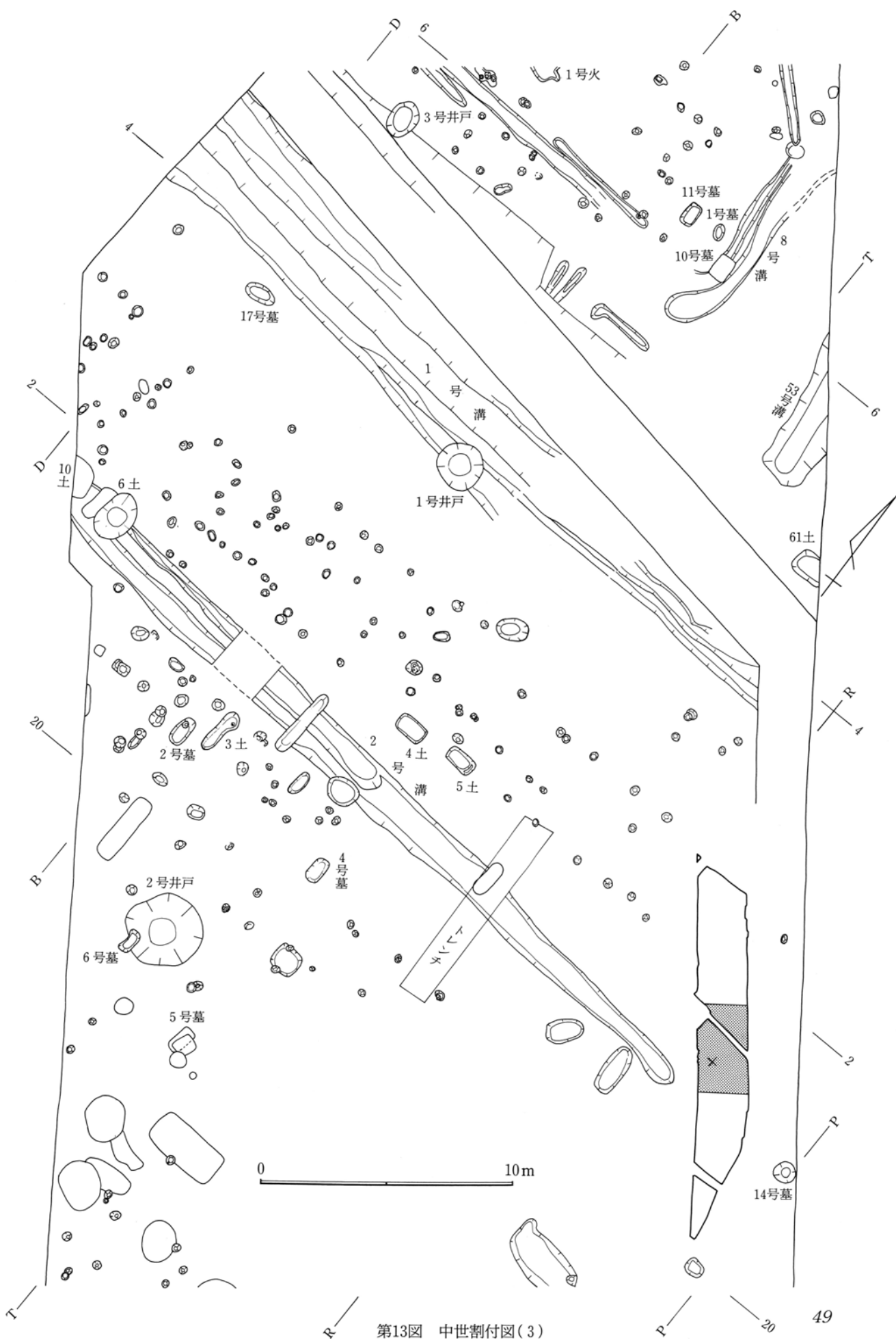
第10図 中世割付位置図



第11図 中世割付図(1)



第12図 中世割付図(2)

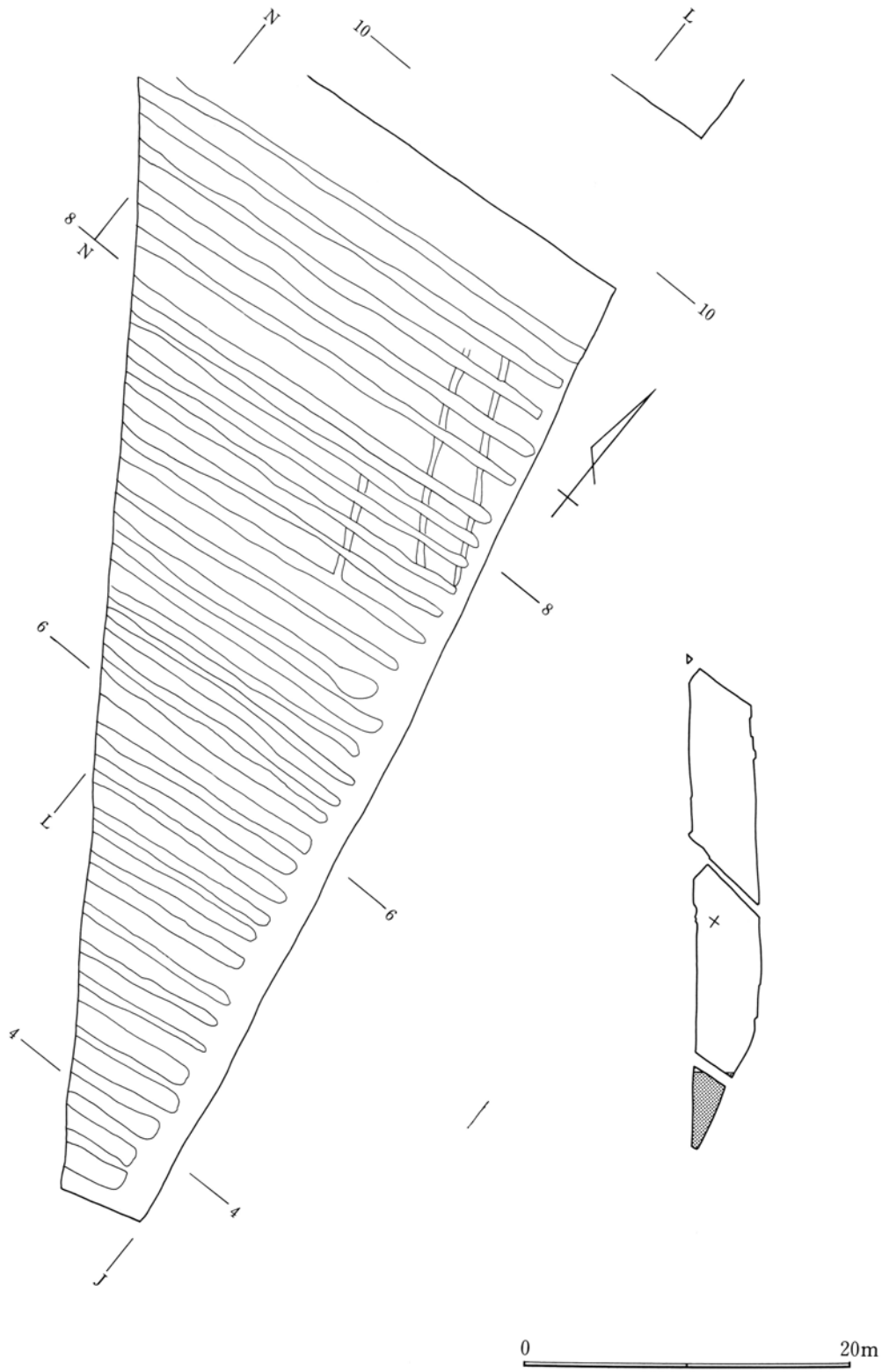


第13图 中世割付图(3)

第3章 遺跡の概要

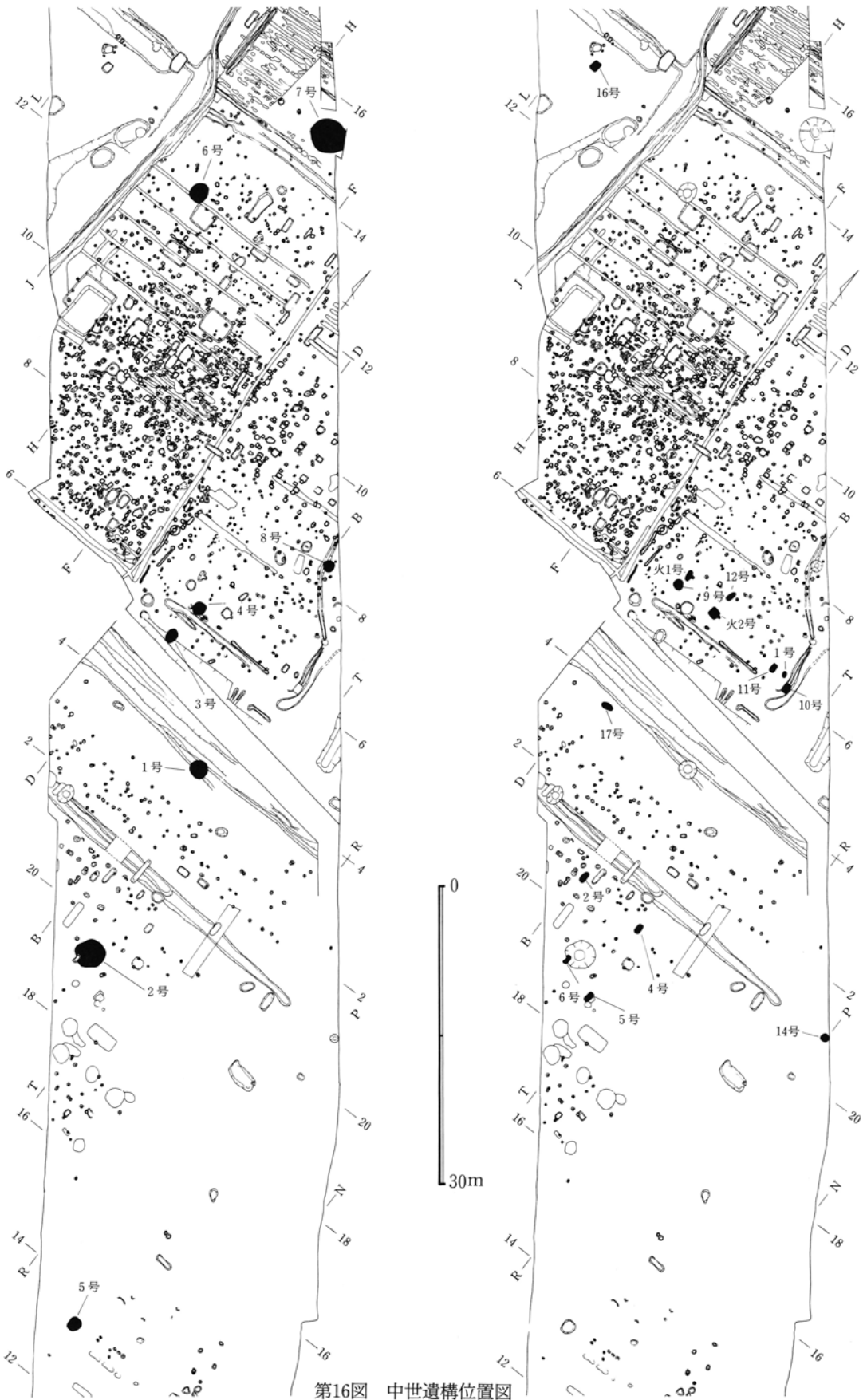


第14図 中世割付図(4)



第15図 中世割付図(5)

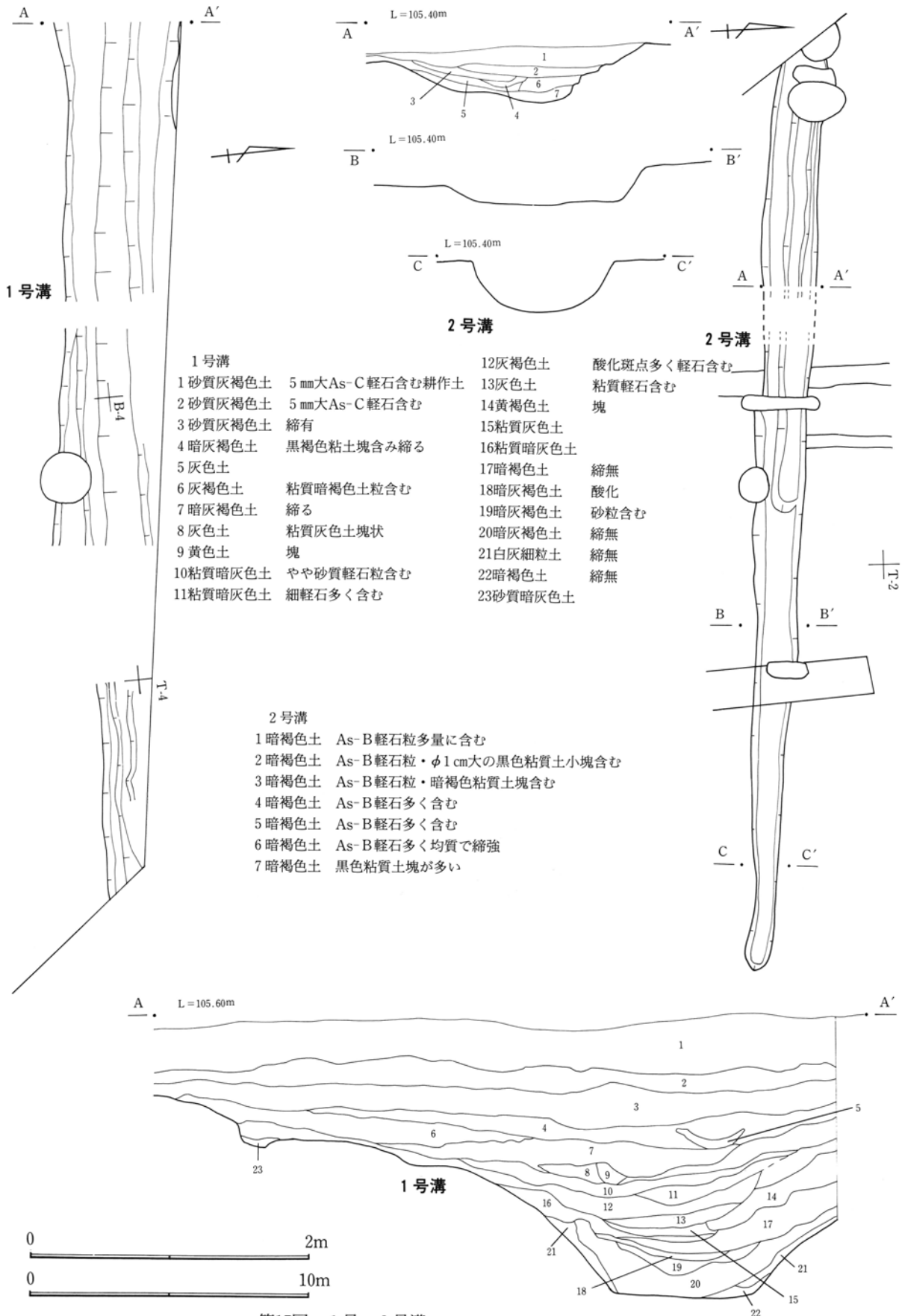
第3章 遺跡の概要



第16図 中世遺構位置図

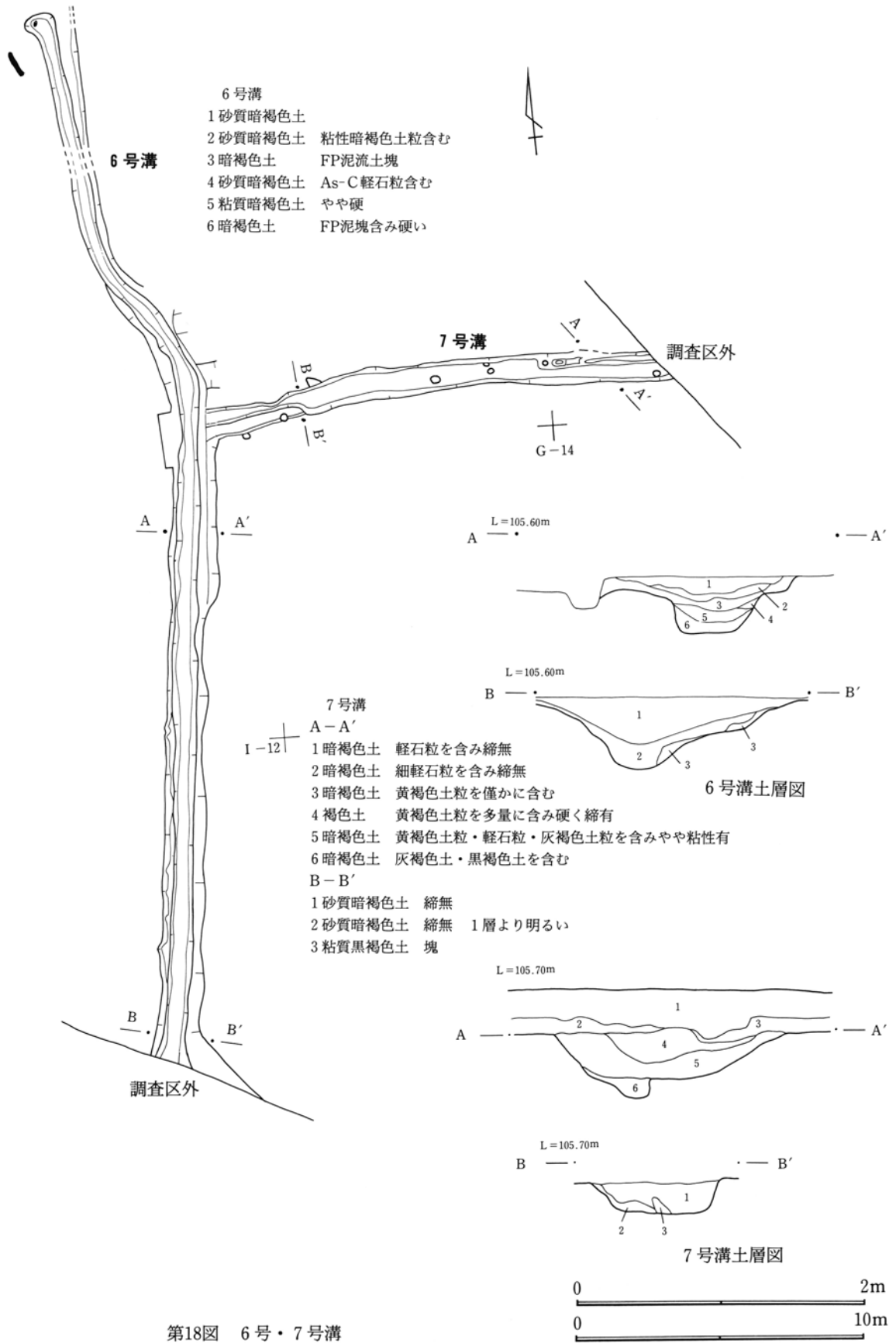
井戸跡

土墳墓・火葬跡



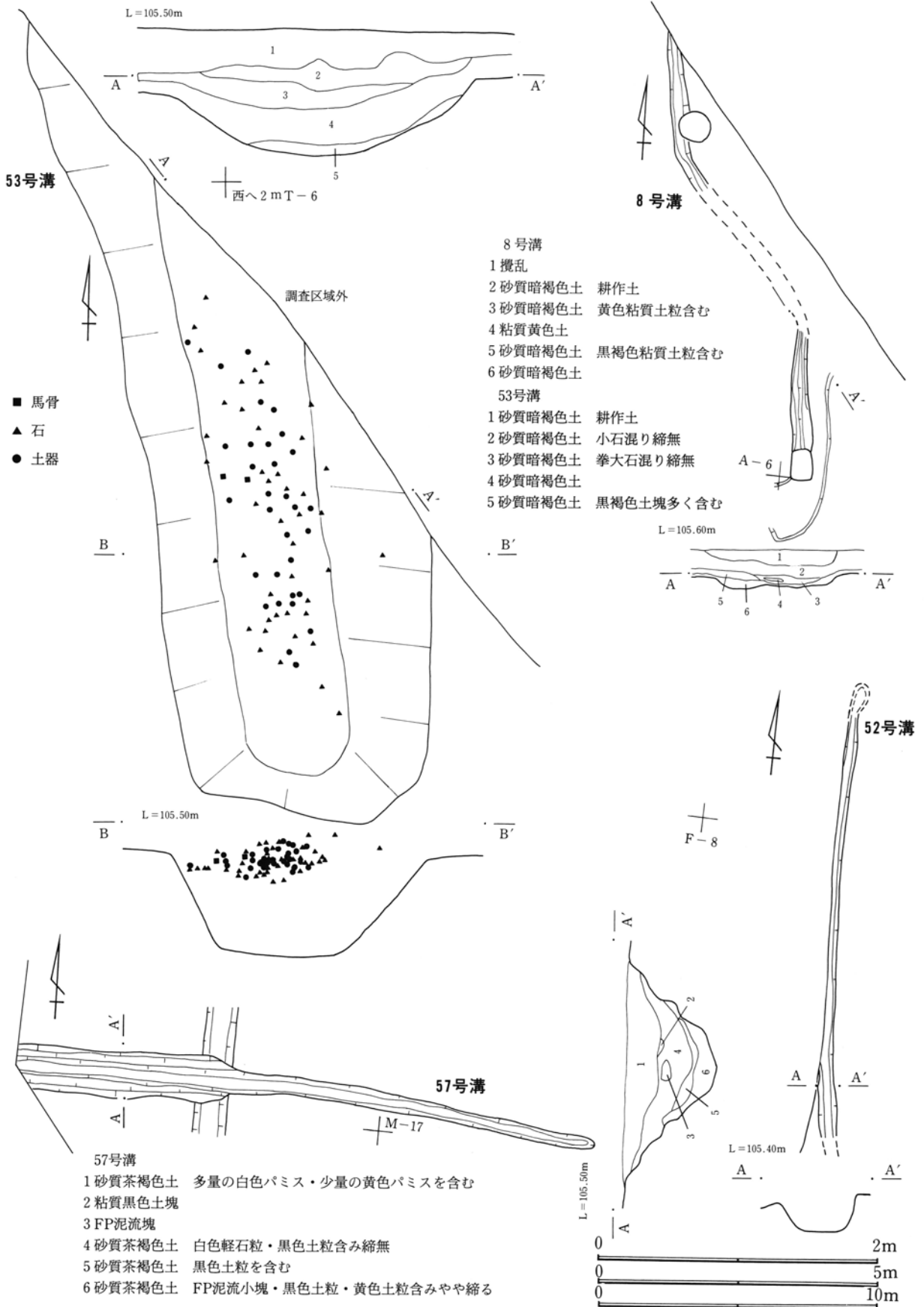
第17図 1号・2号溝

第3章 遺跡の概要



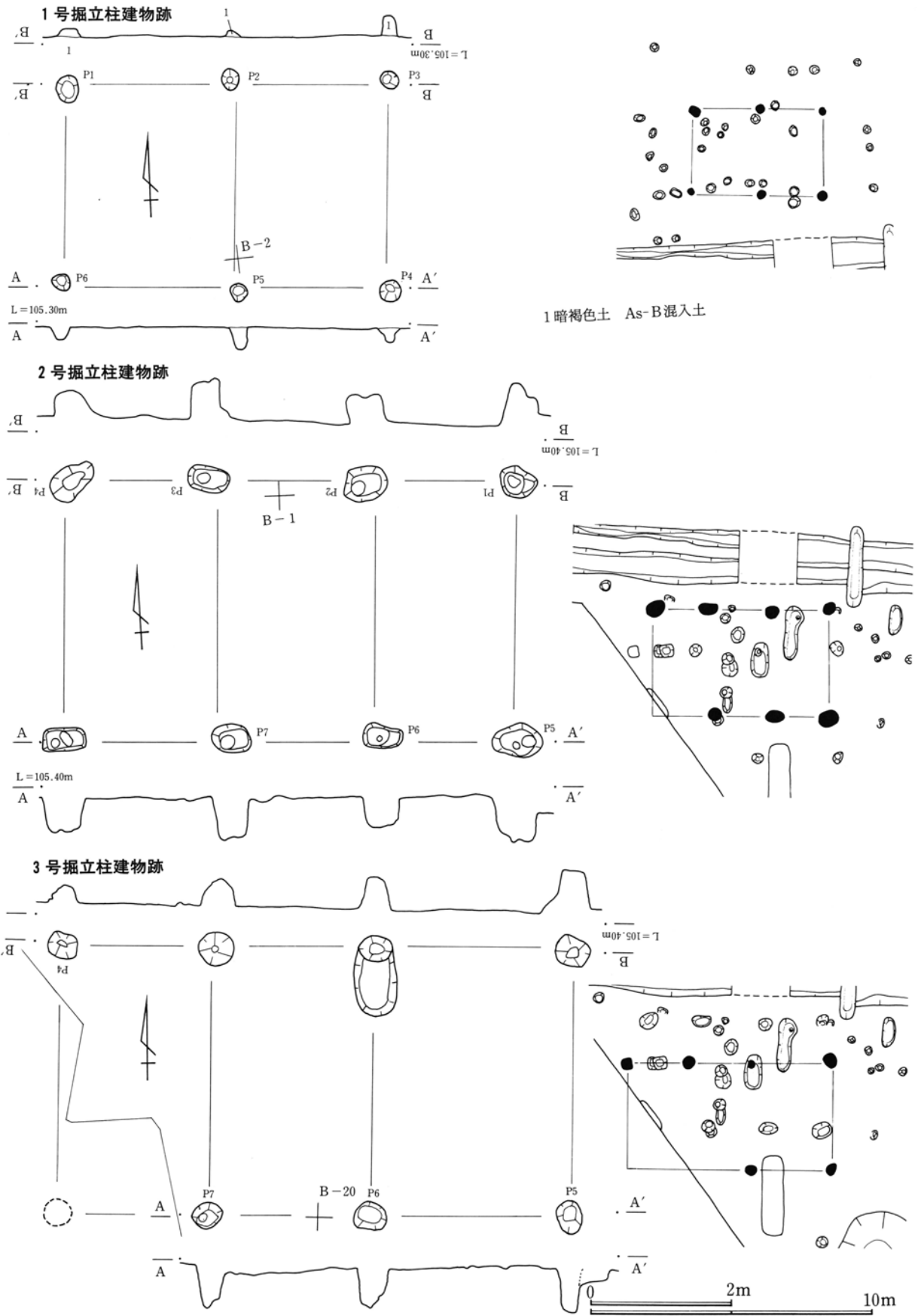
第18図 6号・7号溝

第1節 中世の遺構と遺物

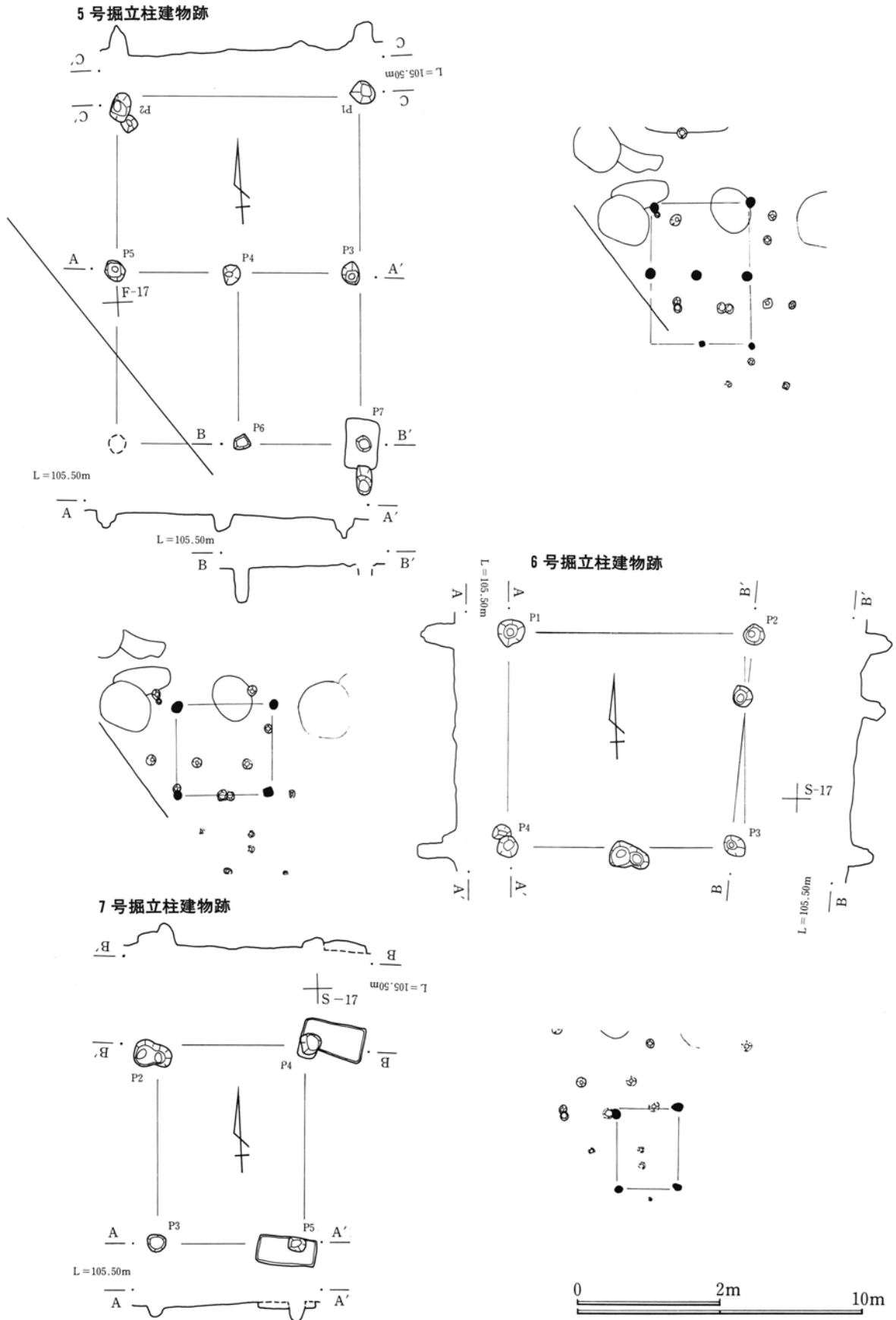


第19図 8号・52号・53号・57号溝

第3章 遺跡の概要

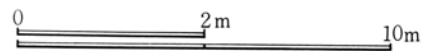
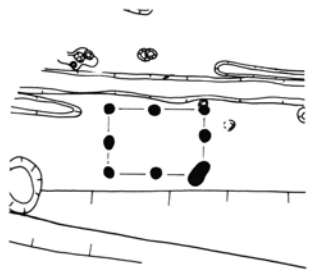
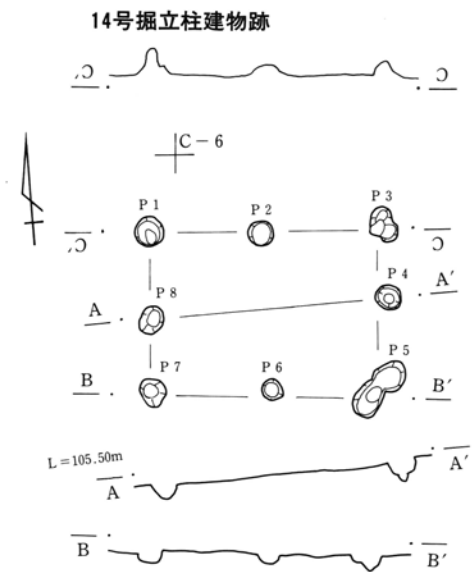
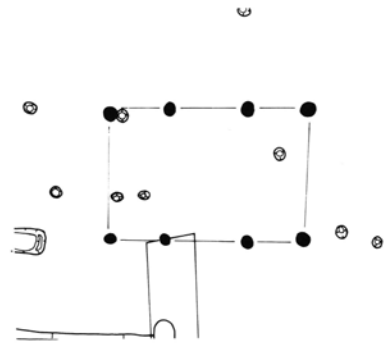
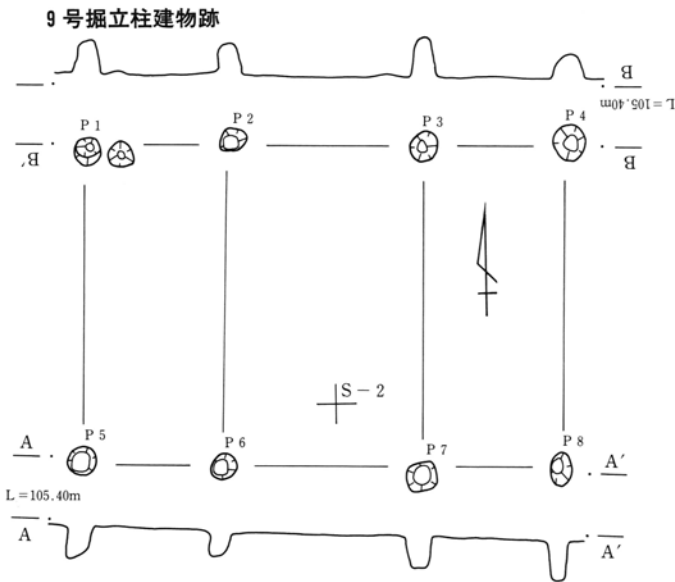
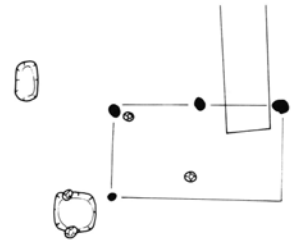
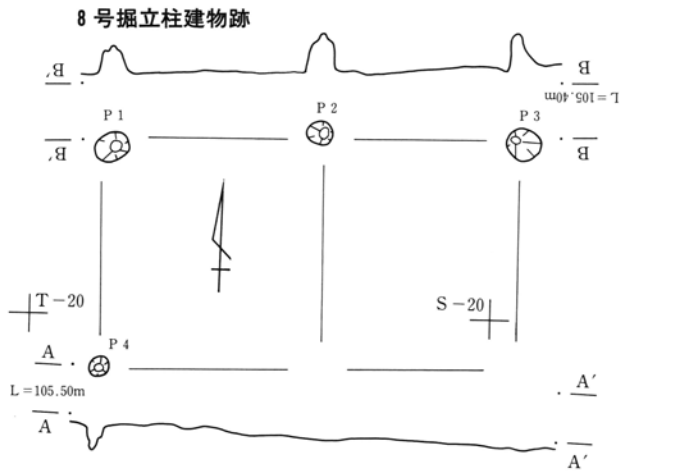


第20図 1号・2号・3号掘立柱建物跡



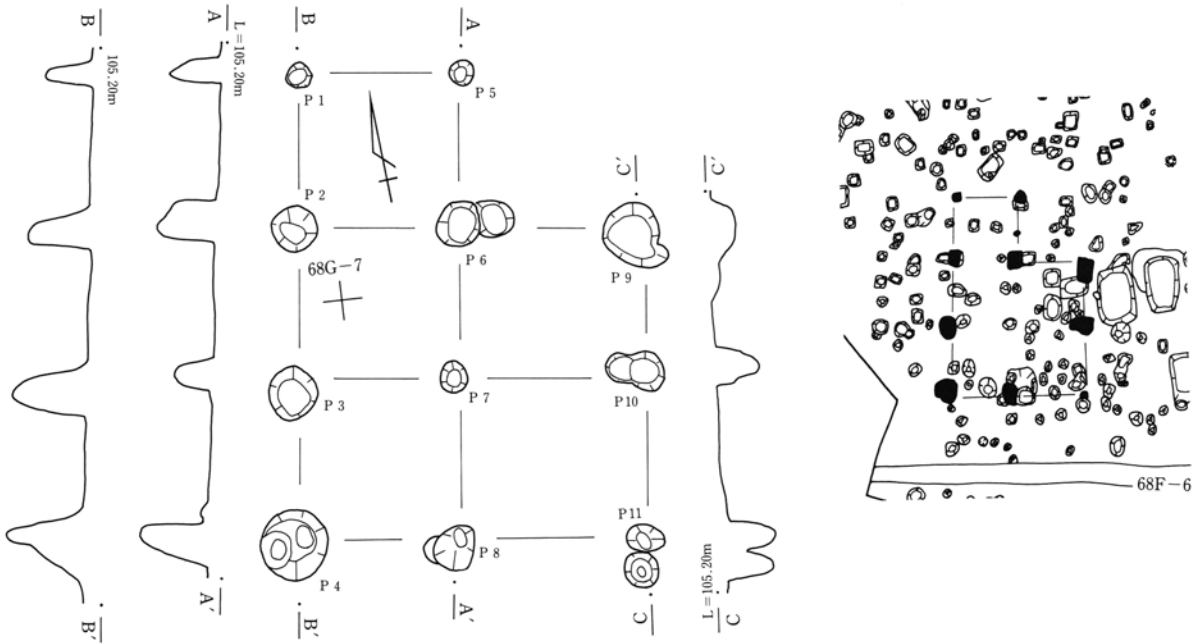
第21図 5号・6号・7号掘立柱建物跡

第3章 遺跡の概要

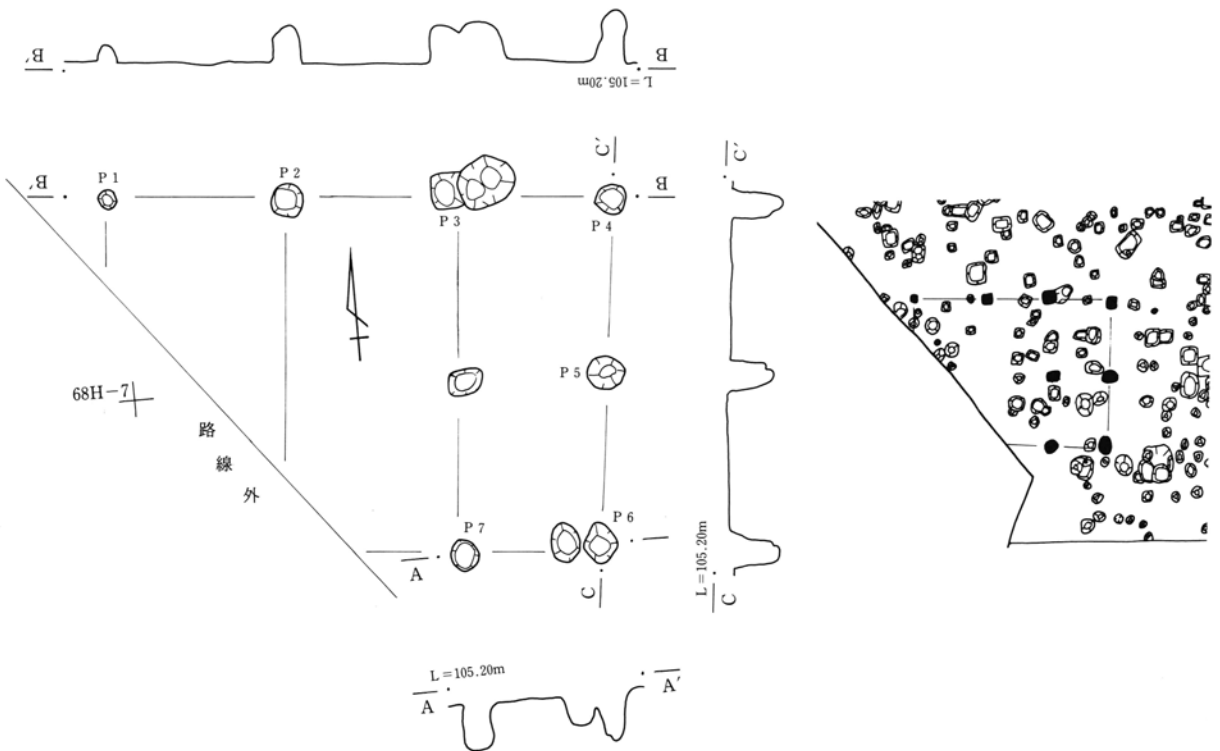


第22図 8号・9号・14号掘立柱建物跡

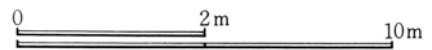
4号掘立柱建物跡



10号掘立柱建物跡

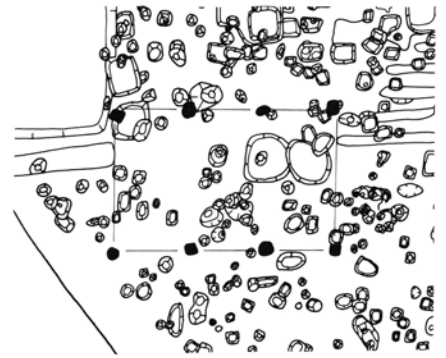
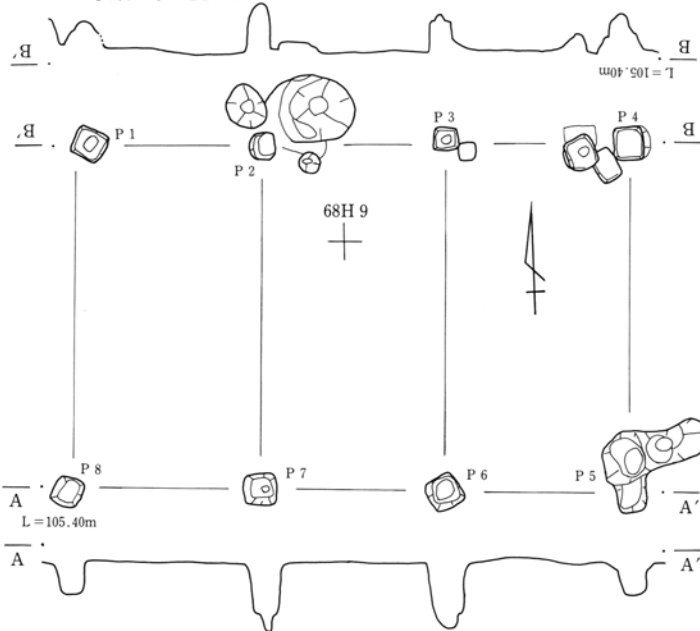


第23図 4号・10号掘立柱建物跡



第3章 遺跡の概要

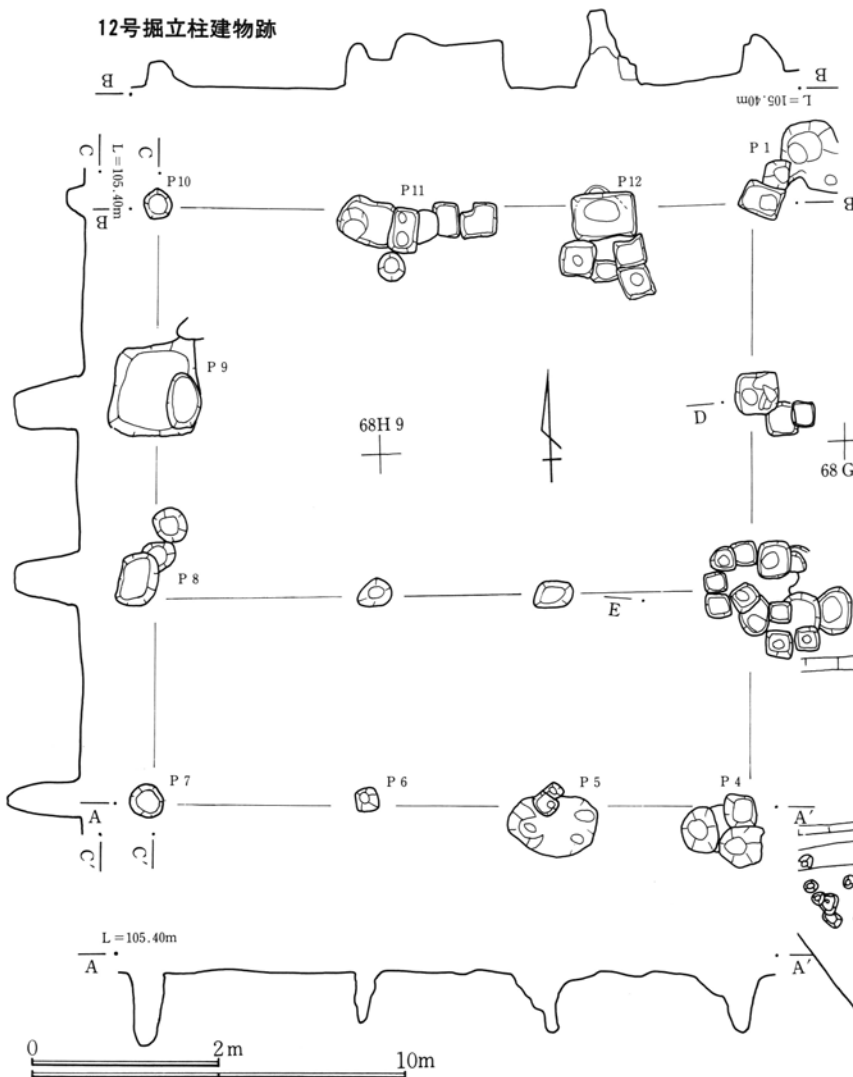
11号掘立柱建物跡



12号掘立 D-D'

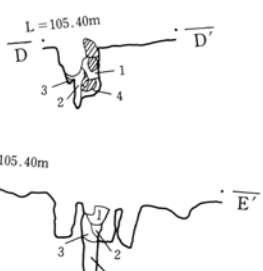
- 1 暗褐色土 Bを40%含・泥混ブロック10%含・カーボン5%以下含・しまりややあり・粘性なし・ザラザラ
- 2 暗褐色土 Bを40%含・しまりややあり・粘性弱・ザラザラ・混流無・カーボン無
- 3 黒褐色土 粘黒ブロック80%・混流20%
- 4 黒褐色土 粘黒土50%・粘性あり・しまりあり・Bなし・混流ブロック10%含む

12号掘立柱建物跡

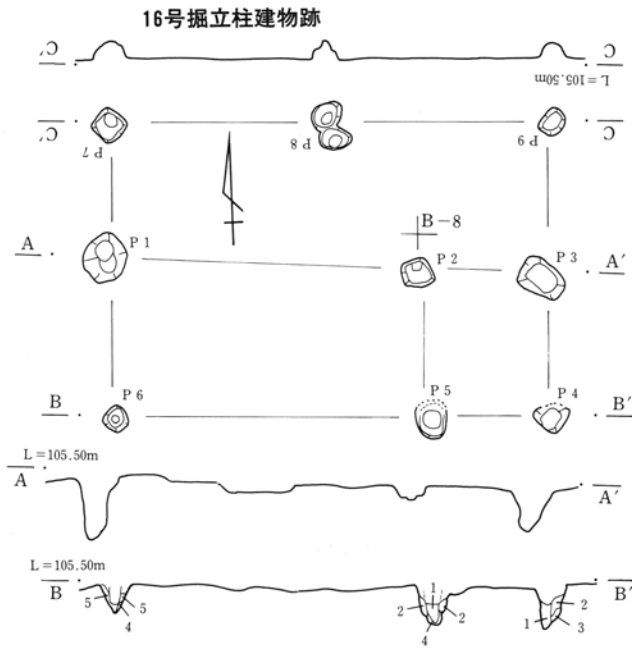


12号掘立 E-E'

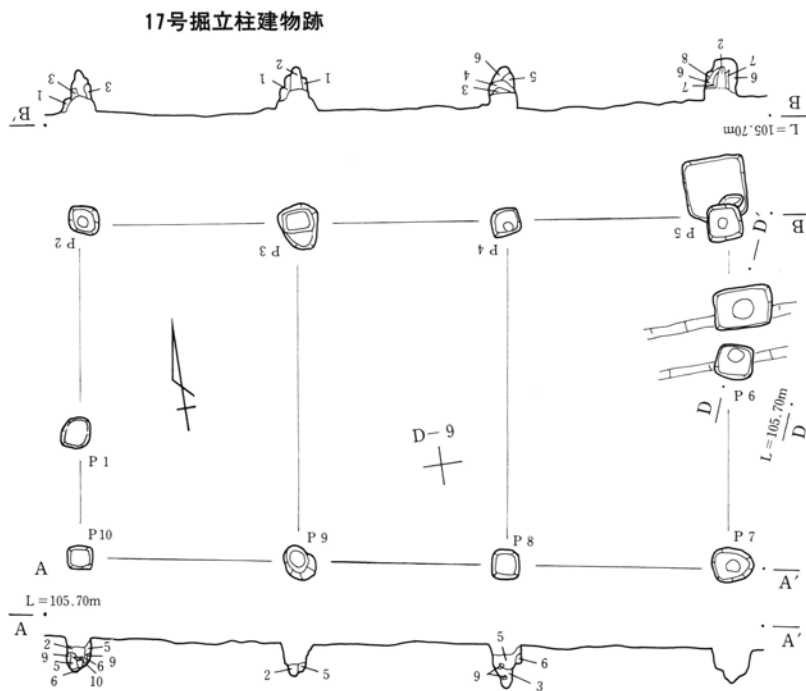
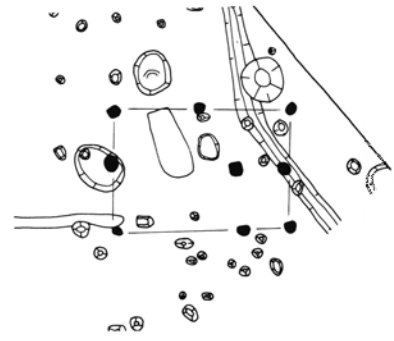
- 1 淡い灰褐色土 まじり(泥混層が70%・Bを10%含む・カーボン5%以下)・しまりあり・粘性なし
- 2 泥混ブロック
- 3 褐色土 褐色粘質土が90%・Bは5%以下・泥混なし・しまりややあり・粘性弱
- 4 黒褐色土 (暗青灰っぽい)・B(あるいはC)を10%含む・カーボンなし・泥混×・しまりよい・粘性あり・ややフカフカ



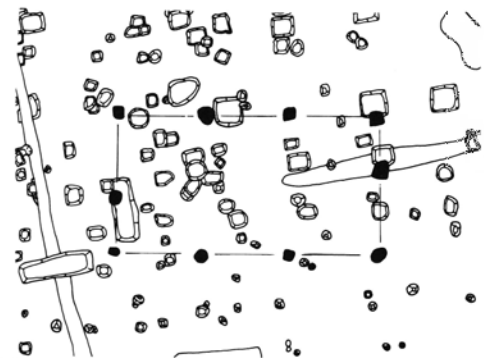
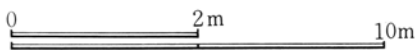
第24図 11号・12号掘立柱建物跡



- | | |
|----------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | As-B 軽石混入土 |
| 2 暗褐色土 | 粘質黒色土小塊含む |
| 3 砂質灰褐色土 | |
| 4 暗褐色土 | 粘質黒色土小塊含む |
| 5 砂質暗褐色土 | FP泥流土粒・白色粒・As-B 軽石含む |



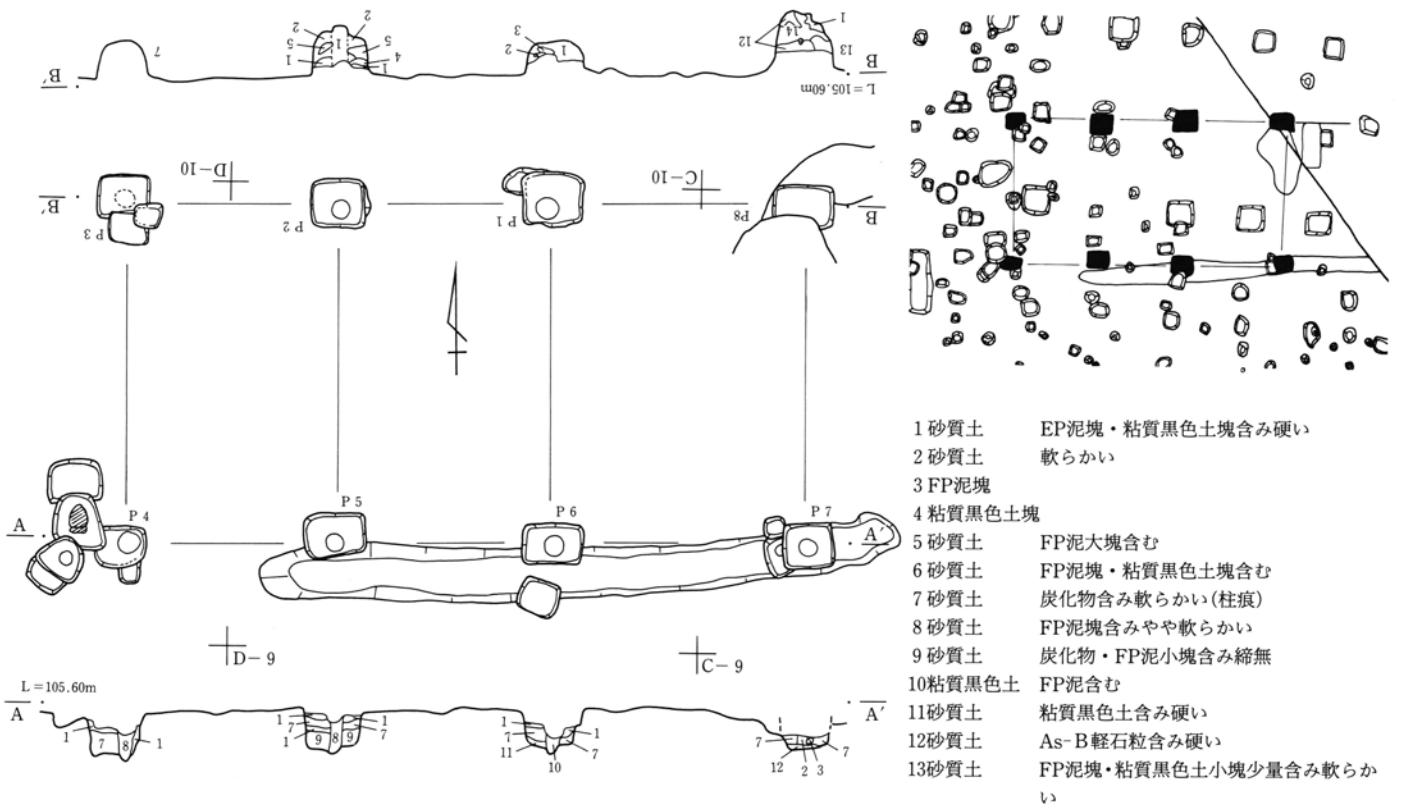
- | | |
|----------|---------------------|
| 1 砂質暗褐色土 | FP小塊・CP粒含み硬い |
| 2 砂質暗褐色土 | As-B 軽石少量含み軟らかい(柱痕) |
| 3 砂質暗褐色土 | 軟らかい(柱痕) |
| 4 砂質暗褐色土 | 黒色土塊・FP含み硬い |
| 5 砂質暗褐色土 | FP塊含みやや硬い |
| 6 粘質黒色土 | FP塊含み硬い |
| 7 砂質暗褐色土 | FP小塊含みやや軟らかい |
| 8 砂質暗褐色土 | 粘質黒色土塊含み軟らかい |
| 9 粘質黒色土塊 | 硬い |
| 10 FP泥塊 | |



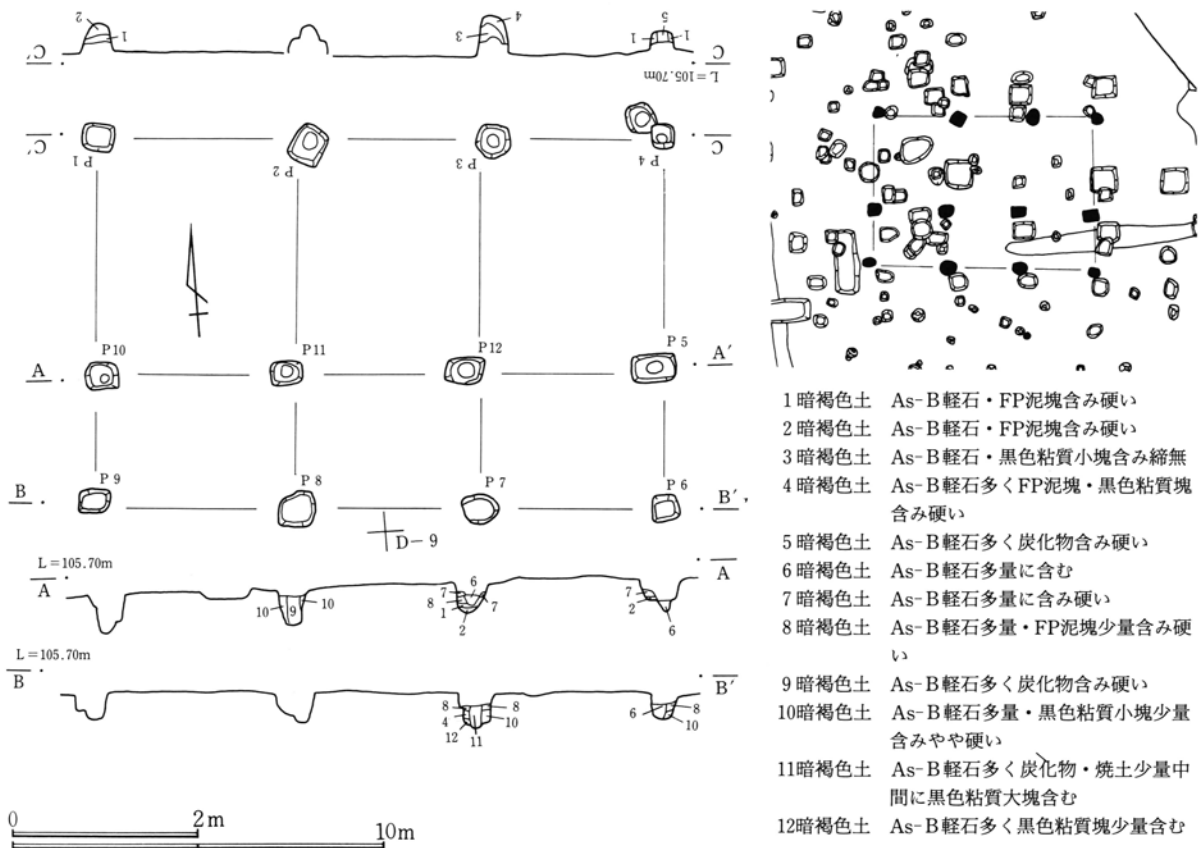
第25図 16号・17号掘立柱建物跡

第3章 遺跡の概要

18号掘立柱建物跡



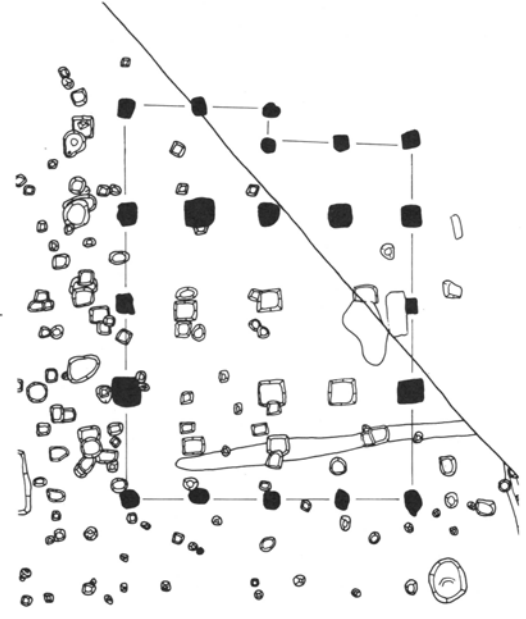
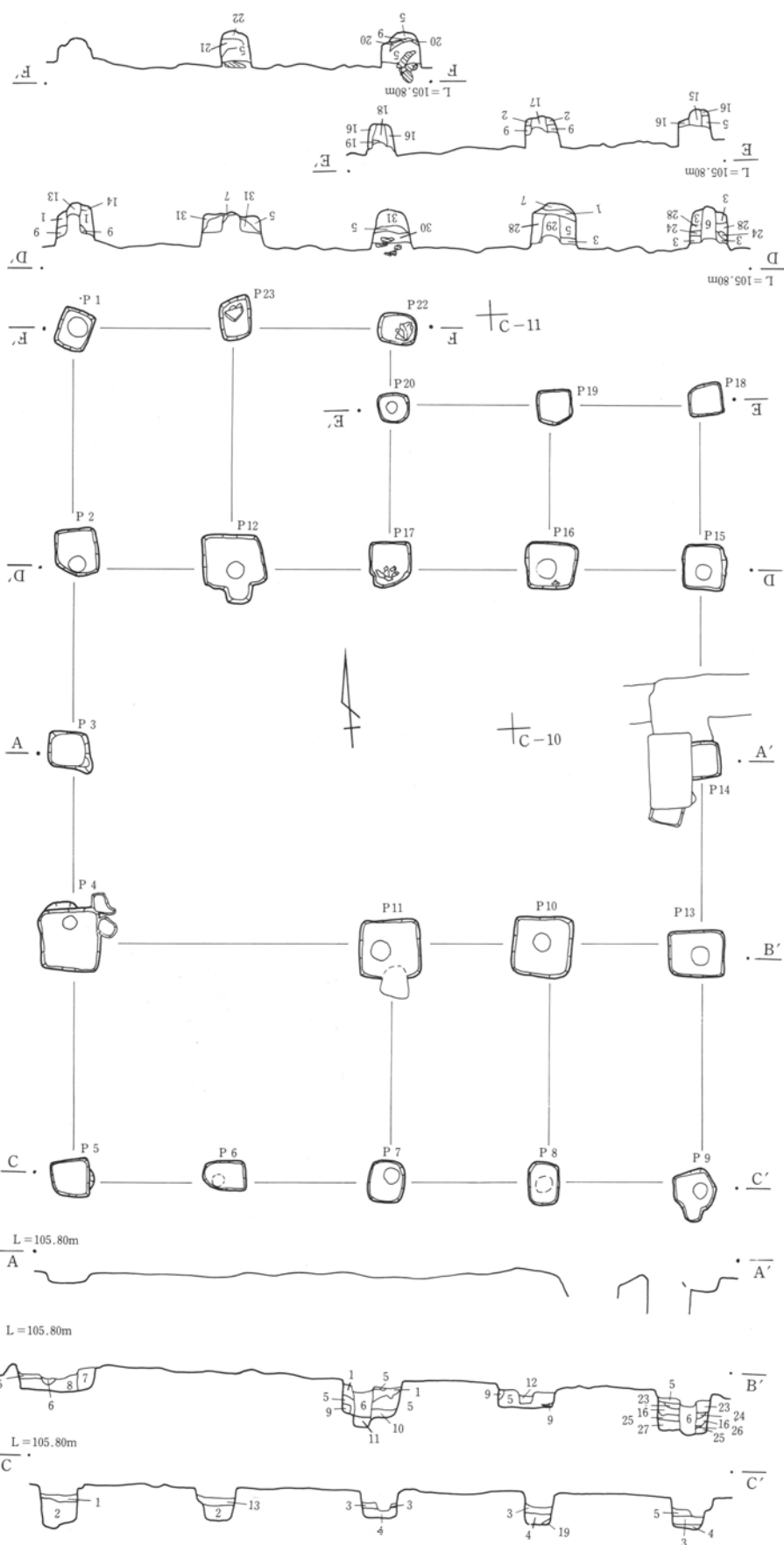
19号掘立柱建物跡



第26図 18号・19号掘立柱建物跡

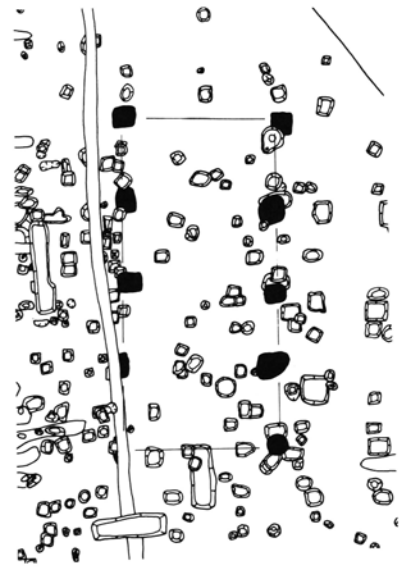
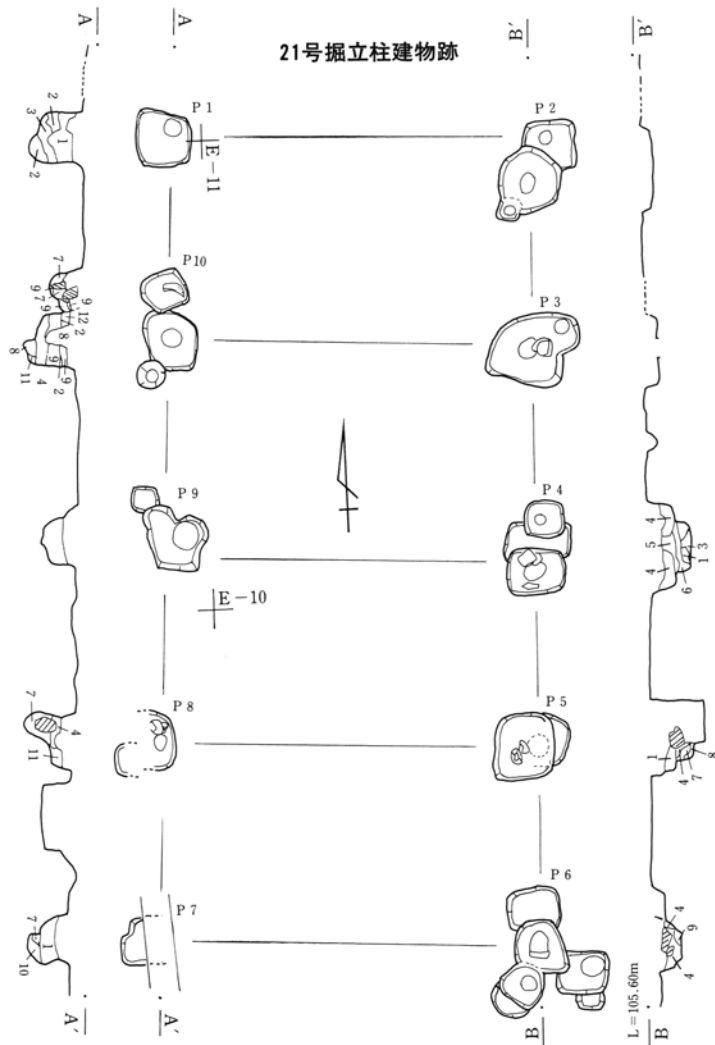
20号掘立柱建物跡

第1節 中世の遺構と遺物

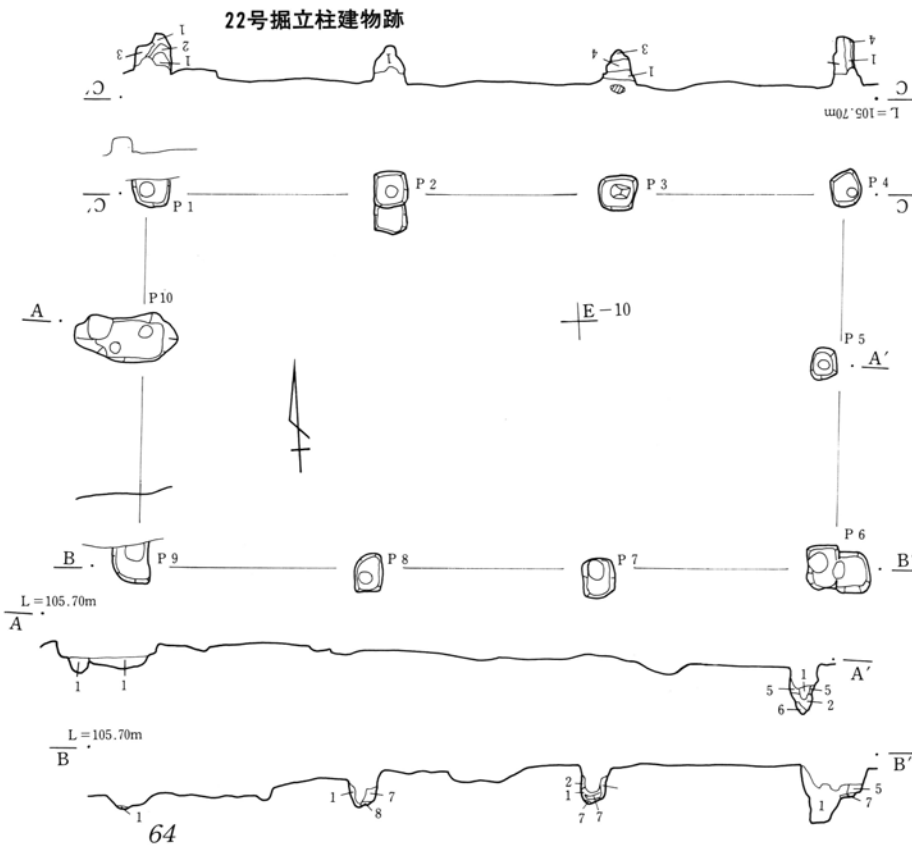


- 1 粘質黒色土 As-B軽石含み硬い
- 2 粘質黒色土 As-B軽石多量に含む
- 3 粘質黒色土 As-B軽石・FP泥含み硬い
- 4 粘質黒色土 As-B軽石多量・FP泥少量含み硬い
- 5 暗褐色土 As-B軽石多量・FP泥小塊少量含み硬い
- 6 暗褐色土 As-B軽石・焼土・炭化物多く含む
- 7 暗褐色土 As-B軽石主体
- 8 粘質黒色土 As-B軽石・FP泥塊多量に含む
- 9 暗褐色土 As-B軽石多く含み硬い
- 10 粘質褐色土 黒色粘質土塊・As-B軽石微量含み粘性強
- 11 暗褐色土 As-B軽石多く・焼土少量・FP泥塊含む
- 12 暗褐色土 As-B軽石・焼土・炭化物多く含む
- 13 暗褐色土 As-B軽石・炭化物多く含む
- 14 暗褐色土 As-B軽石多量・FP泥少量含む
- 15 暗褐色土 As-B軽石主体で炭化物少量含む
- 16 粘質黒色土 As-B軽石多量に含みやや硬い
- 17 粘質黒色土 As-B軽石多量・炭化物少量含む
- 18 暗褐色土 As-B軽石多量に含む
- 19 FP泥塊
- 20 粘質黒色土 As-B軽石・FP泥含む
- 21 粘質黒色土 As-B軽石・FP泥多量に含む
- 22 暗褐色土 As-B軽石・FP泥塊含む
- 23 粘質黒色土 As-B軽石多量・FP泥含む
- 24 粘質黒色土塊
- 25 粘質黒色土 FP泥主体にしAs-B軽石含む
- 26 焼土塊
- 27 粘質黒色土 FP泥含む
- 28 暗褐色土 As-B軽石主体で硬い
- 29 暗褐色土 As-B軽石・焼土・炭化物・FP泥小塊多く含む
- 30 暗褐色土 As-B軽石多量・FP泥黒色粘質小塊微量含む
- 31 粘質黒色土 FP泥塊にAs-B軽石含み硬く粘性強

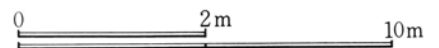
第27図 20号掘立柱建物跡



- | | |
|------------|--------------------|
| 1 砂質暗褐色土 | 粘質黒色土塊含みやや硬い |
| 2 粘質黒色土塊 | 粗粒砂含む |
| 3 粗粒砂質土 | 軟らかい |
| 4 砂質暗褐色土 | FP小塊僅かに含みやや軟らかい |
| 5 砂質暗褐色土 | FP粘質黒色土塊含み硬い |
| 6 砂質暗褐色土 | FP粘質黒色土塊少量含みやや軟らかい |
| 7 砂質暗褐色土 | 軟らかい |
| 8 FP粘質黒色土 | 塊層で粗粒砂含み硬い |
| 9 粘質黒色土 | 塊層で硬い |
| 10 砂質暗褐色土 | 粘質黒色土塊含みやや軟らかい |
| 11 FP粘質黒色土 | 塊層で炭化粒・粗粒砂含む |
| 12 FP塊層 | 極めて硬い |



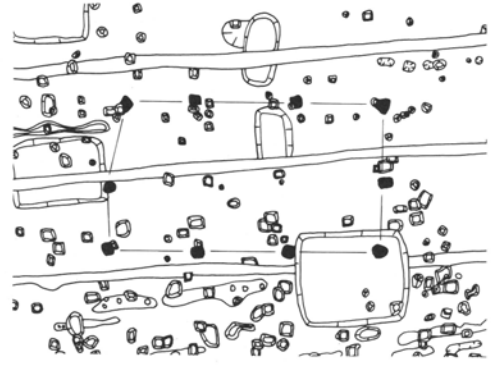
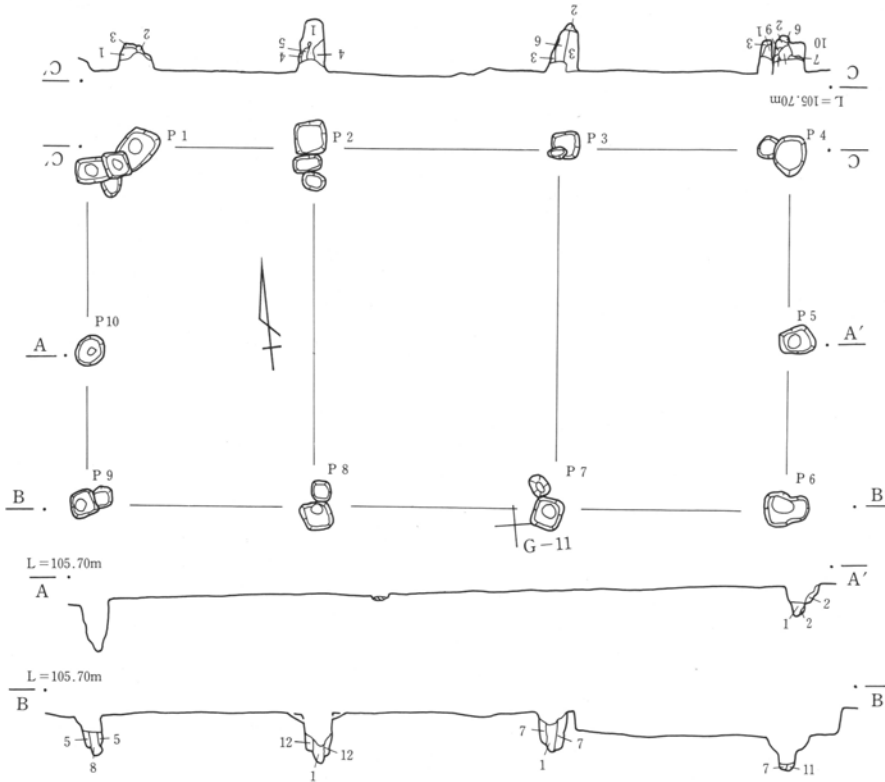
- | | |
|----------|--------------|
| 1 砂質暗褐色土 | 軟らかい |
| 2 砂質暗褐色土 | FP塊含み軟らかい |
| 3 粘質黒色土塊 | 粗粒砂含み硬い |
| 4 砂質暗褐色土 | 粘質黒色土塊含みやや硬い |
| 5 砂質暗褐色土 | FP塊含みやや硬い |
| 6 FP塊層 | 硬い |
| 7 粘質黒色土塊 | |
| 8 砂質暗褐色土 | 粘質黒色土塊含み硬い |



第28図 21号・22号掘立柱建物跡

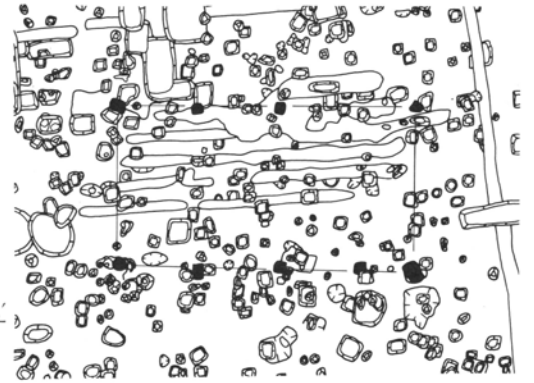
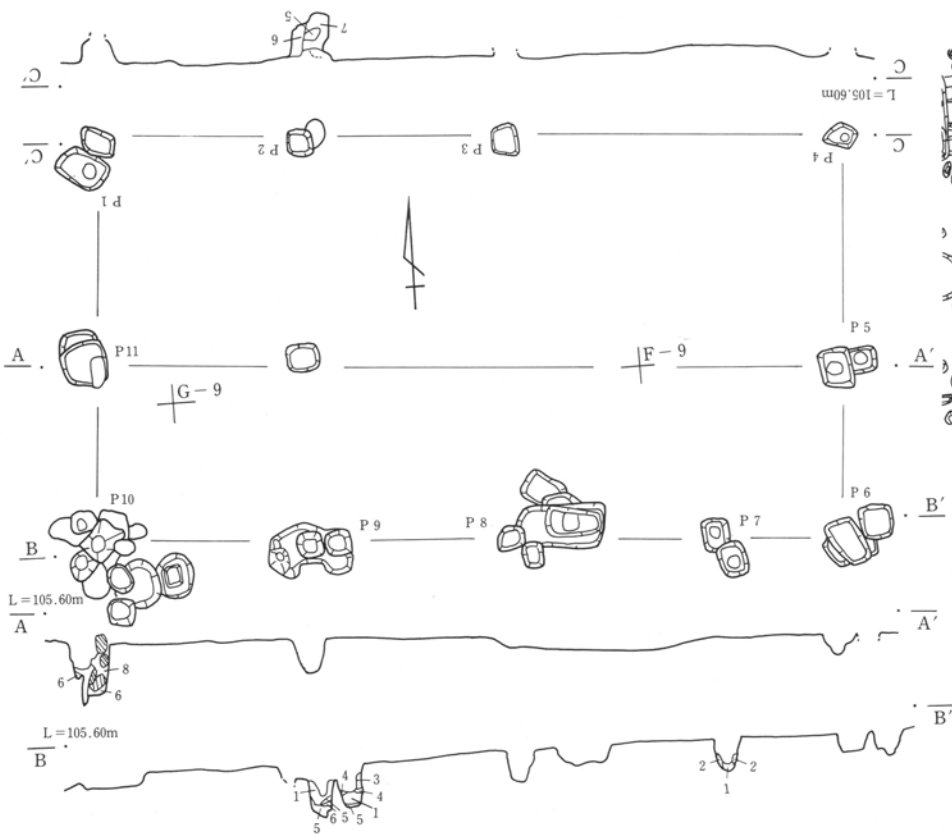
第1節 中世の遺構と遺物

24号掘立柱建物跡

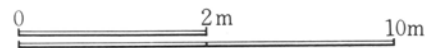


- | | |
|-------------|----------------|
| 1 砂質暗褐色土 | 軟らかい |
| 2 粘質黒色土塊 | 硬い |
| 3 砂質暗褐色土 | 粘質黒色土塊含み硬い |
| 4 砂質暗褐色土 | CP粒含みやや硬い |
| 5 砂質暗褐色土 | FP粘質黒色土塊含み硬い |
| 6 砂質暗褐色土 | 粘質黒色土小塊含み軟らかい |
| 7 砂質暗褐色土 | FP小塊含み硬い |
| 8 砂質暗褐色土 | FP小塊含み軟らかい |
| 9 FP塊 | 軟らかい |
| 10 FP粘質黒色土塊 | 硬い |
| 11 粘質黄褐色土塊 | |
| 12 砂質暗褐色土 | FP粘質黒色小塊含み軟らかい |

25C号掘立柱建物跡

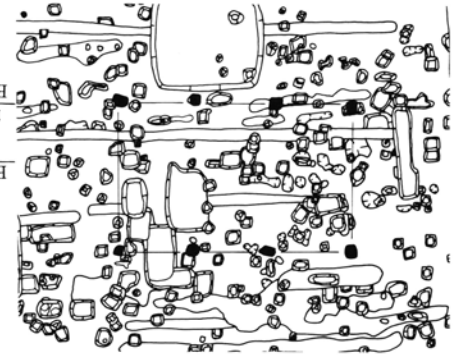
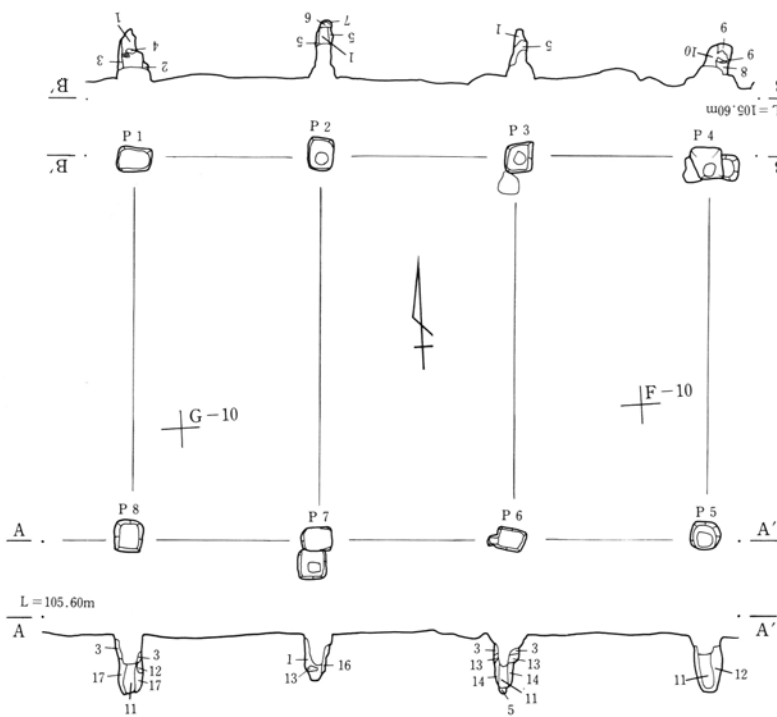


- | | |
|-------------|-----------------|
| 1 粗粒砂質暗褐色土 | 軟らかい |
| 2 砂質暗褐色土 | FP小塊含みやや軟らかい |
| 3 砂質暗褐色土 | FP粘質黒色土小塊含みやや硬い |
| 4 FP粘質黒色土塊層 | |
| 5 粘質暗褐色土 | 硬い |
| 6 粘質黒色土薄層 | |



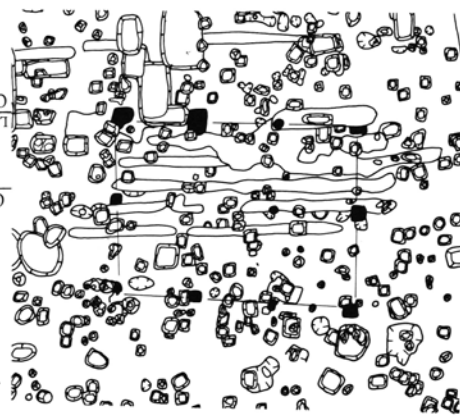
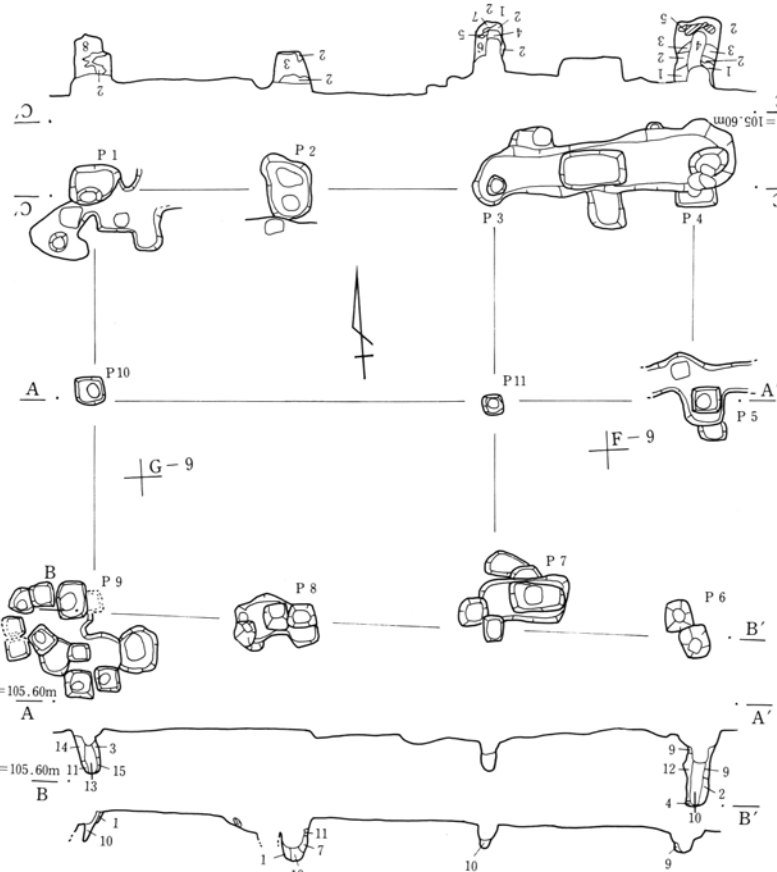
第29図 24号・25C号掘立柱建物跡

第3章 遺跡の概要
25A号掘立柱建物跡

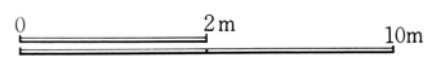


- 1 砂質暗褐色土 軟らかい
- 2 粘質黒色土塊 FP含み硬い
- 3 砂質暗褐色土 FP小塊含みやや硬い
- 4 粘質褐色土塊
- 5 砂質暗褐色土 粘質黒色土・粘質褐色土塊含み硬い
- 6 粘質暗褐色土 やや軟らかい
- 7 粘質灰褐色土 やや軟らかい
- 8 砂質暗褐色土 FP小塊・炭化粒含みやや硬い
- 9 砂質暗褐色土 FP小塊含み軟らかい
- 10 粘質黒色土 FP塊層に砂含みやや硬い
- 11 砂質暗褐色土 炭化粒含み軟らかい
- 12 粘質黒色土 FP塊を主に砂含み硬い
- 13 粘質黒色土 砂含み硬い
- 14 砂質暗褐色土 粘質黒色土塊含みやや硬い
- 15 粘質暗褐色土 硬い
- 16 砂質暗褐色土 FP粘質黒色土塊含み硬い
- 17 粘質黒色土 粘質褐色土塊層に砂含み硬い

26号掘立柱建物跡

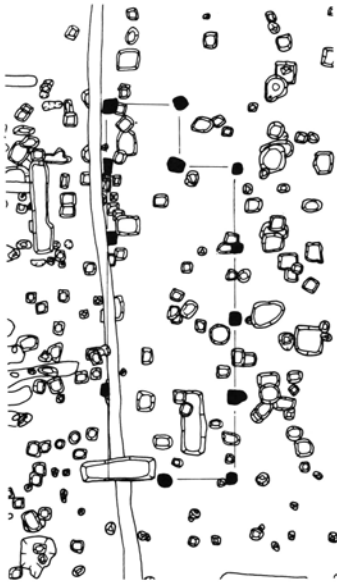


- 1 砂質暗褐色土 FP粘質黒色土塊含み硬い
- 2 粘質褐色土 塊層で硬い
- 3 FP粘質褐色土 塊層で砂含み硬い
- 4 砂質暗褐色土 粘質黒色土塊含み軟らかい
- 5 砂質土 軟らかい
- 6 FP粘質黒色土 黄褐色土塊含み硬い
- 7 粘質黒色土 塊層で砂含み硬い
- 8 粘質黒褐色土 塊層で粗粒砂含み硬い
- 9 砂質暗褐色土 FP小塊含みやや硬い
- 10 砂質暗褐色土 やや軟らかい
- 11 砂質暗褐色土 やや硬い
- 12 FP粘質黒色土 塊層で粗粒砂質土含み硬い



第30図 25A号・26号掘立柱建物跡

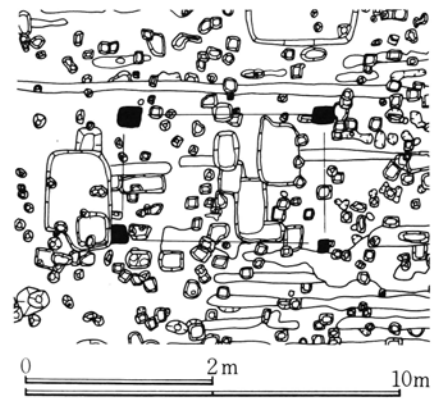
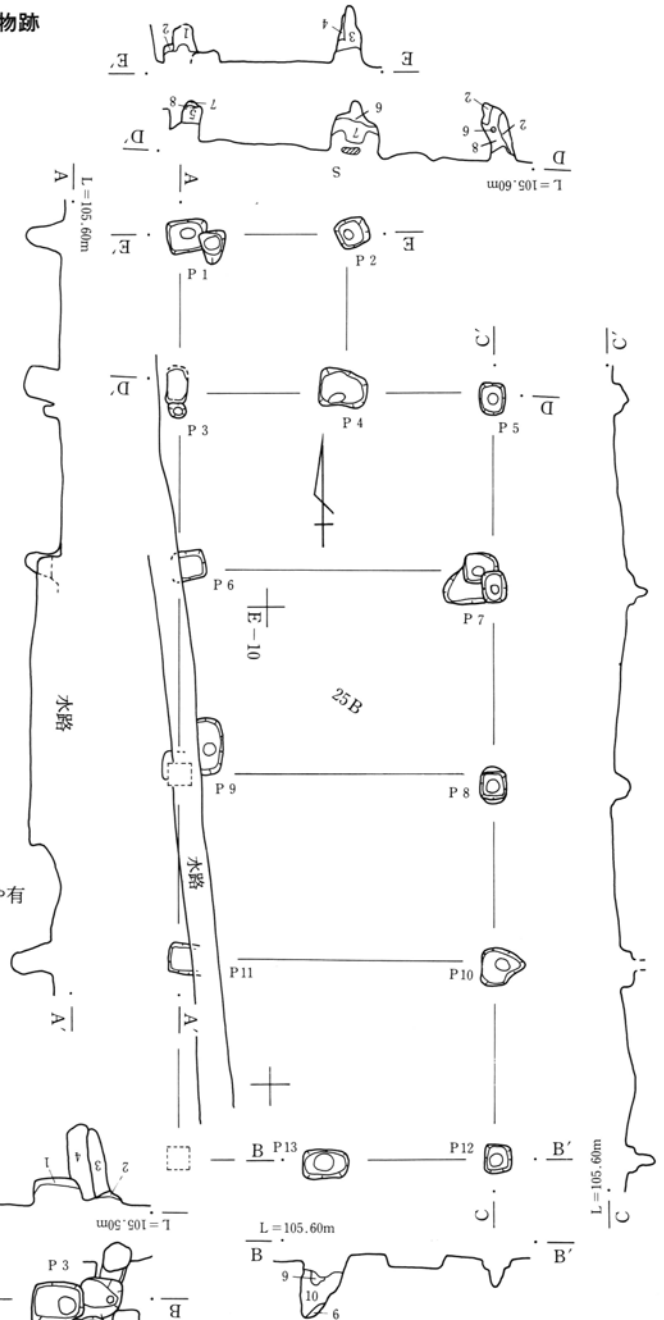
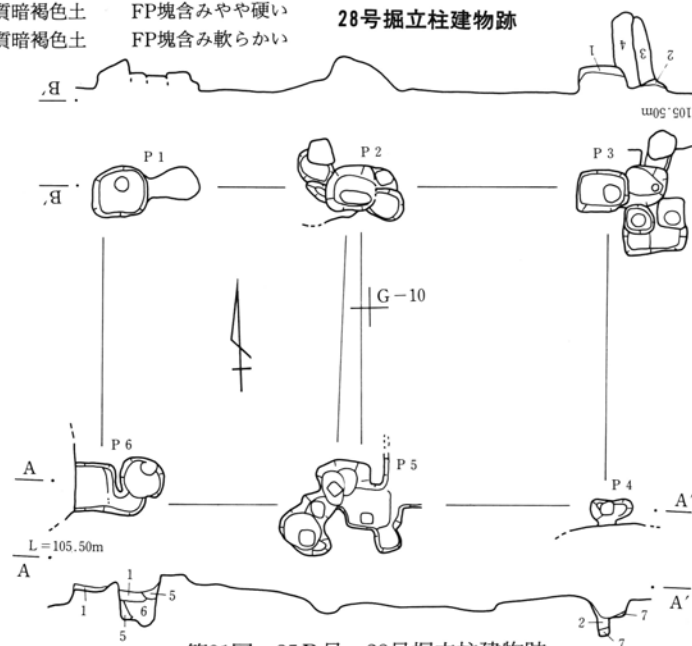
25B号掘立柱建物跡



- 1 砂質暗褐色土 炭化粒含み軟らかい
- 2 砂質暗褐色土 FP塊含みやや硬い
- 3 暗褐色土 As-B軽石粒多く泥流土塊・炭化粒少量含み締弱
- 4 黒褐色土 As-B軽石粒を含み粘性やや有
- 5 砂質暗褐色土 軟らかい
- 6 粘質黒色土 軟らかい
- 7 砂質暗褐色土 粘質黒色土小塊僅かに含み軟らかい
- 8 砂質暗褐色土 FP粘質黒色土塊含みやや軟らかい
- 9 褐色土 As-B軽石粒含み締有
- 10 暗褐色土 As-B軽石粒多く泥流土塊・炭化粒少量含み粘性やや有

- 1 砂質暗褐色土 軟らかい
- 2 粘質褐色土 塊層で硬い
- 3 砂質暗褐色土 軟らかい
- 4 粘質黒褐色土 砂含み硬い
- 5 FP塊層 やや硬い
- 6 砂質暗褐色土 FP塊含みやや硬い
- 7 砂質暗褐色土 FP塊含み軟らかい

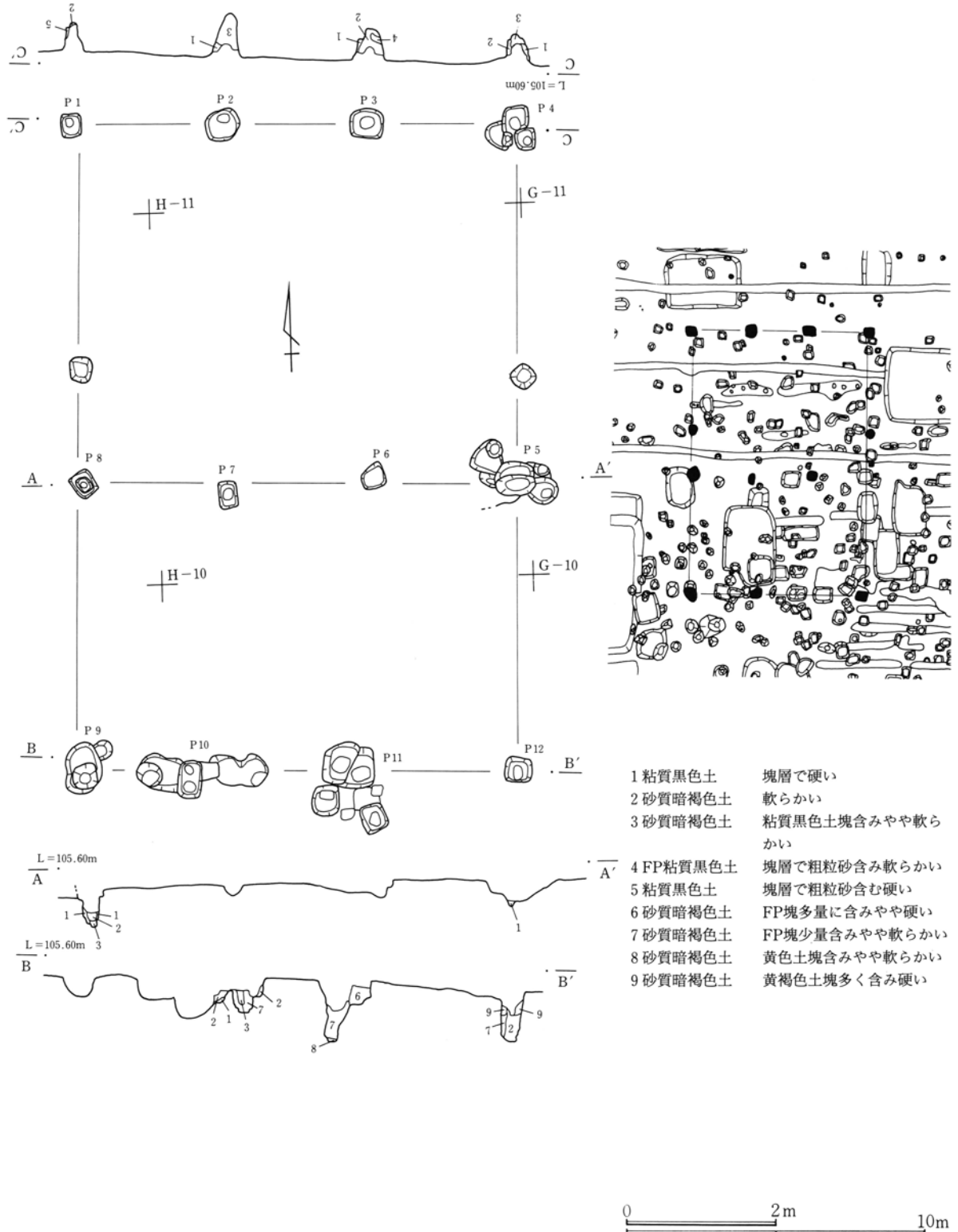
28号掘立柱建物跡



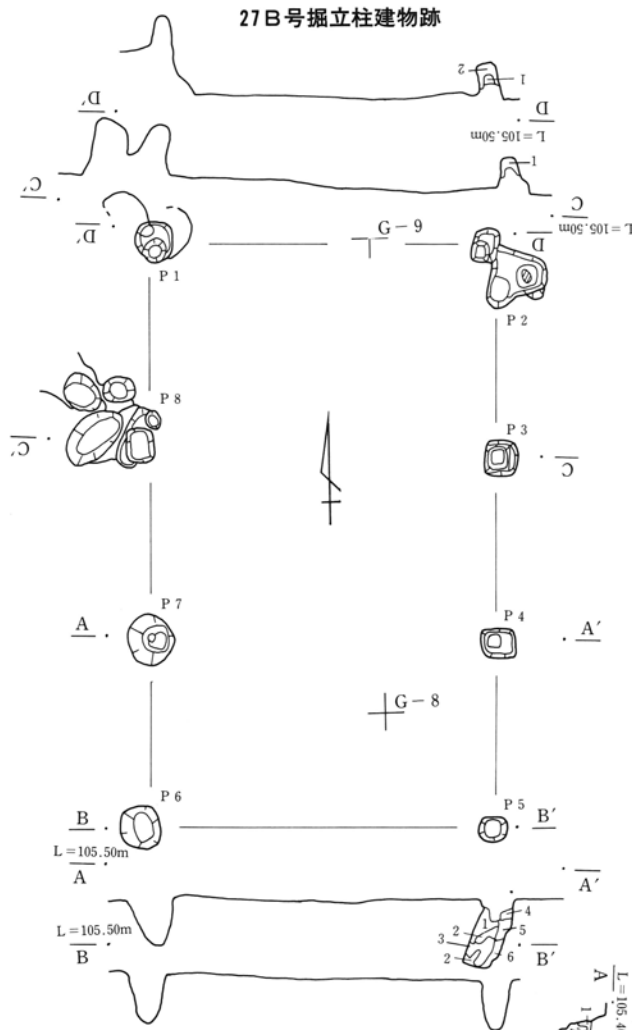
第31図 25B号・28号掘立柱建物跡

第3章 遺跡の概要

27A号掘立建物跡



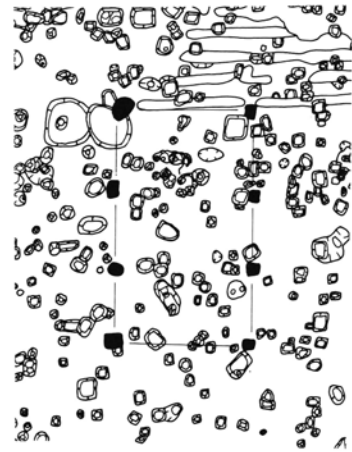
第32図 27A号掘立建物跡



- 1 砂質暗褐色土 粘質黒色土塊含み硬い
- 2 砂質暗褐色土 FP塊含み軟らかい
- 3 粘質黒褐色土 塊層で硬い
- 4 砂質暗褐色土 FP粘質黒色土塊含み硬い
- 5 FP粘質褐色土塊層
- 6 粘質褐色土塊層
- 7 砂質暗褐色土 粘質黒色土塊含み硬い
- 8 粘質黒色土塊層
- 9 砂質暗褐色土 軟らかい
- 10 砂質暗褐色土 粘質黒・褐・黄褐色土塊含み硬い

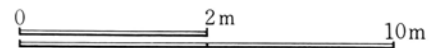
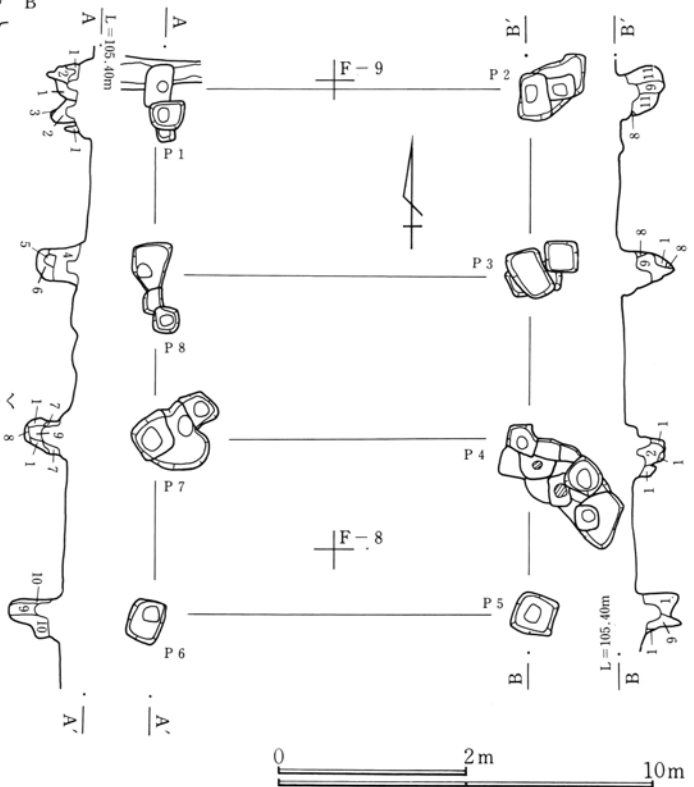


- 11 砂質暗褐色土 粘質黒色土塊多く含み硬い



- A-A'
- 1 粗粒砂質土 軟らかい
- 2 粘質黄褐色土 硬い
- 3 粘質暗褐色土 硬い
- 4 粘質褐色土 塊層で硬い
- 5 砂質暗褐色土 FP小塊含む
- 6 粘質黄褐色土 粘質黒色土含み硬い
- C-C'
- 1 砂質暗褐色土 軟らかい
- D-D'
- 1 粗粒砂質暗褐色土 軟らかい
- 2 粗粒砂質暗褐色土 FP塊含み軟らかい

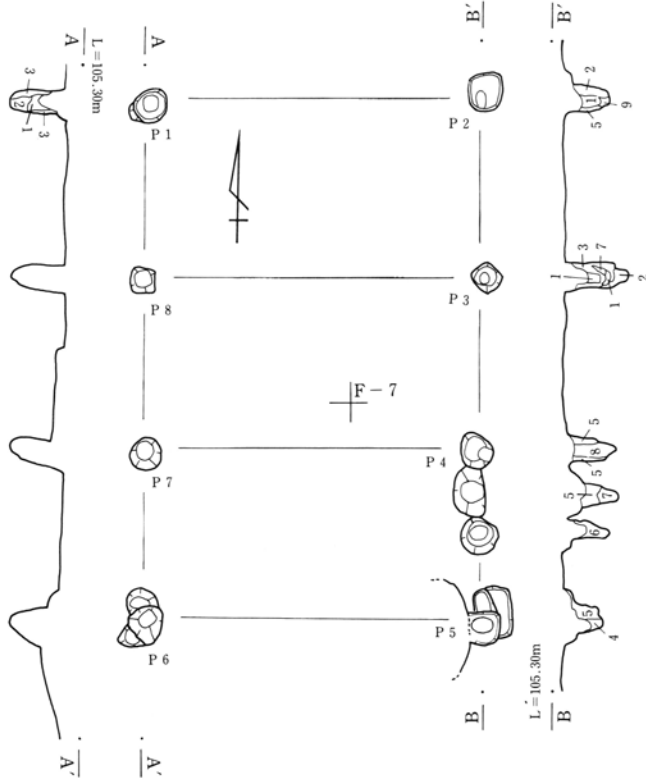
30号掘立柱建物跡



第33図 27B号・30号掘立柱建物跡

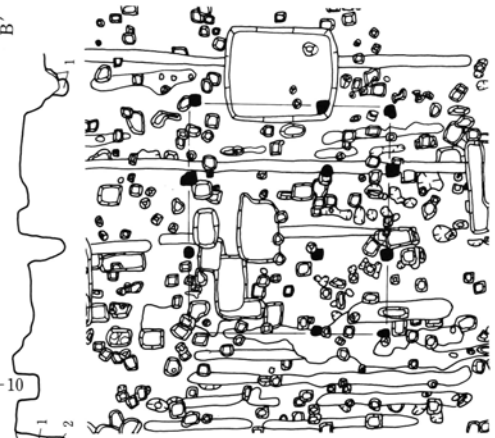
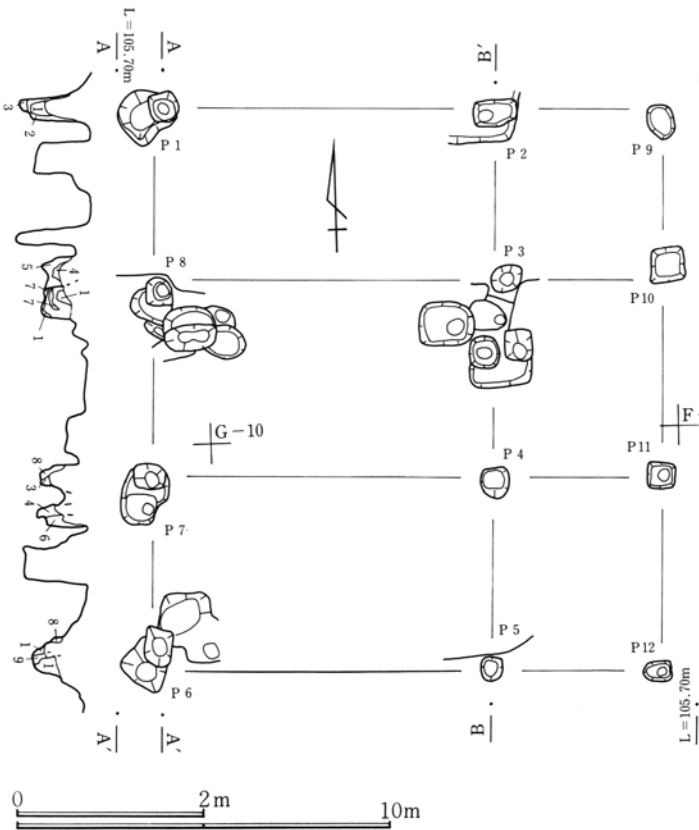
第3章 遺跡の概要

31号掘立柱建物跡

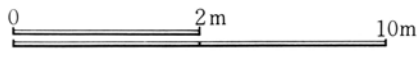


- 1 砂質暗褐色土 軟らかい
- 2 粘質暗褐色土 軟らかい
- 3 粘質黒色土 塊層で硬い
- 4 砂質暗褐色土 炭化粒・CP粒含み軟らかい
- 5 砂質暗褐色土 粘質黒色土塊含み硬い
- 6 FP粘質黒色土 塊層で極めて硬い
- 7 砂質暗褐色土 粘質黒色土塊含み軟らかい
- 8 砂質暗褐色土 FP粘質黒色土粒含みや軟らかい
- 9 粘質灰褐色土

32号掘立柱建物跡

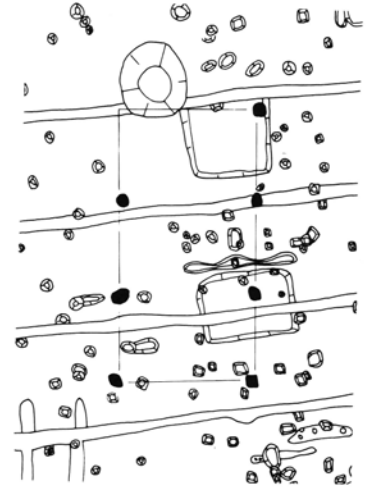
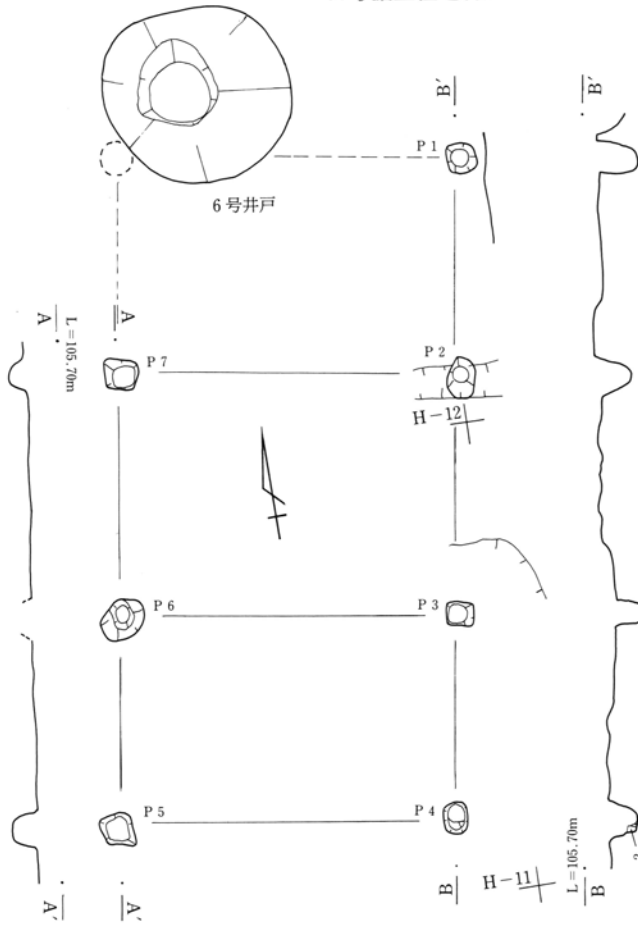


- 1 粗粒砂質暗褐色土 軟らかい
- 2 砂質暗褐色土 黄褐色土粒多くFP粘質黒色土塊少量含みや硬い
- 3 粘質暗褐色土 酸化粒含み硬い
- 4 粗粒砂質暗褐色土 軟らかい
- 5 粘質暗褐色土 FP塊・酸化粒含みや硬い
- 6 FP粘質黒色土塊層 粗粒含みや硬い
- 7 粘質黄褐色土
- 8 砂質暗褐色土 FP塊含みや硬い
- 9 粘質黄褐色土 砂含む
- 10 粗粒砂質暗褐色土 FP塊少量含み軟らかい



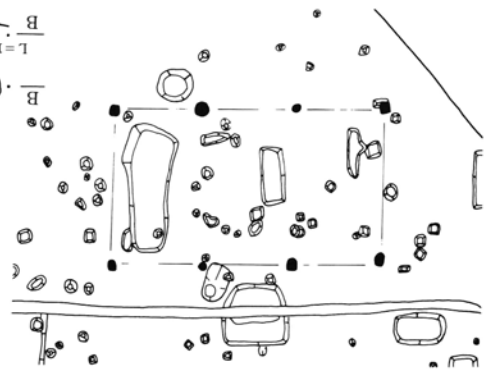
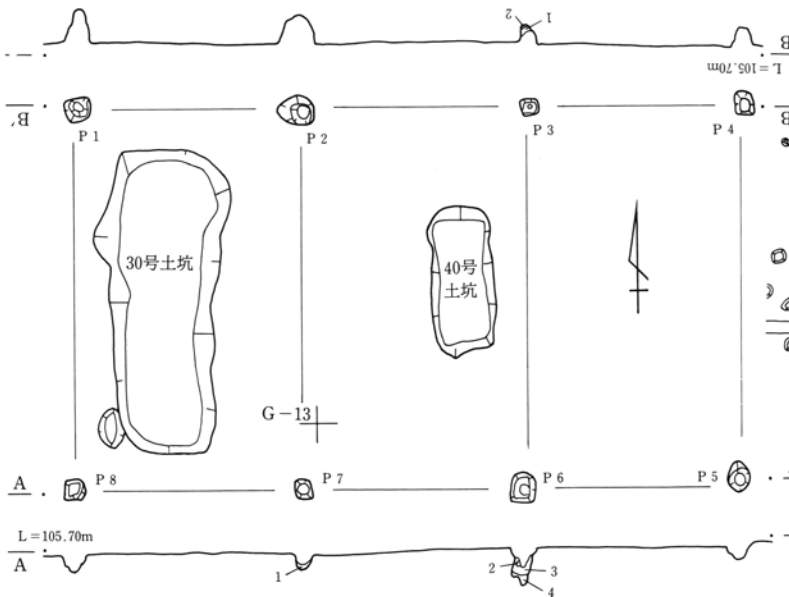
第34図 31号・32号掘立柱建物跡

33号掘立柱建物跡

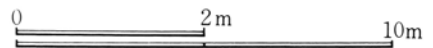


- 1 黒褐色土 粘質土主体締有
- 2 暗褐色土 As-B軽石少量・粘質黒色土僅かに含む

34号掘立柱建物跡



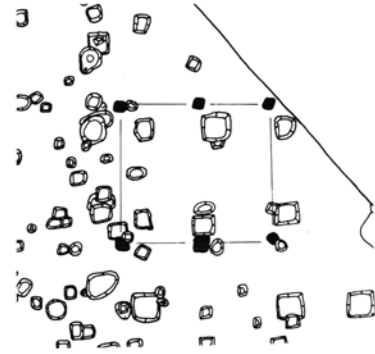
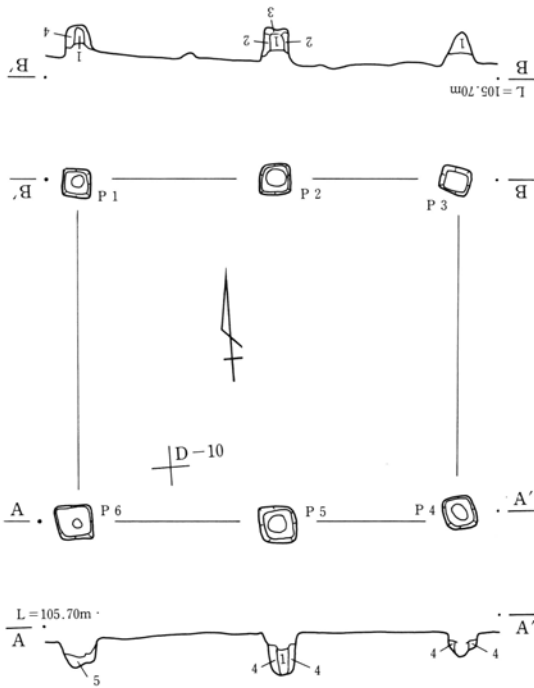
- 1 砂質暗褐色土 軟らかい
- 2 FP混塊
- 3 砂質暗褐色土 FP小塊含み軟らかい
- 4 粘質黒色土塊層 砂質暗褐色土少量含み硬い



第35図 33号・34号掘立柱建物跡

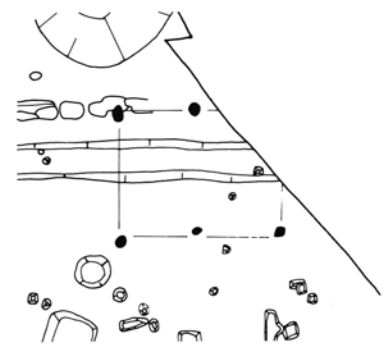
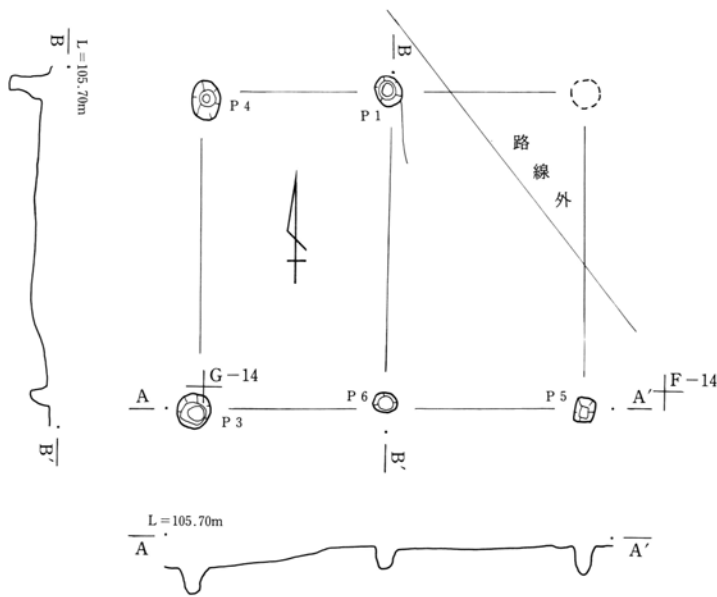
第3章 遺跡の概要

36号掘立柱建物跡

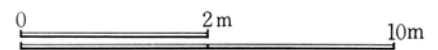


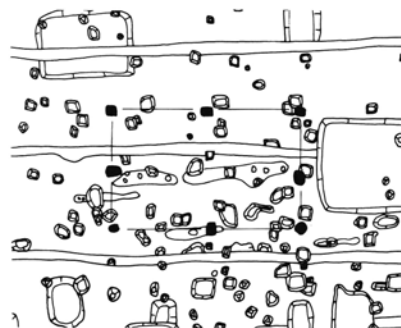
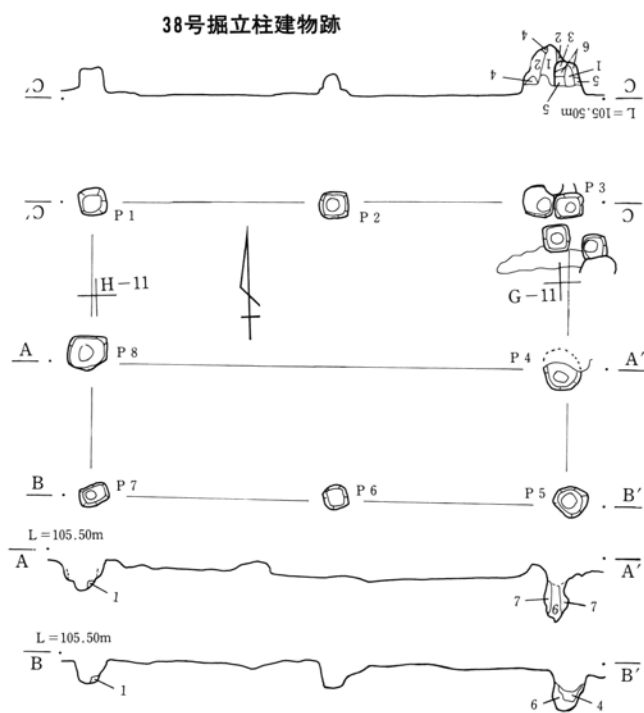
- 1 暗褐色土 As-B軽石多量に含む
- 2 暗褐色土 As-B軽石多くFP僅かに含みやや締有
- 3 暗褐色土 As-B軽石多くFP泥少量含む
- 4 暗褐色土 As-B軽石多量にFP泥塊少量含み硬く締有
- 5 粘質黒色土塊 As-B軽石多く含み硬く締有

37号掘立柱建物跡

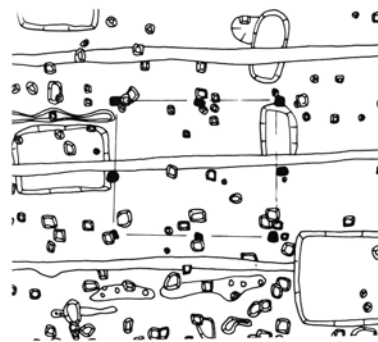
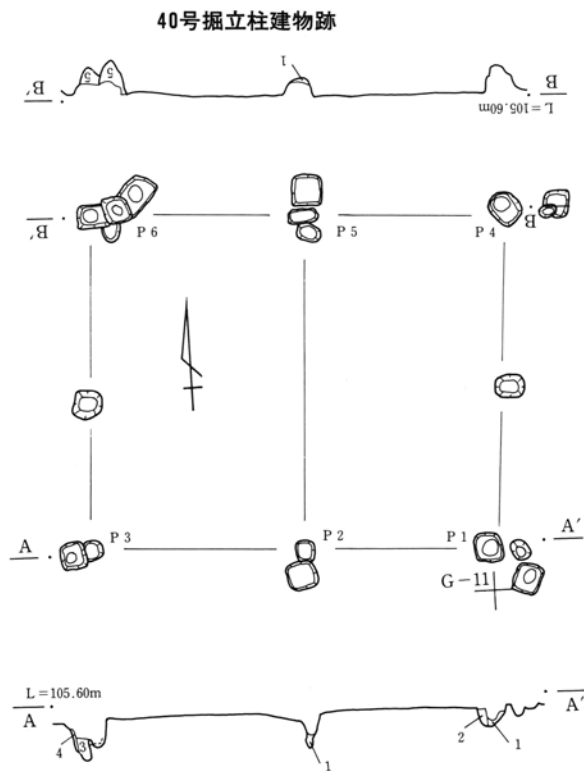


第36図 36号・37号掘立柱建物跡

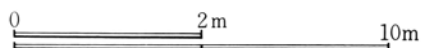




- 1 砂質暗褐色土 軟らかい
- 2 砂質暗褐色土 FP小塊含みやや硬い
- 3 粘質褐色土塊層 砂含み硬い
- 4 FP粘質褐色土塊層 硬い
- 5 砂質暗褐色土 FP塊含み硬い
- 6 砂質暗褐色土 FP塊含みやや軟らかい
- 7 FP粘質褐色土塊層 砂含み硬い

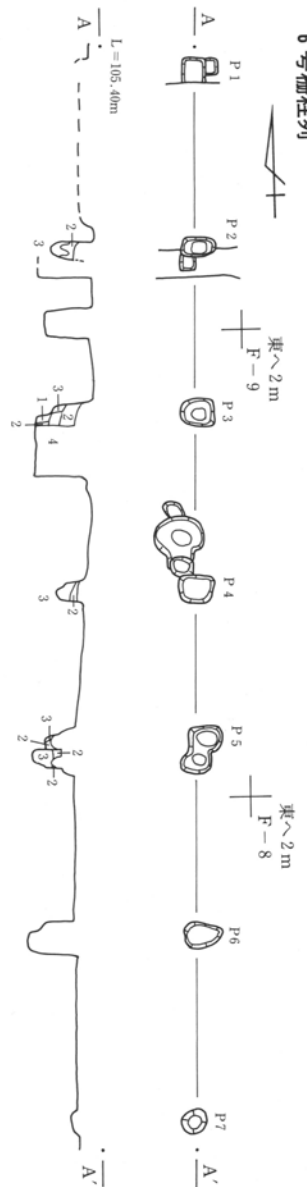


- 1 砂質暗褐色土 軟らかい
- 2 粘質黒灰色土
- 3 砂質暗褐色土 FP塊含み軟らかい
- 4 砂質暗褐色土 FP粘質黒色土塊含み硬い
- 5 砂質暗褐色土 FP粘質黒色土塊含みやや軟らかい

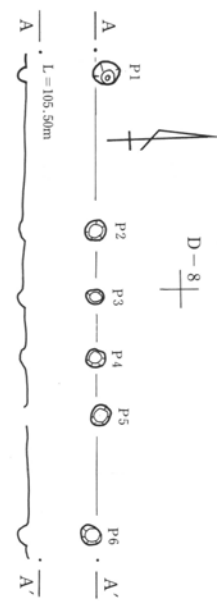


第37図 38号・40号掘立柱建物跡

6号柵柱列

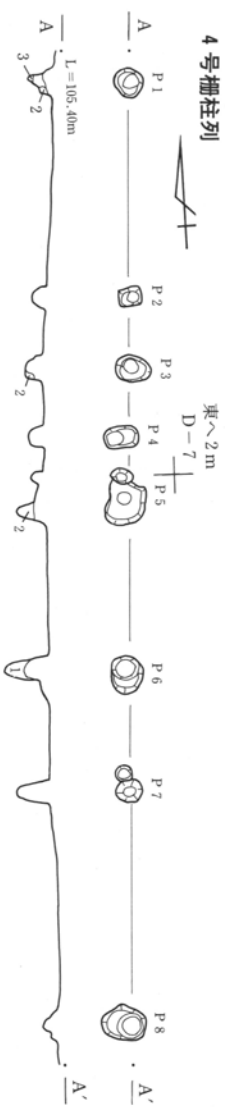


5号柵柱列



- 6号柱列
- 1 粗粒砂質暗褐色土 軟らかい(柱痕)
 - 2 砂質暗褐色土 FP小塊含み硬い
 - 3 暗褐色土 FP泥・粘質黒色土塊含み硬い
 - 4 粘質褐色土塊

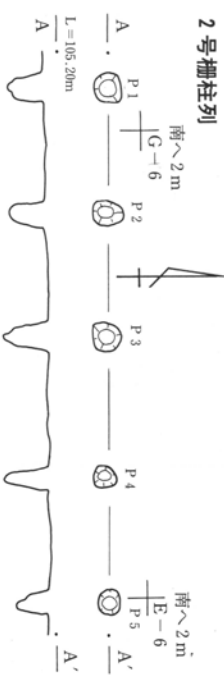
4号柵柱列



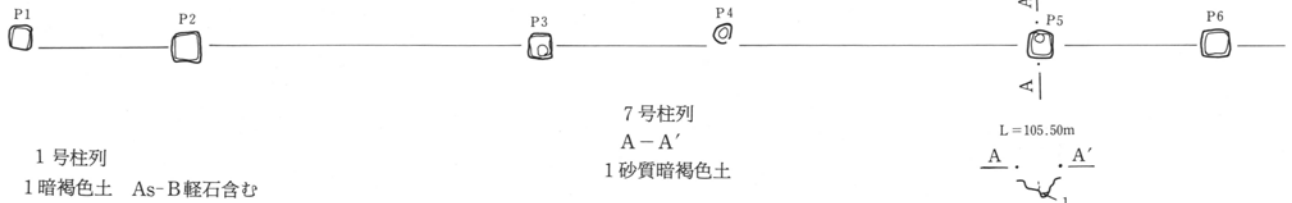
4号柱列

- 1 暗褐色土 As-B軽石多量に含み硬いか粘性弱
- 2 暗褐色土 As-B軽石・多量の黒色粘質土塊含み硬く粘質
- 3 暗褐色土 As-B軽石・粘質塊含み硬く粘性強

2号柵柱列



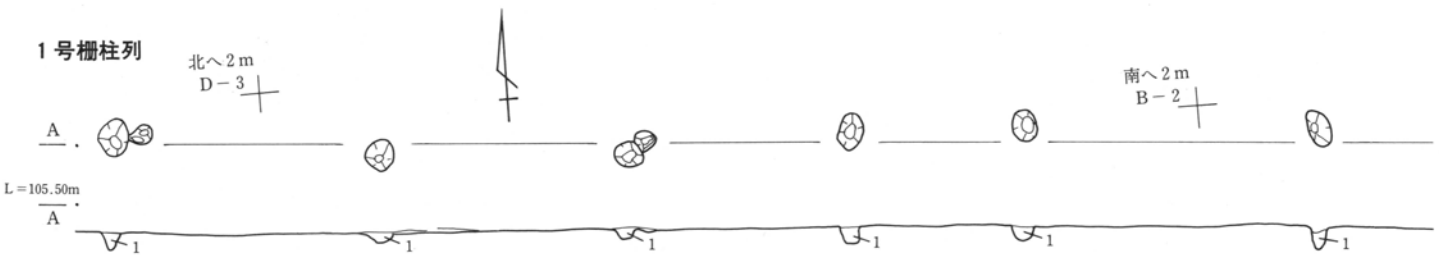
7号柵柱列



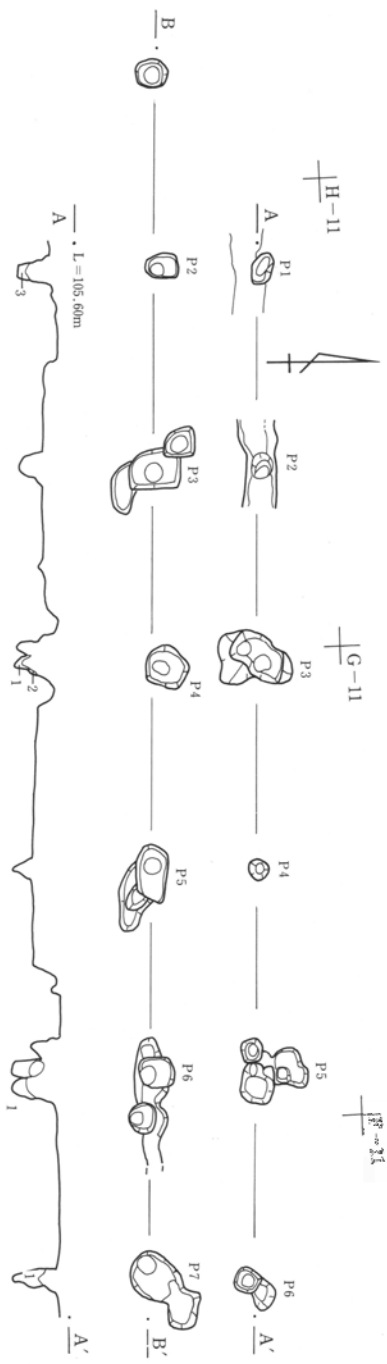
- 1号柱列
- 1 暗褐色土 As-B軽石含む

- 7号柱列
- A-A'
 - 1 砂質暗褐色土

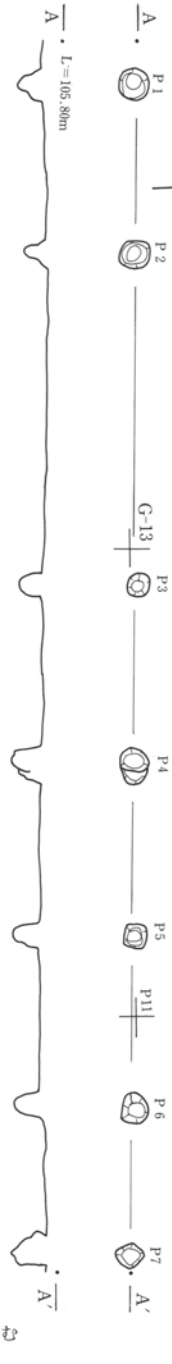
1号柵柱列



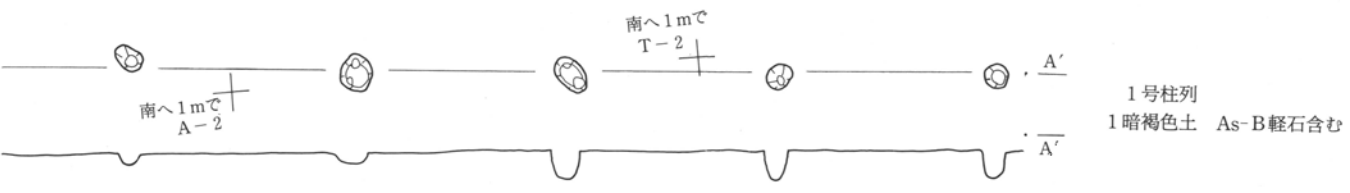
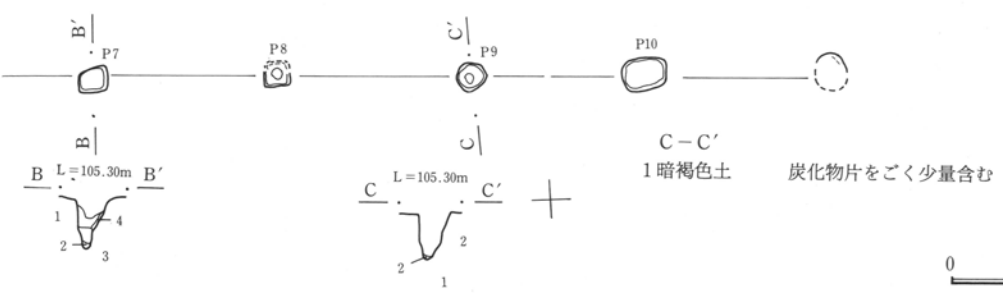
第38図 1号・2号・3号・4号・5号・6号・7号・8号・9号柵柱列



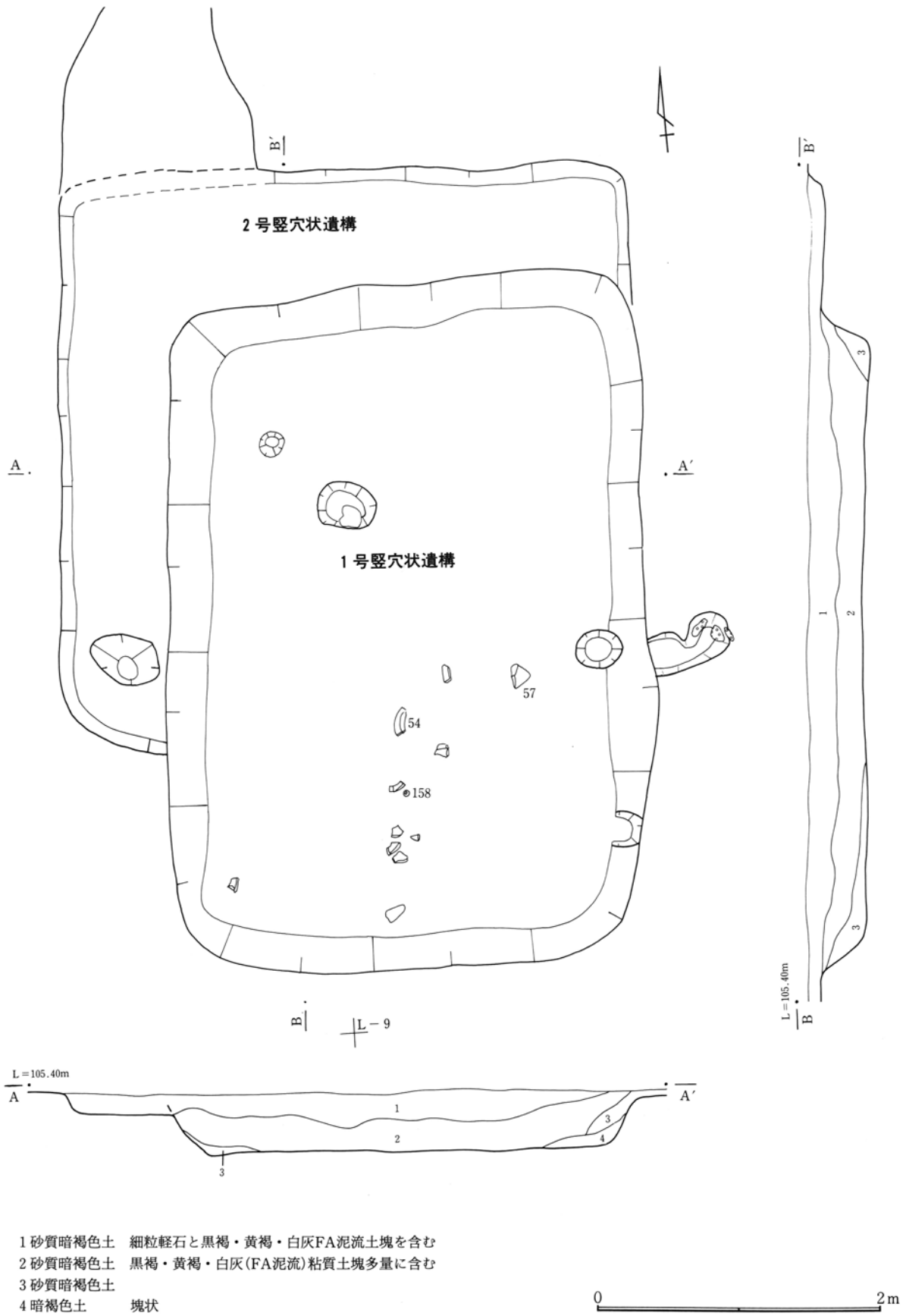
- 8・9号柵柱列
- | | |
|-------------|--------------|
| 1 粗粒砂質暗褐色土 | 軟らかい(柱痕) |
| 1' 粗粒砂質暗褐色土 | 粘質暗褐色土含み軟らかい |
| 2 砂質暗褐色土 | FP塊含み硬い |
| 3 砂質暗褐色土 | FP・粘質黒色土含み硬い |
| 4 粘質褐色土 | 硬い |
| 5 粘質褐色土 | 砂粒含み硬い |
| 6 FP塊 | |



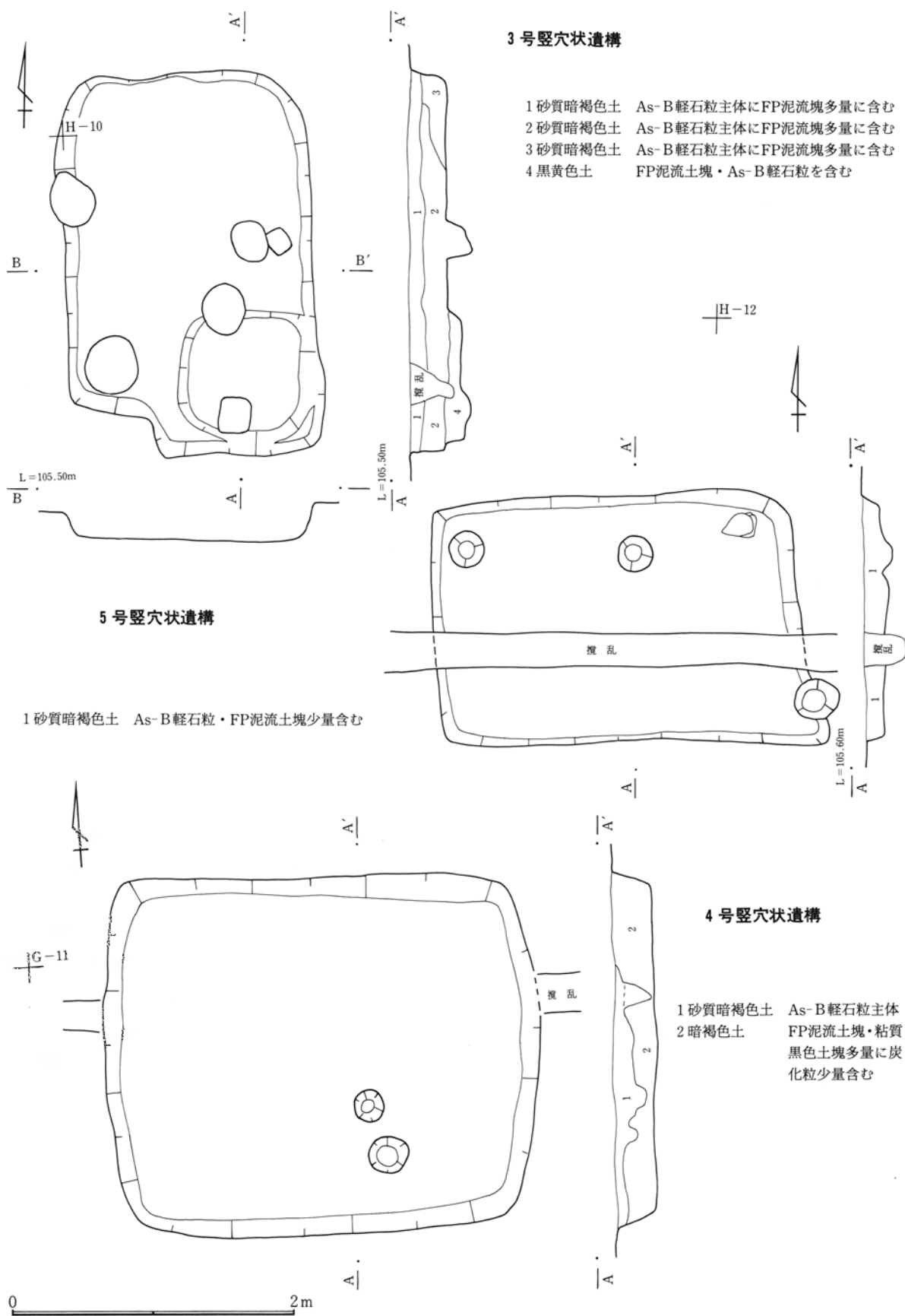
- B-B'
- | | |
|----------|------------|
| 1 粗粒暗褐色土 | 粘質黒色土塊含む |
| 2 粘質黒色土 | 白色バミス含む |
| 3 暗褐色土 | 夾雑物なく締弱 |
| 4 砂質暗褐色土 | 粘質黒色土塊多く含む |



第3章 遺跡の概要

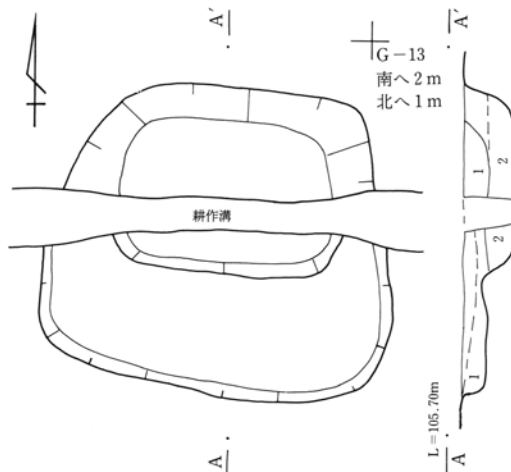


第39図 1号・2号竖穴状遺構



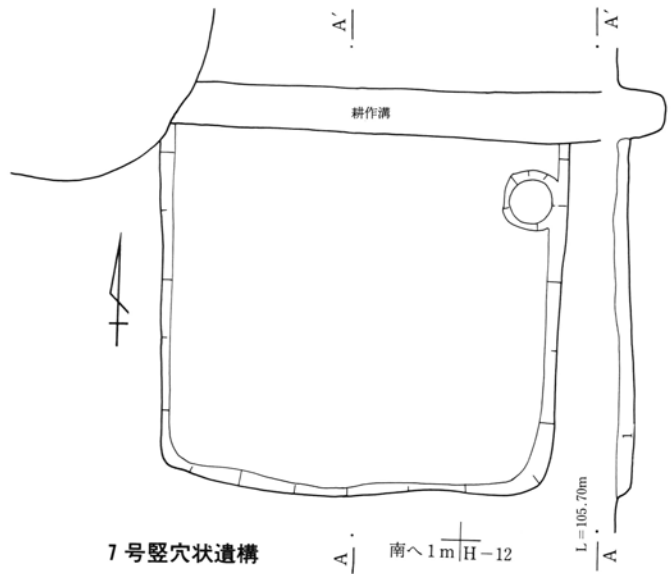
第40図 3号・4号・5号竖穴状遺構

第3章 遺跡の概要



6号竪穴状遺構

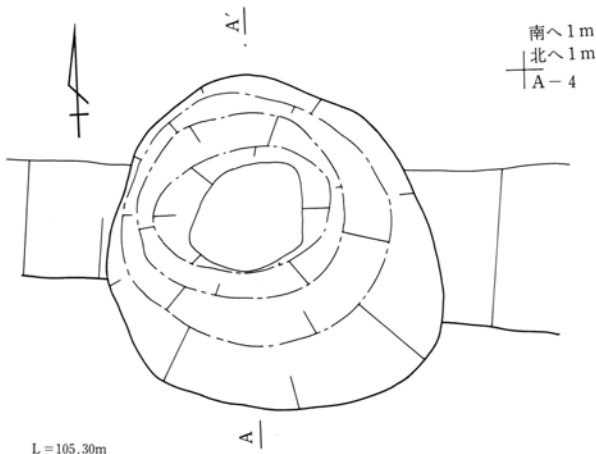
- 1 砂質暗褐色土 As-B軽石粒主体にFP泥流土塊少量含む
- 2 砂質暗褐色土 FP泥流土塊含む



7号竪穴状遺構

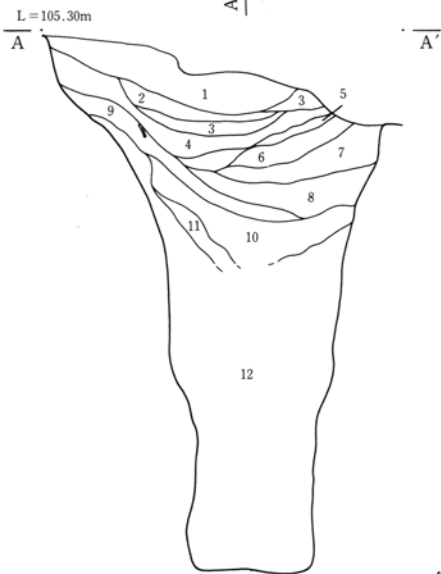
- 1 砂質暗褐色土 As-B軽石粒主体にFP泥流土塊少量含む

0 2m

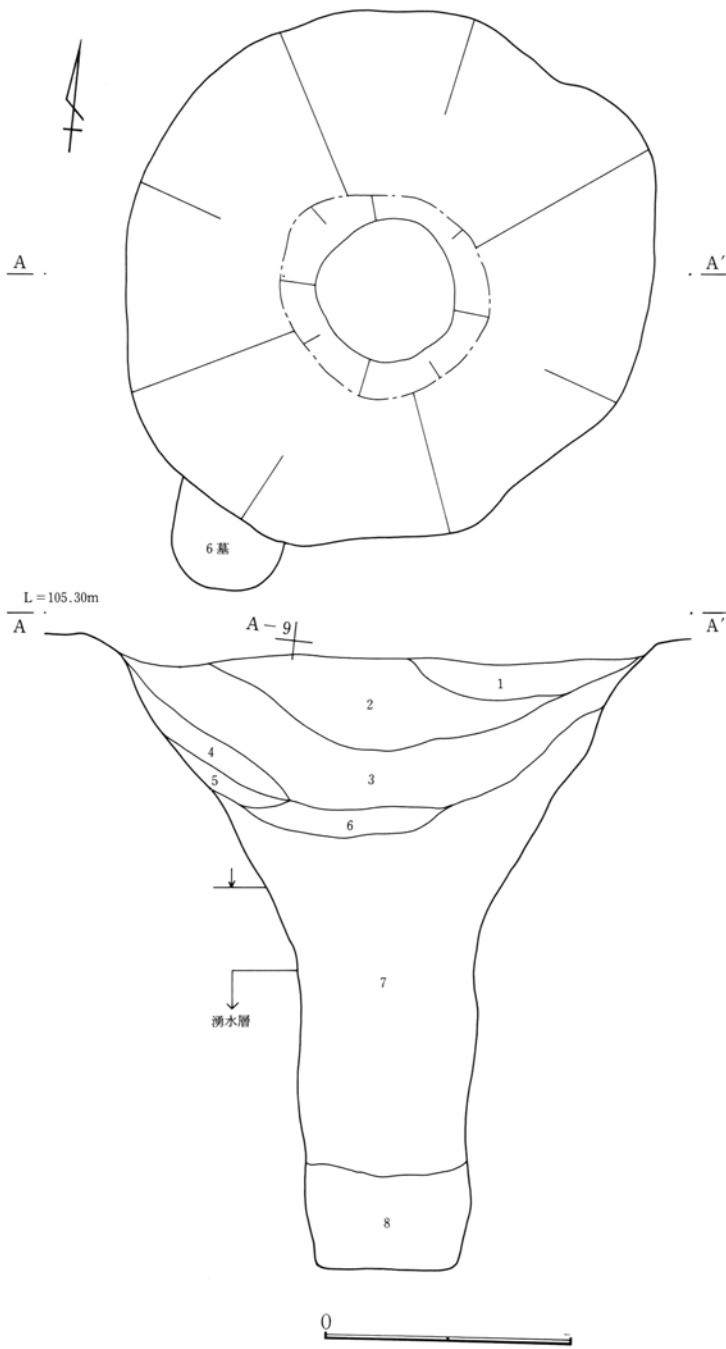


1号井戸跡

- 1 砂質灰褐色土 As-B軽石主体
- 2 砂質灰褐色土 暗褐色粘土塊含む
- 3 砂質灰褐色土 白黄色土塊含む
- 4 砂質灰褐色土 白黄色土粒含む縮良
- 5 砂質灰褐色土 暗色土粒多く含む
- 5' 灰褐色土 塊状
- 6 砂質灰褐色土 白黄色土含む
- 7 砂質灰褐色土 黒褐色粘土塊含む
- 8 灰褐色土 黒褐色粘土塊含む軟弱
- 9 砂質灰褐色土 著しく軟弱
- 10 砂質灰褐色土 黒褐色粘土塊含む軟弱
- 11 黒褐色粘土塊
- 12 砂質灰褐色土 粘質黒色土の互層



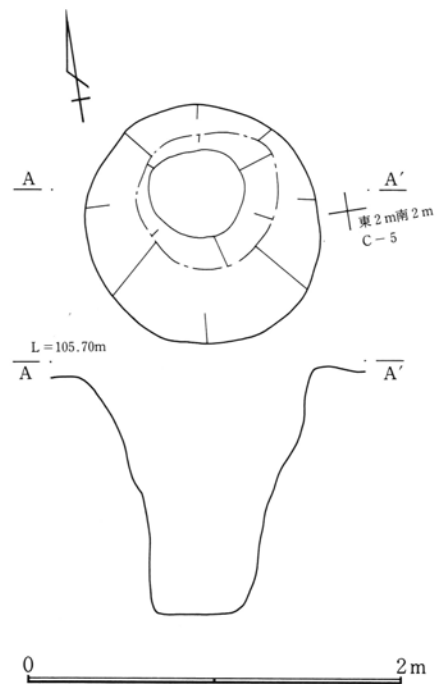
第41図 6号・7号竪穴状遺構・1号井戸跡



2号井戸跡

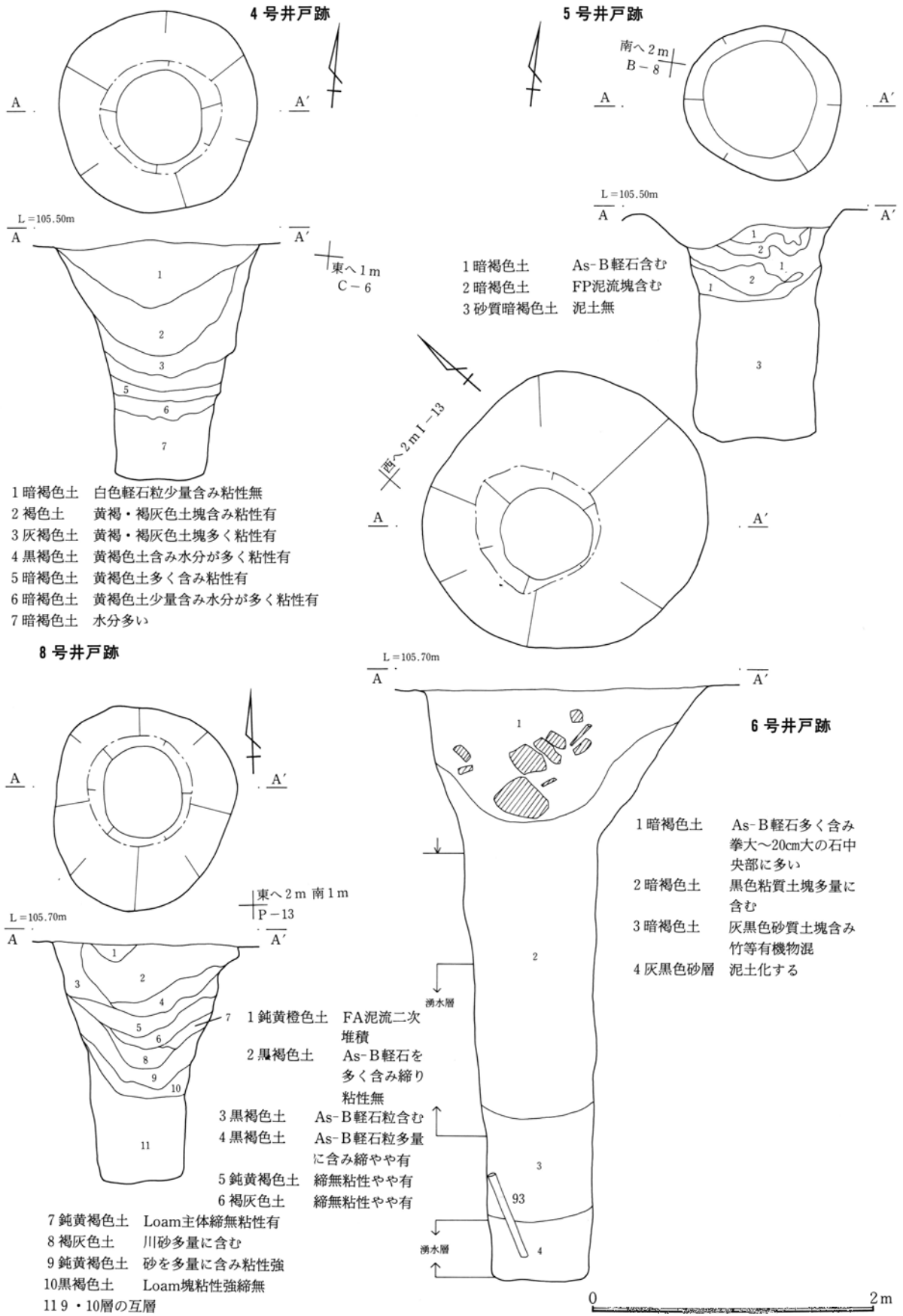
- | | |
|----------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 黄褐色土塊含む |
| 2 黄白色土 | φ5mm大の礫少量含む |
| 3 砂質暗褐色土 | 白黄・黒褐色土塊少量含む縮無 |
| 4 砂質暗褐色土 | 白黄・黒褐色土塊少量含む縮無 |
| 5 砂質暗褐色土 | 褐色土小塊含む縮無 |
| 6 砂質暗褐色土 | 砂粒粗く縮無 |
| 7 砂質暗褐色土 | 黒褐・白黄色土塊多量に含む縮無 |
| 8 黒色土 | 粗粒・石・拳大の礫をまばらに木
葉・竹多く含むヘドロ化 |

3号井戸跡

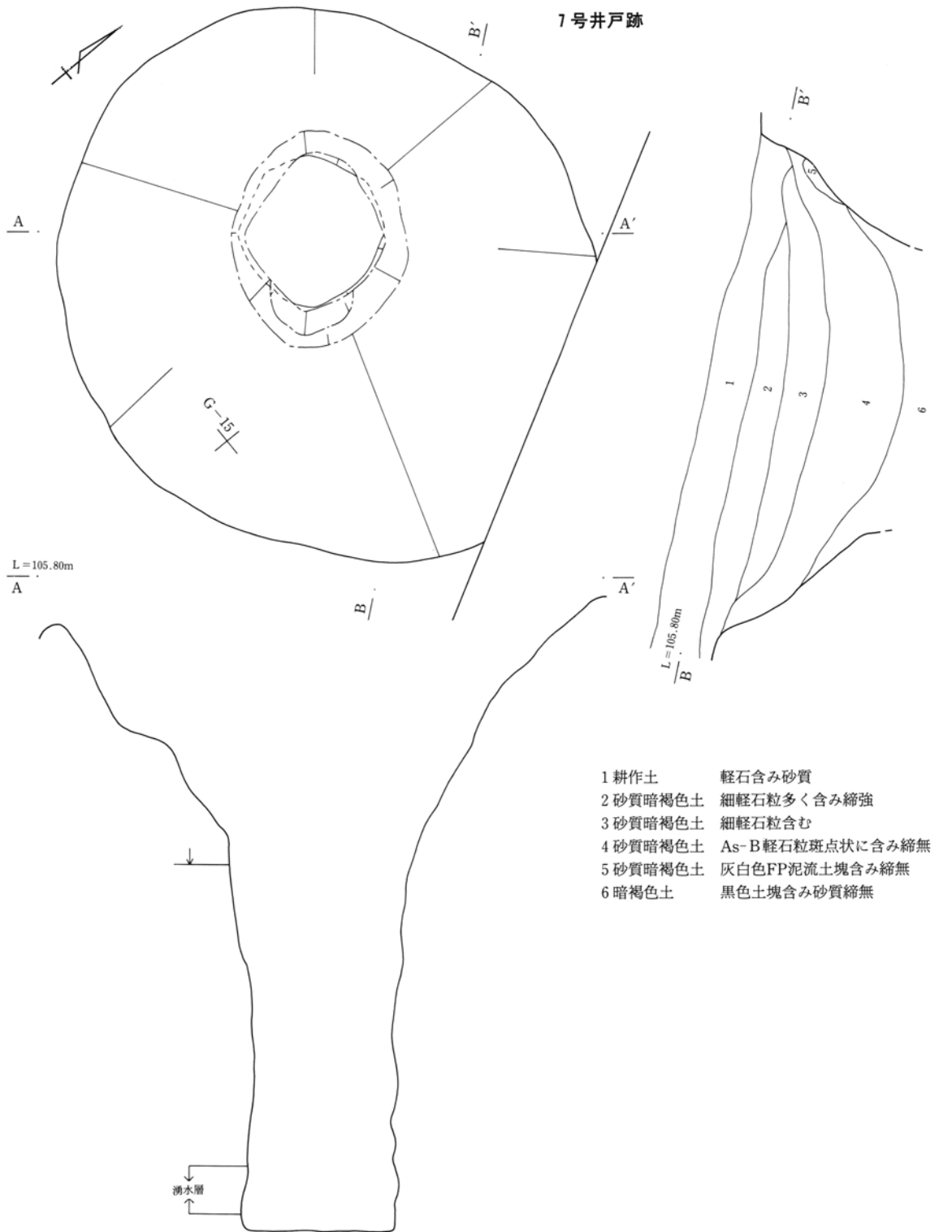


第42図 2号・3号井戸跡

第3章 遺跡の概要



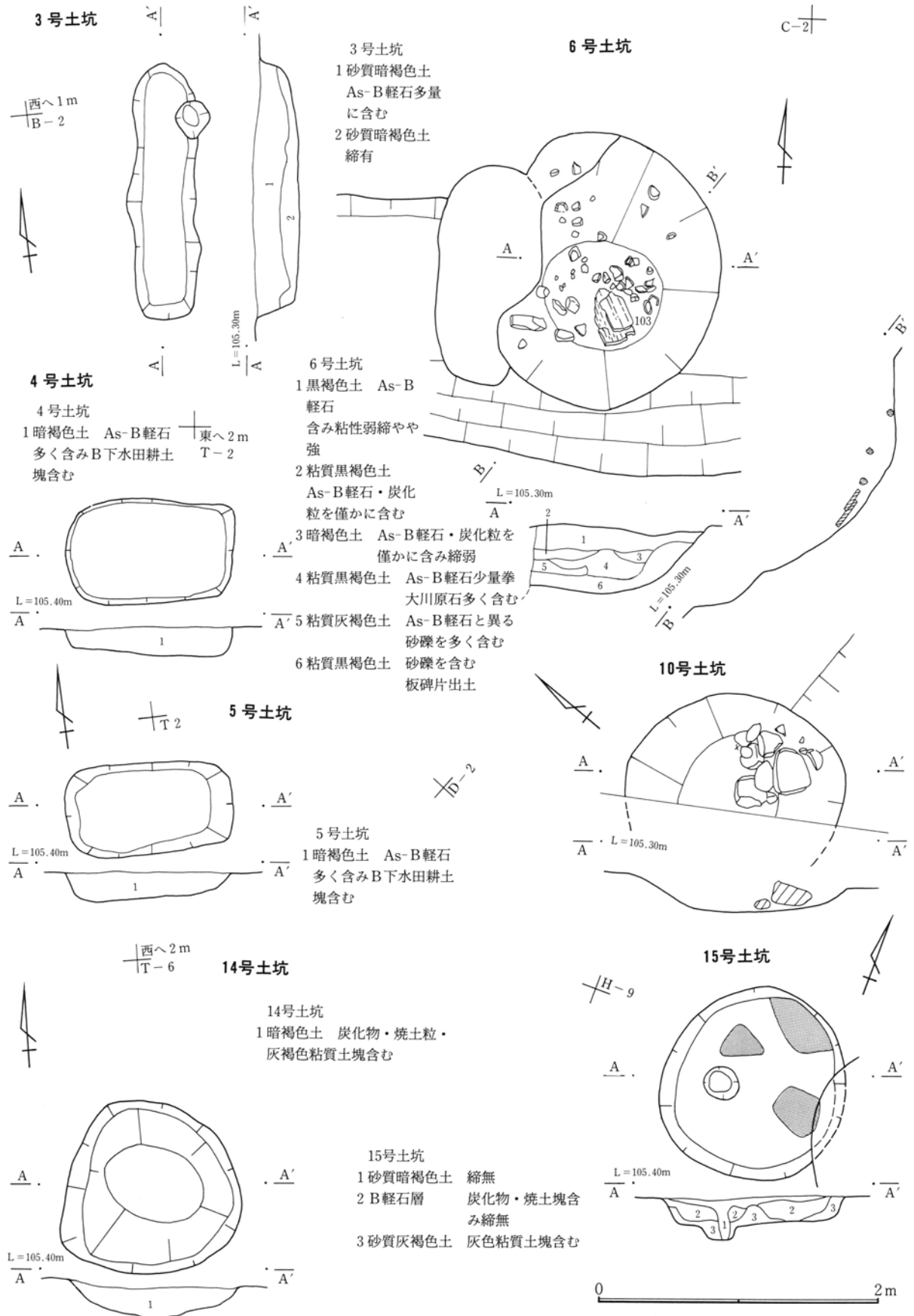
第43図 4号・5号・6号・8号井戸跡



第44図 7号井戸跡

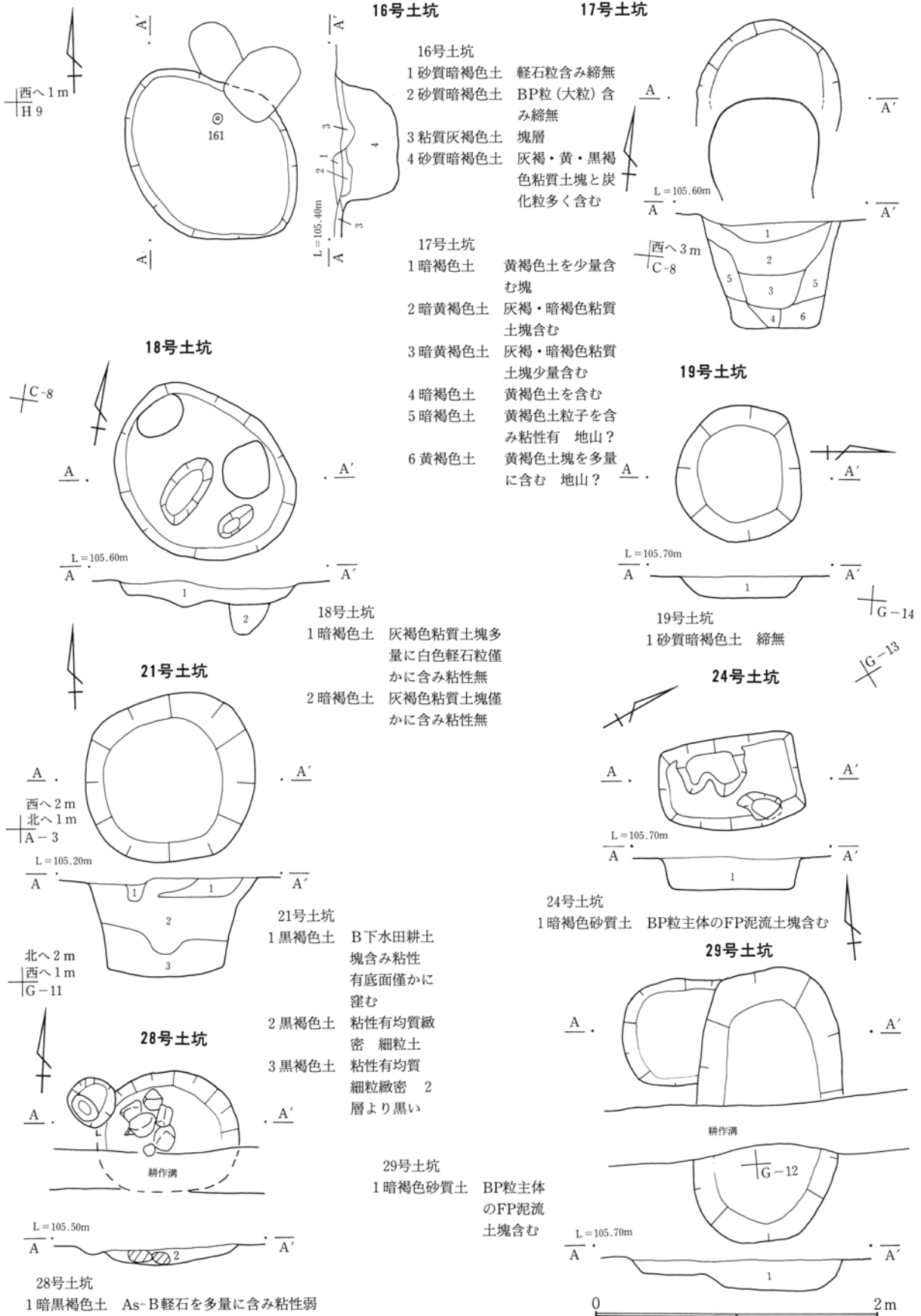
0 2m

第3章 遺跡の概要



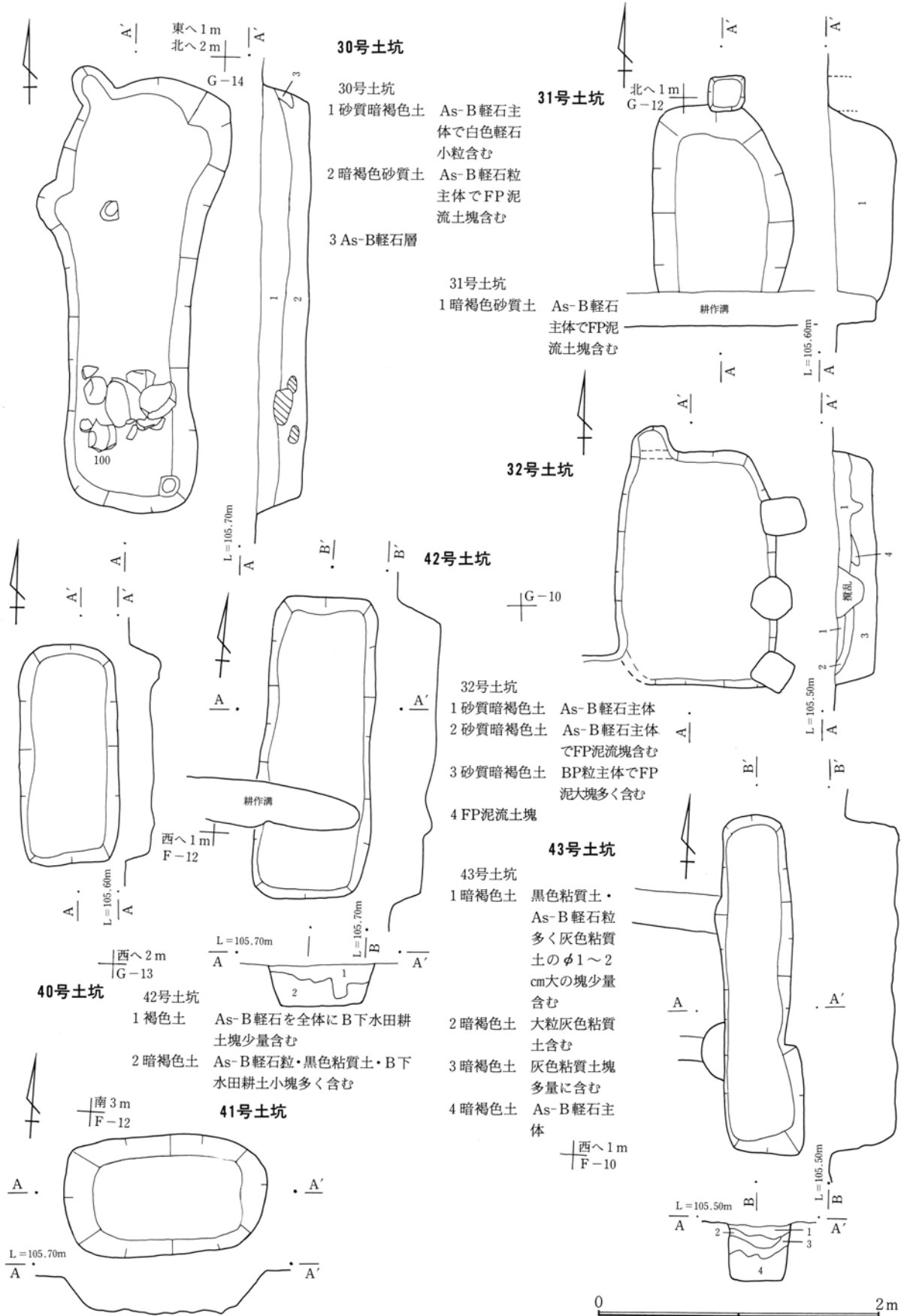
第45図 3号・4号・5号・6号・10号・14号・15号土坑

第1節 中世の遺構と遺物



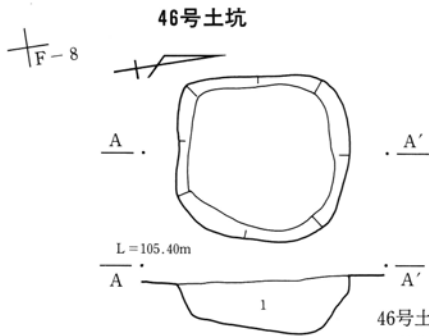
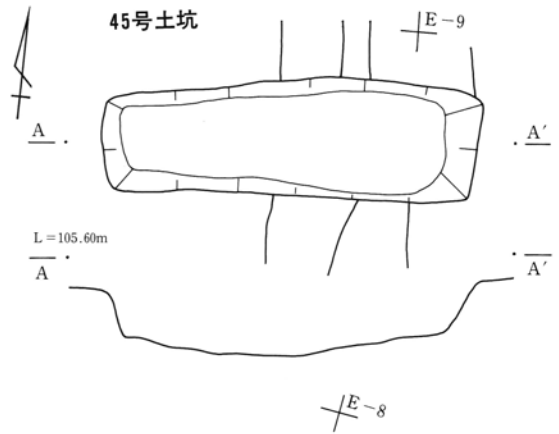
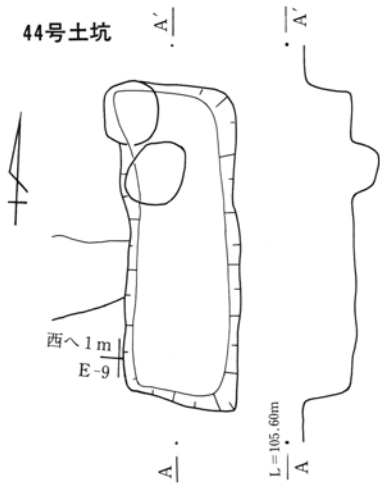
第46図 16号・17号・18号・19号・21号・24号・28号・29号土坑

第3章 遺跡の概要

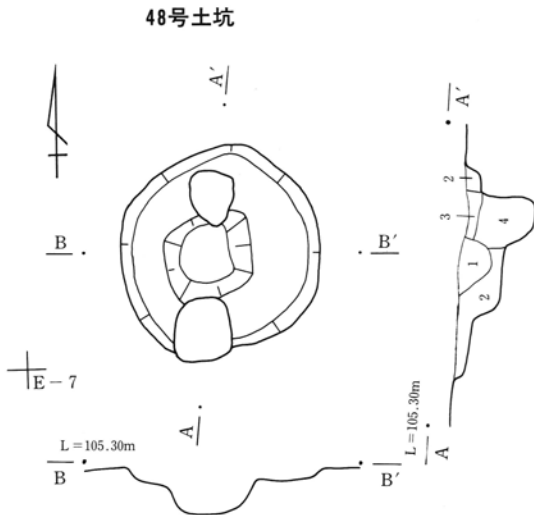
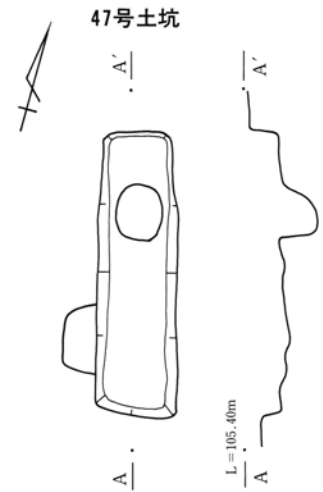


第47図 30号・31号・32号・40号・41号・42号・43号土坑

第1節 中世の遺構と遺物

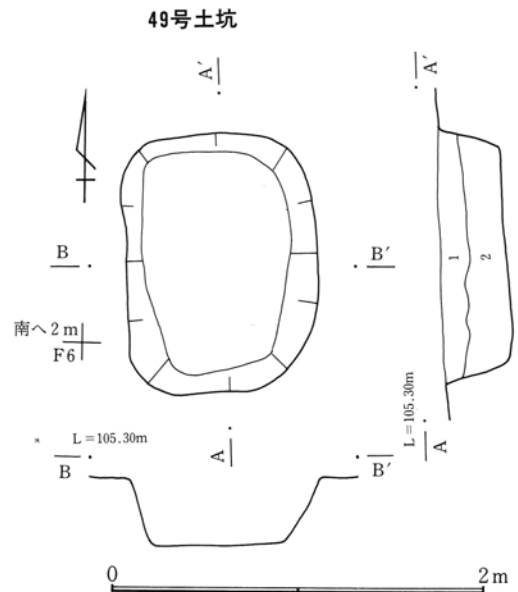


46号土坑
1 暗褐色土 As-B軽石粒多量に含む



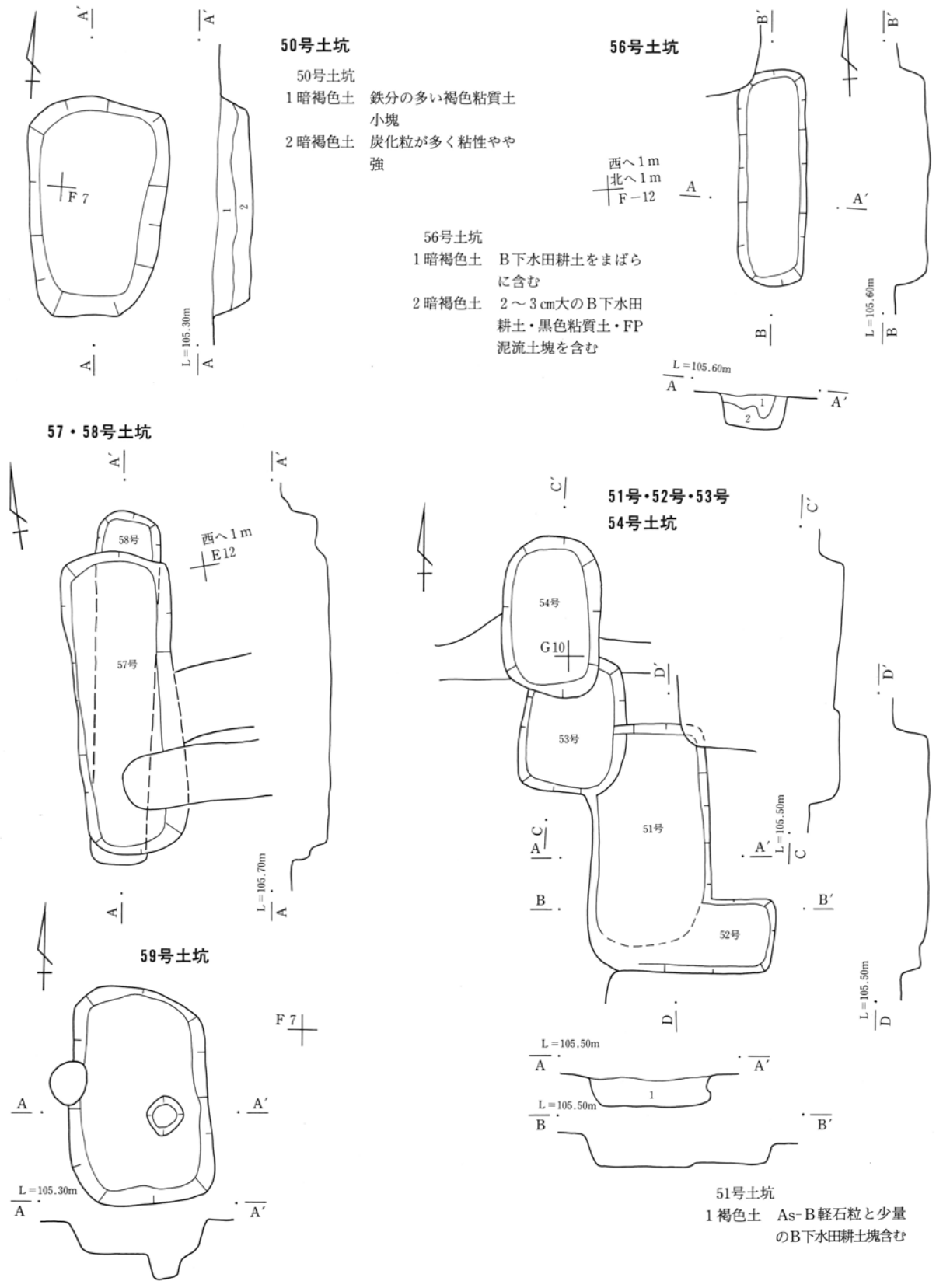
48号土坑
1 褐色土 黒色粘質土・灰色粘質土粒を多く含む
2 粘質黒色土
3 褐色土 鉄分多く含み粘性強
4 暗褐色土 褐色土塊・As-B軽石粒含む

49号土坑
1 暗褐色土 鉄分の多い褐色粘質土小塊
2 暗褐色土 炭化粒が多く粘性やや強



第48図 44号・45号・46号・47号・48号・49号土坑

第3章 遺跡の概要



50号土坑

- 50号土坑
 1 暗褐色土 鉄分の多い褐色粘質土
 小塊
 2 暗褐色土 炭化粒が多く粘性やや強

56号土坑

56号土坑

- 1 暗褐色土 B下水田耕土をまばらに含む
 2 暗褐色土 2~3cm大のB下水田耕土・黒色粘質土・FP泥流土塊を含む

57・58号土坑

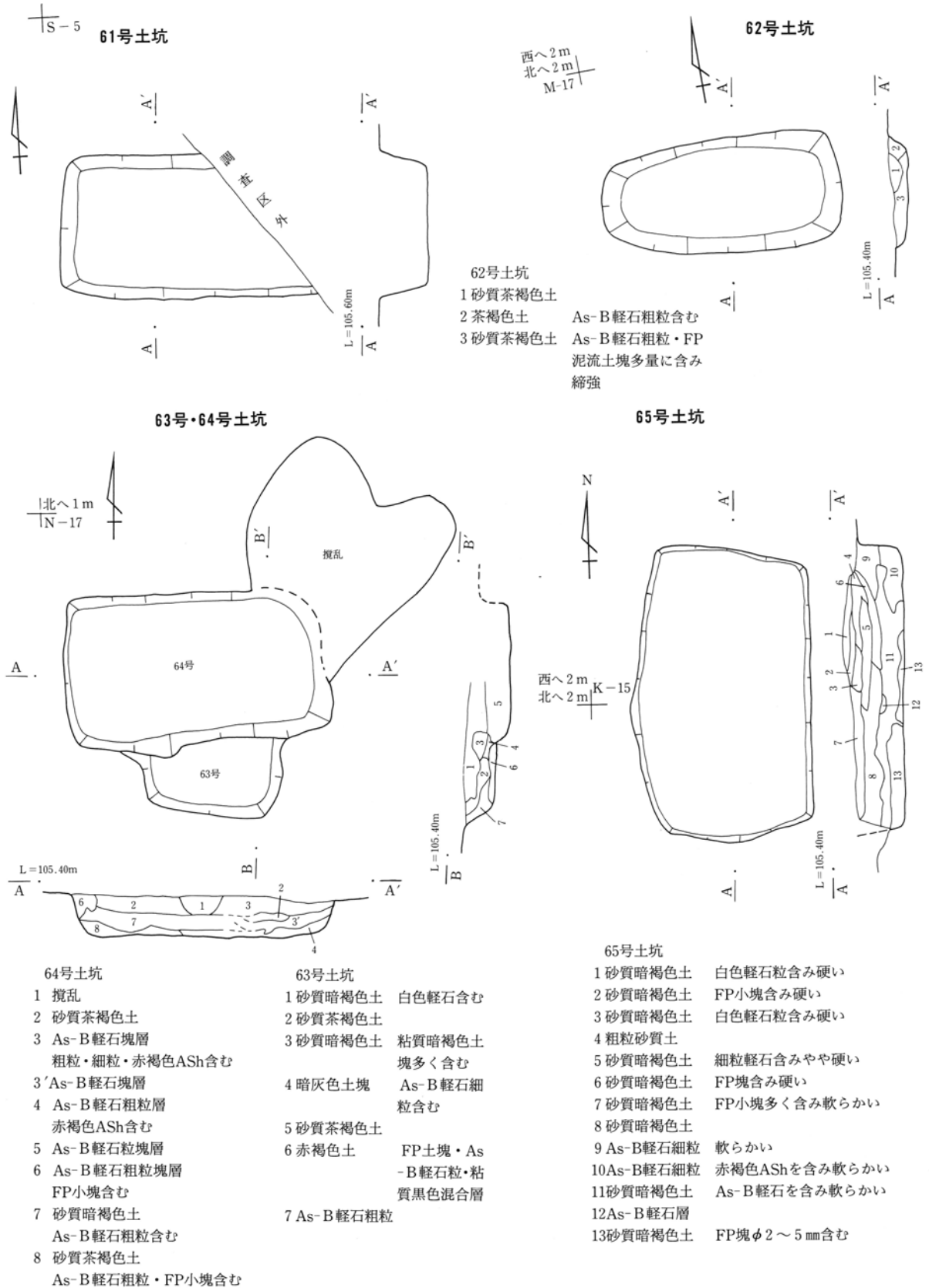
51号・52号・53号
 54号土坑

59号土坑

- 51号土坑
 1 褐色土 As-B軽石粒と少量のB下水田耕土塊含む

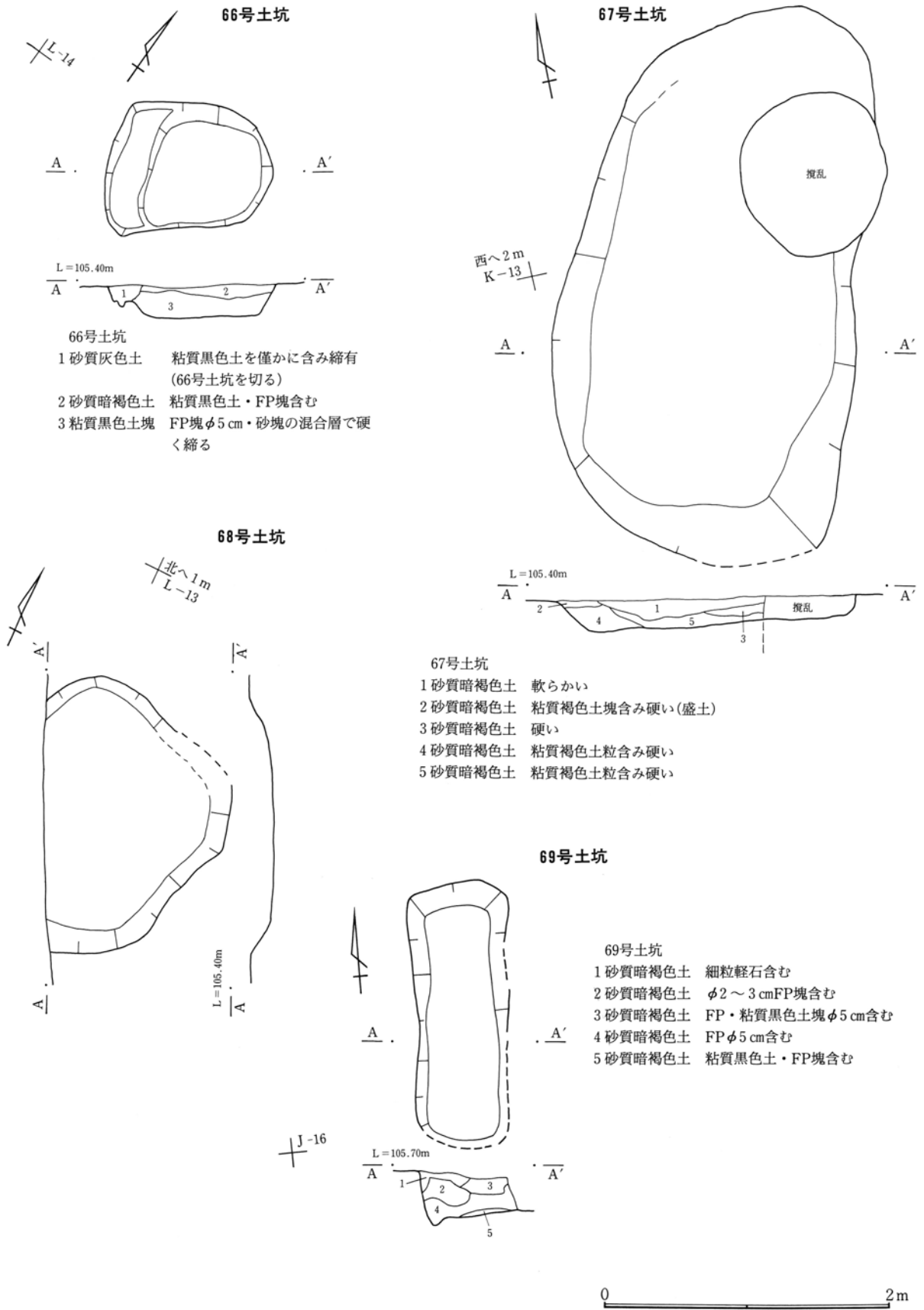
第49図 50号・51号・52号・53号・54号・56号・57号・58号・59号土坑

第1節 中世の遺構と遺物

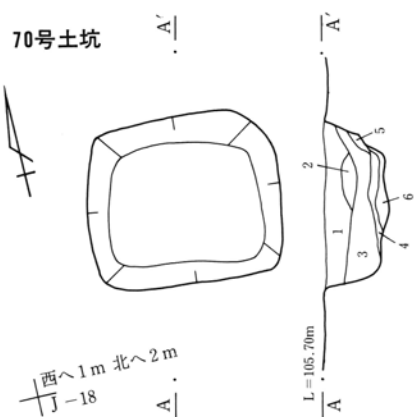


第50図 61号・62号・63号・64号・65号土坑

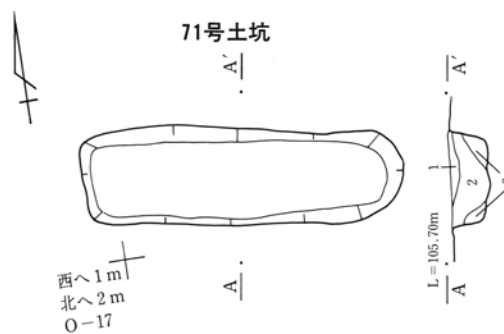
第3章 遺跡の概要



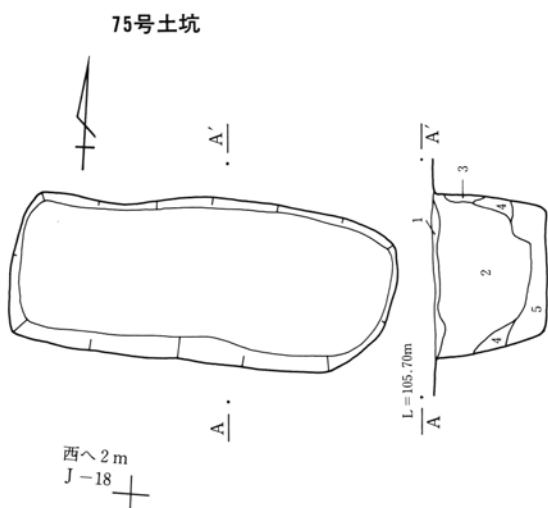
第51図 66号・67号・68号・69号土坑



- 70号土坑
- 1 砂質暗褐色土 FP小塊・ ϕ 0.5~1.0cm白色軽石含む
 - 2 砂質暗褐色土 FP小塊・粘質黒色土塊少量含む
 - 3 砂質暗褐色土 FP小塊少量含む
 - 4 FP塊 締無
 - 5 粘質黒褐色土 締無
 - 6 砂質暗褐色土 FP塊層で締無



- 71号土坑
- 1 砂質暗褐色土 軟らかい
 - 2 砂質暗褐色土 FP塊 ϕ 1~5cm含む軟らかい
 - 3 粗粒砂質暗褐色土 軟らかい

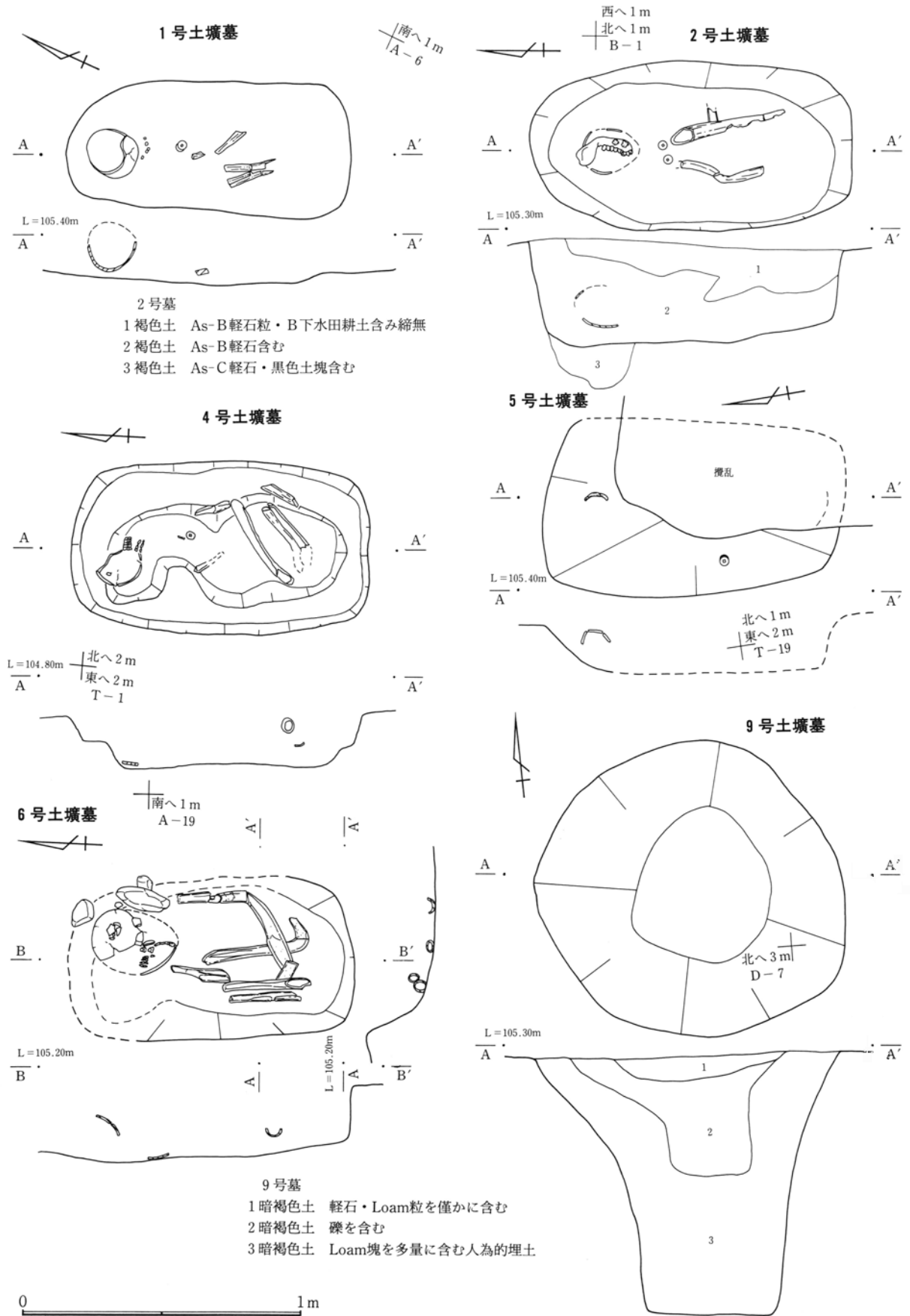


- 75号土坑
- 1 砂質暗褐色土 粘質黒色FP小塊 ϕ 0.5~1.0cm含む軟らかい
 - 2 砂質暗褐色土 粘質黒色土塊・FP塊 ϕ 2.0~5.0cm含む
 - 3 粘質黒色土塊
 - 4 砂質暗褐色土 FP塊僅かに含む軟らかい
 - 5 砂質灰褐色土 FP粘質黒色土塊 ϕ 0.5cm含む

第52図 70号・71号・75号土坑

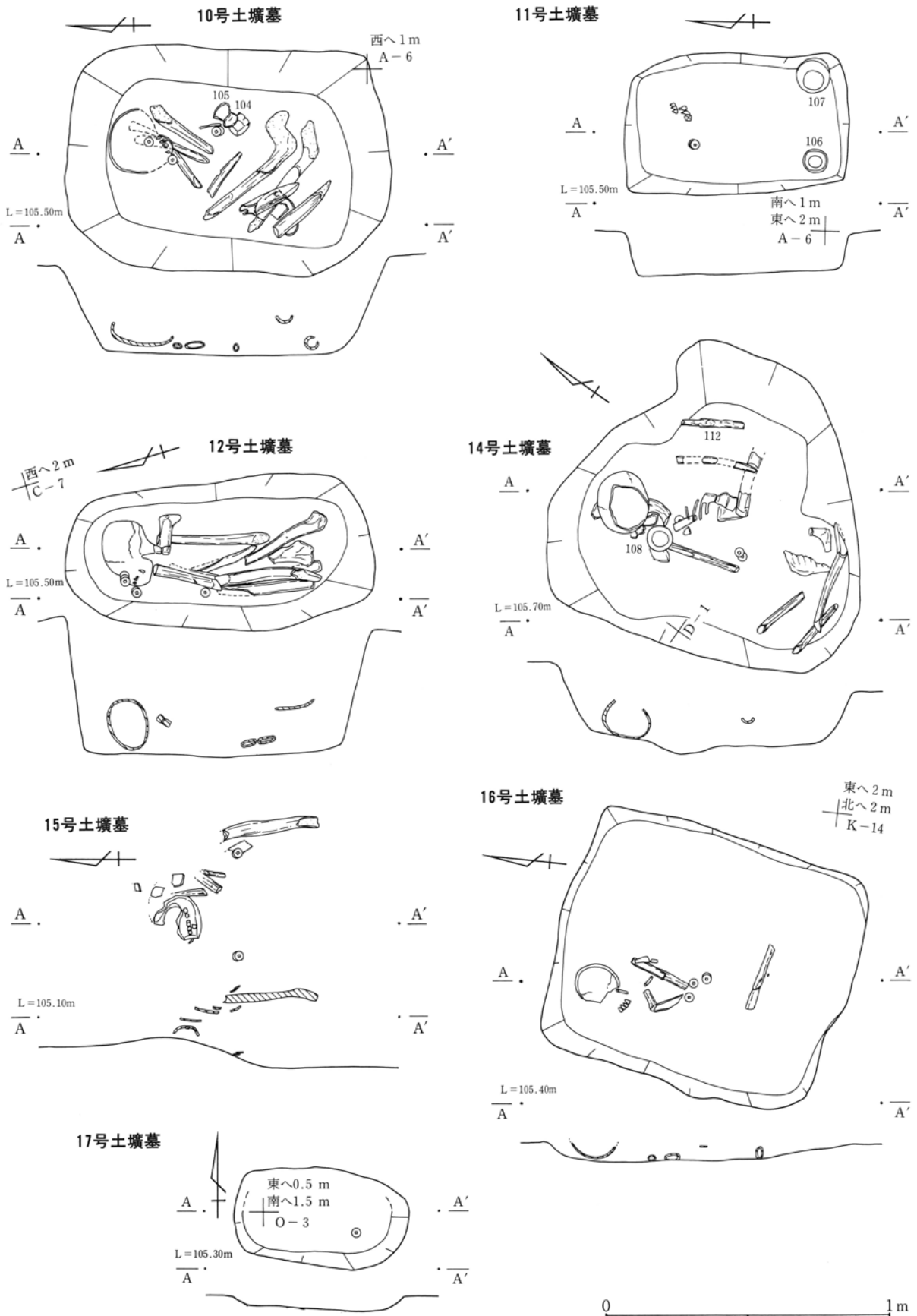


第3章 遺跡の概要



第53図 1号・2号・4号・5号・6号・9号土墳墓

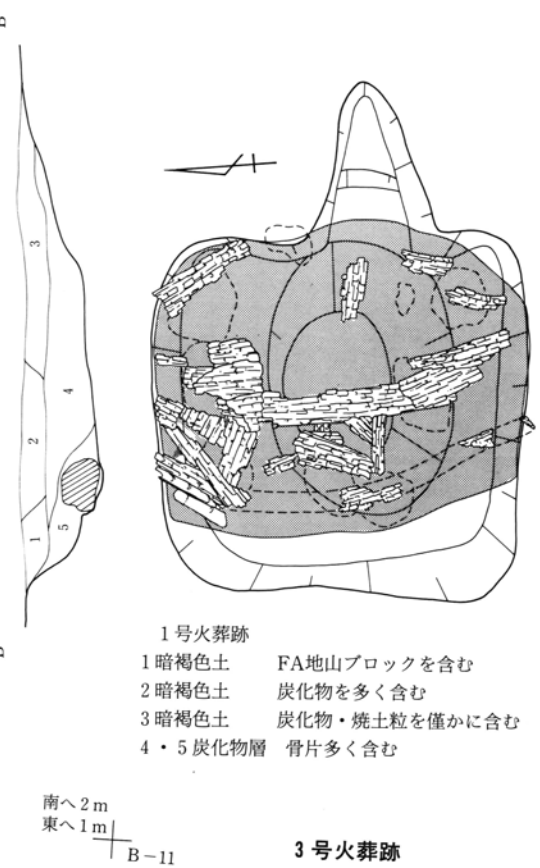
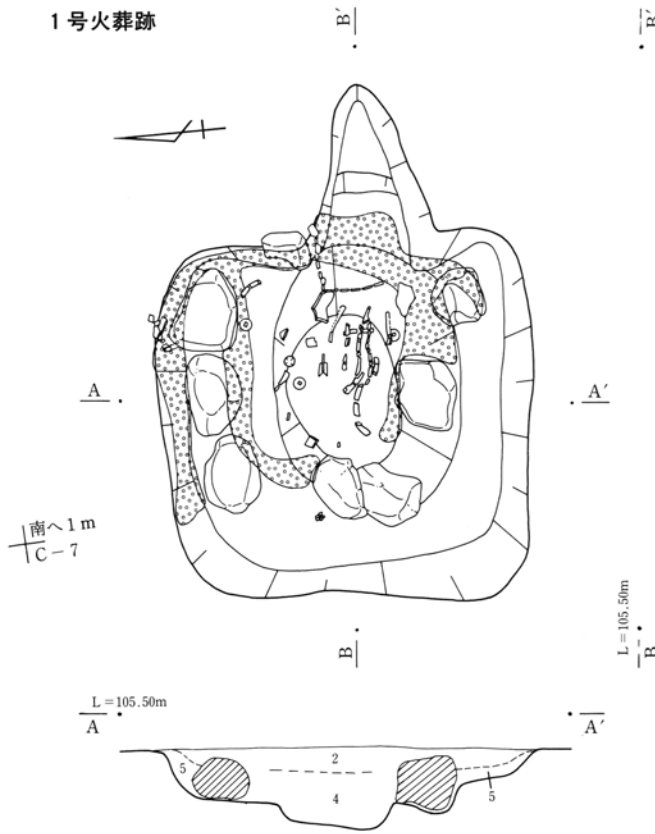
第1節 中世の遺構と遺物



第54図 10号・11号・12号・14号・15号・16号・17号土墳墓

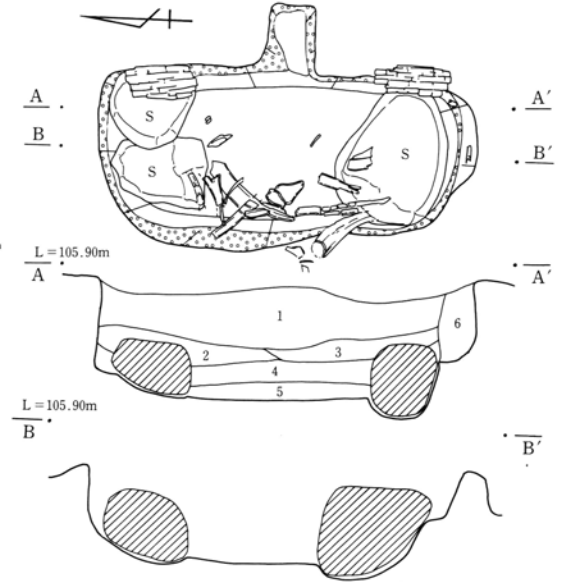
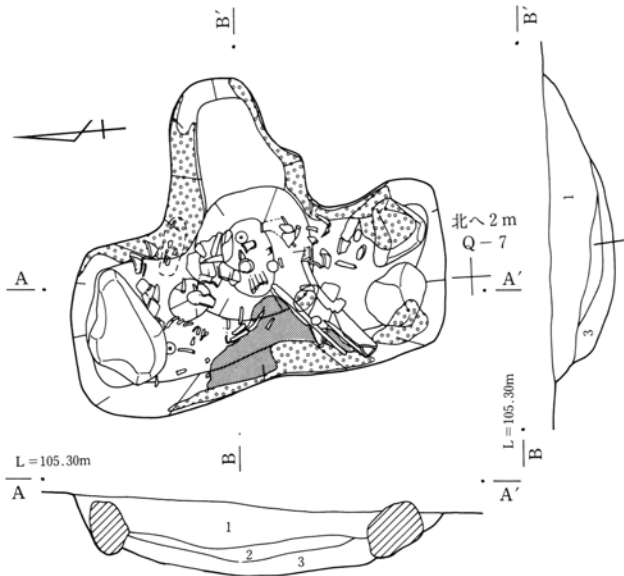
第3章 遺跡の概要

1号火葬跡



- 1号火葬跡
- 1 暗褐色土 FA地山ブロックを含む
 - 2 暗褐色土 炭化物を多く含む
 - 3 暗褐色土 炭化物・焼土粒を僅かに含む
 - 4・5 炭化物層 骨片多く含む

2号火葬跡



- 3号火葬跡
- 1 暗褐色土 灰褐色粘質土塊を僅かに含み締無
 - 2 暗褐色土 焼土塊・炭化物を多量に含む
 - 3 暗褐色土 焼土粒を僅かに含む
 - 4 暗褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む
 - 5 暗褐色土 炭化物を多量に含む

2号火葬跡

- 1 暗褐色土 地山暗褐色土塊・炭化物・焼土粒を含む
- 2 灰色土
- 3 灰色土 骨片を含む

0 1m

第55図 1号・2号・3号火葬跡

2. 遺構出土遺物

遺物出土遺構には、溝・小穴・竪穴状遺構・井戸・土坑・土墳墓がある。主な遺物種には、土器類としてかわらけ土器・内耳鍋・鉢・焼締陶器。石製品類には砥石・石鉢・石臼・板碑。木製品類は井戸より杭状製品・曲物底板・漆器。金属類は古銭・小刀・釘である。

(1) 溝出土遺物

遺物出土の溝は、1号溝、2号溝、6・7・8号溝、53号溝である。

1号溝 (第57・58図 PL21・22-13~23)

土器類は内耳鍋、軟質陶器の鉢、常滑壺・甕、火鉢脚、陶器鉢、石製品は砥石、板碑が出土している。土器類はいずれも小片で全体を知れるものはない。

(1~8)は内耳鍋である。口縁部は内湾ぎみに外傾し、弱いくの字状に折れて体部は直ぐに立つ。復元口径27.6cm(1)、底径19cm(3)、器高は15cm程度になろう。内面及び口縁部は篋状工具による横位の調整。体部は指頭痕が残り、斜位の篋撫を施すものもある。腰部は横位の篋削り、体部は平たく器厚は0.5cmに満たない。色調は外面灰褐色、内面暗灰色を呈し軟焼成だが、(7)は内外とも灰色で硬焼成である。胎土は緻密性を欠くが、均一で細粒砂が多い。外面には総じて煤状付着物が見られる。口唇部断面矩形で上端水平が多く、(6)は内傾する。

(9~13)は軟質陶器すり鉢である。内面摩滅する。底径11cm(13)。内面及び口縁部は篋状工具による横位の調整。体部に指頭痕と弱い指撫で、底部は静止回し糸切り(13)。灰色の硬焼成(9・10・12)とやや灰褐色(11・13)がある。胎土は緻密性を欠くが、均一で細砂粒が多い。口唇部断面形は略矩形で上端が小さく内に突出する。

(14)は火鉢脚であろう。焼成はあまく、淡褐色を呈す。胎土は均一である。凝獅子頭であろうか。

(15・16)は常滑焼壺ないしは甕である。(15)はゆるく肩部から頸部は直立する。口縁部は水平に外曲し、口唇端部を上下に小さく突出させる。壺になろうか。肩部には乳灰色の自然釉がかかる。焼成は堅致で胎土には細砂粒が多い。(16)は腰部片である。外面には平行叩き目の上に格子文叩き目が施される。焼成堅致で胎土均一、白色微細粒多く混じる。

(17)は瀬戸系陶器の鉢であろう。口縁部は外反し玉縁状に丸まる。内面に段をなして体部へ至る。内面口縁部には緑色釉が、体部には鉄釉による釉がけがみられる。

(18)は自然礫利用の砥石である。多面に使用痕がある。4ヶ所を凹状にくぼます。砥石後の仕業であろう。石質は粗粒安山岩である。

(19~23)は板碑残欠である。いずれも小片で種子など完形をとどめるものはない。緑色片岩製である。明確な年代を示す資料はないが、唯一常滑壺口縁部は13世紀後半の形態になろうか。

2号溝 (第59図 PL22-24~26・23-27)

土器類では内耳鍋・常滑、石製品は石臼が出土している。土器類は小片である。

(24・25)は内耳鍋でいずれも内耳部分である。(24)は灰色の硬い焼成で、(25)は褐色を呈す。胎土は均一だが、細砂粒が多く、(24)に白色粒が目立つ。

(26)の常滑は緻密な胎土に大粒な乳白色粒子が目立つ。

第3章 遺跡の概要

(27)は上臼である。復元径31.5cm、厚12cm、縁幅3.0cm、縁高2.5cm、供給孔径4.0cmである。下面のふくみは約1cmをもち、臼目は摩滅し使用頻度の著しさを示す。石材は粗粒安山岩である。

6号溝 (第59・60図 PL23-28~34)

土器類では内耳鍋、軟質陶器鉢・甕、常滑、石製品は砥石、台石（建物台石？）が出土している。

(28)は内耳鍋の腰から底部である。体部は指頭痕及び撫で、腰部は横位篋削りである。外面は媒状付着物がある。内面は灰色、外面は暗褐色の色調を呈す。胎土は細砂粒が多い。

(29・30)は軟質陶器すり鉢で、(29)は内面及び口縁部は横撫で、体部指頭痕及び弱い撫でを施す。口唇断面は丸味をもち上端は内外に小さく突出する。焼成は硬く灰色を呈す。胎土は細砂粒が多い。(30)の底部は径11cmで静止回し糸切り。焼成はやや甘く暗褐色を呈す。胎土は密である。

(31)は軟質陶器甕の肩部であろう。内面組作り痕は比較的丁寧に消されている。色調は褐色で内面は燻しが施されたごとく黒灰色である。胎土は均一で細砂粒が多い。

(32)は常滑甕胴部小片である。部分的に平行叩き目が残る。焼成は堅致で胎土には白色細粒が混じる。

(33)の砥石は流紋岩製で半欠である。外面に使用痕があり、一面の減りが著しい。破損後に弱い被熱が認められる。

(34)は角閃石安山岩で、両面とも平らに加工されたようである。建物礎石として用いられたものであろうか。被熱の痕跡がある。

7号溝 (第60図 PL24-35)

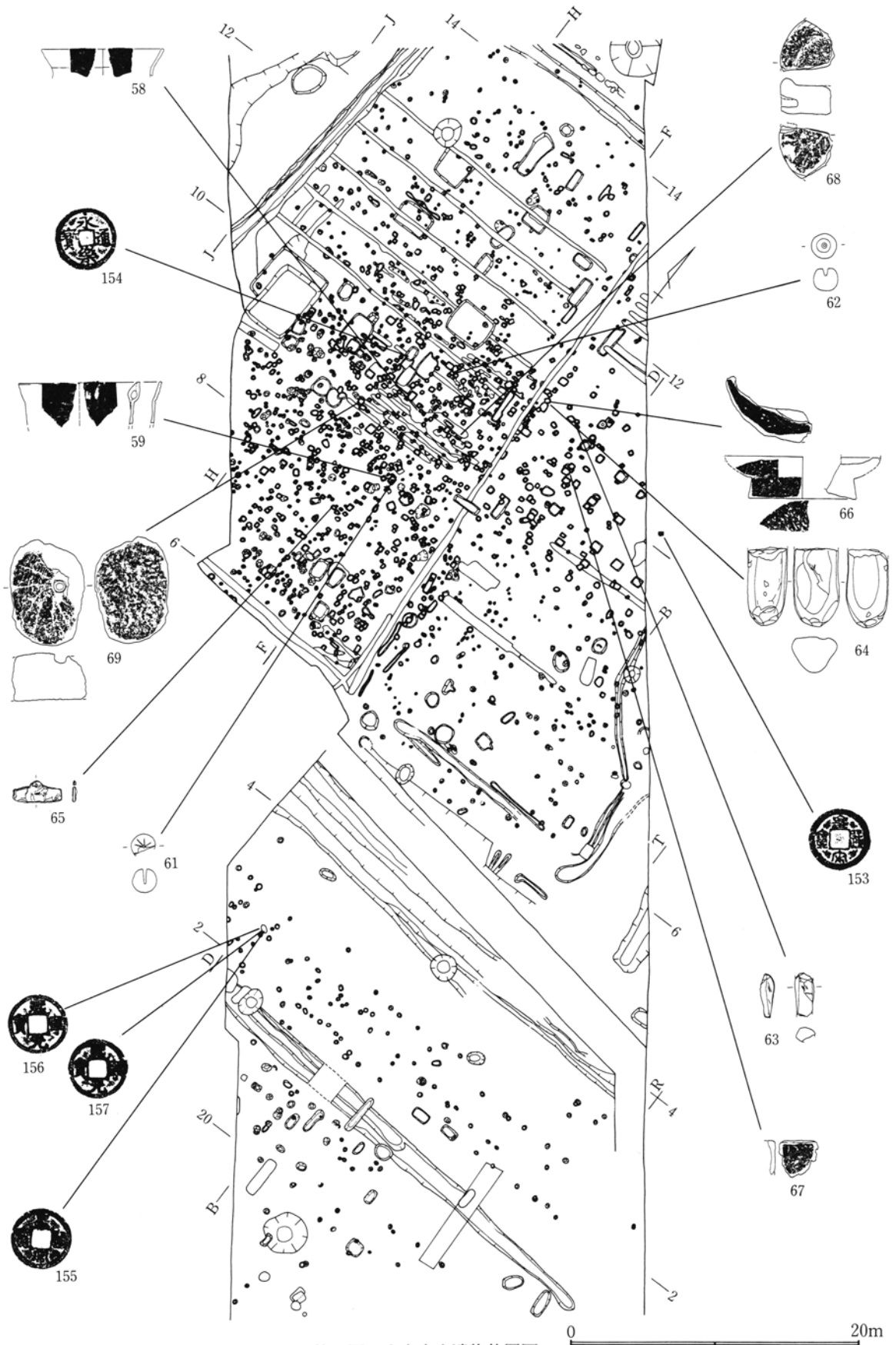
内耳鍋片が出土している(35)。口縁部は短く内湾して開く。口唇断面は矩形で上端は内側に小さく突出する。内外面は横撫でが施されるが、体部内外とも指頭が残る。色調は表面黒灰色で燻し焼成で堅致である。胎土は均一で細砂粒が多い。

8号溝 (第60図 PL24-36・37)

石鉢と石臼が出土している。石鉢(36)は粗粒安山岩製で全体に肉厚でやや内湾気味に立ち上がる。内面の摩滅は著しく、外面は丁寧な石面調整がなされる。推定計測値は口径29cm、底径15.5cm、高14cmである。石臼(37)は粗粒安山岩製。すり面の摩滅著しい。臼目は八分画になろうか。復元径26.5cm、厚み13cm。鉢・臼とも被熱の痕跡がある。

53号溝 (第61・62図 PL24-38~47・25-48~52)

^{かわらけ}土器・内耳鍋が出土している。^{かわらけ}土器(38~43)のうち、(42)・(43)は燈明皿で2枚重ねの使用である。(38~41)は各々形態差が強く、(42・43)は大きさが異なる。すべて轆轤調整で底部の切り離しは不明の(39)・(41)以外は左回転の糸切りである。色調は橙色で胎土が比較的密である。(40)は白味が強く胎土に細砂粒が目立つ。また(42)・(43)は油煙状の付着物が内外面を覆う。(38)は扁平な器形で体部は内湾。口径7.8、底径5.0、器高1.6cm。(39)は体部外反して開く。口径7.6、底径4.4、器高1.6cm。(40)は体部が深く、器肉が薄い。口縁部調整による稜がある。口径7.6、底径4.5、器高2.3cm。(41)は口径・底径の差が小さく、口唇部が尖る。口径6.6、底径5.4、器高1.7cm。(42)・(43)はともに口縁部の1/2が欠損するが、割口全体にも油煙状付着物が認められ、現状態で使用されたものであろう。(42)の外底と(43)の内面付着物痕跡の形状が一致するところ



第56図 小穴出土遺物位置図

第3章 遺跡の概要

から、上下の割口を合わせて用いたと考えられる。(42)は口径7.2、底径4.5、器高1.6cm。(43)は口径7.8、底径5.0、器高2.0cm。

(44)～(52)は内耳鍋である。内面及び口縁部は横撫で、体部には指頭痕及び撫で、腰部に横篋削りを施す。口唇部断面形は矩形を呈するが、(44)・(48)は上端水平、(45)は内傾する。胎土は細粒が多い。色調は黒灰色で外面煤状付着物がある。(44)の内面は灰色で焼き上がりが良好。口径34.0、底径23.6、器高16.0cm。(45)は口径27.6、底径19.0、器高14.6cm。(48)は口径35.6、底径25.0、器高17.5cm。(46)・(47)・(49)の底径は各々21.9・22.0・17.6cmである。

(2) 小穴出土遺物 (第56・63・64図 PL26-58～67・27-69・38-153～157)

遺物出土の小穴には、掘立柱建物跡を構成する柱穴とそれ以外の小穴がある。遺物には土器類として内耳鍋片・軟質陶器と砥石・石臼などの石製品が、金属類としては火打金・古銭がある。

(58)・(59)は内耳鍋片である。ともに復元口径33.8cm前後になる。外面口縁部横撫で、体部は指頭痕が残る。(58)は内外面とも黒色の燻べし焼成。(59)は黒斑の暗黄橙色。胎土は粗砂粒と白色細粒が混じる。

(60)は軟質陶器鉢物であろう。内面に摩滅はなく、火鉢の類になろうか。内面灰色・外面くすんだ橙色を呈す。胎土は5mm大の砂礫が混じる。

(61)・(62)は形態の同じ土製品と石製品で、球体である。球体の本体に一孔を穿つが貫通はしない。(61)は土製焼成品で半欠である。孔は僅かに先細りで深さ3.0cm、上端径1.0cm。周辺には放射状に4条の細筋が刻まれ、欠損部分へ対応すれば計8条になる。色調はにぶい黄橙で胎土は細密である。(62)は石製で孔を穿つ面は平坦に作られ、これと対する面も平坦気味である。孔は先細りで深さ1.5cm、上端径1.0cm。孔の縁辺の4ヶ所に微かな刻みが観察できる。石質は粗粒安山岩。(61)・(62)とも直径5.0cm、重さは(61)の半欠分を加算すればともに140g前後である。

(63)・(64)は砥石である。(63)は流紋岩製の定形砥石であろう。現状5面体で使用痕が認められるのは4面である。片端部は欠損。長さ12.0cm、厚さ4.0cm、重量240g。(64)は粗粒安山岩棒状亜円礫利用で置砥になろうか。片端は欠損するが欠損後に被熱。3面に使用痕が顕著。22.0×13.0×10.0cm、重量4.3kg。

(65)は火打金である。長軸の片縁が山形に盛り上がる形態である。錆のため明らかでないが、山部には小孔が穿たれるようである。刃部の両端は切り落としになり略長方形である。長さ7.0cm、幅3.0cm(刀幅1.5cm)、刀厚0.3cm、重量15g。

(66)～(69)は粗粒安山岩製の石臼である。(66)は茶臼の受皿部分である。下臼は欠損する。受皿部復元径42cm、台部径30cm、高さ11.5cm。幅2.0cmの水平な皿縁部から弧を描いて皿面になる。深さ2.0cm。(68)は上臼である。復元径33cm。表面縁部欠損。厚み少なく現状で7.0cm。裏面に径4.0cmの芯棒受孔あり。臼目消失するが、ものくぼり痕残る。ふくみ1.5cm。(69)は下臼である。復元径28cmになろうか。厚さ13cm、芯棒受孔は貫通しない。希な事例とされる。径3.5cm、深さ

3.0cm。すり目は放射状を呈するが、目筋は粗い。8分画か。ふくみ0.9cm。

No	出土遺構	銭名	鑄造年			備考
			北宋	宝元	2	
153	20号掘立	皇宝通寶	北宋	宝元	2	1039
154	25号掘立	永楽通寶	明	永楽	9	
155	68C2小穴	皇宋通寶	北宋	宝元	1	1039
156		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068
157		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068

(3) 竪穴状遺構出土遺物

1号・4号竪穴状遺構から出土している。遺物は僅かであり、石臼・砥石・古銭などである。出土位置はいずれも埋土中であり、遺構に直接伴っているものはない。

1号竪穴状遺構 (第62・74図 PL25-53~57・38-158)

石臼小片2点、砥石2点(同一個体)、古銭である。

(53)は茶臼の下臼受皿部分である。粗粒安山岩製、復元口径19.5cm、縁幅2.3cm、縁高0.8cm。側面は細かな調整が施される。縁・皿部の器面は滑らかである。(54)は白目が刻まれる面が張らみをもち下臼である。粗粒安山岩製。

(55)・(56)は同一個体の砥石である。流紋岩と考えられるが質量は軽い。破損後で使用されている。

(57)は角閃石安山岩である。精緻な成形はないが、方形状に整えたものであろう。また一面は粗く割り取り平坦面を作り出している。部分的には被熱の痕跡が残る。掘立柱建物跡に関わる土台石であろうか。

古銭は景祐元宝(北宋・景祐元年・1034年初銭)である。

4号竪穴状遺構 (第74図 PL38-159)

古銭で聖宋元宝(北宋・建中靖国元年・1101年初銭)である。

No.	出土遺構	銭名	鑄造年			備考
			北宋	景祐	1034	
158	1号竪穴	景祐元宝	北宋	景祐	1034	
No.	出土遺構	銭名	鑄造年			備考
			北宋	建中靖国	1101	
159	4号竪穴	聖宋元宝	北宋	建中靖国	1101	

(4) 井戸跡出土の土器類・石製品

遺物出土の井戸跡は1号・2号・6号・7号井戸である。出土遺物のうち木器は2号・6号・7号井戸から検出されている。また6号井戸に獣骨(狸頭骨)がある。

1号井戸 (第65図 PL27-70・71)

^{かわらけ}土器と内耳鍋小片がある。(70)は皿型で轆轤調整。底部左回転糸切りである。色調は橙色で胎土は細砂粒が混じり、茶褐色粒子が目立つ。口径11.2、底径6.4、器高2.6cm。本遺跡出土の^{かわらけ}土器では大型品に類する。

2号井戸 (第65図 PL27-72~76)

軟質陶器の鉢・壺である。(72)~(76)は鉢で内面の摩滅は著しい。色調は暗灰色で胎土は粗く、砂粒の混入多い。(72)は口縁部で横撫で調整。口唇部は矩形を呈し、上端は内に小さく突出する。(73)は胴部紐作りで指頭痕著しい。底部右回転糸切り。胴部との接合痕明瞭。底径10.9cm。(76)は壺口縁部である。短く直立し端部は小さく外傾する。色調は赤橙色から暗灰色で胎土中に赤褐色粒子が混入。復元口径23.6cm。

4号井戸 (第65図 PL27-77)

肉厚な大型類の^{かわらけ}土器である(77)。轆轤調整で、底部左回転糸切りと考えられるが、指頭による凹凸が目立つ。色調は淡黄橙色で胎土は蜜である。口径11.0、底径7.0、器高3.3cm。

第3章 遺跡の概要

6号・7号井戸（第65・66図 PL27-78・79 28-80~89）

土器類は内耳鍋小片、石製品は石鉢・石臼・凹石・板碑片がある。

(78)・(79)は内耳鍋口縁部及び体部片である。(78)は口唇部上端強く内傾する。外面は黒色ないし黒褐色で内面は暗灰色、(79)は浅黄橙色、胎土は砂粒多く混じる。

(80)は緑色片岩の自然石である。表裏に刻線状の擦痕がある。刃物刃部の研痕か。10.9×4.7×2.1cm。150g。

(81)・(82)は石鉢の小片である。石質は粗粒安山岩、口唇部は略矩形。

(83)は上臼である。復元径30cm、表面縁は幅3.5cm、縁高2.5cm、供給孔径4.4cm。表面は白目の摩滅著しい。供給孔より物くぼり痕が見られる。ふくみ大きく2.0cm、中央に芯棒受け孔径4.5cmがある。粗粒安山岩。

(84)は角閃石安山岩の凹石である。20.5×16.0×12.0cm。1.9kg。非整形の自然礫を使用。1片面に8.5×7.0cm、深さ2.0cm弱の不正凹部を作る。中世には比較的例を見る遺物であるが、用途は不明。

(85)~(89)は板碑片である。緑色片岩製。種子等画像を残すものはない。(86)の裏面には1.5cm幅で横位の鑿痕がある。(89)は7号井戸出土。

(5) 井戸跡出土の木製品

2号井戸（第67図 PL29-90・91）

(90)は漆塗り製品である。表裏とも黒漆で片面には赤漆で描かれた草文と考えられる文様が見られる。縁辺は破損し現況で6.0×7.0cm、厚み1.5cm。片方に緩く湾曲する。漆碗の底部と考えられる。

(91)は棒状製品で片方向は破損し、本来はある程度の長さを持つものであろう。現況で長5.9cm、径3.0cm。表面は磨かれ、相対の側面を平坦に削る加工が施されている。

6号井戸（第67図 PL29-92・93）

(92)は曲物の底板と考えられる。4枚の部材からなり、各部材側面には2箇所に留め釘痕が残り、木釘あるいは竹釘によって接合されていたものであろう。底板は正円とならず、寸法に僅かな差がある。径18.6×18.2cm、厚0.9cm。

(93)は棒状製である。表面は微細な削り加工が施され滑らかである。両端部の縁は面取りがなされており、本来の形状をとどめる。全体に太・細の径差はなく均一な作りである。長さ60.9cm、5.0cm。

7号井戸（第68図 PL29-94~97）

(94)は板材で節部の欠落と考えられる。厚さ0.9cm。

(95)は棒状の端部であろうか。片端は終結し、縁は丸味をつけて面取りがなされる。側面は縦方向に細く面取り状に表面調整を施す。他方端部は欠損するが緩い抉りを施し、径2cm程度に細くする。全体形状は不明であるが、編具の一つ駒に類似する形状になろうか。現況では長さ7.0cm（5.5cm・1.5cm）、太部径4.8cm、細部径2.0cm。

(96)・(97)は杭状製品である。片端部に削りを施し尖らせる。(96)は長さ59.6cm、径7.6×9.0cm。(97)は長さ30.9cm、径5.2×6.0cm。

(6) 土坑出土遺物（第69図 PL30-98~103・38-160~162）

土坑出土遺物には土器類と石臼・板碑・古銭がある。遺物出土土坑は6号・28号・29号・30号・56号土坑

である。

(98)は29号土坑出土。土器かわらけ小片である。体部は外反して大きく開く大型類である。轆轤調整。復元は径12.6、底径6.8、器高2.6cm。色調は橙色、胎土は蜜である。

(99)は56号土坑出土。小型類の土器かわらけでは口唇部欠損、轆轤調整、底部回転糸切り。表面は二次被熱の痕跡か、赤褐色を呈す。胎土細砂粒多く混じる。

(100)・(101)は30号土坑出土、軟質陶器鉢である。(100)は片口の鉢。内面摩滅著しい。外面上半横撫で、体部指頭痕、腰部横位篋削りを施す。底部糸切り。底部・腰部を除き外面は煤状付着物著しく、被熱する。口唇部上端は内外面に突出。色調は灰色。胎土は砂粒混子。口径28.8、底径11.4、器高12.4cm。(101)口縁部小片、口唇部矩形で上端は内面に小さく突出。色調は灰色。胎土に細砂粒多く混じる。

(102)は28号土坑出土。石臼の上臼である。復元径33.0cm、上面縁部欠損、厚み小さく現況で7.0cm、下面ふくみ15.0cm。ものくばり痕残るが、白目は消失する。芯棒受け孔径4.0cm。粗粒安山岩製。

(103)は6号土坑出土。緑色片岩製板碑である。蓮座の蓮弁部が僅かに残り、脇侍種子サク(勢王)サ(観音か)が刻される。薬研彫りはやや鋭敏さに欠ける。裏面には2cm程度の鑿痕が残る。

古銭は15号土坑より熙寧元宝(北宋・熙寧元年・1068年初銭)、16号土坑より天聖元宝(北宋・天聖元年・1023年初銭)、29号土坑より皇宋通宝(北宋・宝元二年・1039年初銭)がある。

No.	出土遺構	銭名	鑄造年			備考
160	15号土坑	熙寧元寶	北宋	熙寧 1	1068	
161	16号土坑	元聖元寶	北宋	天聖 1	1023	
162	29号土坑	皇宋通寶	北宋	宝元 2	1039	

(7) 土墳墓出土遺物

土墳墓出土遺物には古銭は例外なく検出されている。古銭以外の遺物では土器かわらけ・鉄器・砥石などである。これらが検出された遺跡は6号・9号・10号・11号・14号墓である。土器は10号・11号・14号墓から、鉄器(刀子)は9号・14号墓からである。6号墓出土の砥石は副葬品としての蓋然性が低く、混入品の可能性もある。

土器かわらけは器高の低い無高台皿型で、口径の大小から2類に分けられる。1つは口径10cm以下、他は口径10cm以上である。大・小の土器かわらけは組み合わせて副葬される。なお、14号墓では大を欠くが、遺構の一部が調査区域外にかかるため未検出の可能性もある。10号・11号墓の大型土器かわらけは形態が極めて類似する。また両墓跡の土器大・小は10号墓が淡黄色、11号墓が淡橙色で統一である。

6号土墳墓(第70図 PL31-109)

粗粒輝石安山岩の自然礫使用の砥石であろうか(109)。2面に著しい摩滅痕あり。不定形で14.2×11.5×6.0cm、1.5kg。

9号土墳墓(第70図 PL31-110)

釘状の鉄製品である(110)。断面矩形、片端は尖る。中央部に木質部が残る。全長18.0cm、径0.4cm。

第3章 遺跡の概要

10号土墳墓 (第70図 PL31-104・105)

土器(104)・(105)とも轆轤調整、底部左回転糸切り。(104)は色調が淡黄色、胎土は細砂粒が多く混じる。口唇部に小さな油煤状付着物あり。口径7.6cm、底径5.2cm、器高1.9cm。(105)は口径10.8cm、底径6.4cm、器高2.6cm。

11号土墳墓 (第70図 PL31-106・107)

(106)・(107)とも轆轤調整、底部左回転糸切り。色調は淡橙色。器表面は微細土で上撫のため緻密。(106)は口径7.5cm、底径4.5cm、器高1.7cm、(107)は口径12.0cm、底径7.0cm、器高2.9cm。

14号土墳墓 (第70図 PL31-108・111・112)

(108)の土器は轆轤調整、底部左回転糸切り。色調は橙色。胎土は密。口唇部に小さな油煤状付着物あり。口径7.5cm、底径5.6cm、器高2.0cm、(111)は角釘棺留に使用したものかL字に折れる。(112)は刀子。柄部に木質残る。先端欠損。全長21.7cm、最小幅1.0cm、最大幅1.7cm。

(8) 火葬跡出土遺物

3基の火葬跡のうち、副葬品としての古銭が検出されたのは1号・2号火葬跡である。いずれも融着しており、形状の歪みが著しく銭種等の判読は不可能である。

2基の火葬跡とも古銭の数は6枚と考えられる。

土墳墓出土古銭 (第74・75・76図 PL38-163~192・39-193~218)

No	出土遺構	銭名	鑄造年			備考	No	出土遺構	銭名	鑄造年			備考	
163	1号墓	皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039	182	10号墓	皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039	
164		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068	183		至和通寶	北宋	至和	1	1054	
165		紹聖元寶	北宋	紹聖	1	1094	184		元豐通寶	北宋	元豐	1	1078	
165		不明					密着		185	元祐通寶	北宋	元祐	8	1093
167		不明							186	政和通寶	北宋	政和	1	1111
168		不明							187	永樂通寶	明	永樂	9	1411
							188	永樂通寶	明	永樂	9	1411		
169	2号墓	天聖元寶	北宋	天聖	1	1023	189		永樂通寶	明	永樂	9	1411	
170		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068								
							190	11号墓	開元通寶	唐	武德	4	621	
171	4号墓	祥符通寶	北宋	大中祥符	1	1068	191		天穆通寶	北宋	天祐	1	1017	
172		洪武通寶	明	洪武	1	1368	192		元祐通寶	北宋	元祐	8	1093	
173	5号墓	祥符通寶	北宋	大中祥符	1	1008	193	12号墓	祥符通寶	北宋	大中祥符	1	1008	
174		嘉祐通寶	北宋	嘉祐	1	1056	194		治平元寶	北宋	治平	1	1004	
175		紹聖元寶	北宋	紹聖	1	1094	195		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068	
								196	至大通寶	元	至大	3	1350	
176	6号墓	不明					密着	197	洪武通寶	明	洪武	1	1368	
177		不明						198	不明					
178	9号墓	祥符通寶	北宋											
179		永樂通寶	明	永樂	9	1411								
180		永樂通寶	明	永樂	9	1411								
181		永樂通寶	明	永樂	9	1411								

第1節 中世の遺構と遺物

No.	出土遺構	銭名	鑄造年			備考	No.	出土遺構	銭名	鑄造年			備考	
199	14号墓	天聖元寶	北宋	天聖	1	1023								
200		皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039								
201		皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039			祥符元寶	北宋	大中祥符1	1008		
202		至和元寶	北宋	至和	1	1054			元祐通寶	北宋	元祐	8	1093	
203		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068			元祐通寶	北宋	元祐	8	1093	
204		元豐通寶	北宋	元豐	1	1078			至元通寶	元	至元	22	1285	
205		元豐通寶	北宋	元豐	1	1098			洪武通寶	明	洪武	1	1368	
206		大觀通寶	北宋	大觀	1	1107		218	17号墓	開元通寶	唐	武德	4	621
207		寧元通寶	南宋	慶元	1	1195								
								219	68G 9	開元通寶	唐	武德	4	621
208	15号墓	嘉祐通寶	北宋	嘉祐	2	1057		220	68G 10	景德元寶	北宋	景德	2	1005
209		元祐通寶	北宋	元祐	8	1093		221	68区表採	熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068
210		聖宋元寶	北宋	建中靖国		1101		222	68G 8	不明				
211		洪武通寶	明	洪武	1	1368		223	68D 7	不明				
		廖国通寶	後周	顯德	5	938								

(9) 遺構外出土及び表採遺物 (第71・72・73・74・76・77図 PL31-113~124 32・33・34-150~151)

遺構に伴わない遺物には陶磁器類・土器類・石製品類がある。概略の出土範囲は遺構が密集する68区からの検出が大半である。

青磁

(113)~(119)は舶載青磁である。いずれも小片で全体形状を知るものはない。碗類は(113)~(118)、(118)は皿形か。(119)は香炉になろうか。

(113)は線刻文で連弁が表される。外面口縁下に連続した弧状山形文を刻し、山と谷の部分から継線を施す。弁文は個別単位を示さず谷部分の重線を共有するものであろう。胎土は灰白色で粗く、釉調はくすんだ緑色で薄い。内外面とも貫入が生じる。(16C前)

(114)は体部下半で外面片切彫連弁文をもつ。弁の鑄は比較的明瞭。胎土は灰白色でやや粗い。釉調は明緑灰色で釉は薄い。(13~14C)

(115)は口縁部で片切彫連弁文である。弁の鑄は比較的明瞭。弁先端は尖る。胎土は灰色でやや粗い。釉調は緑灰色。

(116)は片切彫連弁文の口縁部である。弁の鑄には厚みがあり弁先端は尖る。胎土は灰色でやや粗い。釉調は灰オリーブ色。比較的時代が溯り13C~14C

(117)は小碗になろうか。胎土白色で密。釉調は明青緑灰色で厚い。高級品。

(118)は口唇部が小さく外反し皿形になろうか。片切彫の草文と考えられるか。胎土灰色で粗い。釉調は緑灰色で比較的釉掛りが厚い。(15C)

(119)は香炉になろうか。体部は直立し、口唇部は矩形をなす。外面には凸線を巡らすいわゆる竹の節香炉の一種であろうか。胎土は白灰色で密である。釉調は緑色を呈す。筋線は薄く白味を帯びる。高級品(14C)

瀬戸系陶器

皿・御し皿・天目茶碗がある。いずれも小片である。

(120)は口縁部に灰釉が施され直線的に開く。胎土は黄白色で細かい。釉調は白黄緑色。細片の為復元径は

第3章 遺跡の概要

定かではないが、口径11cm前後になろう。

(121)は御し皿である。浅い体部から口唇部は丸まって内屈気味に立つ。口唇部に灰緑色の灰釉が施される。御し目は細かく刻まれている。胎土は黄白色で細かい。復元径は14cm前後になろうか。

(122)は天目茶碗である。体部上半で張り、口縁部はくの字状に外反する。胎土は白灰色で細かい。釉調はにぶい暗赤褐色で黒色釉が細線状に施されている。腰部から下位は無釉。復元口径12.0cm。

かわらけ 土器

口径10cm以下(123)～(126)の小型品と10cm以上(127)・(128)の大型品の2形態がある。すべて轆轤調整で底部切り離しは不明の(128)以外左回転の糸切りである。色調は淡橙色か橙色を呈すが、(127)は燻しがかかり褐色を呈する。胎土は比較的細密であるが赤褐色粒子が混じる。小型品は体部が内湾気味に開く(123)・(124)と外反する(125)・(126)がある。大型品は大きく外反して開く。口径・底径・器高の計測値は、(123)7.9×4.8×2.1cm。(124)7.8×5.6×5.2cm。(125)7.8×5.6×4.8cm。(126)8.2×5.6×4.8cm。(127)11.8×6.6×2.6cm。(128)12.0×7.0×4.6cm。

内耳鍋

口縁部が短く屈曲する(129)・(130)と大きく外屈する(131)・(132)がある。(129)は復元口径32.0cm。色調は灰色で胎土粗く白色細粒多く混じる。(130)は淡橙色細砂粒混じる。(131)・(132)は口縁部高5.0cmで、内湾気味に立つ。(131)の口唇端部は細まる。色調はくすんだ橙色で胎土に砂粒多い。(132)は口縁部内外面及び内面は横撫で、体部に指頭痕残る。色調は内面灰色、外面黒色、胎土は粗い。(133)は体部下半である。腰部丸く、体部には指頭痕が残る。色調は橙色で部分的に黒斑が入る。胎土は粗く砂粒多い。復元底径18.0cm。

鉢

すり目の有・無がある。(134)・(135)はすり目が無く、口縁近くのためか摩滅は観察されない。(136)・(137)・(138)はすり目をもつ。こね鉢・すり鉢の区別はすり目の無い多くの資料に摩滅痕が著しく、目の有無ではできない。

(124)～(125)は口唇部矩形を呈し、上端部は内に小さく尖る。(125)は鋭い。(124)は色調赤橙色で胎土粗い。(125)は復元口径31.0cm、色調は灰黄色、胎土粗く白色細粒多く混じる。

(136)・(138)はすり目をもつ。(136)・(137)のすり目は弧の曲がり強く、(138)は直線的である。(136)のすり目は1条がかるうじて観察できる。体部は外反気味に開き、口唇部は外に向かい細まる。色調は灰色で焼成は良い。胎土は粗く砂粒が多く混じる。体部外面には指頭痕が著しい。(137)は4条1単位の深いすり目を施す。色調は灰黄色で胎土は粗い。(138)は5条1単位のすり目を施す。現状で3単位で復元では5単位になろう。底部は回転糸切痕に見える切り離しが見られる。この切り離し痕は静止状態で糸のまき引き切りでも可能である。底径12.0cm。外面には指頭痕著しい。色調は赤褐色、胎土は粗い。

火鉢

胴部に僅かな膨らみを有するようである(139)。口唇部上端は強く外に突出する。口縁下には径2cmの巴文の凸印が施され、下位に2条の凹線を巡らす。色調は灰色で、胎土は粗く砂粒が多い。

常滑焼

(140)・(141)は甕胴部片である。(140)は押印文が見える。器厚は(140)が0.9cm、胎土灰橙色で比較的密。(141)は黒灰で表面色調は暗褐色、胎土は砂礫混じり粗い。

硯

粘板岩製の石硯である(142)。形状は長方硯になろう。硯尻部分である。幅4.5cm、厚0.7cm、丁寧な作りで、幅0.3cm程度の縁が作られる。器面の調整は磨きが施され滑らかである。

砥石

(143)・(144)とも流紋岩製である。(143)は多面使用で不定形を呈す。10.0×3.2×2.2cm。重量15.0g。(144)は西端部欠損、3.8×0.8cm。

石臼

(145)・(146)は粗粒安山岩製茶臼である。(145)は上臼の縁部で、復元口径20cmになろうか。(146)は下臼の受皿部縁である。

不明石器

安山岩で球体である(147)。用途不明、表面は磨かれている。径5.0cm、重量145g。68区小穴より出土している。石製・土製で未貫通の孔をもつ製品と形状・径・重量とも酷似しており、これらの未完製品であろうか。

鉄器

角釘である(148)。両端部欠損、現長3.0cm、厚・幅0.6cm。

板碑

遺構外より4点の板碑が出土する(149)～(152)。いずれも緑色片岩製で、梵字等の種子類を残す資料はない。

(10) 調査区内移転民家跡地出土遺物 (第78～81図 PL34-231～237・35～37)

調査区内には数軒の民家が存在した。移転後の発掘によって、調査区北側に位置していた民家跡地からは、江戸時代後半から明治時代前半に至ると考えられる磁器類・石臼・木製品などが採取された。いずれも、明確な遺構に伴っての出土ではなく、現存の家屋建設のための盛土あるいは整地土中からのものである。

陶磁器類

(231)は染付碗蓋、角銘・見込部「寿」銘・継ぎ跡あり、口径9.6cm・摘径4.0cm・高3.0cm。(以下単位はcm)
(232)～(241)は染付碗。(236)は見込部に五弁コンニャク判。(239)は内面口縁部のみ墨弾き。(232)は口径8.6、(233)は底径3.1、(234)は底径4.5、(235)は口径7.0・底径3.7・高5.5、(236)は口径9.2・底径3.7・高4.8、(237)は口径10.0・底径4.0・高5.0、(238)は底径4.7、(239)は口径9.5・底径4.9・高5.7、(240)は口径8.4・底径3.5・高5.0、(241)は口径10.0。

(242)～(244)は皿で(244)は陶器である。染付皿(242)は鉄釉絵、見込五弁花のみコンニャク判、見込蛇ノ

第3章 遺跡の概要

目釉ハギ、磁肌は白灰色、口径13.5、底径6.8、高3.0。(243)は底部蛇ノ目凹形高台、破損面が研磨される。底径8.3。陶器皿(244)は灰釉、高台部は無釉、胎土は淡黄白色で細かい。底径6.0。

(245)は染付徳利である。底面無釉、「有田屋」墨書銘、底径6.0。

(246)は染付急須口部分。(247)は染付散蓮華の柄部。

(248)は染付皿、底部ハリ支え、口径29.5・底径16.0・高4.5。(249)は印版染付皿、口径23.5・底径11.8・高4.5。

(250)は染付徳利、口径3.6・頸長10.5。

(251)は磁器色絵童子人形である。高さ3.3、重量13g。灯明の灯芯押えとも考えられるがやや不安定。

装飾具

かんざし玉・櫛である。いずれも原材から明治前半期のものと考えられる。

(252)はかんざし玉である。擬珊瑚玉、セルロイド製か。0.3×0.5cm大の磁器細片を埋め込む。径1.5cm。

(253)はセルロイド製櫛、約半欠である。淡黄色で緩い弧状に縞模様入る象牙目である。

セルロイドが我国にもたらされたのは明治十年より同十八年にかけて断続的にアメリカより輸入され、小物類の製品加工が行われた。明治十年、珊瑚色のセルロイド生地がもたらされ、簪用の擬珊瑚珠を鍍や金剛砂を用い製品化したが、加工費等が高く採算が合わず、好評にもかかわらず頓挫し、セルロイド生地の輸入も途切れた。明治十一年に至り轆轤を使用し、簡単に珠を作るようになったが、光沢が出ず、再び頓挫した。明治二十一年、苦心のすえ光沢に関しては望みがもて、また珠加工方法では熱を加える技術によって生産効率が上がった。この擬珊瑚珠は吾妻珠・旭珠と称して大いに好評だった。

櫛は卵甲などで簪櫛を作り、表面にセルロイド薄板を貼布し、光沢のある櫛目製作に成功。明治十八年、鼈甲加工職人を集め、櫛・笄のほか小間物類、洋傘柄、ステッキ柄などを製造。当時のセルロイド生地色は赤・肉・孔雀石・象牙目の四種があった。(「明治工業史 化学工学編」山崎俊雄 昭和43年・財団法人学術文献普及会)より

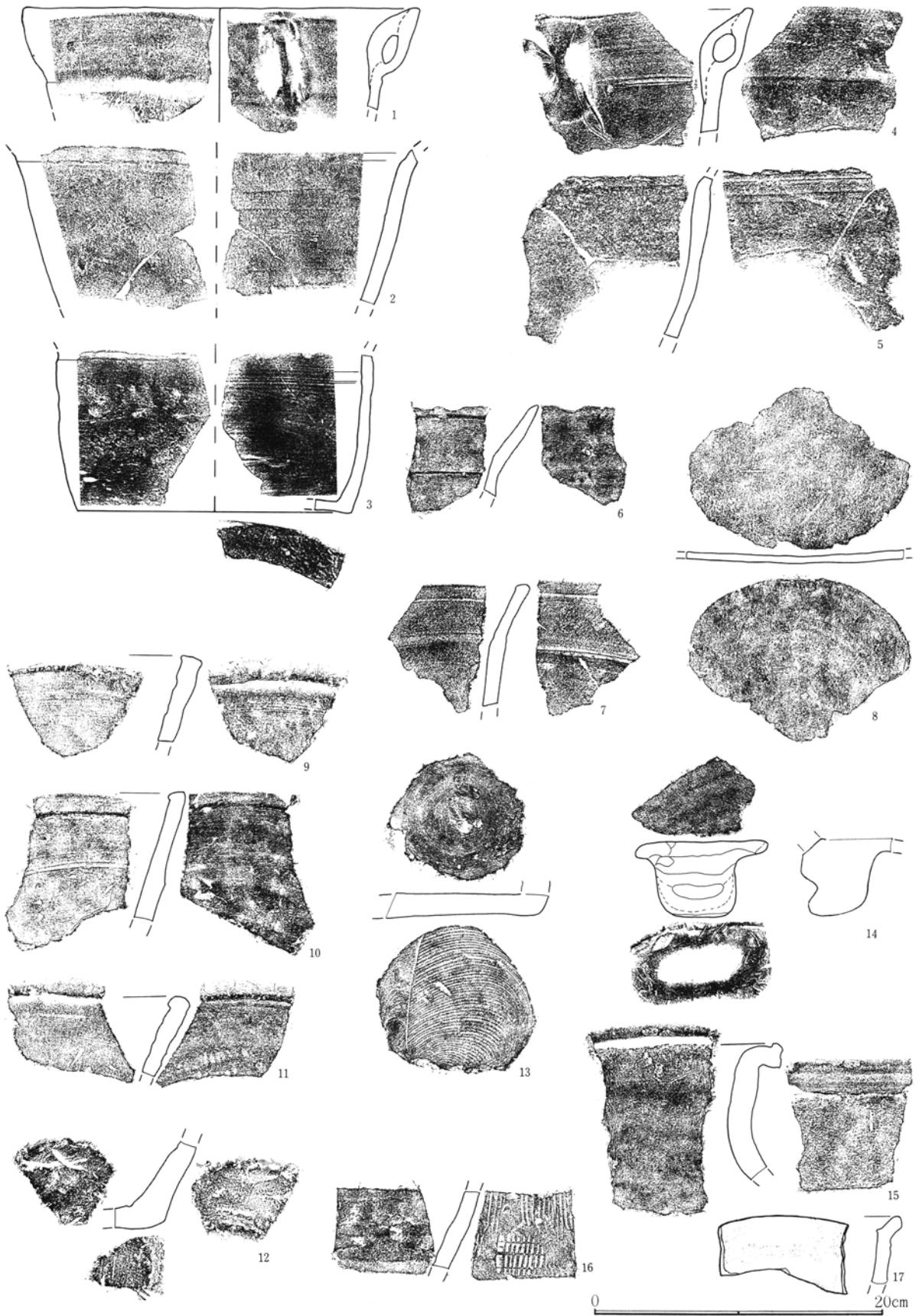
石臼

(254)は茶臼の上臼である。芯棒受けは無く、供給口が臼中心を貫通。側面には2ヶ所に角状の横打込み式挽き木孔があり、連珠状の装飾が施される。径21.0cm、厚12.0cm、縁幅3.0cm、縁高4.0cm、供給口上径3.0cm・下径4.8cm、挽き木孔深さ4.4~4.2cm。石材は粗粒安山岩。

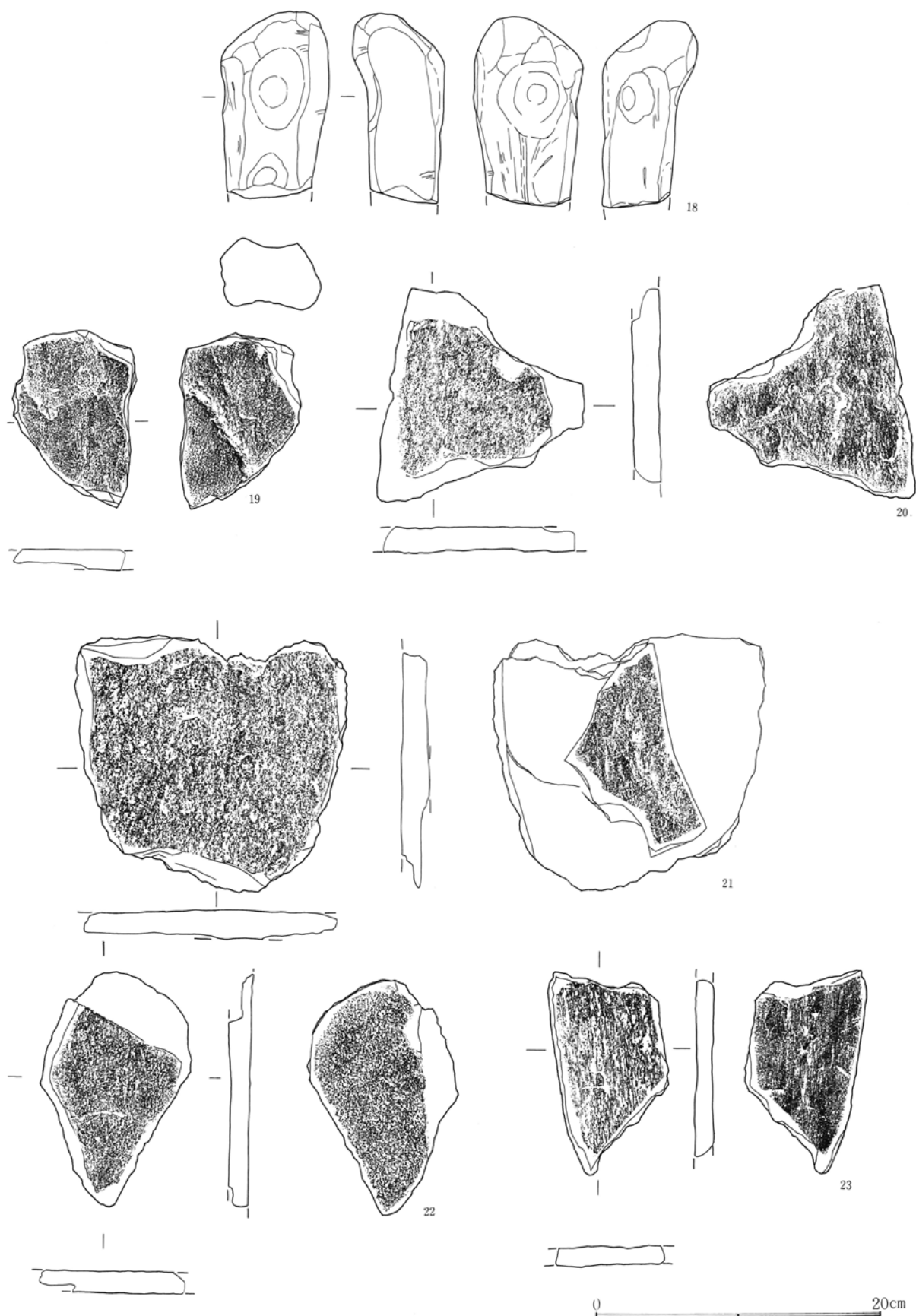
(255)は粉挽き臼上臼で挽き木作り付け式である。供給孔は片端にあり、裏面にはものくばりが施される。裏面中心に芯棒受け孔。径37.0cmの大型品、厚18.0cm、縁幅5.0cm、縁高3.0cm、供給口上径5.0cm・下径6.0cm、芯棒受け孔径4.0cm、深4.0cm。すり目は著しく摩滅。石材は粗粒安山岩。

木製品

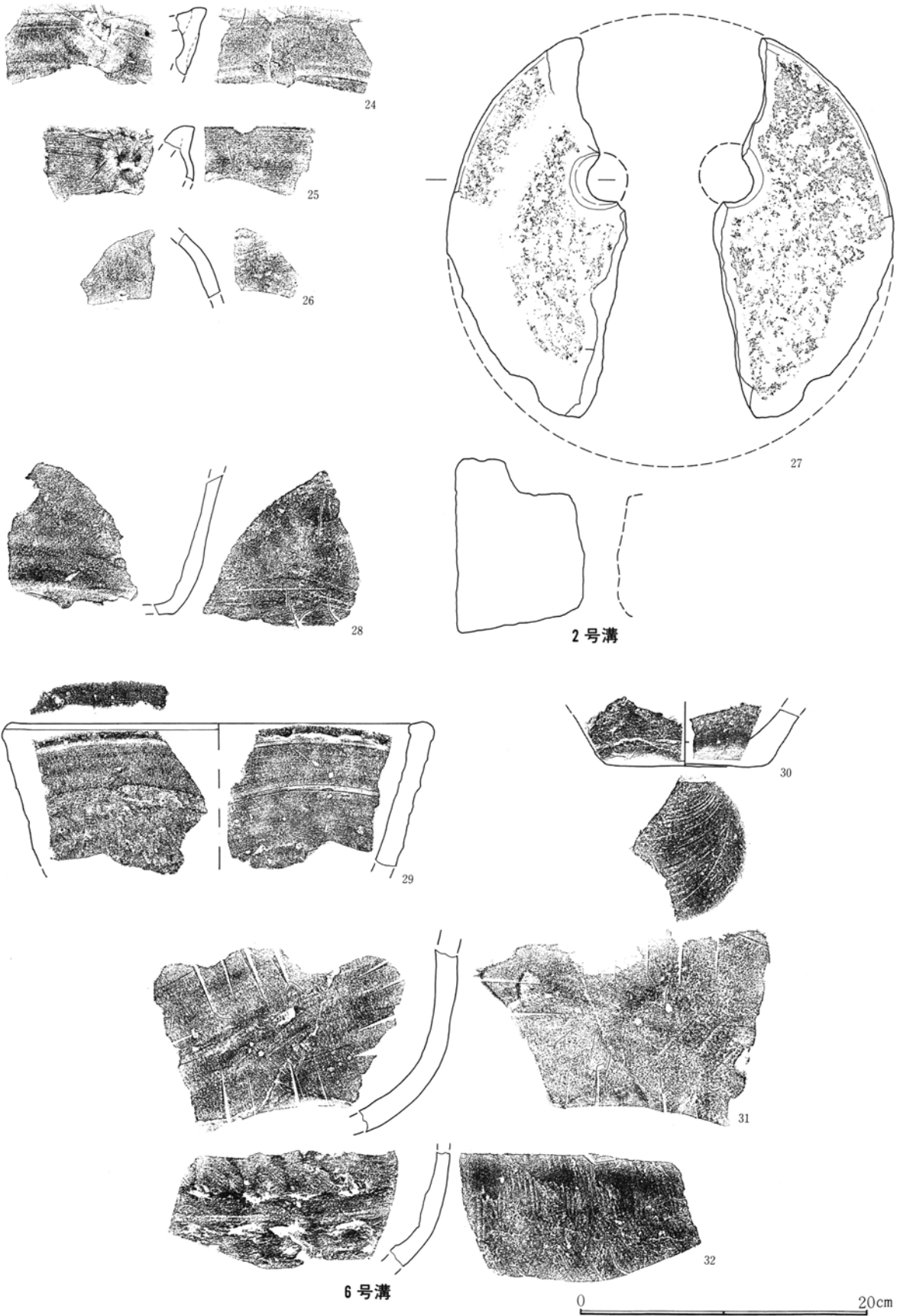
(256)は下駄である。白木であろう。歯はくり出し。長14.2cm、幅8.0cm、厚1.5cm。(257)~(259)は加工板材である。(257)は表裏貫通の小孔あり。長14.0cm、現況最大幅5.0cm、厚3.0cm。(258)は長7.0cm、幅2.8cm、厚1.0cm。(259)は現況長24.6cm、幅10.0cm、厚2.4cm。1側面に角孔あり、継ぎ合わせ孔か。(260)・(261)は杭状である。(260)は現況長20.0cm、径4.0×5.0cm。(261)は長42.0cm、径7.4cm。



第57図 1号溝出土遺物

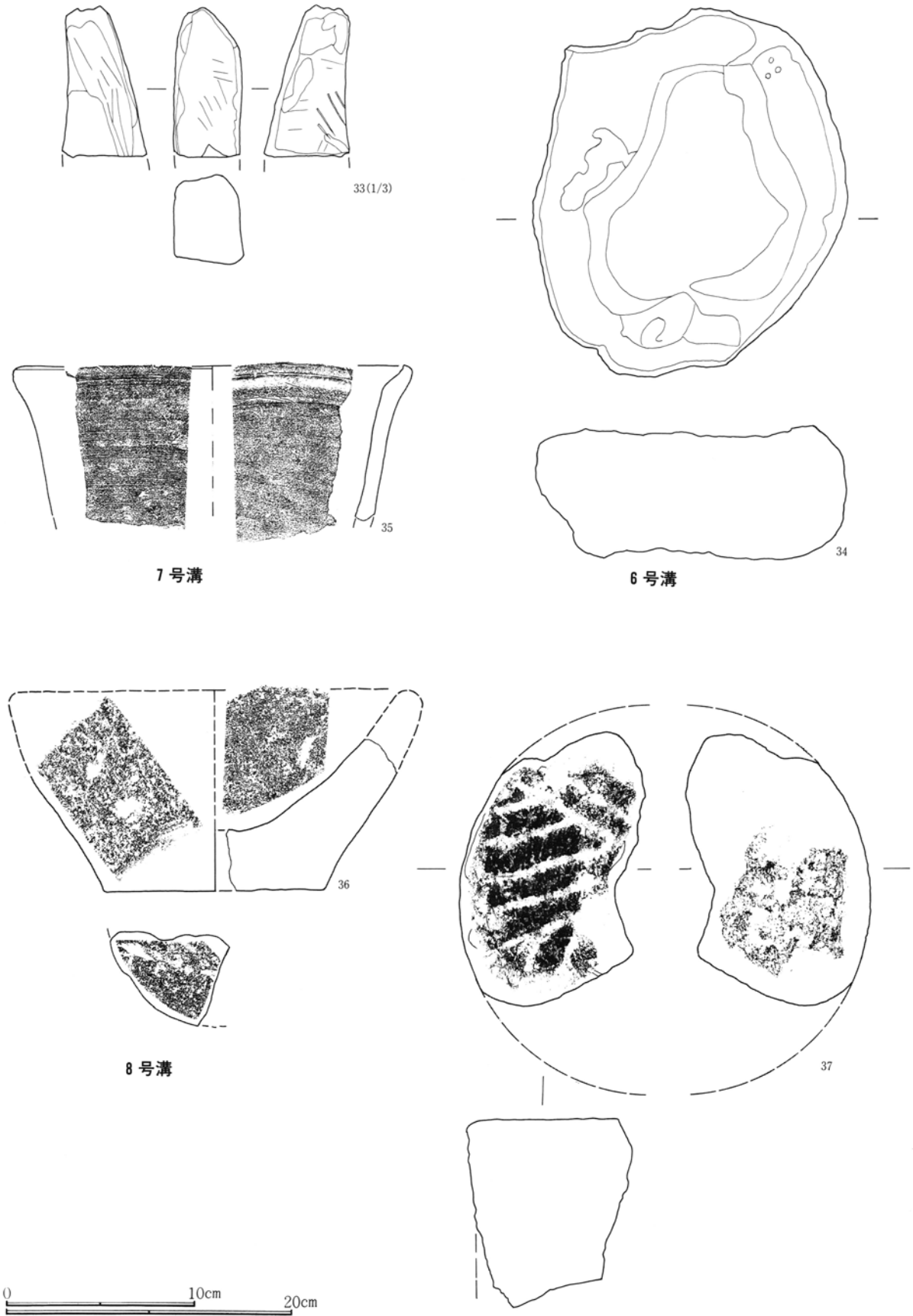


第58図 1号溝出土遺物



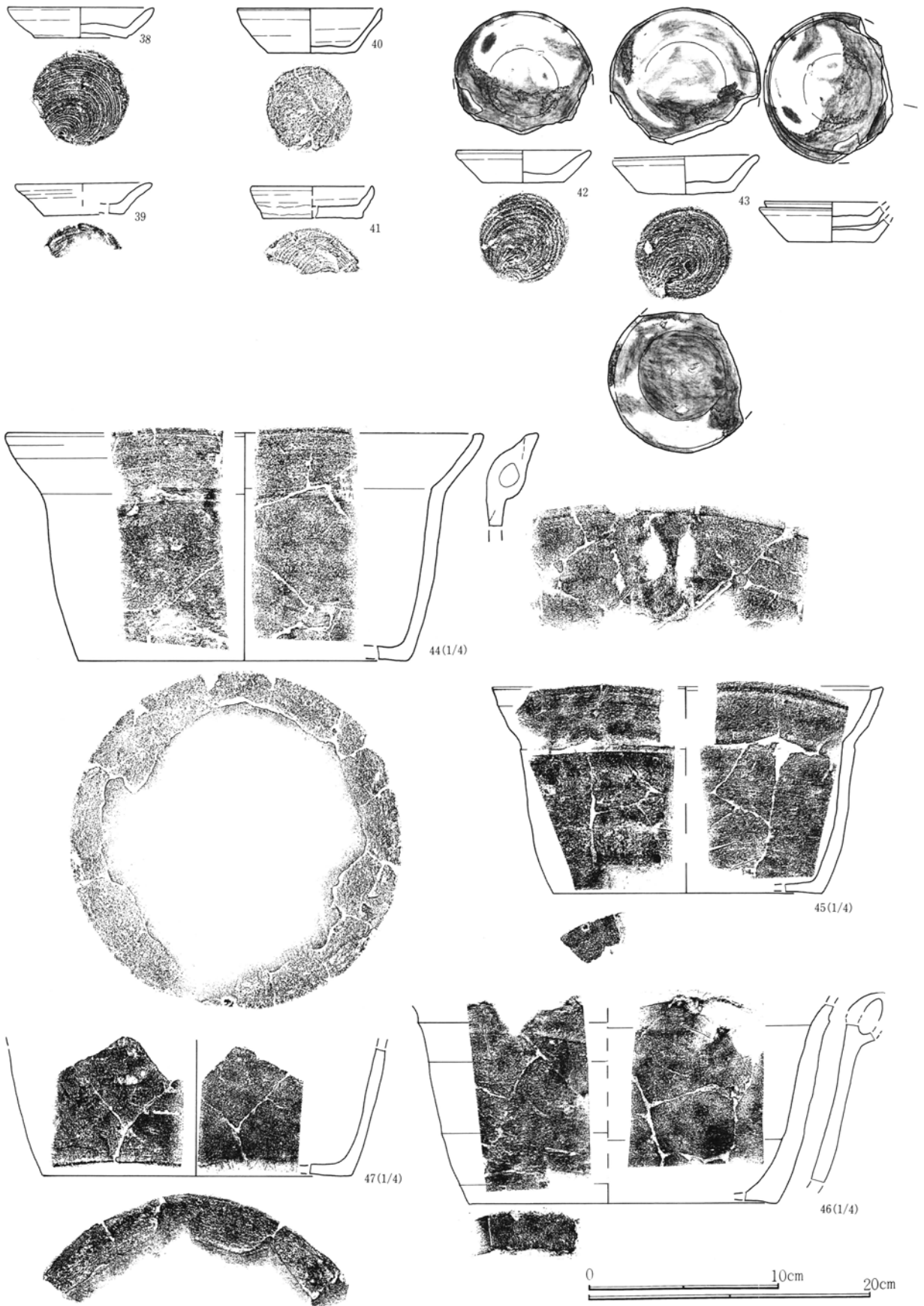
第59図 2号・6号溝出土遺物

第3章 遺跡の概要

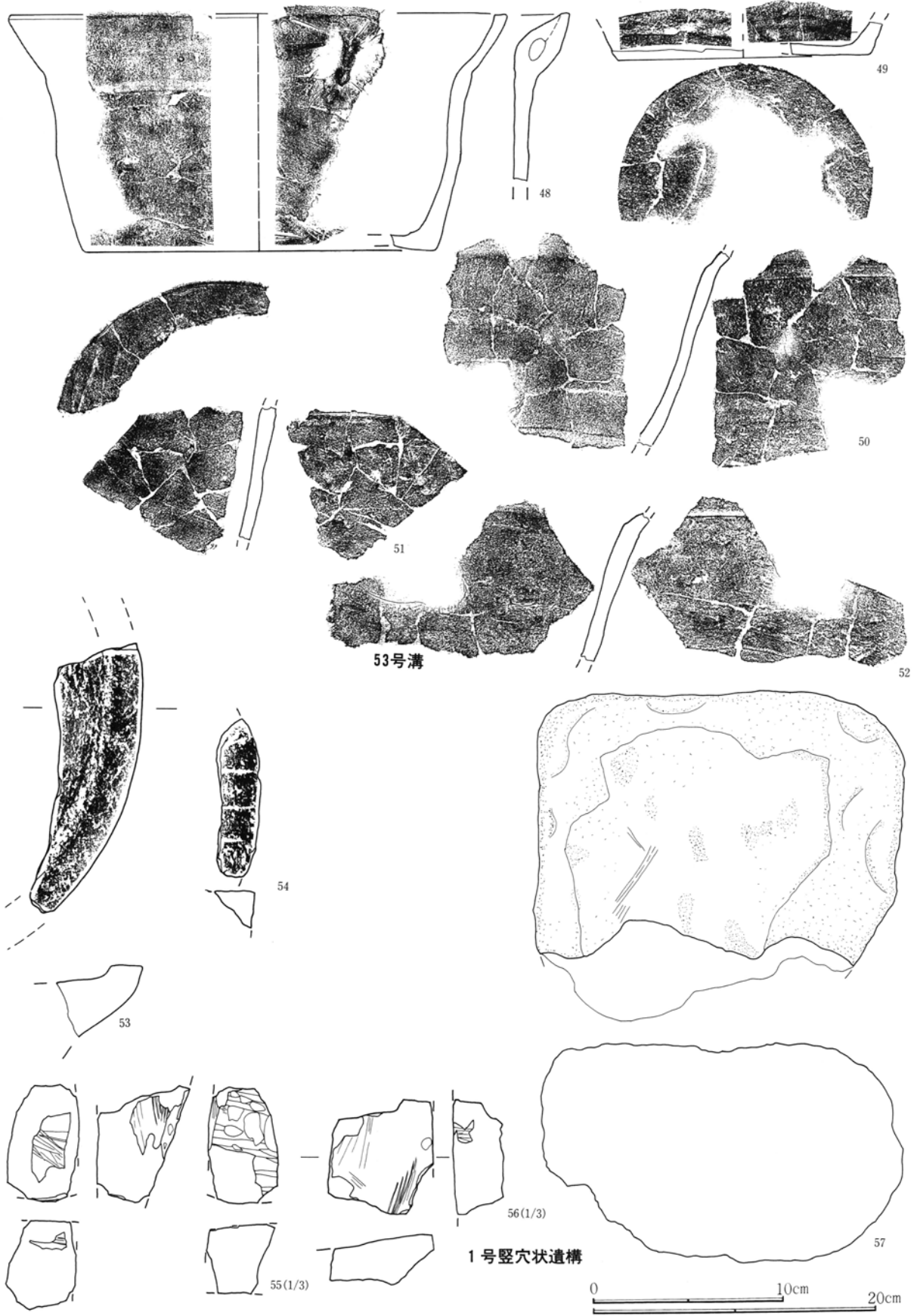


第60図 6号・7号・8号溝出土遺物

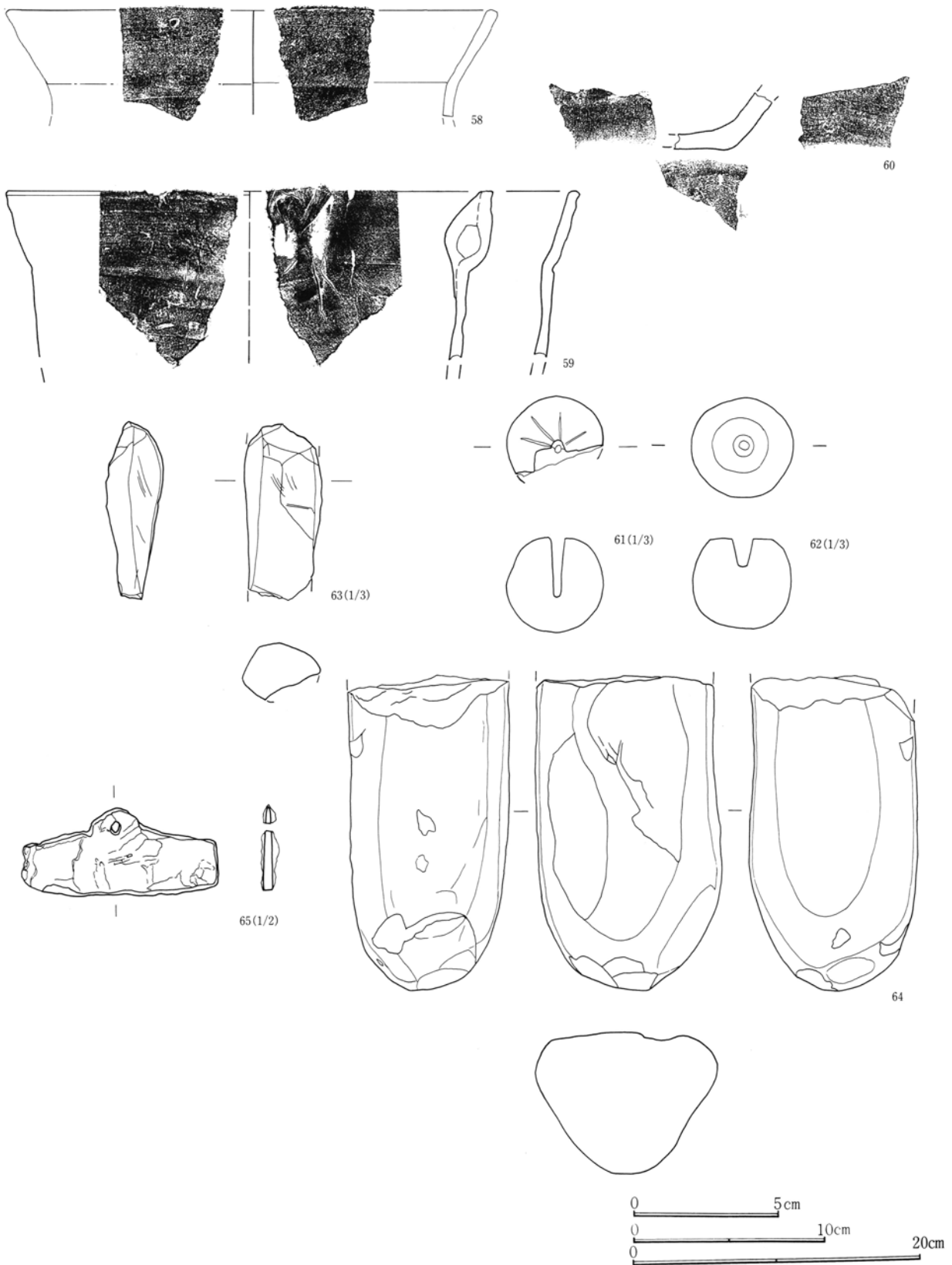
第1節 中世の遺構と遺物



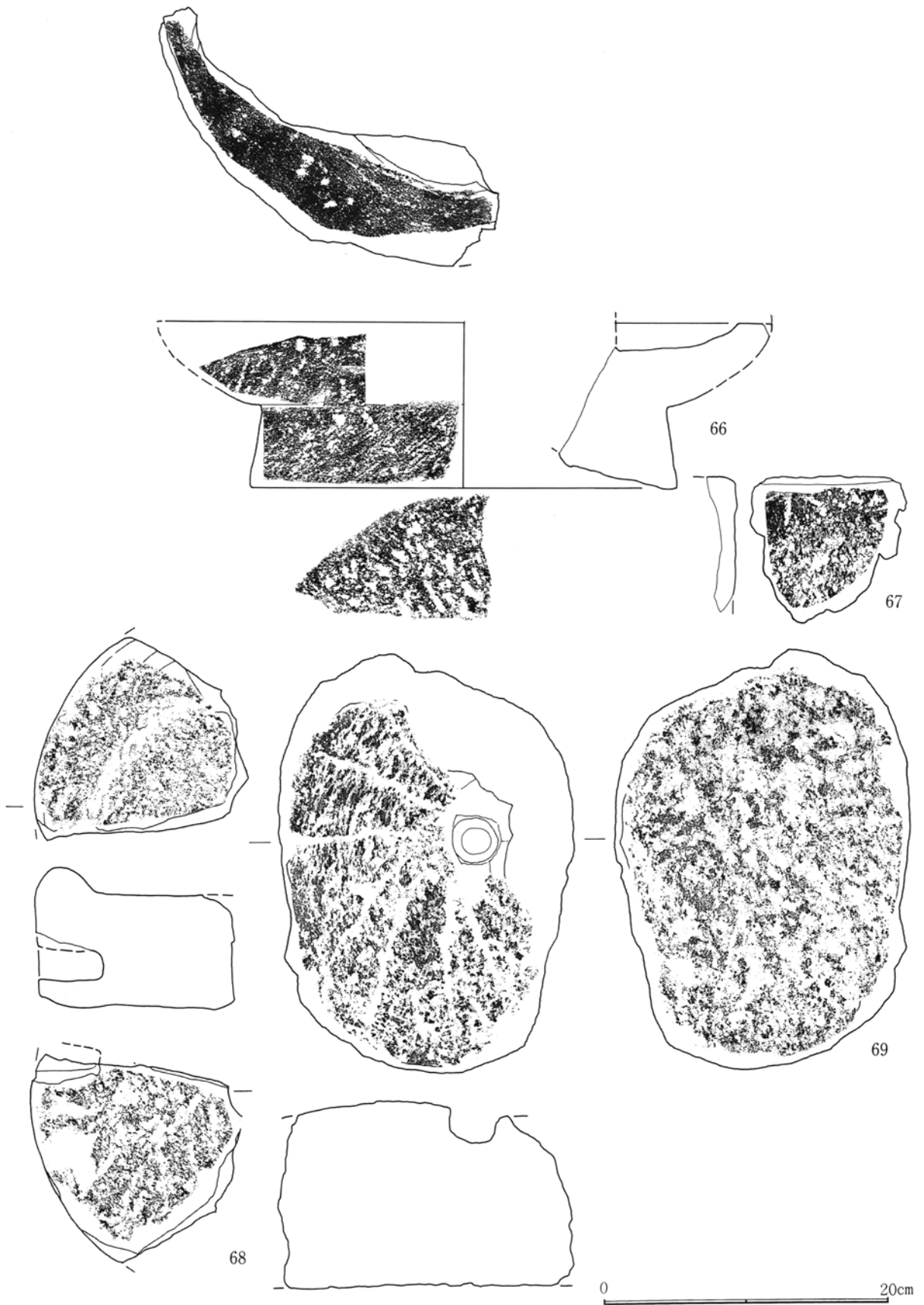
第61図 53号溝出土遺物



第62図 53号溝・1号竖穴状遺構出土遺物

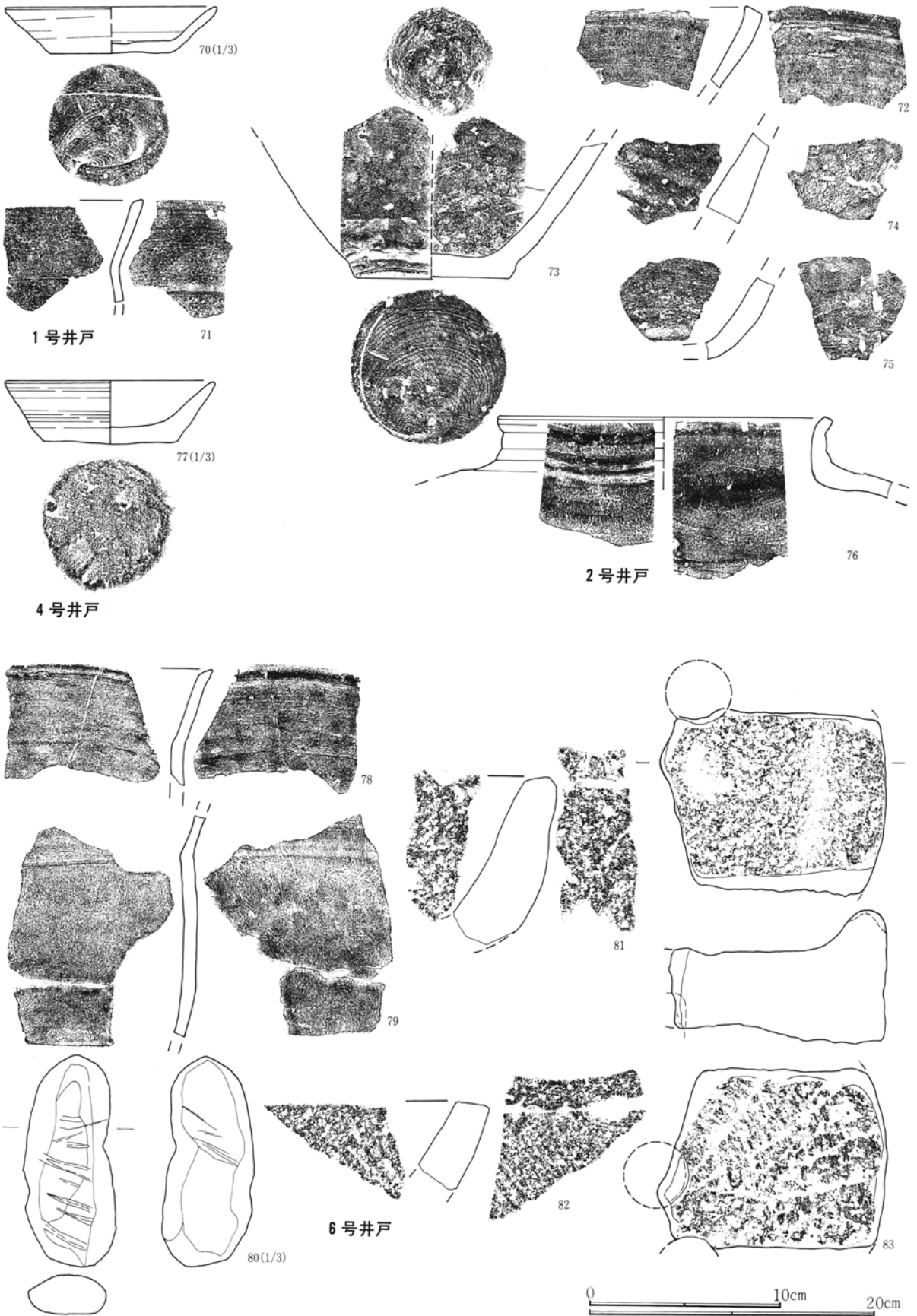


第63図 小穴出土遺物

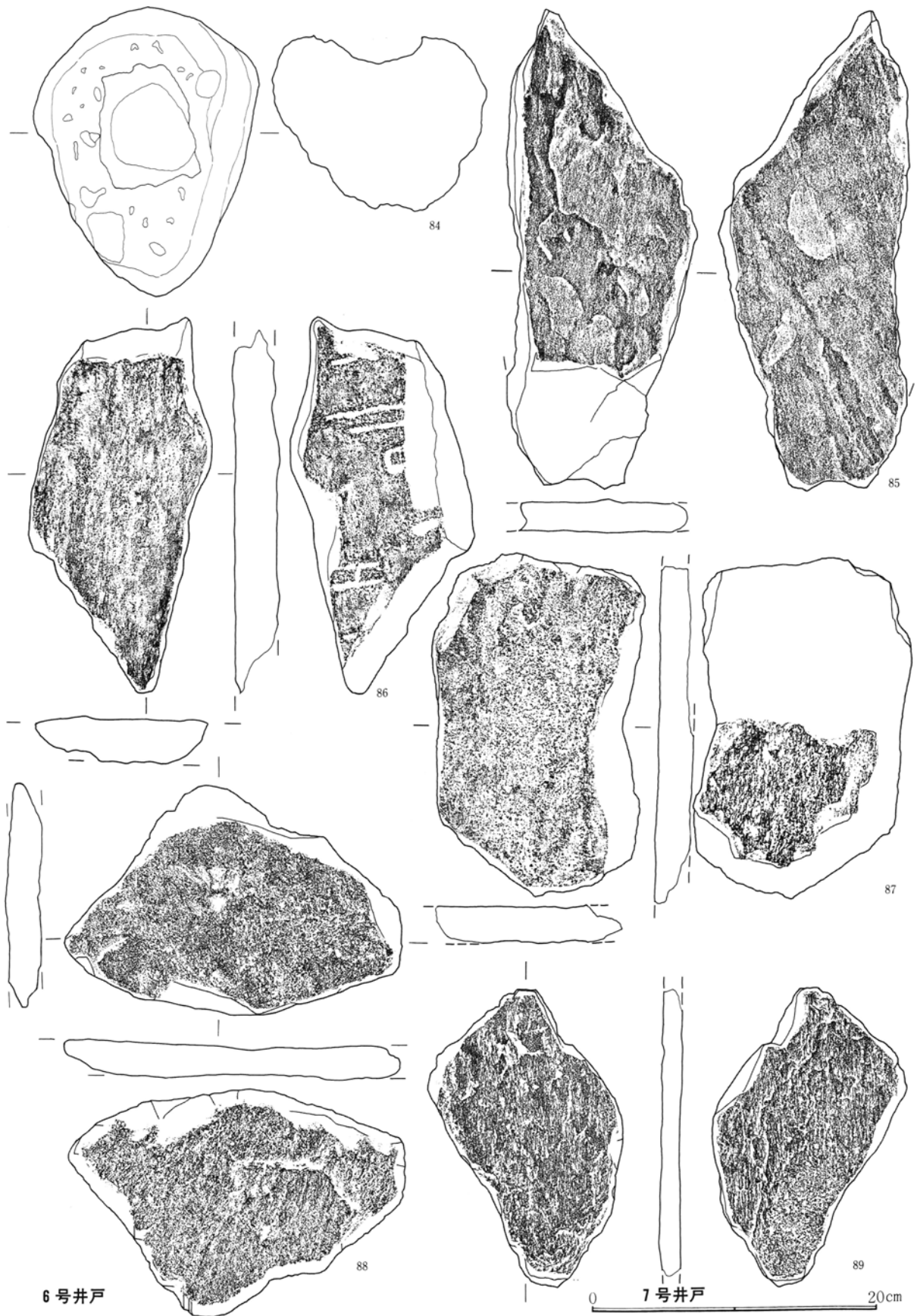


第64図 小穴出土遺物

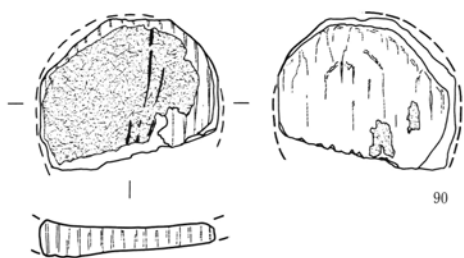
第1節 中世の遺構と遺物



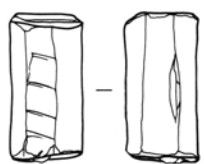
第65図 1号・2号・4号・6号井戸出土遺物



第66図 6号・7号井戸出土遺物

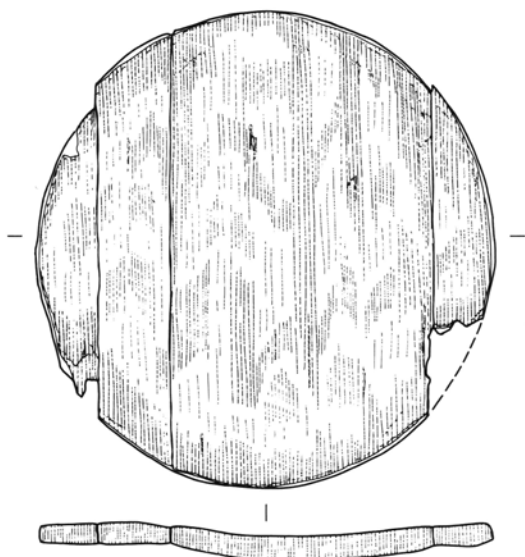


90



91

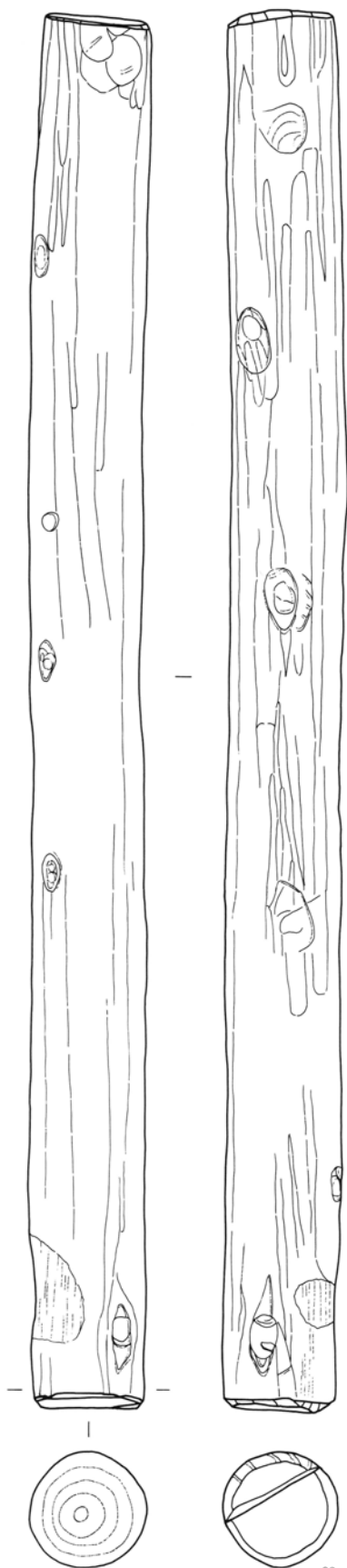
2号井戸



92

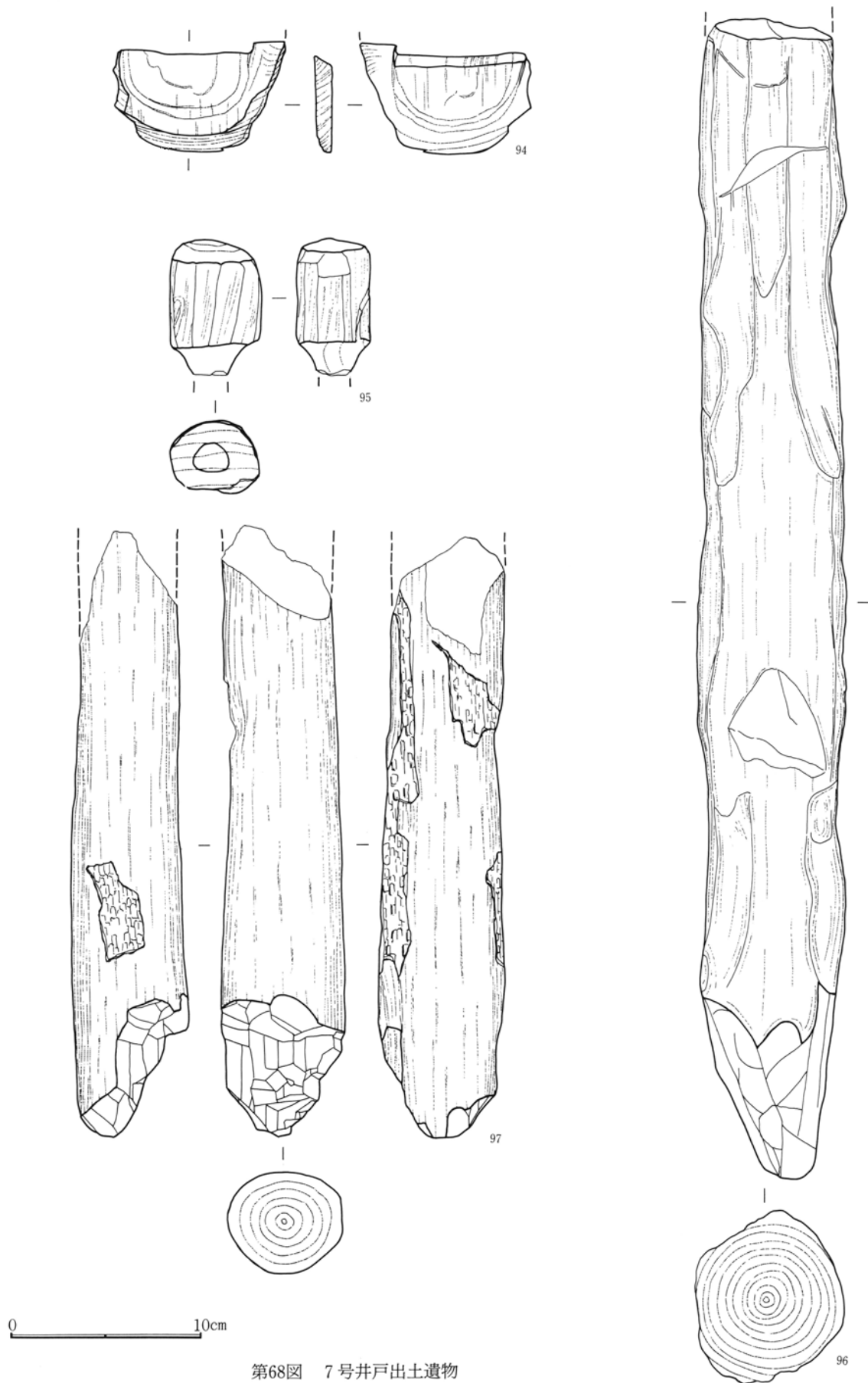
6号井戸

0 10cm

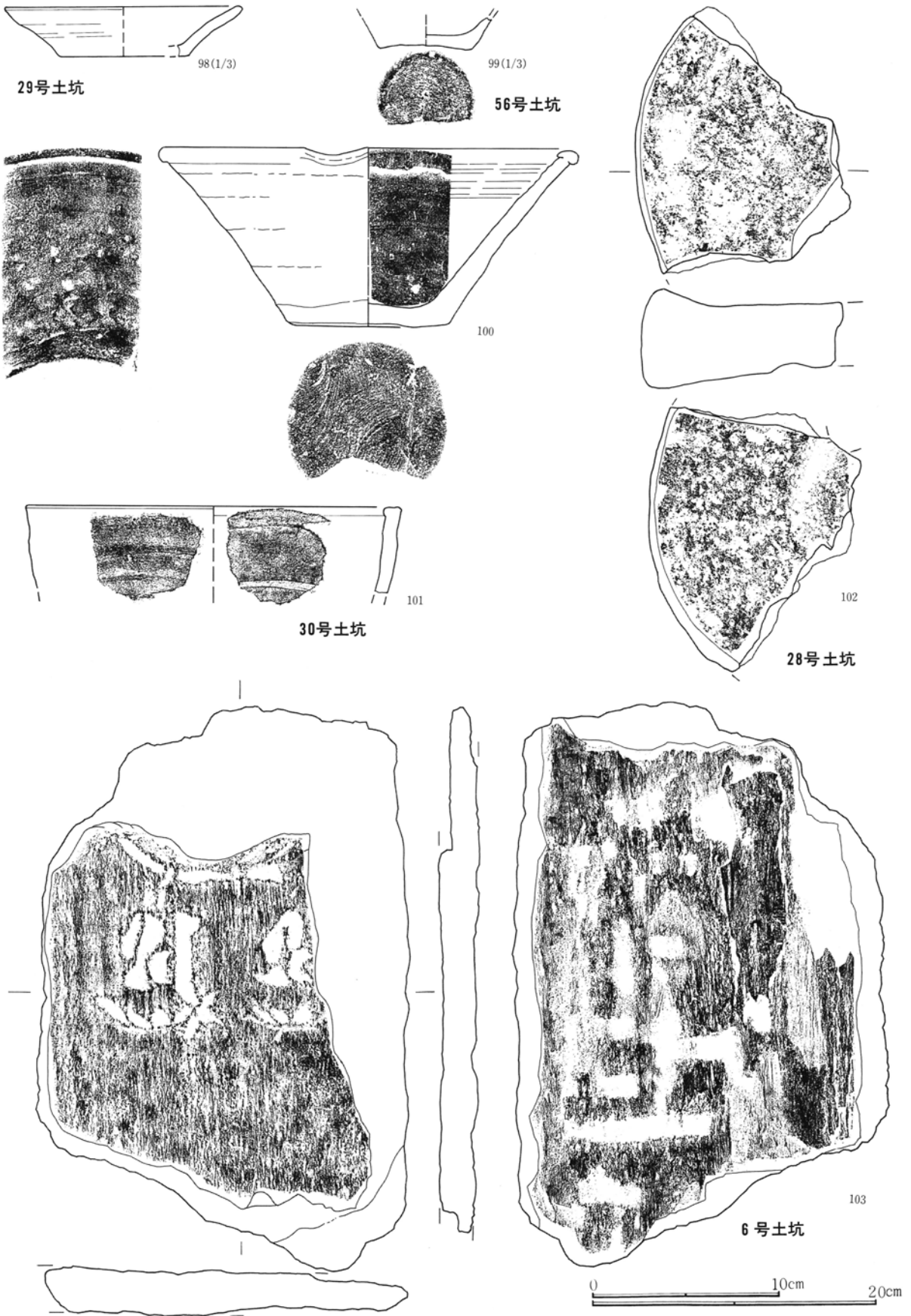


93

第67図 2号・6号井戸出土遺物

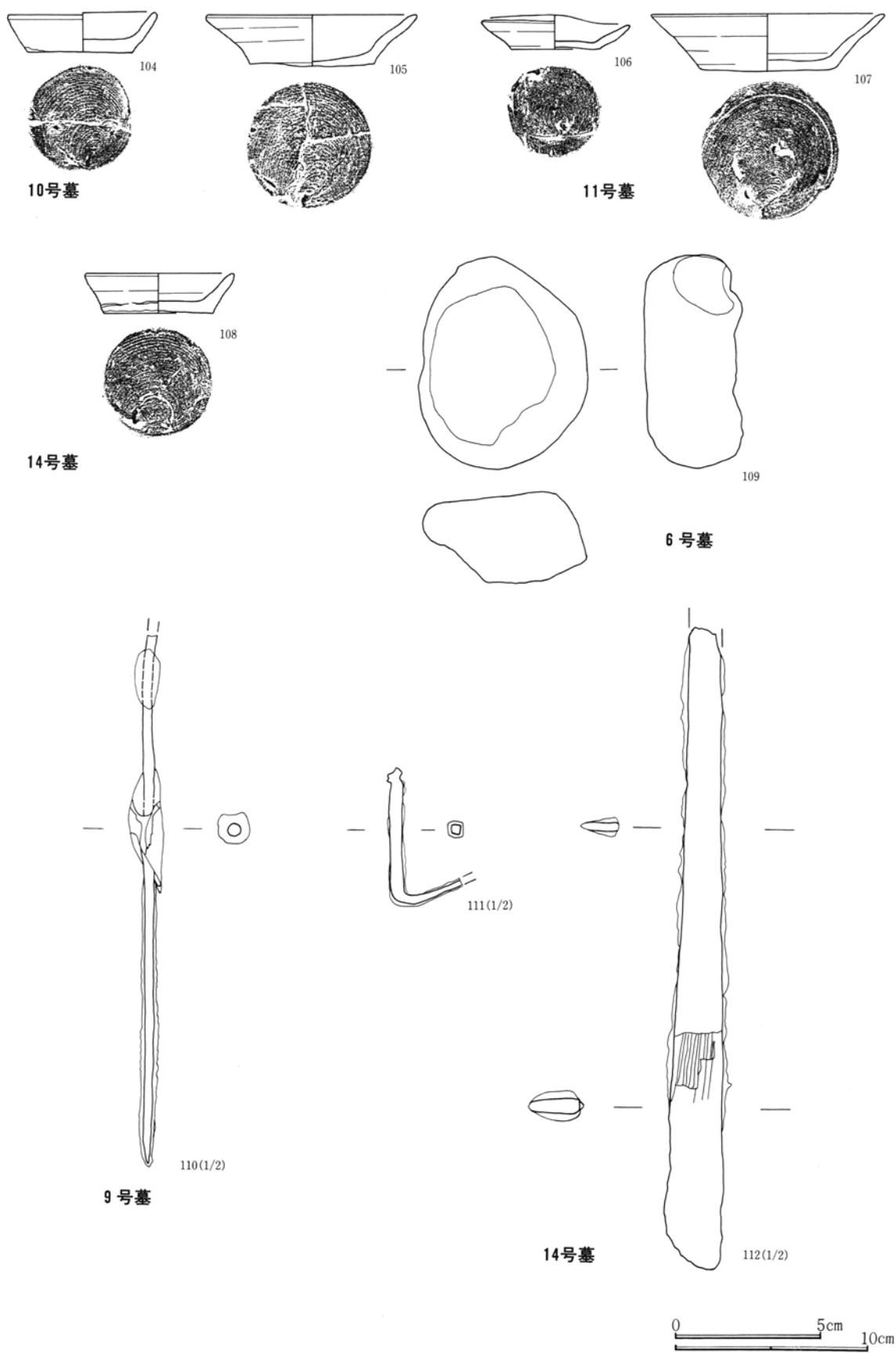


第68図 7号井戸出土遺物



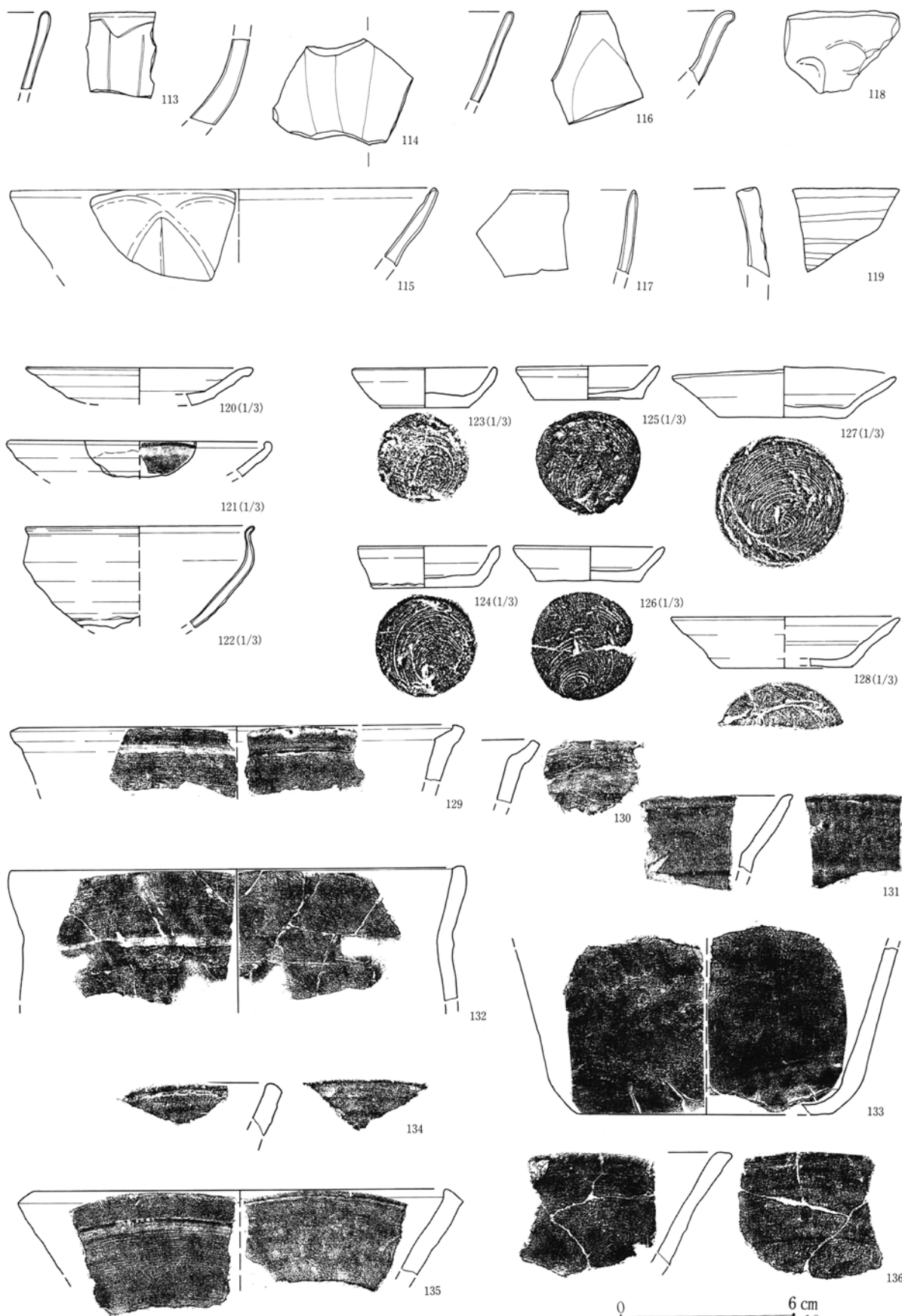
第69図 6号・28号・29号・30号・56号土坑出土遺物

第3章 遺跡の概要



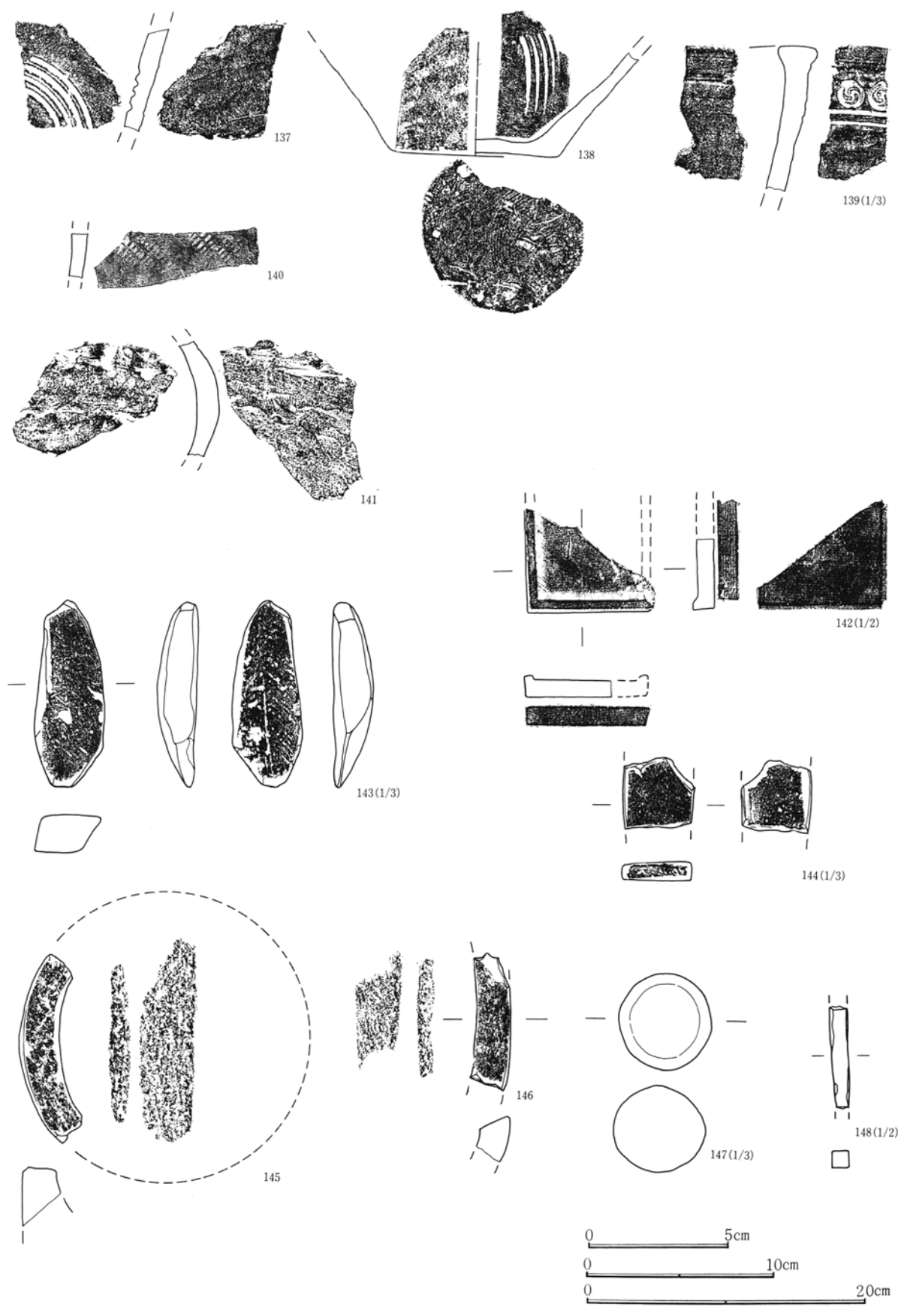
第70図 6号・9号・10号・11号・14号墓出土遺物

第1節 中世の遺構と遺物

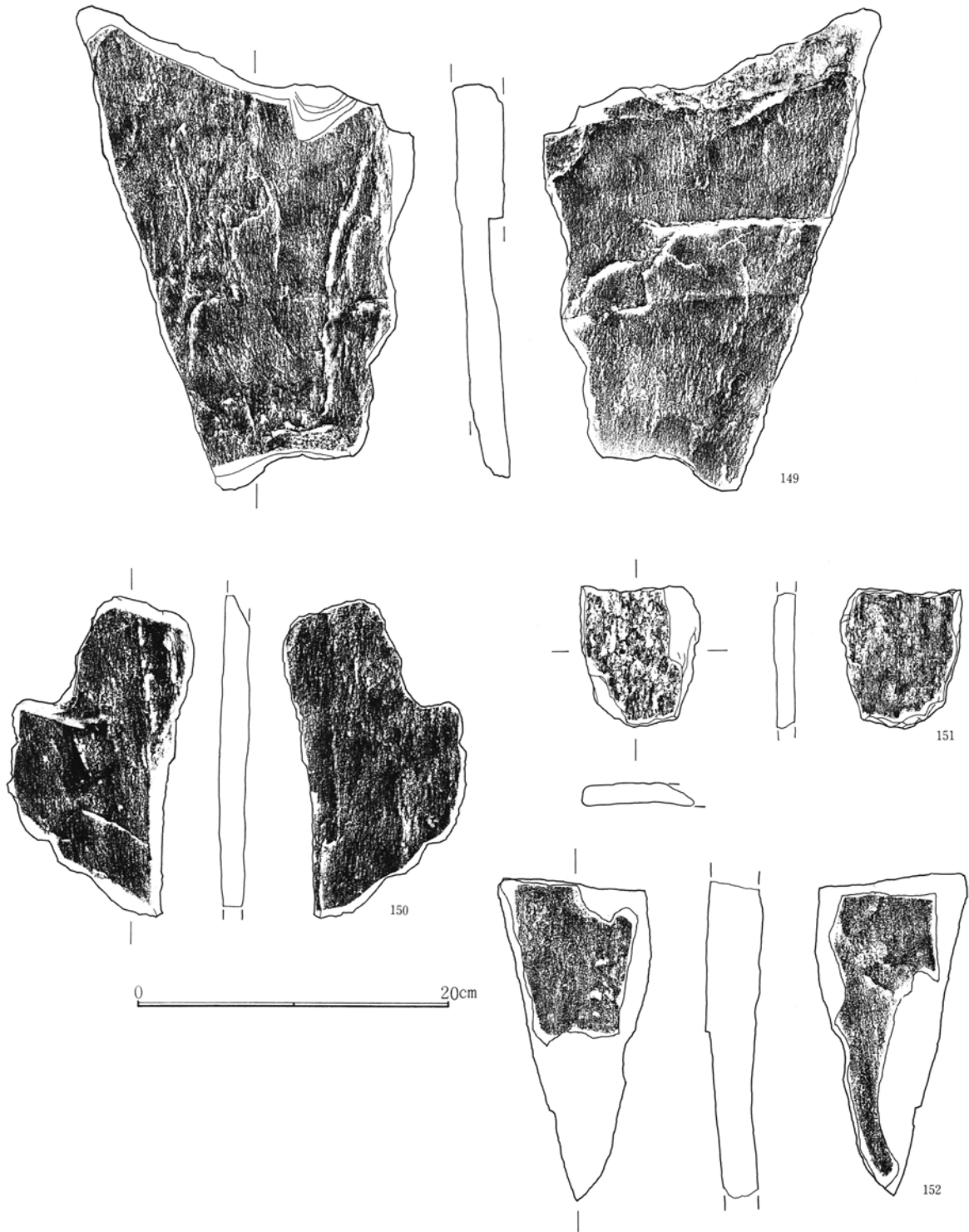


第71図 小区及び表採遺物

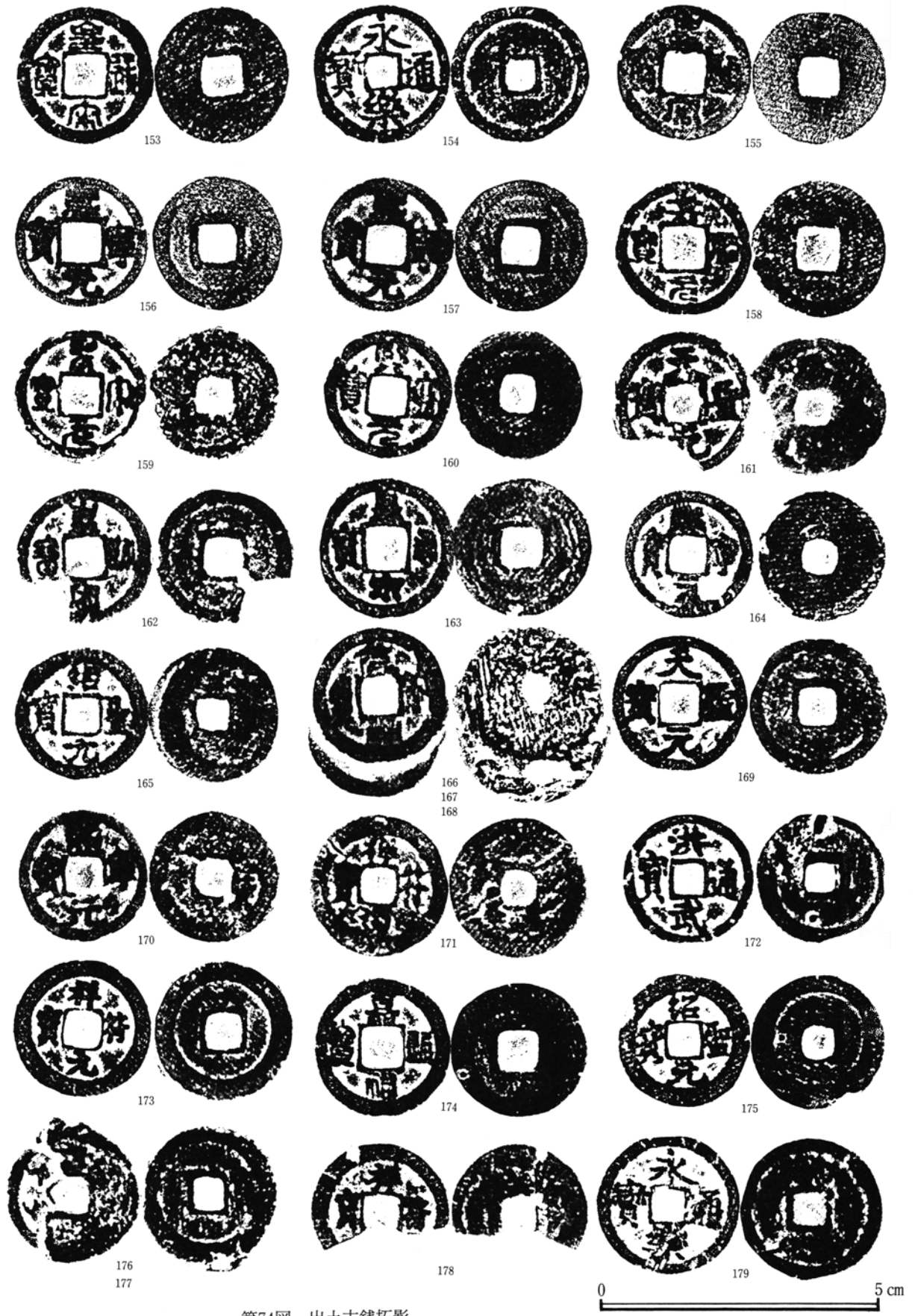
第3章 遺跡の概要



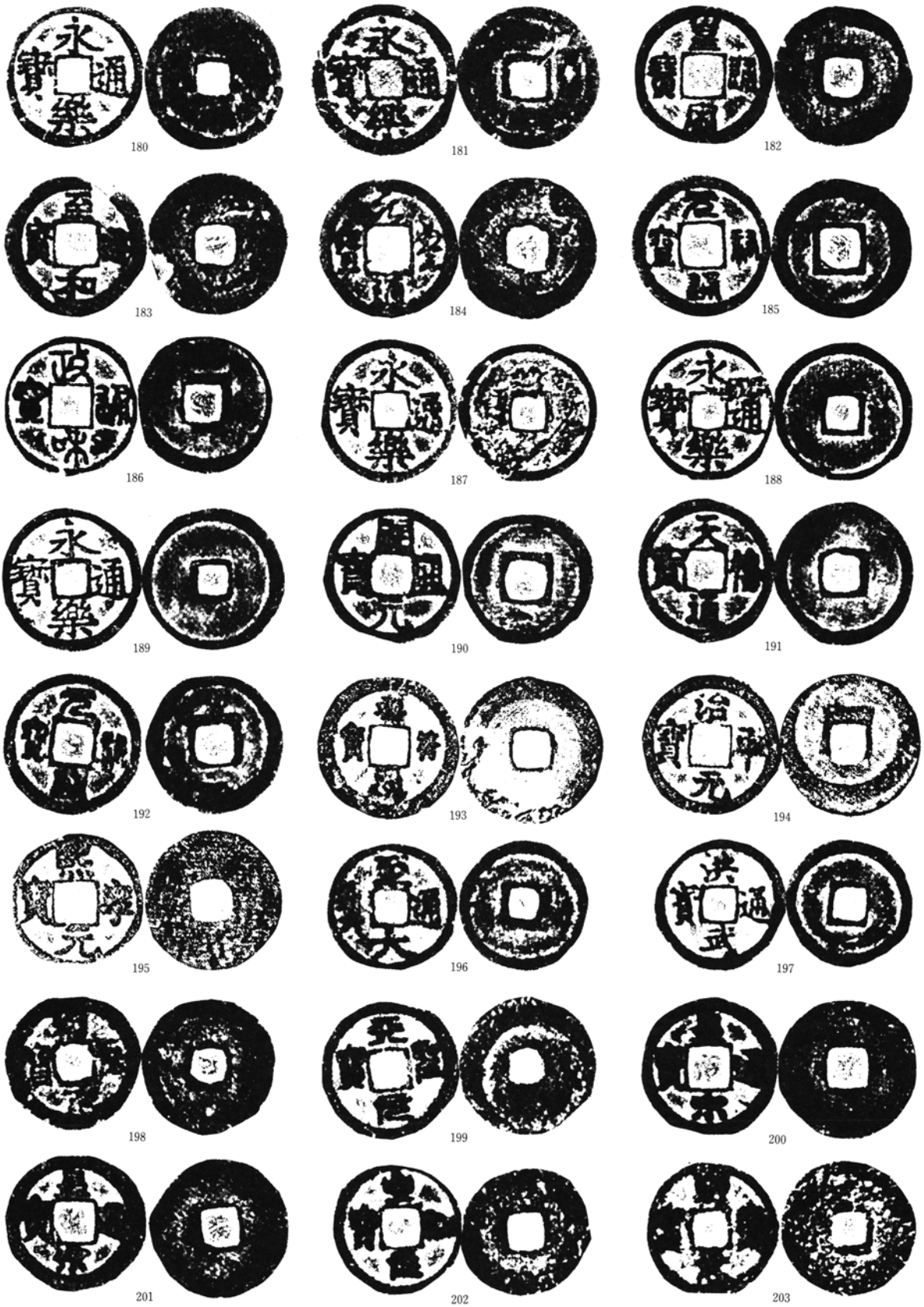
第72図 小区及び表採遺物



第73図 小区及び表採遺物

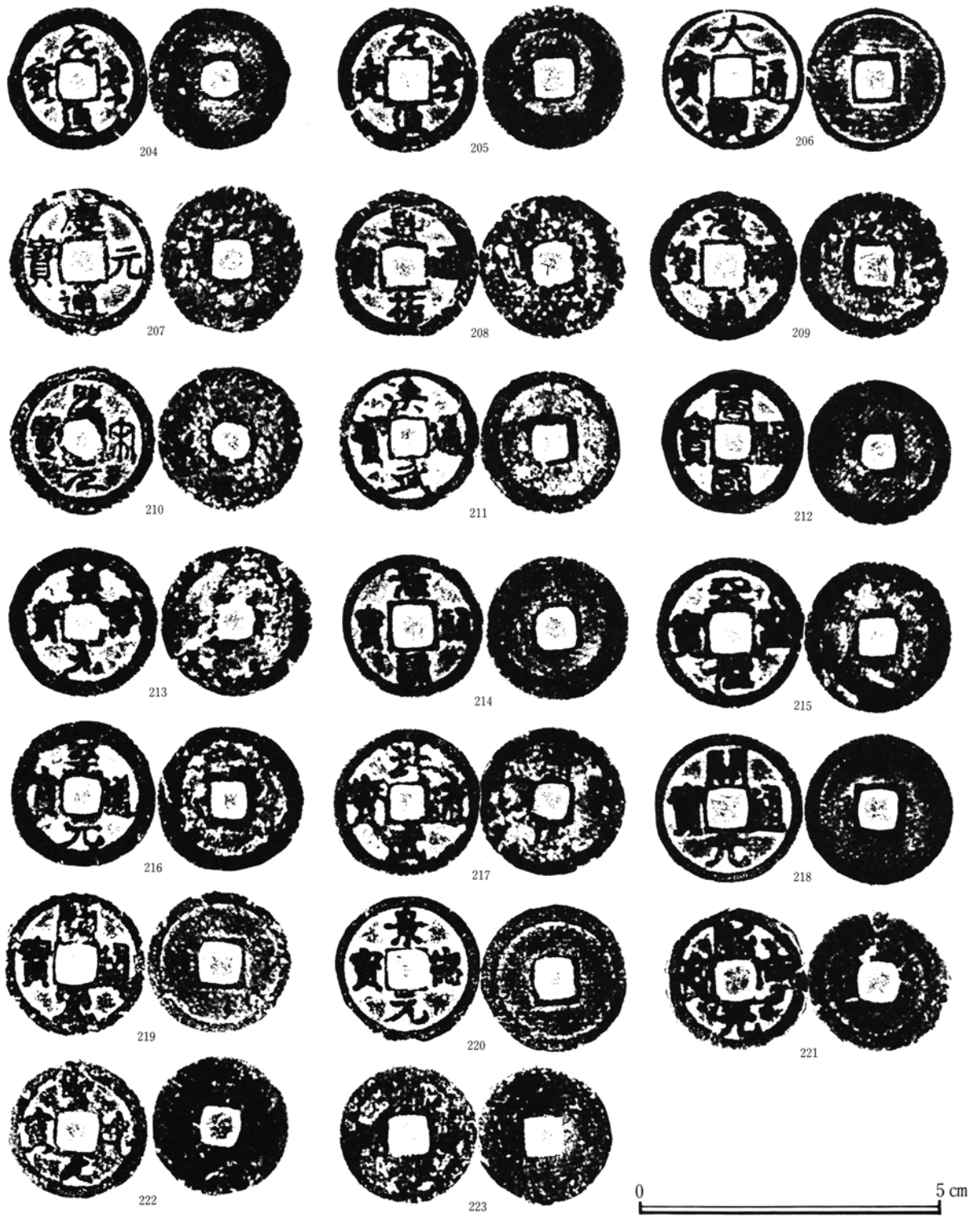


第74図 出土古銭拓影



第75図 出土古銭拓影

0 5 cm



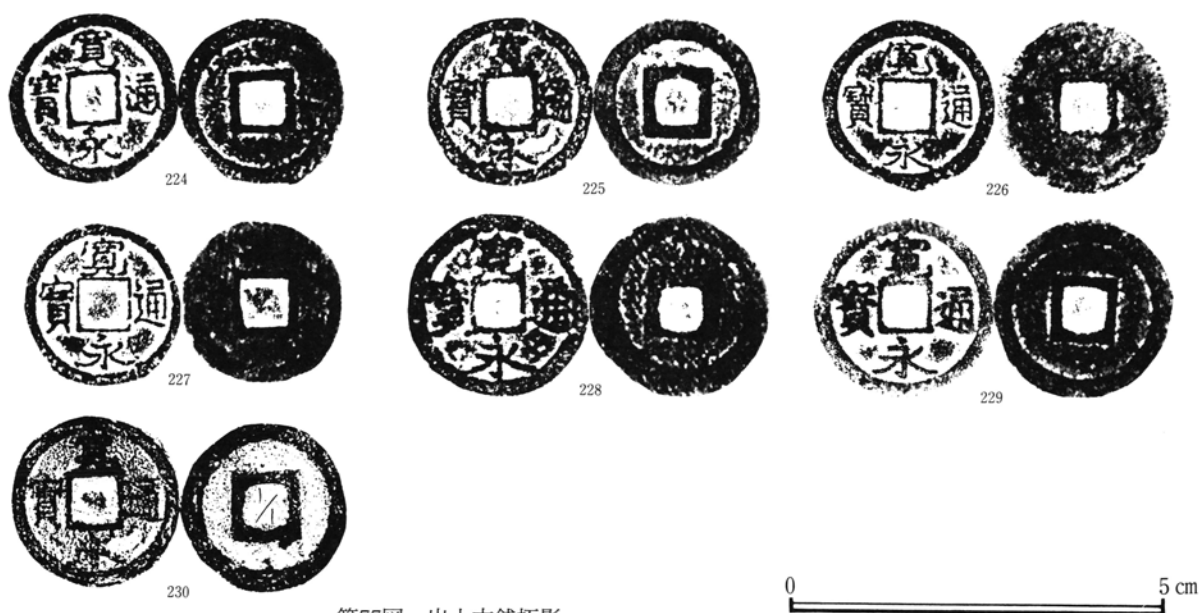
第76図 出土古銭拓影

第1節 中世の遺構と遺物

古銭観察表(中世)

No	出土遺構	銭名			鑄造年			備考	No	出土遺構	銭名			鑄造年			備考
		銭名	朝	年	年	月	日				銭名	朝	年	月	日		
153	20号掘立	皇宝通寶	北宋	宝元	2	1039		193	12号墓	祥符通寶	北宋	大中祥符1	1008				
								194									治平元寶
154	25号掘立	永楽通寶	明	永楽	9			195		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068			
								196									至大通寶
155	68C2小穴	皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039		197		洪武通寶	明	洪武	1	1368			
156		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068		198		不明							
157		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068											
158	1号竪穴	景祐元寶	北宋	景祐	1	1034		199	14号墓	天聖元寶	北宋	天聖	1	1023			
								200									皇宋通寶
159	4号竪穴	聖宋元寶	北宋	建中靖国		1101		201		皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039			
								202									至和元寶
160	15号土坑	熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068		203		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068			
								204									元豐通寶
161	16号土坑	元聖元寶	北宋	天聖	1	1023		205		元豐通寶	北宋	元豐	1	1098			
								206									大觀通寶
162	29号土坑	皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039		207		寥元通寶	南宋	慶元	1	1195			
163	1号墓	皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039		208	15号墓	嘉祐通寶	北宋	嘉祐	2	1057			
164		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068		209		元祐通寶	北宋	元祐	8	1093			
165		紹聖元寶	北宋	紹聖	1	1094		210		聖宋元寶	北宋	建中靖国		1101			
166		不明					密着	211		洪武通寶	明	洪武	1	1368			
167		不明								廖国通寶	後周	顯德	5	938			
168								212	16号墓								
								213		祥符元寶	北宋	大中祥符1	1008				
169	2号墓	天聖元寶	北宋	天聖	1	1023		214		元祐通寶	北宋	元祐	8	1093			
170		熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068		215		元祐通寶	北宋	元祐	8	1093			
171	4号墓	祥符通寶	北宋	大中祥符1		1068		216		至元通寶	元	至元	22	1285			
		洪武通寶	明	洪武	1	1368		217		洪武通寶	明	洪武	1	1368			
172																	
								218	17号墓	開元通寶	唐	武德	4	621			
173	5号墓	祥符通寶	北宋	大中祥符1		1008											
174		嘉祐通寶	北宋	嘉祐	1	1056		219	68G9	開元通寶	唐	武德	4	621			
175		紹聖元寶	北宋	紹聖	1	1094		220	68G10	景德元寶	北宋	景德	2	1005			
								221	68区表採	熙寧元寶	北宋	熙寧	1	1068			
176	6号墓	不明					密着	222	68G8	不明							
177		不明						223	68D7	不明							
178	9号墓	祥符通寶	北宋														
179		永楽通寶	明	永楽	9	1411											
180		永楽通寶	明	永楽	9	1411											
181		永楽通寶	明	永楽	9	1411											
182	10号墓	皇宋通寶	北宋	宝元	2	1039											
183		至和通寶	北宋	至和	1	1054											
184		元豐通寶	北宋	元豐	1	1078											
185		元祐通寶	北宋	元祐	8	1093											
186		政和通寶	北宋	政和	1	1111											
187		永楽通寶	明	永楽	9	1411											
188		永楽通寶	明	永楽	9	1411											
189	永楽通寶	明	永楽	9	1411												
190	11号墓	開元通寶	唐	武德	4	621											
191		天穆通寶	北宋	天穆	1	1017											
192		元祐通寶	北宋	元祐	8	1093											

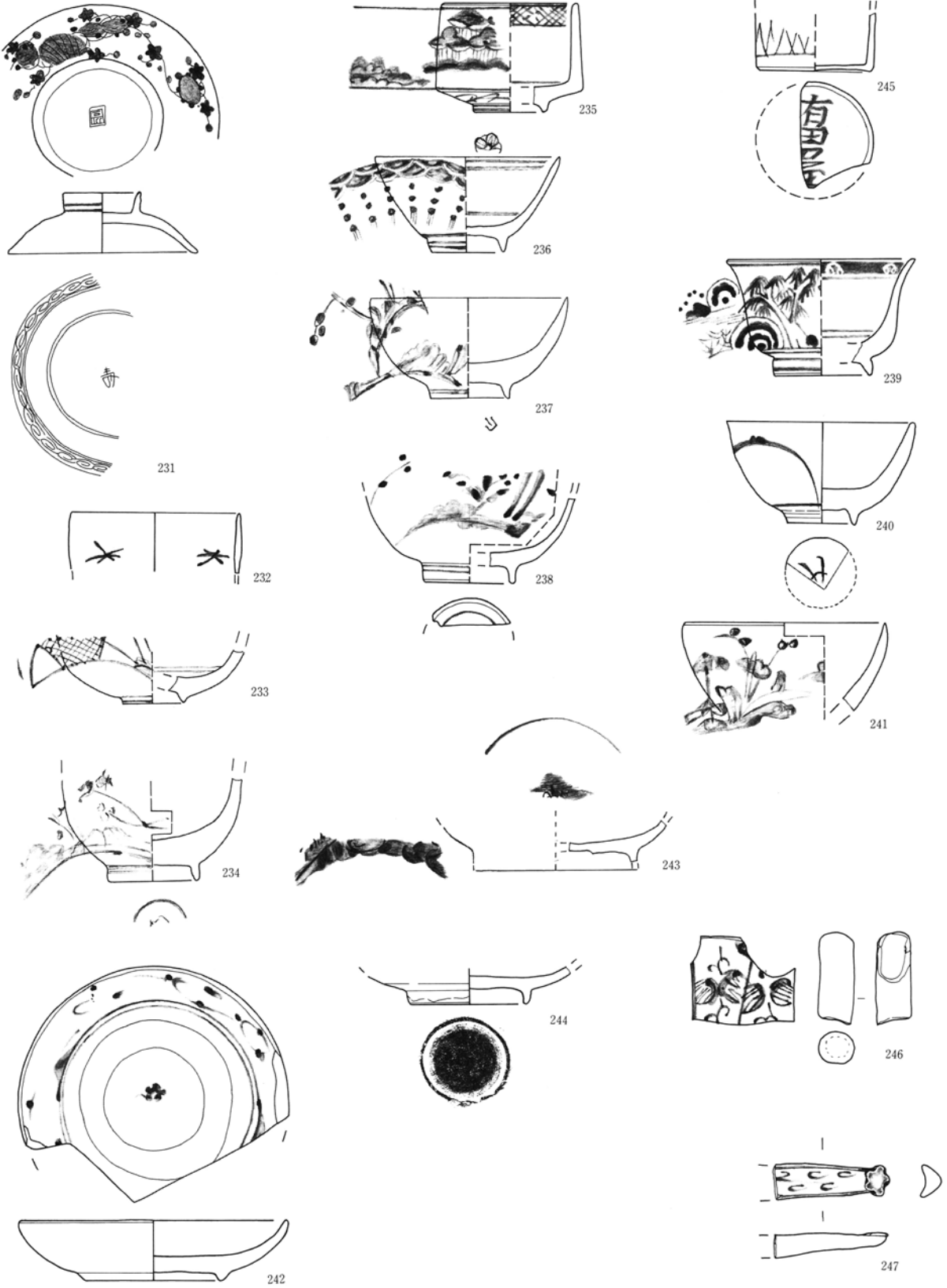
第3章 遺跡の概要



第77図 出土古銭拓影

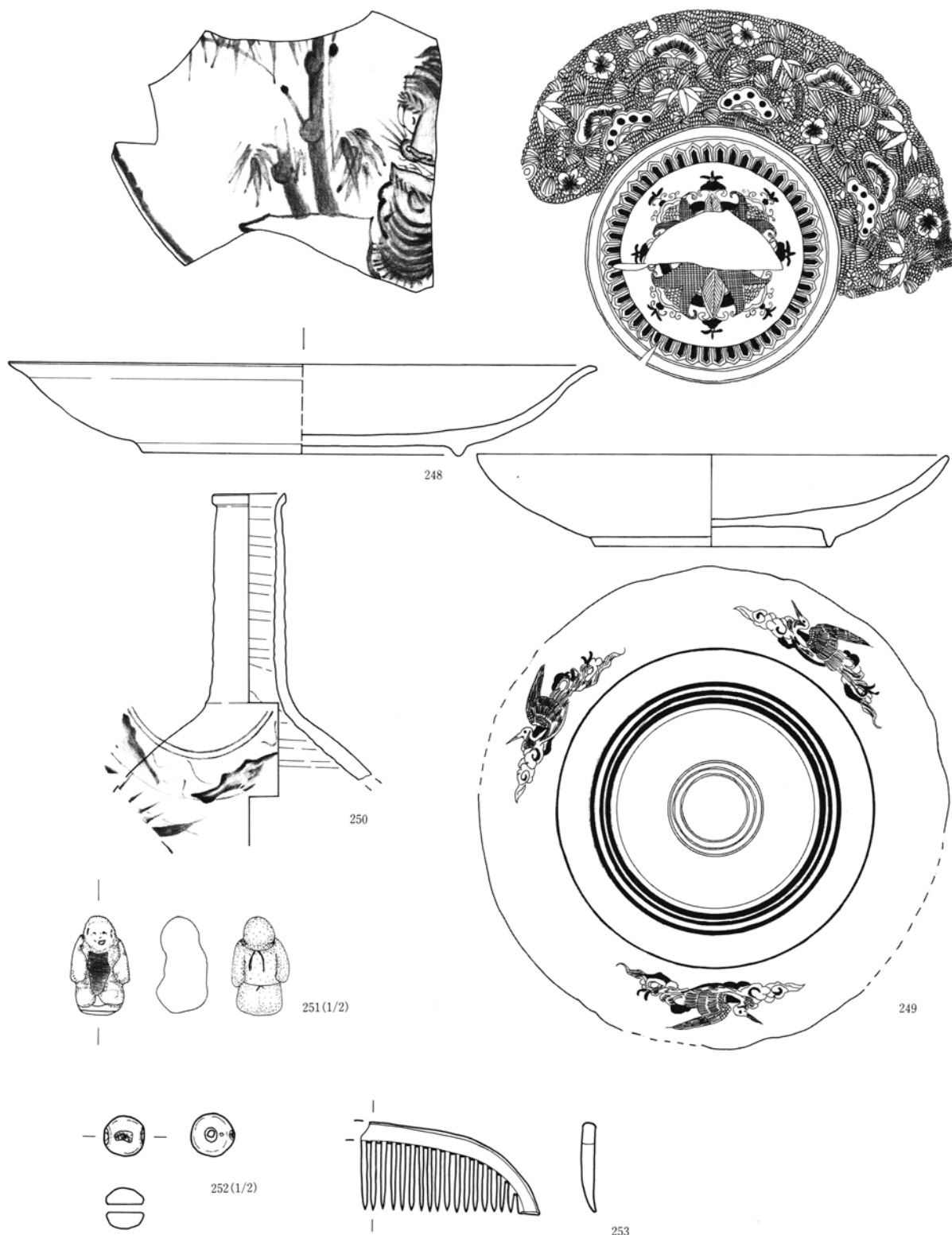
古銭観察表(江戸)

No.	出土位置	銭名	材質	外径cm	厚mm	重g	備考	No.	出土位置	銭名	材質	外径cm	厚mm	重g	備考
224	68H15	寛永通寶	銅					228	68区表採	寛永通寶	銅				
225	58区表採	寛永通寶	銅					229	表採	寛永通寶	銅				
226	68区表採	寛永通寶	銅					230	表採	寛永通寶	銅				
227	68区表採	寛永通寶	銅												



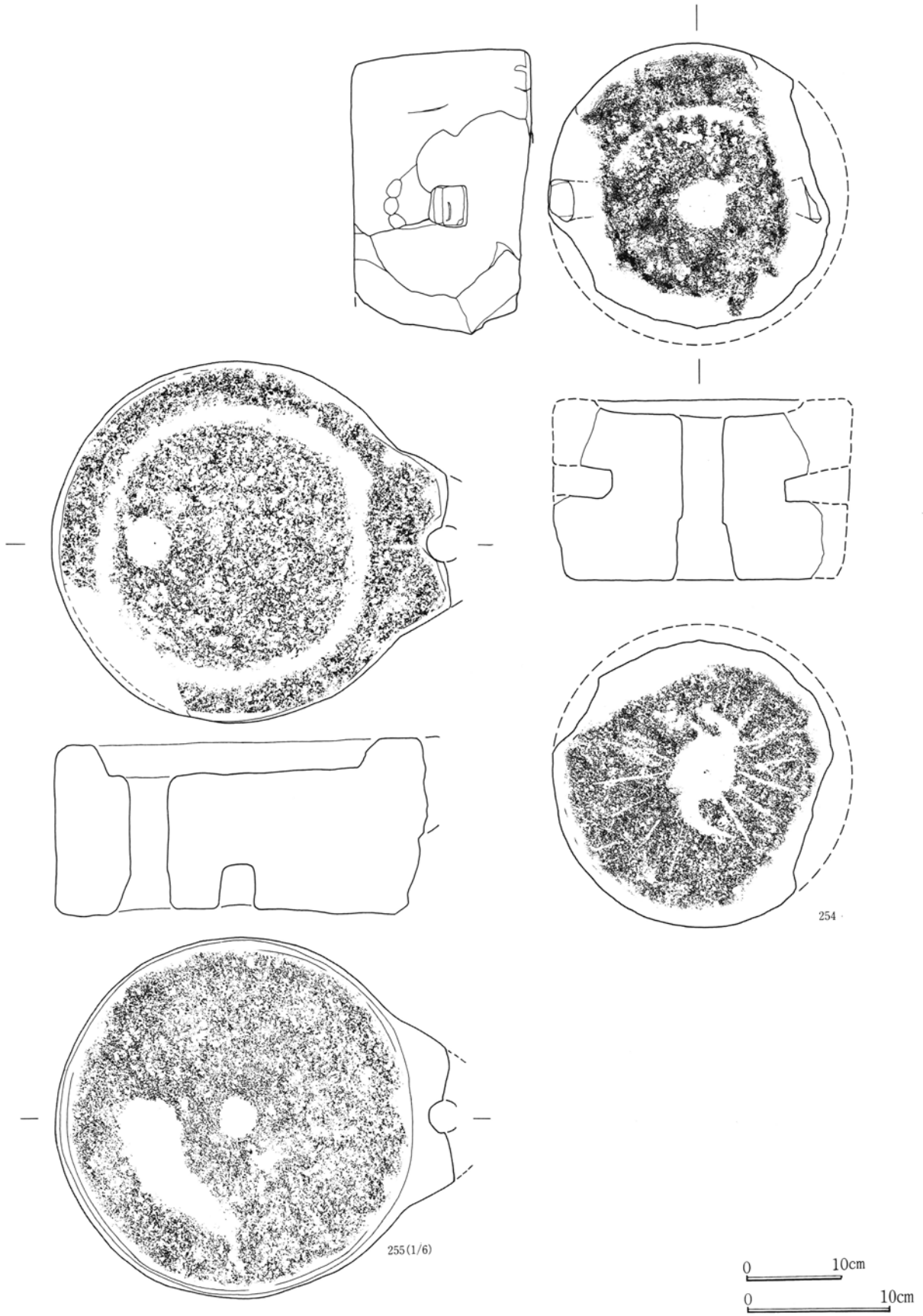
第78図 移転宅地内出土遺物

0 10cm



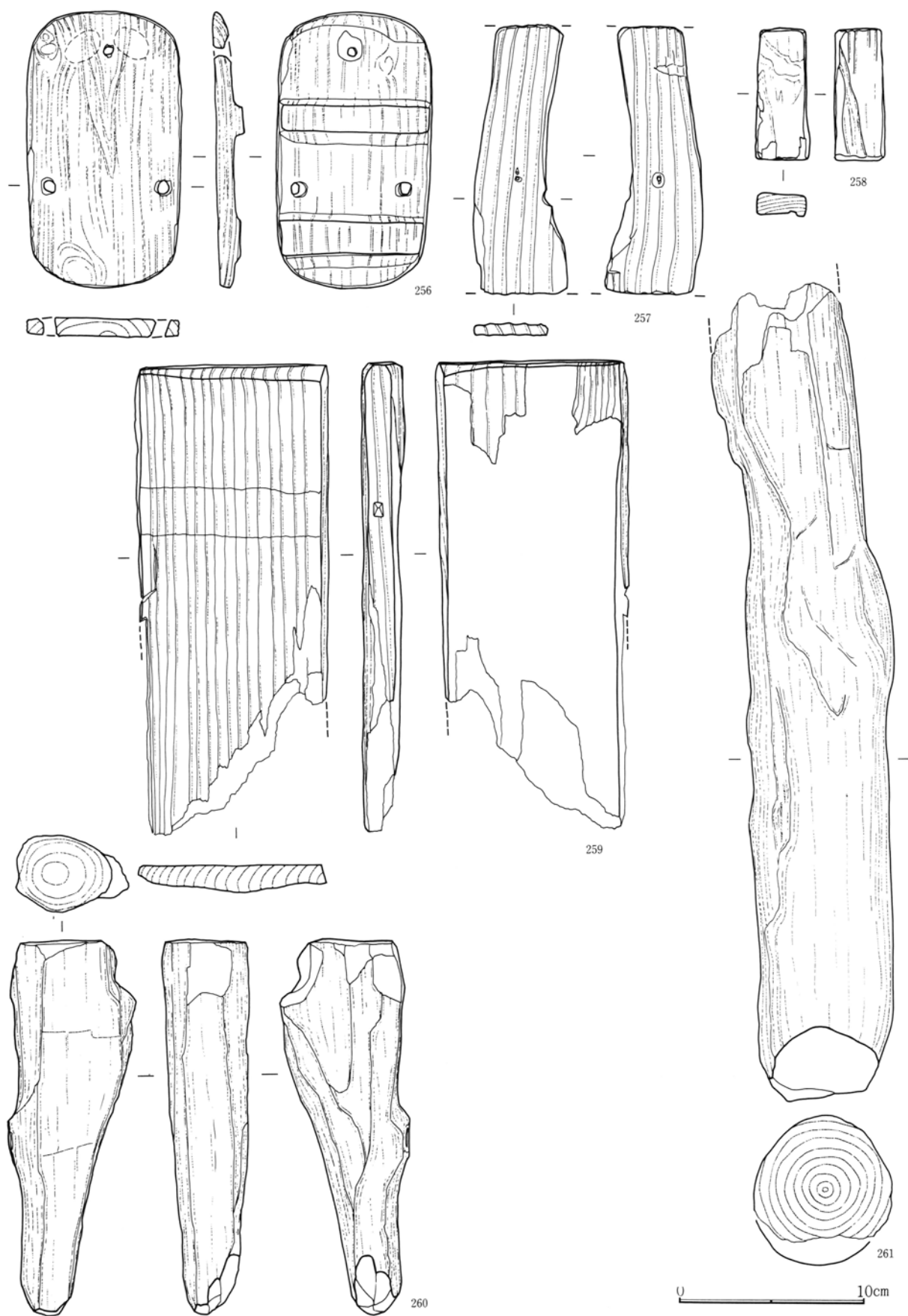
第79図 移転宅地内出土遺物





第80図 移転宅地内出土遺物

第3章 遺跡の概要



第81図 移転宅地内出土遺物

第2節 歴史時代の遺構と遺物

1. 遺構各説

(1) 溝

歴史時代に属する溝は57区に検出され、南東から北東に緩く弧を描く3号溝と、同じく57区にあり、南北走する10条ほどの溝群である。

3号溝 (第83図 PL16-2・3)

57区の調査区東縁にあり、ほぼ南北走するが、緩く弧を描く。走方向は南半では約10mの間がN-44°-W。方向をやや北に変じ、N-9°-Wになる。検出総延長約30m、深さ70~40cm、南高東低で、最北端部が澱み状に窪むため終結の様相を見せるが、深さを減じてさらに北進するようである。溝幅は北に向かい幅広になり、南端では上幅2m、北では最大3mである。溝断面形は緩いU字形をなす。検出面はFP泥流層中と考えられる。埋土の主体は川砂・小礫を主に、微泥を互層となす。底面に近く薄い粘性黑色土(基層)が堆積する。人為的な埋土状況は窺われず自然流水による埋没と思われる。

出土遺物には埋土中より、八世紀代に属する土師器・須恵器の小型品がある。出土遺物から当跡の開削時期はFP泥流堆積直後より、やや遅れる時期になろう。

57区溝群 (第84図 PL16-1)

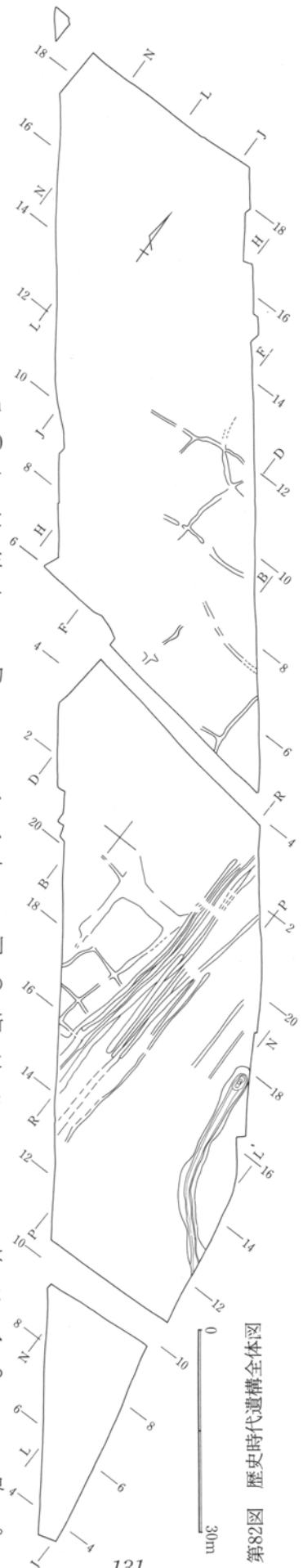
57区西縁近くにあり、10条の南北走する小幅溝からなる。多くの溝は互いに重なり合い、また跡切れて連走する。溝群の検出総延長53.5m、溝幅は不揃いで最大1.5m、最小0.5m、深さ15~30cmである。埋土は浅間山As-B軽石粒を主にするか、As-B軽石層がunit埋積する溝はわずかに一条にすぎない。出土遺物はない。

当溝群は西側58区とは地形的には、10~20cmほどの高低差が生じて微高地となり、西側58区にはAs-B軽石下の水田面が検出されている。面的には同時代と考えられ、土地区画の意味合いが窺われる。また、流水の痕跡が認められず、積極的に溝跡としてよいか判断はできない。当跡の性格付けには、道跡状遺構の可能性もあるが、これもまた、調査時において、硬化面の認識はできなかった。また、側溝等の道路基本幅を示す単位も確認できなかった。

(2) 水田 (第85図 PL16-1・4・5)

当遺跡における歴史時代の水田跡は調査区のほぼ中央部に検出されている。その範囲は57・58区と68区の南・北に分断され両者を繋ぐ面は欠落するが、本来は連続する水田面として広がっていたと考えられる。水田の検出は、中世館跡に関わる諸遺範囲とほぼ重なり、その遺存程度は極めて不良である。以後の土地改変によっておおかたは消失したものであろう。

調査区の南と北側は地形的にやや高まりをなし、当該期の水田は検出されていない。とくに南側では東が高く西側が低い水田面となる。比高差が20cm程度の段差になり、その境界上段に南北走する57区溝群が存在している。土地利用上での区別の意図を示すようである。

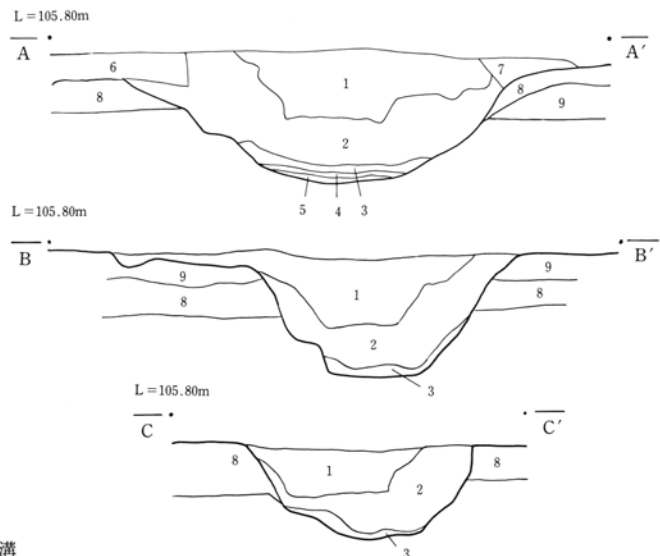
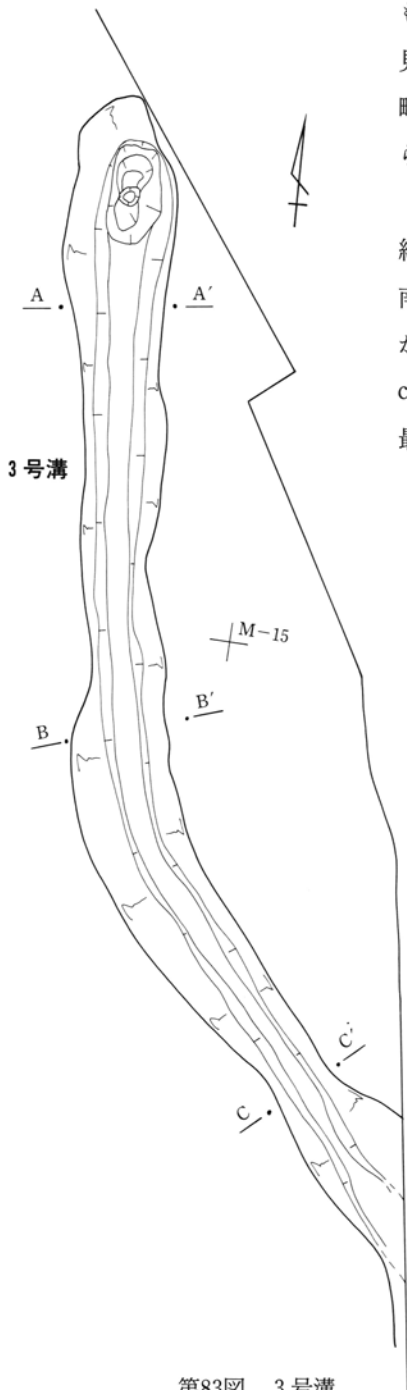


第3章 遺跡の概要

水田跡は浅間As-B軽石層の直下から検出され、その耕土はやや粘性のある暗褐色土である。耕土下は榛名山二ツ岳噴火を起源とする泥流層と考えられるが、その堆積は二ツ岳噴火に伴う直接的なものとは考えられない。耕土及び泥流層は少数ながら平安期の土器を混じえる包含層となっている。土器の年代観からすれば泥流発生からかなり時期を隔てたものであり、井野川の氾濫による水成堆積と考えられる。当遺跡のAs-B軽石層下水田開削の時期を考えるうえで重要な視点となる。

57・58区では12区画の水田面が検出・推定されている。水田区画の基本的な区割りは北東高南西低の緩い勾配を利用している。南北を基軸とし、東西方向で方形形状に小間割りする。東側水田面から西側水田各面への高低は5cm前後の段差で連続する。水路に関しては、57区溝群に該当溝の存在も考えられるが、いずれもAs-B軽石による埋没で特定することはできない。畦畔は一部分大畦が見られ、幅1.2m、その他の小畦は幅30cm前後である。水口と考えられる畦畔の跡切れは南西隅に一ヶ所確認された。水田面には細かな凹痕が多数見られ、足跡・鋤跡と思われるが形状は一定でなく不明である。

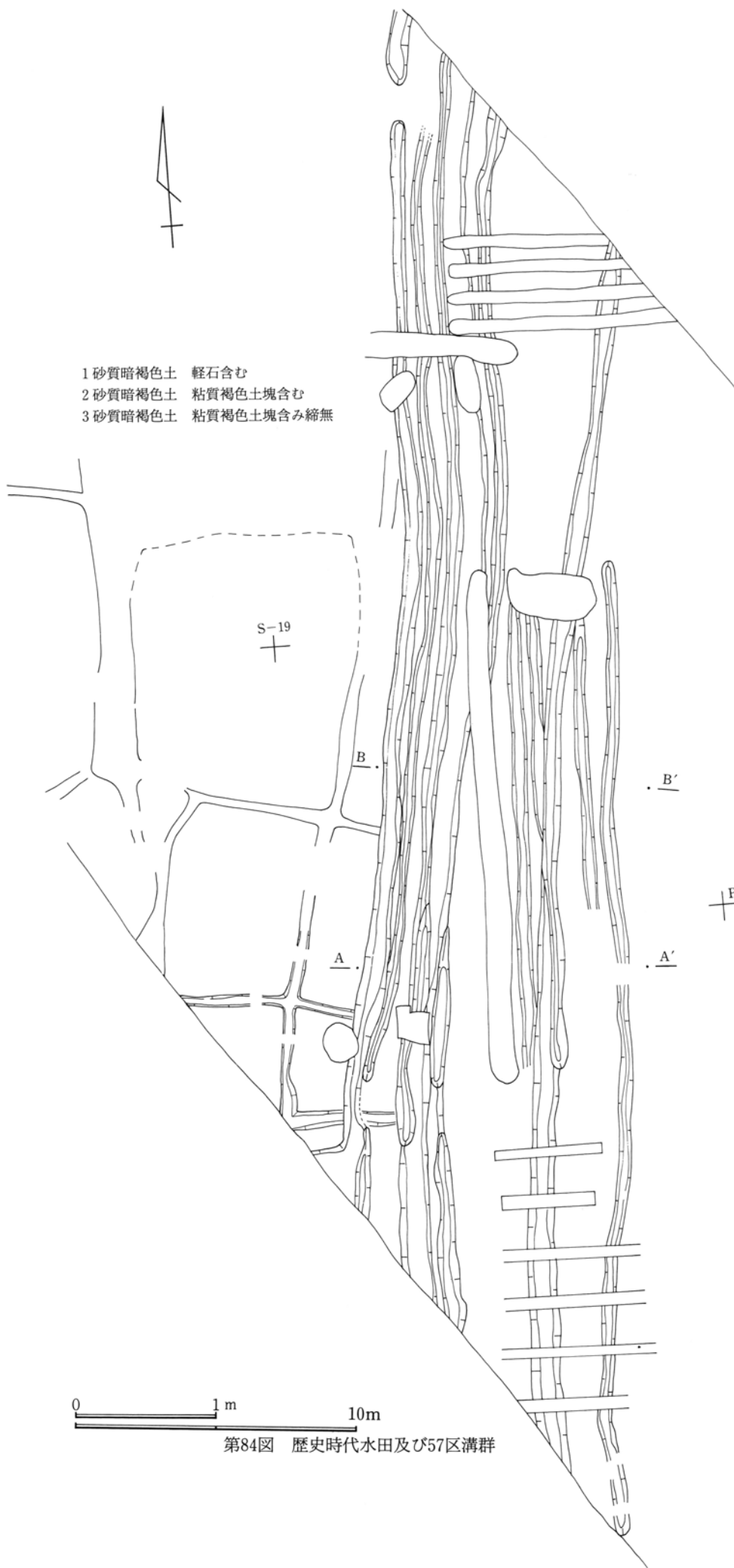
68区の水田跡は中世掘立柱建物跡の最も著しい地域に検出されている。約16面を推定できるが、畦畔が終結する区画は無い。水田区画は北東から南西への緩い傾斜を利用して区切られ形状は方形を主とするようであるが、各区画には大きな高低差はなく、高位置から低位置の水田面落差は45cmの間隔の中で約30cm程度である。畦畔は小畦のみの検出で、幅30~40cm、最も遺存の良好な畦で高さ15cm程度である。水口などは不明である。



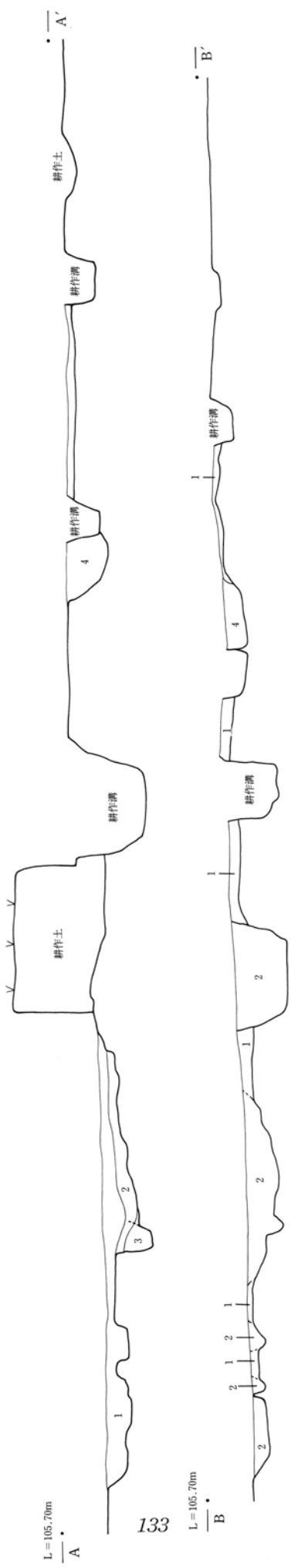
- 3号溝
- 1 粘質鈍黄褐色土 小礫多く含み川砂礫(φ~8mm)とシルトが互層
 - 2 褐灰色土 川砂礫(φ~8mm)とシルトが互層 遺物若干出土
 - 3 暗褐色土
 - 4 灰白色砂土 砂粒1mm大
 - 5 黒褐色土 As-C軽石・砂礫(5mm)多く含む
 - 6 褐色土 攪乱層
 - 7 褐色土 川砂礫多く含む
 - 8 褐灰色土 角安石を少量含み締有粘性やや有
 - 9 灰黄褐色土 8層を主体とし2層を少量含む



第83図 3号溝



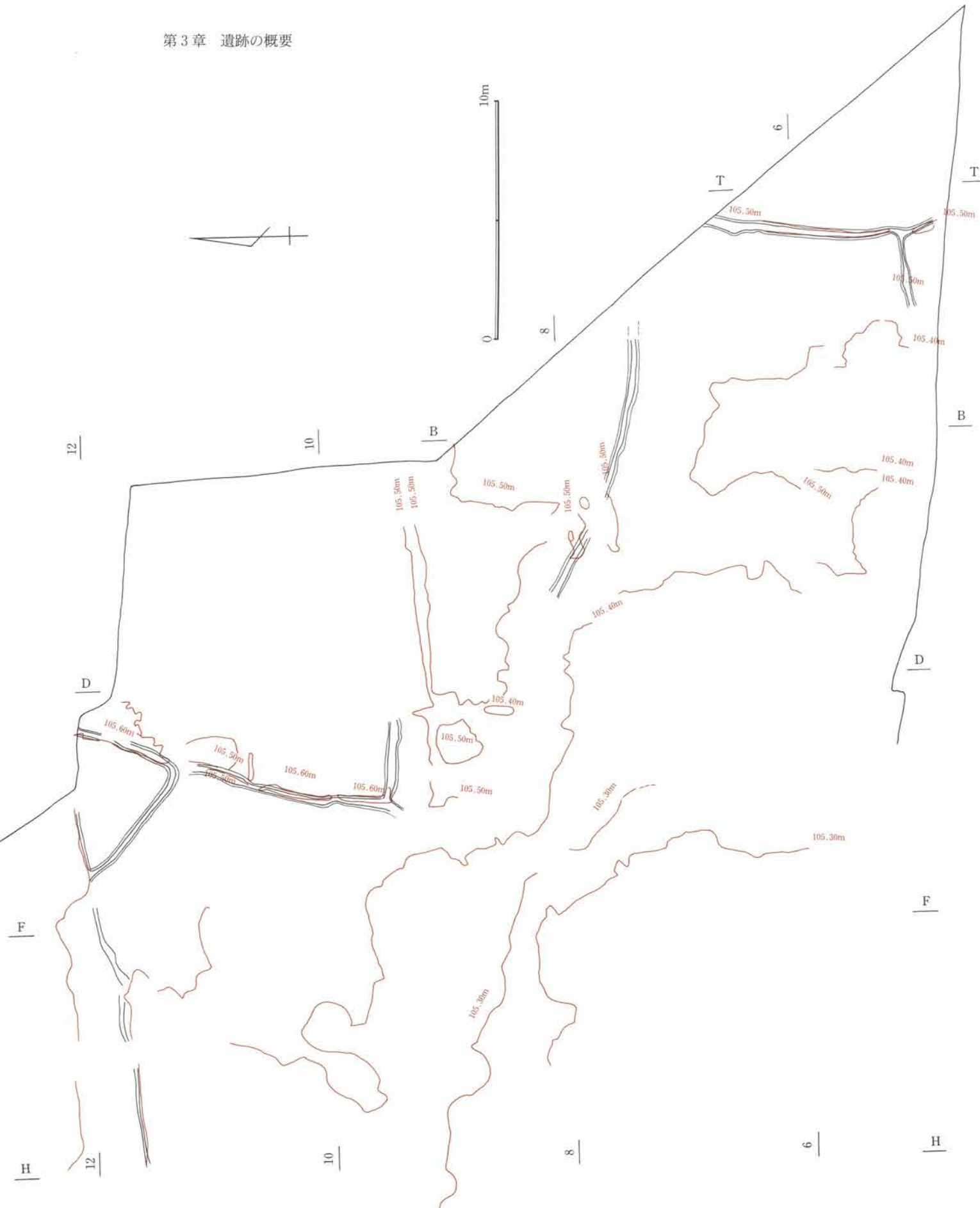
- 1 砂質暗褐色土 軽石含む
- 2 砂質暗褐色土 粘質褐色土塊含む
- 3 砂質暗褐色土 粘質褐色土塊含み締無



第84図 歴史時代水田及び57区溝群

L = 105.70m
A

L = 105.70m
B



第85図 歴史時代水田

2. 遺構出土遺物

奈良・平安時代の遺物は、当該期の遺構が極めて希薄なためもあってその数量は僅かである。遺構に伴う遺物としては、調査区の南側で検出された奈良時代に属する3号溝より出土した土師器・須恵器の類である。これらも、溝という性格上、遺物は投棄されたものである。遺構としては溝跡の他、As-B軽石層下に検出された平安時代に相当する水田跡があるのが知られているように、水田跡は本来的には遺物の出土は少なく、見るべきものは無い。この他には、平安時代を中心とした包含層からの遺物がある。

(1) 溝跡出土遺物

遺物を伴う溝跡は3号溝のみである。埋没過程での投棄と考えられ、細片化した遺物が多い。かろうじて図示し得たものを掲載した。土師器を中心に少量の須恵器で、小型品がほとんどである。

3号溝出土遺物（第86図 PL40・41-285~291）

出土遺物には土師器と須恵器がみられる。土師器は坏と皿の2器種があり、須恵器には蓋・坏・長頸瓶の3器種である。両者の量比率は土師器が多数を占める。土師器の坏は丸底系と平底系に分類される。また皿は浅皿・深皿に2分類される。

土師器坏丸底系

体部と底部に明瞭な変換部がなく全体に丸味をもつ形態である。底部の接地面が広い偏平な(266)などもあるが、形態としては同類であろう。口縁部は内湾・直立・外反など若干の相違がみられる。口縁部が僅かに厚みをもち外稜線が明瞭な形態もある(273~278)。大きさには口縁部径が15cm大の(272)・(278)とこれに満たない11~14cm大のものがある。内面は撫で、口縁部は横撫で、体部は横・斜位の比較的小単位の篋削り、底部は不定方向の篋削りを施す。色調は橙色あるいは暗橙色。胎土は砂粒が混じり粗い。

計測値(口径×高)は、(262)12.0×3.0cm、(263)12.3×-cm、(264)13.0×3.8cm。(265)14.0×-cm。(266)13.0×5.0cm。(267)12.2×-cm。(268)12.0×3.5cm。(269)11.4×-cm。(270)12.6×-cm。(271)13.4×3.0cm。(272)15.5×-cm。(273)11.0×-cm。(274)11.5×-cm。(275)12.8×-cm。(276)12.0×2.8cm。(277)12.6×-cm。(278)15.0×4.7cm。

土師器坏平底系

深目の体部をもち底部は平底である。口縁部ないしは上半に幅広な横撫で、下半に面取様に横位の篋削りを施す。篋削りは1段あるいは2段が通例で削り単位は比較的長い。また(280)のように幅広な斜位篋削りもみられる。平底系の坏は総じて胎土が水簸されたように密で、色調は明橙色である。(279)のみ色調・胎土とも丸底系坏に類似し、暗橙色で粗い胎土である。またこの器形には、内面に暗文が施される例が多い(280)。

計測値(口径×底径×高さ)は、(279)11.3×7.6×3.5cm。(280)13.4×8.0×5.0cm。(281)15.0×-×-cm。(282)15.0×6.0×4.6cm。(283)13.8×-×-cm。

土師器皿

浅い形態(284)・(285)と深い形態(286)・(287)がある。浅い形態は大(285)・小(284)に分かれる。口縁部は横撫で、腰部から底部は篋削りが施される。色調は暗橙色。胎土は砂粒が混じり粗い。

計測値(口径×底径×高さ)は、(284)13.8×10.0×1.8cm。(285)18.2×13.2×2.2cm。(286)15.2×9.0×3.0cm。(287)17.2×9.0×3.0cm。

須恵器蓋

第3章 遺跡の概要

(288)・(289)とも内面に鋭いかえりを有する。天井部摘みは偏平なボタン状摘みで、(289)の摘径は大きく6.3cm。(288)は4.5cmを測る。また(288)は本体と摘みの胎土が異なる。轆轤調整。天井部回転篋削り。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は緻密で器表に黒色粒浮く。(289)は焼成は良好で暗灰色を呈す。胎土は粗く石英粒が多く混じる。

計測値(口径×高さ)は、(288)13.0×3.0cm。(289)16.0×2.3cm。

須恵器坏

小片である(290)。体部は直線的に外傾。轆轤調整、底部回転篋削り、腰部手持ち篋削り。焼成良好。灰白色を呈す。胎土は密で器表に黒色粒浮く。

復元計測値(口径×底径×高さ)は14.0×10.0×3.4cm。

須恵器長頸瓶

長頸瓶の頸部である(291)。僅かに外傾斜で開く。巻き上げ形成、轆轤調整。焼成良好。灰色を呈し、器表には部分的に光沢がある。胎土には細砂粒が混じる。

計測値口径8.4cm、現高11.0cm。

(2) 包含層及び表採遺物(第87～90図 PL41-292～304・42～44・45-352～354)

歴史時代の遺物には土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・須恵器円面硯・鬼瓦を含む瓦類がある。これらは浅間山As-B軽石層下及び榛名FD泥流を起源とする二次堆積泥流層中に多く検出されている。出土地点(57・58・67・68区)における量的な偏在は調査面積の狭い58区を除けばほぼ拮抗する。

器種・時代的な傾向は57区には少量ながら8世紀代の遺物が、また灰釉陶器・瓦類が集中する傾向がある。出土遺物のうち年代のやや溯るものは直接的に3号溝に関わると考えられる。瓦類の存在については、当遺跡の東に続く融通寺遺跡に検出されている。瓦塔・瓦類や居住空間としての遺跡内容から、当遺跡出土瓦坑の存在理由は融通寺遺跡にその源を求められるであろう。小破片としての出土量は多いが、図示できる遺物数は僅かである。

土師器

坏・甕でいずれも小片である。(292)は丸底で内湾気味に立ち上がる。口唇部直下は幅狭な横撫で、体・底部は不定方向の篋削り。色調は橙色。胎土に砂粒多い。復元口径11.8cm、器高3.4cm。(57区)(293)は平底になろうか。腰部でくびれ、口縁部は小さく外反する。器面荒れる。体部下半は横1段の篋削り。色調浅黄橙色。胎土は密で茶色粒混じる。復元口径11.2cm、器高3.4cm。(67区)(294)は甕口縁部で、いわゆるコの字口縁で器肉は薄い。色調は橙色で胎土に砂粒多く混じる。復元口径20.6cm。(67区)(295)は外面と内面口縁にベンガラ使用と考えられると塗採土器である。形状は長頸瓶の口縁部のようである。外傾する頸部に口縁部は水平に近く折れる。外面は高速回転の調整痕が残る。色調は灰色。胎土は密である。復元口径9.6cm。(68区)

須恵器

蓋・坏・碗・皿がある。

蓋(296)はかえりが付く。かえり端部は小さく鋭さを欠く。ボタン状摘み。暗灰色で焼成は堅緻。胎土粗く器表肉黒色粒多く浮く。復元口径15.0cm。(297)は口縁端部の折れ小さい。灰色で焼成堅緻。胎土堅緻。復元口径14.0cm。

坏は底部篋調整(298)・(299)と回転糸切り(300)～(305)がある。また全体形状が知れるものは(298)・(299)である。なお計測値は復元値である。(298)は小型の坏で底部・腰部に手持ち篋削りを施す。焼成は良く

浅黄橙色。胎土は密である。口径10.0cm、底径7.0cm、器高3.3cm。(57区)(299)は底部回転篋削り後、撫でを施す。灰色、胎土粗く黒色粒多く混じる。口径13cm、底径8.6cm、器高3.8cm。(68区)(300)～(305)は底部のみである。底部切り離しは回転糸切り。(305)はやや大型になろう。(300)は底径7.4cm。灰色を呈すが焼成は甘い。胎土は密。(67区)(301)は底径7.0cm。灰色を呈し堅い焼成。胎土に黒色微細粒多く混じる。(68区)(302)は底径6.2cm。白灰色で焼成は甘い。胎土に大砂粒多く混じる。(67区)(303)は底径6.0cm。灰白色で焼成は良い。胎土は粗。(67区)(304)は底径7.0cm。灰色で焼成堅い。胎土粗。(67区)(305)は底径8.0cm。深い形状になろうか。灰白色を呈し焼成は堅い。胎土はやや粗。

埴(306)～(324)にはやや大振りな(306)～(310)や断面形角高台で、高台内側の付け根が幅広い撫で調整される(311)～(315)などがある。(324)は足高高台である。なお全形状が知れるものは(308)のみで、全て底部で、計測値は復元値である。

埴(306)は底径9.2cm。内面に炭化物状付着物。白灰色で焼成は良好。胎土はやや粗。(68区)(307)は内湾気味の高台・腰部の張り強い。底部9.0cm。灰色を呈し焼成良好。胎土粗。器表に黒色粒浮く。(68区)(308)は丸い底部から口縁部は緩く外反して開く。口径15.2cm、底径8.0cm、器高6.0cm。灰白色土焼成は良好。胎土細粗。(表採)(309)は底径8.8cm。灰白色を呈し焼成やや甘い。胎土は細かい。(68区)(310)は底径9.2cm。高台断面はやや矩形を呈す。灰色を呈し焼成やや甘い。胎土はやや粗。(67区)(311)は底径7.0cm。角高台。焼成甘く橙色を呈す。胎土密。(67区)(312)は底径7.4cm。角高台。灰色を呈すが焼成やや甘い。胎土細砂粒多く混じる。(57区)(313)は底径7.4cm。角高台気味。暗灰色を呈し、焼成良好。胎土粗粒砂少量混じる。(57区)(314)は底径7.4cm。角高台。橙色を呈し焼成甘い。胎土密。(67区)(315)は底径7.8cm。角高台。暗灰色を呈し焼成良好。胎土細砂粒多く石英粒目立つ。(68区)(316)は底径6.2cm。角高台。灰色を呈し、焼成良好。胎土砂粒多く石英粒目立つ。(68区)(317)は底径6.9cm。高台低く、内側付根に強い撫で調整。灰色を呈すが、焼成やや甘い。胎土砂粒多混じる。(68区)(318)は底径7.5cm。高台は外反気味に開く。灰色を呈し焼成良好。胎土細砂粒混じる。(68区)(319)は底径6.2cm。高台接合部粗雑。焼成甘く淡黄橙色。胎土は粗い。(58区)(320)は底径7.0cm。幅広い高台で接合部は粗雑。高台内側に爪形凹文巡る。灰白色を呈するが焼成やや甘い。胎土細粗。(68区)(321)は底径6.8cm。低い三角高台。灰色を呈し、焼成良好。胎土細砂粒多混じる。(67区)(322)は底径6.3cm。灰色を呈し焼成良好。胎土砂粒多く粗い。(67区)(323)は底径6.6cm。幅広い低い高台。内外面吸炭す。焼成甘い。胎土密。(67区)(324)は底径8.0cm。高台は外反して大きく開く足高である。底部表裏面に回転糸切り痕残り、表面は左回転。淡黄橙色で焼成甘い。胎土粗い。(68区)

皿(325)～(329)で形状の知れるものは(325)・(326)であり、計測値は復元値である。また高台は外反気味に開くが、(327)は幅広で低い角高台である。(325)は口径14.0cm、底径7.9cm、器高3.4cm。体部は直線的に開く。灰色を呈し焼成良好。胎土細粗。(58区)(326)は口径12.4cm、底径6.0cm、器高3.0cm。体部直線的に開く。内面吸炭し、外面は明赤褐色で焼成甘い。胎土細砂粒多く混じる。(57区)(327)は底径7.6cm。暗灰色を呈し、見込部白灰色の重ね焼き痕。白灰色を呈し焼成良好。胎土細粗。(68区)(328)は底径8.0cm。灰色を呈し焼成良好。胎土細砂土。黒色微粒子多く混じる。(57区)(329)は底径7.9cm。暗灰色を呈し、見込部は白灰色の重ね焼き痕。焼成良好。胎土細粗。(68区)

緑釉陶器

57区の一点のみ出土である(330)。皿型になろうか。底径5.7cm。削り出しの板高台である。焼成良好。胎土は密で浅黄橙色で淡い緑色釉が全面に施される。底部の技法・胎土・釉薬の発色から畿内産であろう。

灰釉陶器

第3章 遺跡の概要

壺・皿・小瓶・長頸瓶がある。

壺(331)～(336)のうち器形を知れるものは(331)1点である。口径13.6cm、底径6.8cm、器高4.0cm。内面全体に釉のかかりがあるが、重ね焼き時の最上位におかれたための自然降灰によると考えられる。外面は腰部まで施釉が施される。漬け掛けであろう。底部及び体部上半まで丁寧な回転篋削り調整。高台は稜のある三日月高台。(332)は底径6.2cm。漬け掛け施釉である。高台は小さく角高台気味である。(333)は底径7.6cm。外面は底部を除き施釉、見込部無釉。高台稜無く内湾して立つ。腰部強く張る。(334)は底径7.0cm。漬け掛け施釉。稜の鈍い三日月高台。(335)は底径6.8cm。漬け掛け施釉。稜の鋭い三日月高台。(336)は底径7.8cm。漬け掛け施釉か。稜の丸い三日月高台。(337)は底径6.6cm。漬け掛け施釉。丸味のある高台。

皿(338)は底径7.4cm。外面底部を除き施釉。内面体部と見込部中央に刷毛塗り施釉。丸味のある高台。瓶類は無高台と高台付の小瓶、さらに長頸瓶がある。

(339)底径6.0cm。下脹れの脚部である。轆轤成形、回転糸切り。腰部回転篋削り調整。(340)は底径5.2cm。胴部の張り少ない。幅広で低い高台。轆轤成形、回転糸切り。(341)は口径8.8cm、底径11.6cm、器高26.0cm、胴部最大径19.0cm。肩部は強く張り、最大径は直下にある。頸部・胴部は2部接合。胎土やや粗く器表に黒色粒浮く。

瓦

瓦類には鬼瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦がある。いずれも小破片で全体を知り得るものはない。平瓦の製作技法については小片のため、模滑痕など形跡が認められず、桶巻造り、一枚造りの識別が困難である。厚さ・調整痕の度合いを勘案すれば、(345)～(347)・(349)は桶巻造りになり、(348)・(350)・(351)が一枚造りとなろう。

鬼瓦(342)は右目に相当しようか。眼球復元径6.2cm、顔面厚1.4cm、顔面より眼球は1.7cm突出する。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は密だが砂粒混じる。

軒丸瓦(343)は瓦当部小片。瓦当面は素弁六葉。圏線欠損。中房子葉は不祥。瓦当面裏は粗い布目。厚2.7cm。焼成はやや甘く浅黄橙色。胎土は粗く乳白色粗粒多く混じる。

丸瓦(344)凸面は縦方向縄目叩き、凹面は布目。側面整形は1面?厚1.6～2.3cm。灰色を呈し、焼成良好。胎土粗く白色粗粒多い。丸瓦(345)凸面撫で調整。凹面は布目上から縦方向の篋撫で。側面整形3面、端面整形2面。粘土板重ね成形痕あり。厚2.2～2.9cm。黒灰色を呈し、焼成やや甘い。胎土粗く砂粒多い。平瓦(346)凸面撫で。篋描の痕跡。凹面布目。粘土板重ね成形痕あり。厚2.3cm。灰色を呈し、焼成良好。内胎土は発泡気味。胎土粗く黒色粒子多い。丸瓦(347)凸面縄目叩き。凹面布目。厚1.1cm。暗灰色で焼成は堅緻。胎土細かい。丸瓦(348)凸面縦に単条の縄目後斜方向の強い撫で。凹面斜方向の撫で。端面整形1面。厚1.6cm。黒灰色で焼成やや甘い。胎土細かく白色微粒混じる。丸瓦(349)凸面縦方向篋削り。凹面粗い布目。側面整形2面。厚1.7cm。灰色を呈し焼成良好。胎土やや粗く砂粒混じる。平瓦(350)凸面縦方向、端面近く横方向の縄目叩き。凹面布目。側面整形3面。厚1.4～1.6cm。灰色を呈し焼成良好。胎土縞状乳白色大粒多く混じる。平瓦(351)一枚造り、側面は凹面側に小さく突出。凸面撫で、凹面布目。側面整形1面。厚0.8～0.9cm。焼成甘く淡黄色。胎土やや細かく。

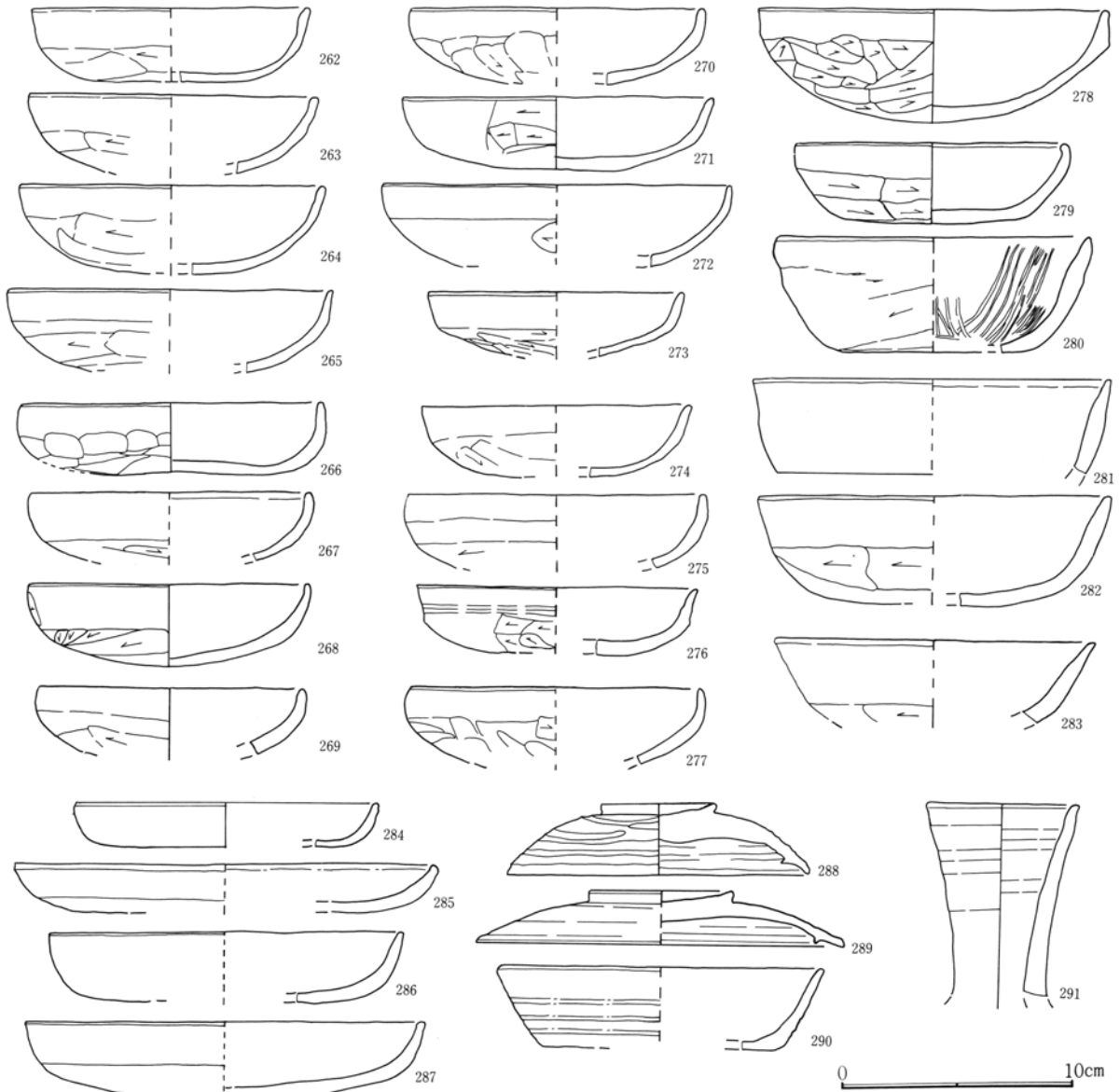
陶硯

円面硯の小片2点である。(352)は硯面から脚上端にかけての部位である。内堤は欠損する。推定硯面外堤径19.0cm。硯面と墨池の落差が大きく、外堤の高い形状になろうか。硯面は著しく摩滅し光沢がある。外堤直下には断面三角形の凸帯が巡る。脚部には1cm前後の幅をもつ長方形透かしが施されていたと考えられる。

青灰色を呈し焼成は良好。胎土は密である。(353)は円面硯脚上端部小片である。長方形透かしが施されるが、透かし間は1.5cm、幅で2条の篋刻垂線で3区割され、中間区割に径1.1cmの円径透かしが穿たれる。灰色を呈し焼成良好。胎土細かい。

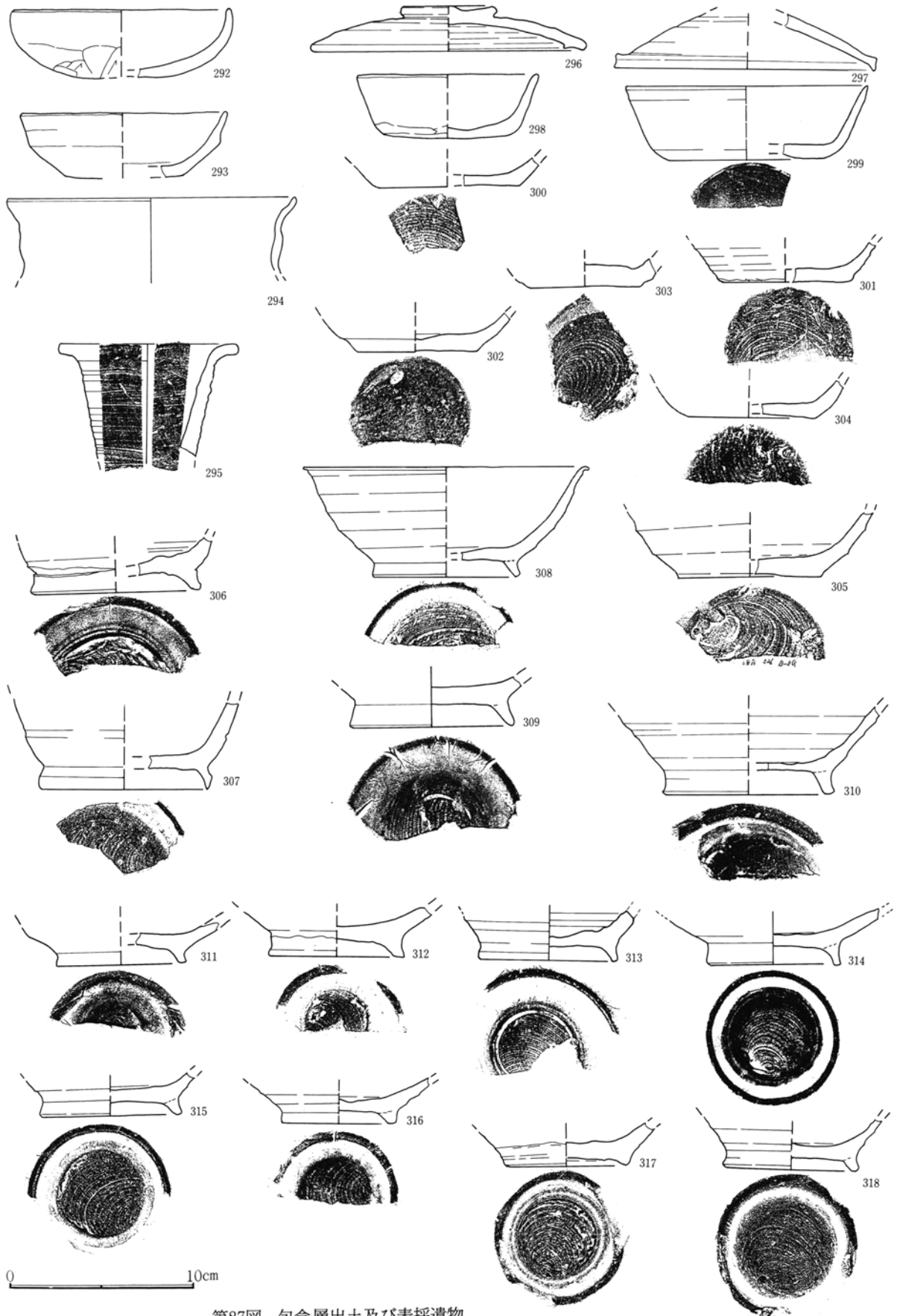
石帯具

巡方の上縁が弧状になる(354)。幅0.5cm、長1.8cmの長方形の透かしを設ける。表・側面は丁寧な研磨が施され、黒色で光沢をもつ。裏面は糸かがり用穴が2ヶ所一対で3個所に穿たれる。研磨は粗く光沢を発しない。糸かがり用穴には、酸化した鉄分が残り、糸には金属糸を用いたと考えられる。透かし縁部と裏面縁部は丁寧な面取がなされている。長・幅・厚の計測値は3.3×2.4×0.6cm。重量10.0g。石材は珪質頁岩になろう。

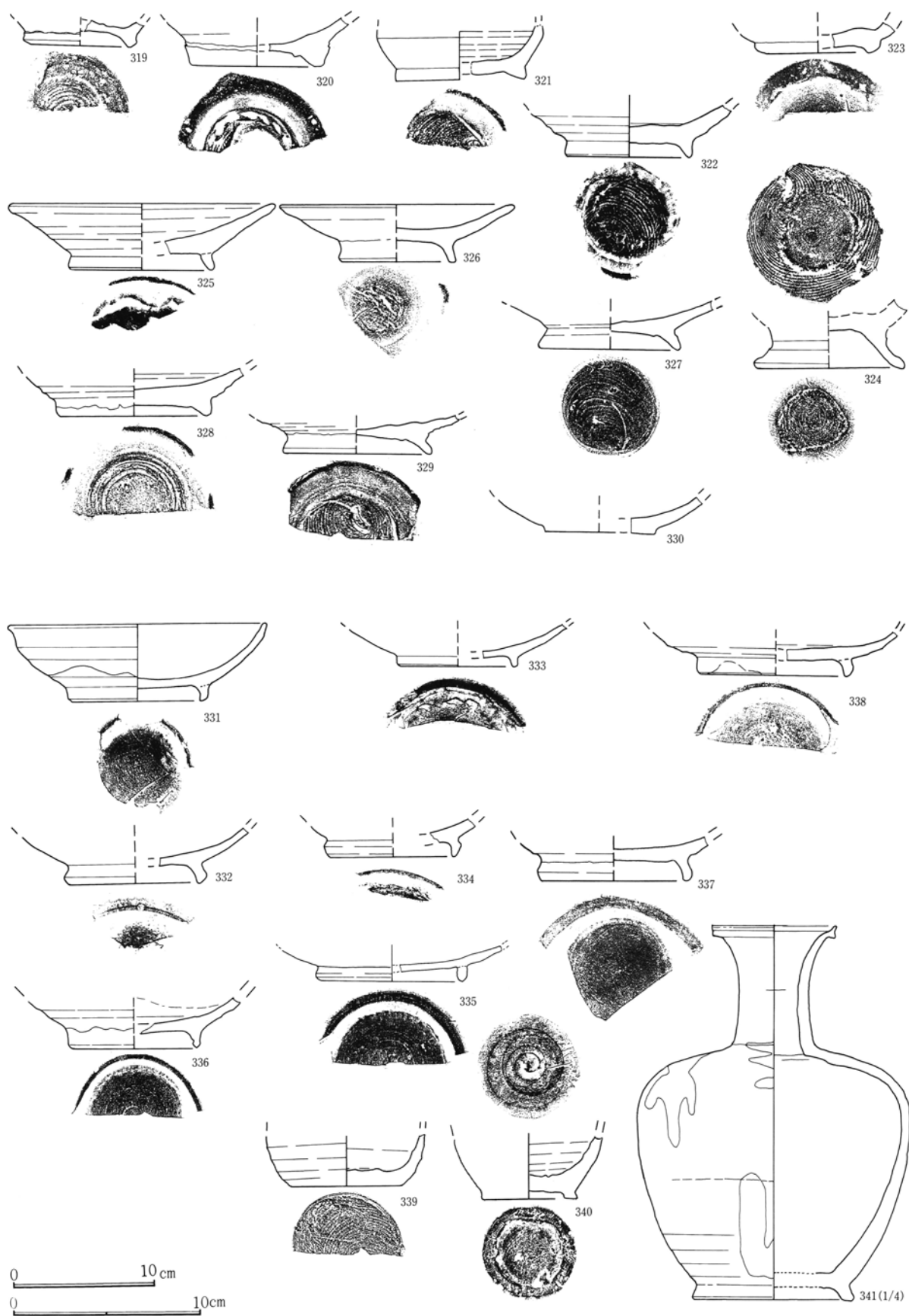


第86図 3号溝出土遺物

第3章 遺跡の概要

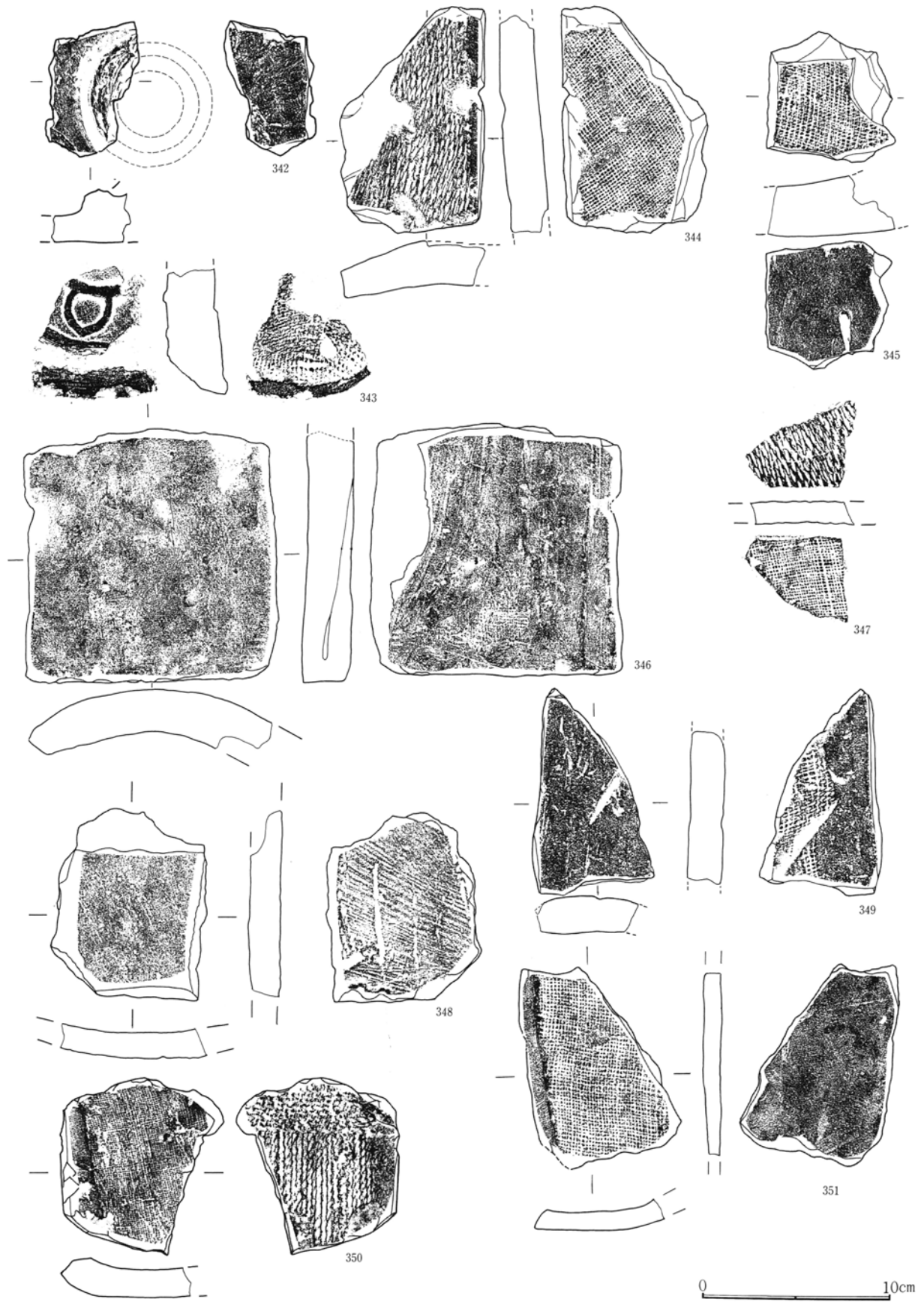


第87図 包含層出土及び表探遺物

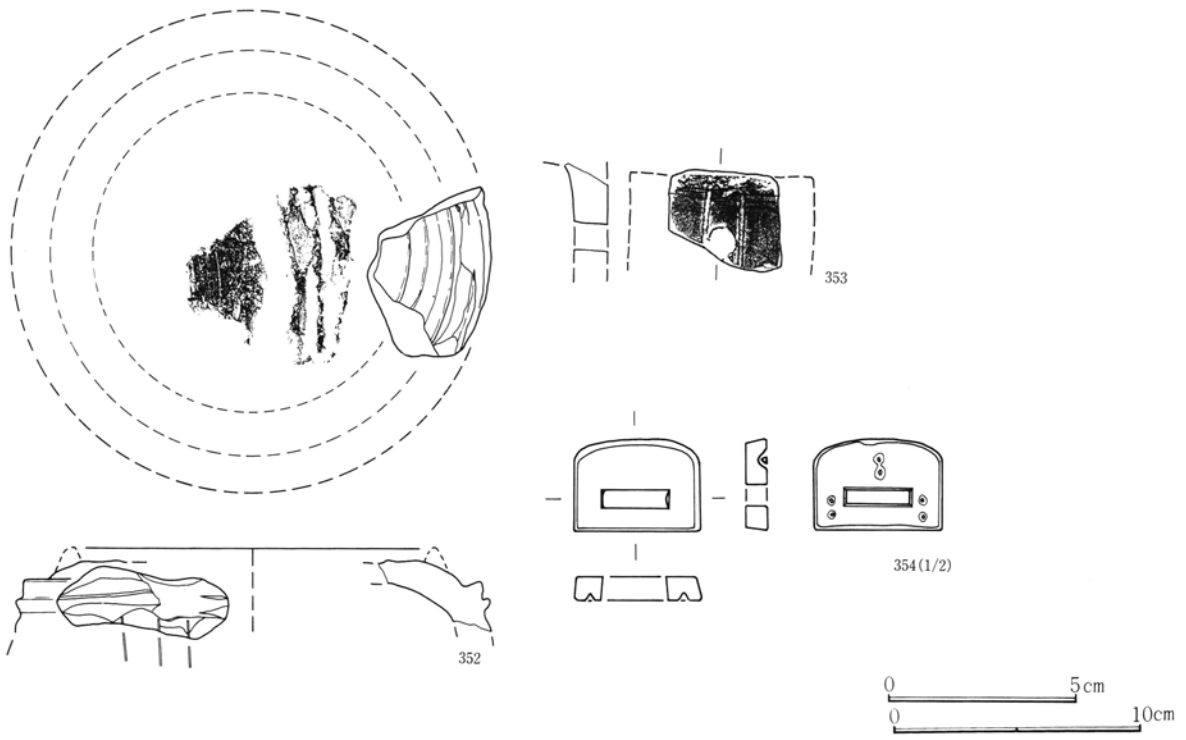


第88図 包含層出土及び表探遺物

第3章 遺跡の概要



第89図 包含層出土及び表採遺物



第90図 包含層出土及び表採遺物

第3節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に属する遺構は、古墳時代前期と古墳時代後期の溝跡と水田跡が各々検出され、前者は4世紀初頭頃に比定されている浅間山噴火起源のAs-C軽石に、後者は6世紀初頭に考えられる榛名山二ツ岳噴火起源火山灰FAに覆われている。したがって、前述したように、古墳時代前期・後期とした遺構の時期はその形成や存続を示すものではなく、遺構廃絶の下限を示す。両該期の水田跡はほぼその占地を同じくしており、調査区の南部では認められていない。また中央部には畦畔等は検出されていないが、中世及び近現代の削平によって消失したためであろう。水田跡の遺存は57区北側から67区南側にかけての範囲と、68区の北側である。68区の北側は古墳時代前期・後期とも方形を水田区画の基本とするのに対し、57・67区にかけての地域では、明瞭な区画は存在せず、後期のものは大畦畔と水路と考えられる溝からなる大区画水田である。前期のそれはほぼ水田形状を同じくしながらも大畦畔は作られず、水田をこれに接結する水路で構成される同じく大区画水田である。古墳時代に関わる出土遺物は、水田跡を中心とした遺構の性格のためか、見るべきものはほとんどなく68J-11区の古墳時代前期に相当する粘性黒色土上面より滑石製白玉が1点検出されたのみである。

1. 遺構各説

(1) 古墳時代後期の溝 (第93図)

検出された遺構のうち、水田跡に直接関わる水路と考えられるものは57・67区にかかる水田大畦畔に沿う26号溝である。また24・25号溝も水路である可能性がある。この3条の溝については水田跡の中で述べる。また、57区中央部で不規則・不連続で検出された小溝群は自然流水による可能性が高い。前述のように不規則で連続的なもので、壁面や広面の掘形などに人為的な所作を窺うことはできない。埋土は主としてよごれの少ない砂粒からなり、底面には随所に硬く凝固した部分が観察されてる。この地域で人為的な溝としては17号溝がある。68区では54・55・58号の3条の溝が検出されている。58号溝は水田跡と重複するもので、水田面を掘り込むところから、水路とは考えにくい。

17号溝 (第97図)

57区の水田跡の南側にあり、直線的でほぼ東西走る溝である。走方向はN-93°-Wを示す。西端は終結するが東側は徐々に掘形が不明瞭となり消滅する。検出全長約20m、幅約80cm、深さ25cmで掘形断面形は箱堀状を呈する。埋土は砂質暗褐色土でFP泥流の二次堆積土である。

54号溝 (第97図 PL17-3)

68区中央部に位置し、東西走る溝である。北側の55号溝と1m前後の間隔をもって並走する。東側は調査区域外に延び、西側は後世の削平によって消失する。古墳時代後期の水田跡内にある。緩い曲線をなすが、ほぼ直進する。走方向はN-38°-Eを示す。検出全長約16.5m、幅60cm前後、深さ約10cmを測る。掘形断面形状は緩いU字状を呈す。埋土の上位は砂質灰褐色土でFP泥流二次堆積土である。底面近くには掘込み基盤層の浅間As-C軽石粒混じりの黒褐色土が流出堆積する。

55号溝 (第97図 PL17-3)

68区中央部に位置し、54号溝の北側を並走する溝である。東側は調査区域外に及び、西側は後世の削平によって消失する。古墳時代後期水田跡中にある。走方向はN-38°-Eを示す。検出全長は約24m、幅約80cm、深さ約15cmを測る。掘形断面形状は緩いU字状を呈す。埋土は54号溝とほぼ同様に、上層は砂質灰褐色土である。

54号・55号の両溝は、溝幅等に若干の差があるものの、走向、形状、埋土など共通点が多く、二条一体の可能性も考えられる。水田跡との関係では、54号溝が水田区画を切り通している状態であるが、南側に広がる水田区画への給水直結区画と考えられる。したがって55号溝は北側水田に対する排水路であり、並走する両者の間隔は大畦畔とすることができる。また溝の走方向は、水田区画の割付けと整合性を示す。

58号溝 (第97図)

68区調査区北端近くにあり、北西・南東走する溝である。調査区西縁に沿い両端とも調査区外に延びる。古墳時代後期の水田面を切り、これより新しい。緩く蛇行するが走方向はN-25°-Eを示す。検出全長13m、幅35cm、深さ約10cmを測る。断面形状はU字形を呈し、埋土はFP泥流二次堆積の灰褐色土である。

(2) 古墳時代後期の水田

大区画水田 (第96図 PL18-1・2)

57区・67区にかけて検出された。水田の範囲は南・東限を示す大畦と外周に沿う水路(23号溝)によってその一部を知ることができるが、北限及び西限は後世の削平で消失している。水田面や水路などは榛名山二ツ岳噴火起源の火山灰(FA)の二次堆積明黄橙色土と降下層の白灰色 Ash 薄層で覆われ、水田耕土は浅間噴出の軽石(As-C軽石)を鋤き込んだ黒褐色土である。畦畔上にはFA層は残らず上面は削平されたものと考えられる。水田面は小さな凹が多数見られ、足跡・鋤痕・根株などの痕跡と考えられるが、形状は不明瞭である。

畦畔は調査区東縁からほぼ南北方向に延び、およそ12m南下した付近が弧を描くように曲がり、西へ方向を転じる。約17mほど延びたために西端は後世の削平により消失する。畦は上面幅90cm前後で、最終放棄の水田面との落差は5~6cmで、耕土最下面とは14~15cmである。構築土壌は、As-C軽石粒を含み暗褐色土で黒褐色土の斑点状混入が目立つ。

23号溝は畦畔の外縁を立ち上がりとして、同一の軌道を取り、水路と考えられる。検出全長22m、幅1.2m、深さ20cmを測る。断面形状は浅いU字形を呈す。埋土の比較的上位にFAの溝層が堆積する。

水田跡の外縁には、畦畔軌道とは若干異なって走向する24号・25号溝が検出されている。両者は部分的には重複と思わせる掘形個所を見せるが土層断面では切り合いを観察できない。同一溝の掘り直しと考えられる。水田跡との関連は不明であるが、時間的隔たりは小さいと思われる。埋土にはFAと思われる溝層が堆積する。検出全長26m、幅50cm、深さ20cmを測る。断面形状はU字形を呈す。

前述したように水田の全体範囲を示す根拠は見い出せないが、水田面断割土層断面からは畦畔より西へ約13mの地点の間で水田面を覆うFAの溝層が跡切れること、さらに水田耕土直下の粘性黒色土が同地点より僅かに高まることから、水田範囲はこの付近まで広がっていた可能性がある。

当該期の水田は多くの場合小区画を基本としている。後述する68区検出の水田は小区画の形態をもつ。県内における水田調査では、大区画水田でも、次の作業として小区画を予想させる事例が知られている。当遺跡でも、その可能性を否定できないが、同じ地点で、古墳時代前期の水田跡も、ほぼ同じ大区画をとっていることから、水田耕作の最終段階でもここでは大区画のままであったとしたい。

小区画水田 (第91・94図 17-3~8)

68区北側に検出された小区画水田である。遺存状態は北端部は比較的良好であったが、南側の畦畔はほとんど高まりをなさず痕跡程度であった。水田面は榛名山二ツ岳火山灰(FA)の溝層で覆われており、水田耕土の浅間山噴火のAs-C軽石層を混じえる黒褐色土である。水田区画は僅かながら南に向かい地形に沿い南北

第3章 遺跡の概要

軸を基本にする長方形が多く南北方向に長軸をもつ。およその基軸方向はN-37°-Wを示す。遺存良好な北端の区割では、畦畔底面幅35cm、水田面より5cm前後の高まりをなす。検出水田面数は推定も含め123面を数える。測定可能な1区画の面積は最小で1.7m²、最大で4.4m²である。

水田に伴う施設としては、前述した54号・55号溝による水路と大畦畔がある。なお、57区・67区にかけて検出された大区画水田との区割りの連続性は不明である。

(3) 古墳時代前期の溝 (第99図 PL20-1・3)

検出された溝跡のうち、人為的に開削されたものは57区・67区にかかる水田跡に伴う水路と考えられる32号・36号溝がある。周辺には不規則・不連続な小溝が多く見られるが、砂粒を主とした埋土と掘形の不統一性から、上位面でも観察された自然流路に類するものであろう。68区には北西から南東方向に走る56号溝がある。

56号溝

68区調査区域の東西中央部の北西から南東走る溝である。検出面は古墳時代後期の水田耕土であるAs-C軽石粒混じりの黒褐色土下である。走方向は南半部でN-44°-Wで、北半は僅かに西へ振れN-52°-Wを示す。北端は終結するようにまとまるが、南半は削平のため消失する。検出全長約48m、幅60~70cm、深さは4~5cmの痕跡程度である。溝の傾斜は地形に沿って北高南低であるが、比高差は僅かである。底面には溝開削底と思われる小さな窪みが多い。埋土は粘性黒褐色土に砂塊が斑点状に混じる。水田跡との新旧関係は明らかでないが、唯一ヶ所で畦畔を切った状態が認められ、水田跡より新しい可能性がある。



第91図 小区画水田面積表示図(単位m²)
古墳時代後期

(4) 古墳時代前期の水田

大区画水田（第96図 PL19-1～5）

57区・67区にかけて検出された。水田の南・東限については、新田である後期水田の畦畔・水路の設置によって該期の形態が損なわれていると考えられる。しかし後期水田畦畔の外周を巡る水路23号溝直下にこれより古い溝跡が土層断面で確認されている。溝上面は浅間As-C軽石が堆積し、掘込み面はAs-C軽石下の粘性黒褐色土である。この溝が水田に伴う水路の痕跡とすれば、ほぼ南・東限は一致することになる。なお後期水田に設けられた畦畔下にはAs-C軽石層は残されず、畦畔の有無は不明である。

水田に関わる水路としては、水田南東縁に直接する36号溝と、これと交わる32号溝がある。

32号溝

水田跡の南東部にあり、緩い弧を描くがほぼ南北走する溝である。36号溝と交差するが、新旧については同時存在と考える。北・南端とも調査区域外に延びる。両端を結ぶ直線走向はN-18°-Eを示す。検出全長は約35m、幅60cm、深さ10～14cmで、断面形状は緩いU字形を呈す。埋土は底面まで浅間As-C軽石層で埋まる。36号溝と連動する給排水路と考えられる。

36号溝

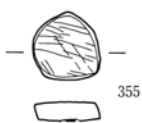
水田で南東縁に直結し、直線的に南東走する溝である。南東端は調査区域外に延びる。走方向はN-46°-Wを示す。検出全長は27m、幅は最大で1.3m、深さ18cmで、断面形状は緩いU字形を呈す。水田南東縁より約8m南下した地点で、前記32号溝と重複するが、土層観察では切り合い関係は無く同時存在であろう。32号溝と比べ若干深い。水田跡との結合部分は著しく溝幅を減じて約30cmである。水田面より高い面にあり、水田間との落差は約30cmである。この落差から本溝は水田跡への給水路と考えられるが、水田の南東限を示すと考えられる23号溝下に検出された溝跡に注ぐ可能性が高い。なお、32号溝との同時存在から、交差部分での水流調整施設の検出に努めたが、その痕跡は認められなかった。埋土は32号溝と同じくAs-C軽石層で埋もれている。

小区画水田（第95図 PL20-4～6）

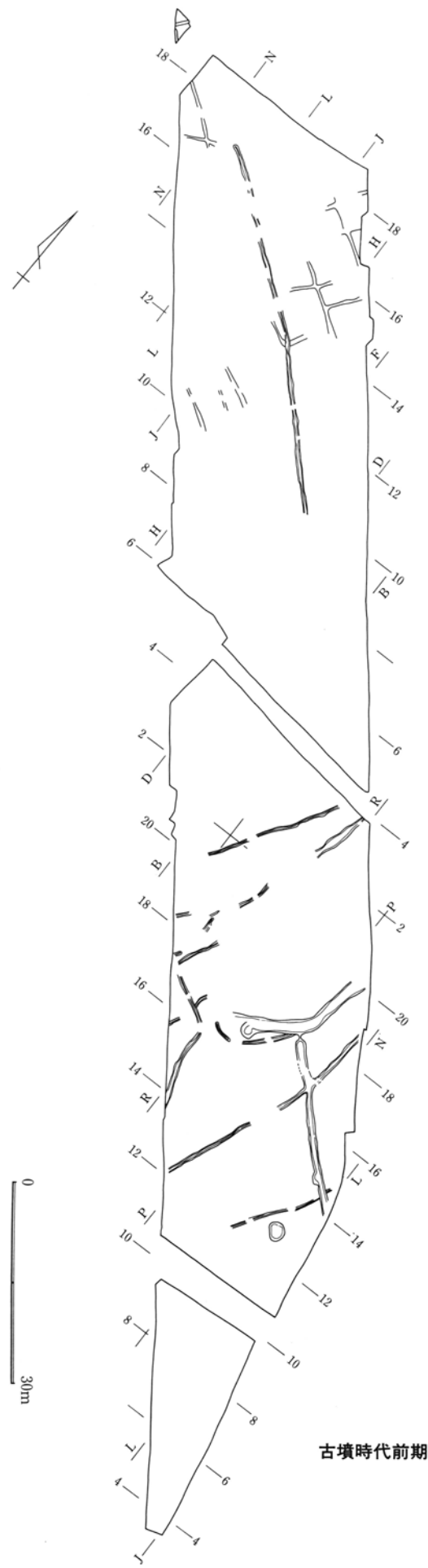
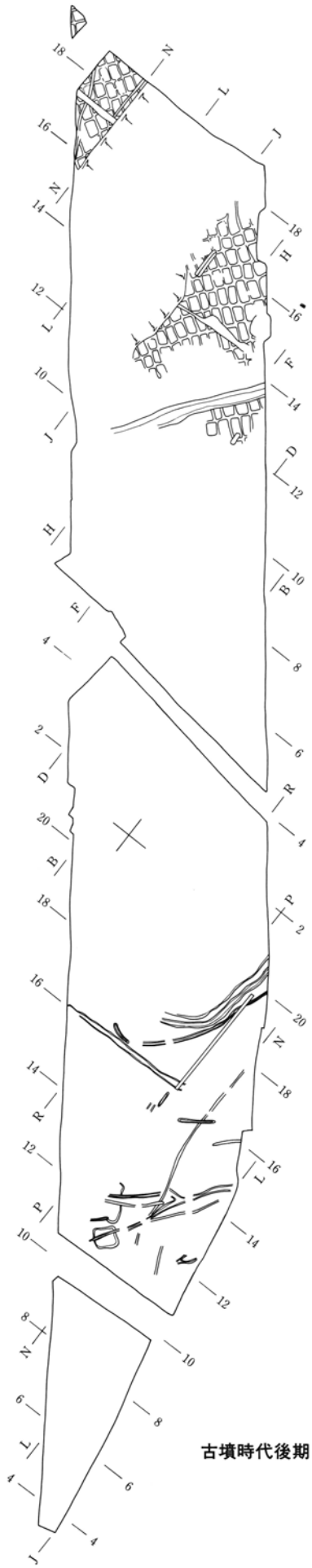
68区北側に検出されている。いわゆるFA下水田と同質な小区画ではなく、57区・67区にかけて検出された大区画の水田と比較しての水田形状をいうものである。浅間山As-C軽石粒を混じえる黒褐色土層（古墳時代後期水田耕土）下で遺存状態は再北端の2条の畦畔を除き極めて不良であり、畦畔の痕跡をかりうじて認める程度である。水田区画は推定も含め約17面の確認にとどまり、完結区画がほとんどなく、面積推定はできない。北端部での畦畔の広面幅は約40cm、水田面より4～5cmの高まりとなる。

2. 出土遺物

68J-11区より滑石製白玉が出土している。出土層位はAs-C軽石下の粘性黒色土上面である。形状は側稜部面取状の成形痕が残り、多面であるが円形を意識したものであろう。表裏面には面調整の細かな擦痕がある。径1.8cm、厚0.5cm、重3.1gである。

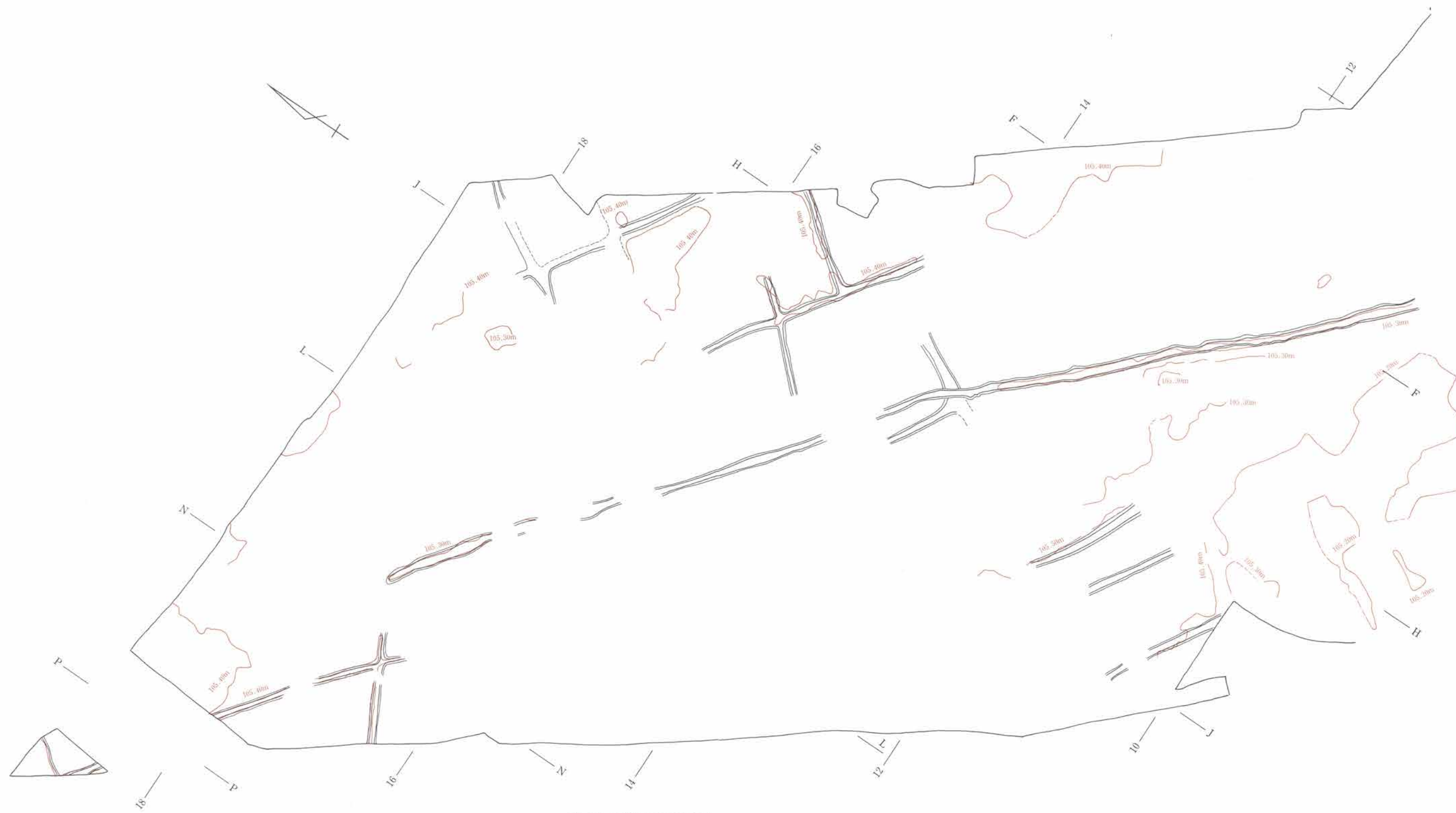


第92図 古墳時代前期面出土遺物





第94図 古墳時代後期小区画水田



第95図 古墳時代前期水田

明黄褐色土 FAか?FA二次堆積より細粒子

明黄褐色土 FA二次堆積

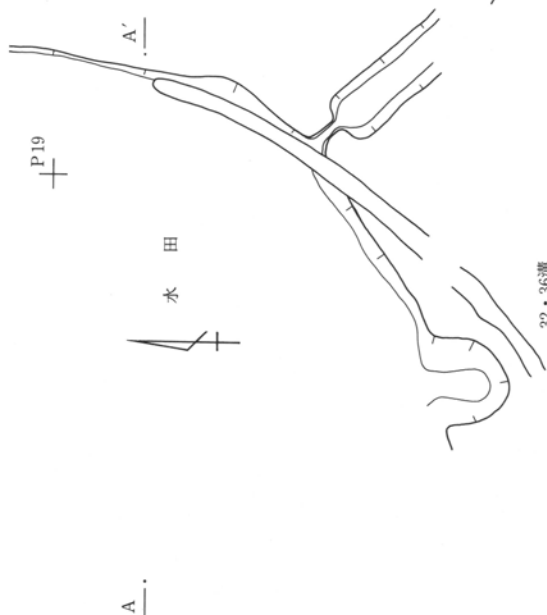
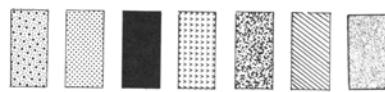
白灰色Ash FA純堆積

As-C軽石純堆積

灰褐色土 FA塊含み粘性有

明褐色土 FA二次堆積

黒褐色土 As-C軽石含む



L = 105.30m

L = 105.30m

L = 105.30m

古墳時代後期水田・水路

- 1 暗灰褐色土
- 1' 暗褐色土
- 2 砂質灰褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色砂層
- 5 黒色土
- 6 黒褐色砂層
- 7 黒灰褐色土
- 7' 暗褐色土
- 8 明黄褐色砂層
- 9 暗褐色土
- 10 黒褐色土
- 11 砂質明黄褐色土
- 12 黒褐色土
- 13 黒灰色土
- 14 明黄褐色砂層
- 15 暗褐色土
- 16 黒褐色土 砂塊含む
- 17 黒灰色粘質土

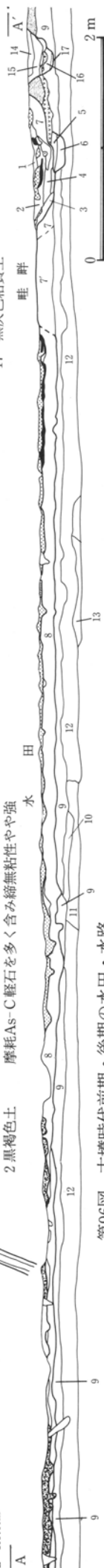


古墳時代前期水田・水路

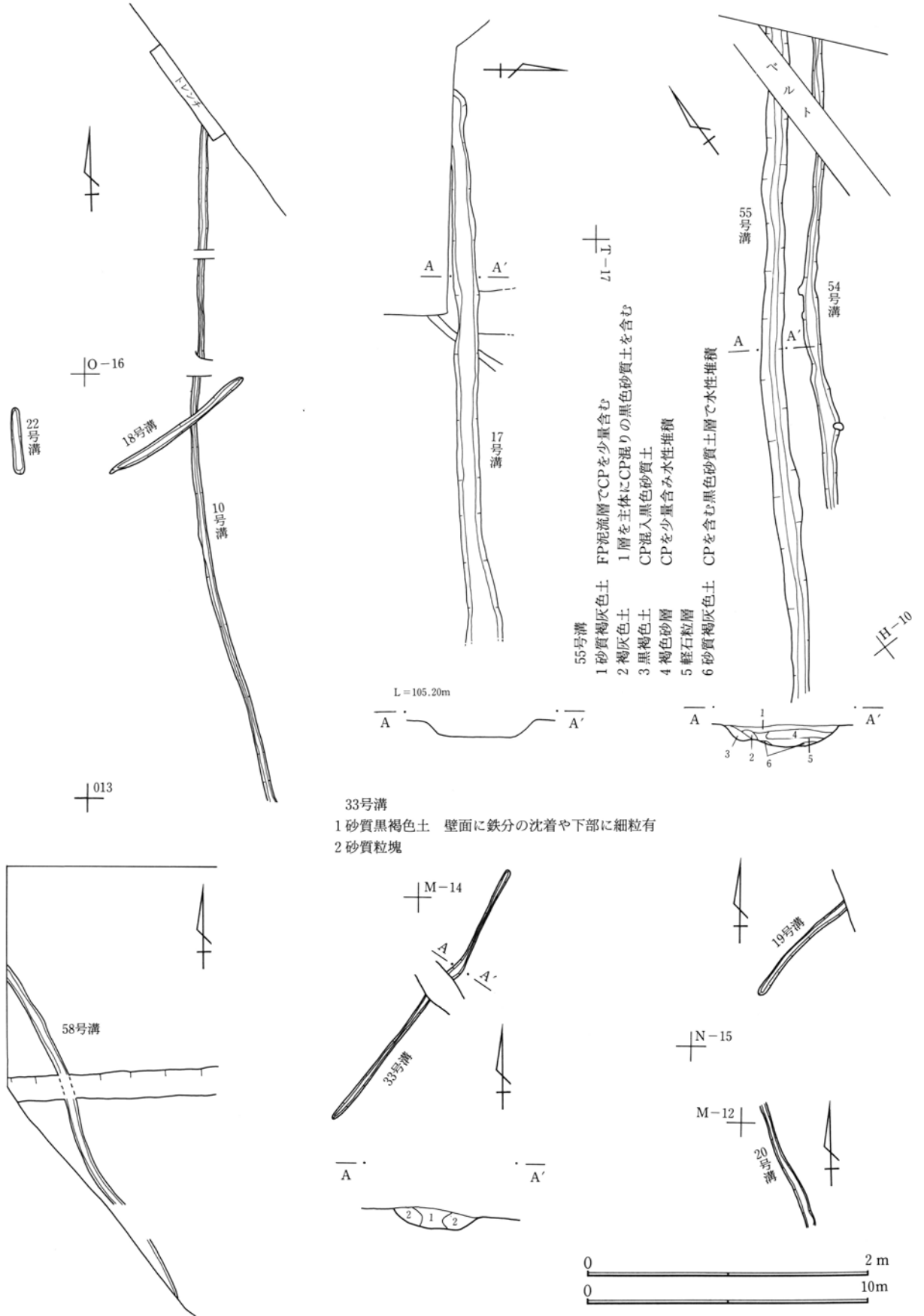
- 36号溝 C-C'
- 1 黒褐色土 摩耗As-C軽石を多く含み縮・粘性強
- 2 C軽石層 角有り
- 3 黒褐色土 As-C軽石を少量含み縮やや強

- 32~36号溝 B-B'
- 1 As-C軽石層 細粒角有
- 2 As-C軽石層 細粒角有多く摩滅粒子少量有
- 3 暗黒褐色土 As-C軽石多量に含み縮・粘性無
- 4 暗黒褐色土 C軽石多く縮有
- 5 黒褐色土 φ1mmのAs-C軽石多く含み粘性やや有
- 6 黒褐色土 As-C軽石を多く含み粘性・縮有
- 7 黒褐色土 地山 縮・粘性強
- 7' 黒褐色土 縮強粘性有

L = 105.50m



第96図 古墳時代前期・後期の水田・水路



第97図 古墳時代後期溝跡

第3節 古墳時代の遺構と遺物

11・12・31号溝

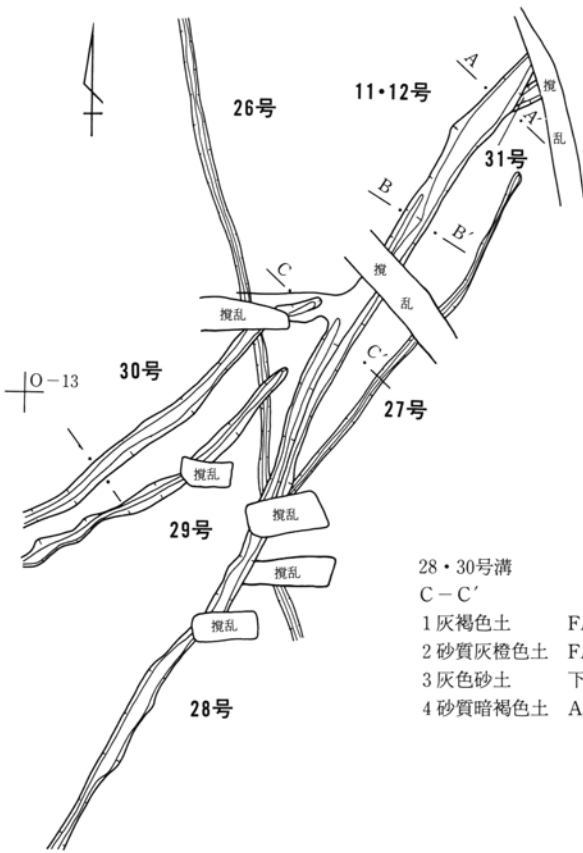
A-A'

- 1 灰褐色土 FP・FA泥流層
- 2 明灰黄色砂 FA二次
- 2' 灰褐色土 明灰黄色砂を多く含む
- 3 暗褐色砂 As-C軽石粒を多く含み底面は硬く酸化
- 3' 酸化層
- 4 暗褐色砂 As-C軽石粒を多く含む
- 5 暗褐色砂 As-C軽石粒を含む
- 6 黄橙色砂
- 7 白灰砂
- 8 砂質暗褐色土 酸化進み硬い

11・12号溝

B-B'

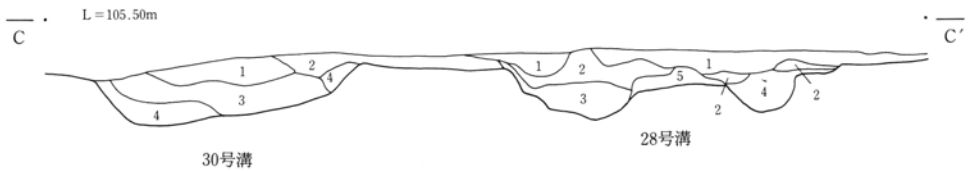
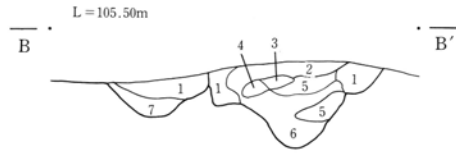
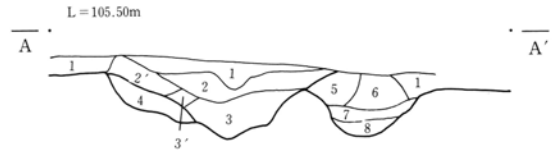
- 1 灰褐色土 FA・FP泥流層 粘性有
- 2 暗褐色土 やや粘性有
- 3 黒褐色土 CP・As-C軽石含む
- 4 FA二次土
- 5 砂質鈍灰橙色土
- 6 砂質暗褐色土 酸化進み堅い
- 7 暗褐色土 $\phi 0.2 \sim 0.3\text{cm}$ のCP含む



28・30号溝

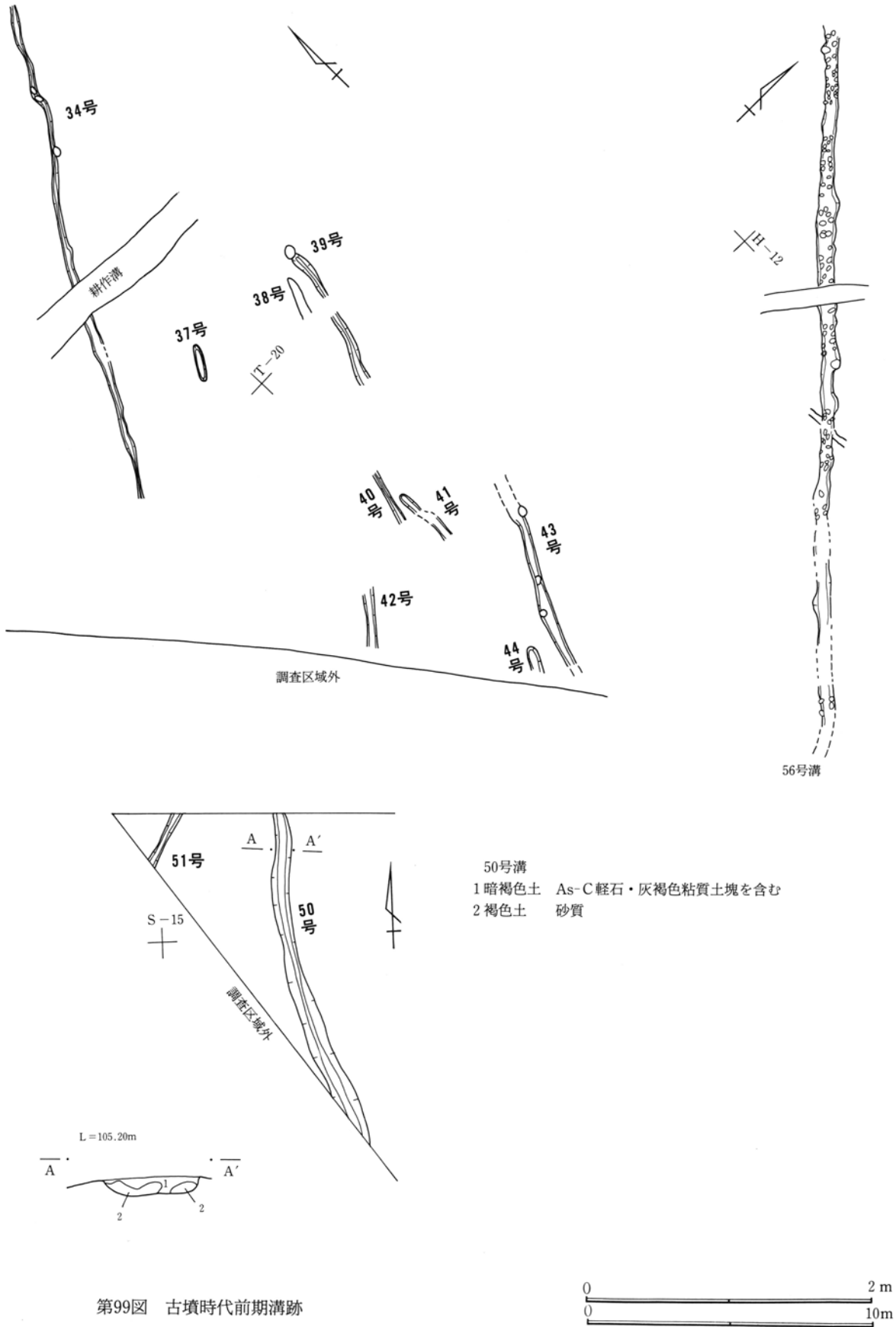
C-C'

- 1 灰褐色土 FA・FP泥流層
- 2 砂質灰橙色土 FA二次堆積
- 3 灰色砂土 下面に酸化層形成
- 4 砂質暗褐色土 As-C軽石多く含み酸化進み軽い



第98図 古墳時代後期溝跡

第3章 遺跡の概要



第4節 その他の遺構と遺物

当遺跡では、古墳時代を遡る時代の遺構は検出されていない。古墳時代水田跡の基層となっている層厚40cm前後の粘性黒色土と黒褐色土下は礫混じり浅黄橙色土に至る。いわゆる井野川泥流層で、この面には多数の倒木痕が検出されている（第101図）。84個所を数える立木ないしは倒木の時期は不明であり、古墳時代前期に水田化する以前、井野川泥流堆積後の環境である。井野川泥流の堆積年代は明示されていないが、浅間—総社軽石(As-Sj)約1.1万年前と浅間—板鼻黄色軽石(As-Yp)約1.3~1.4万年前の間に位置付けられている。

出土遺物

遺構と直接伴わない時代の遺物には弥生時代の土器と縄文時代の土器・石器がある。出土層位は両者とも浅間As-C軽石混じり黒褐色土中である。

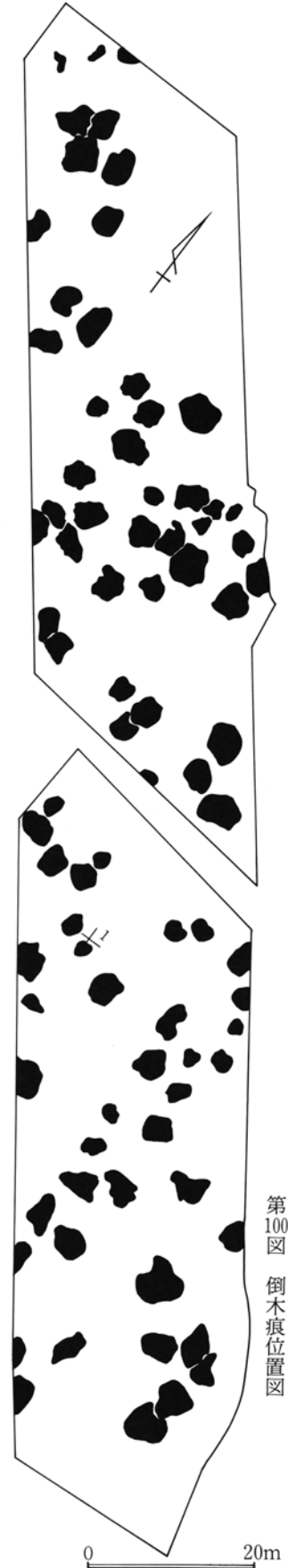
(1) 弥生時代土器(第102図 PL45-356~362)

甕・鉢・台付甕の器種で、いずれも小片である。(356)・(357)は甕口縁部である。接合しないが同一個体であろう。折り返し口縁で外面口縁から頸部は波状文、肩部に3連止め簾状文。内面は口縁横撫で、頸部は横位篋磨き。胎土は砂粒含み、橙色を呈す。口径18cm。(358)は鉢になろう。折り返し口縁。口縁部は波状文、口縁直下横撫で、体部斜位篋磨き、内面横位篋磨き。胎土砂粒含み焼成は堅緻、赤褐色を呈す。(359)・(361)は台付甕肩部であろう。波状文を施す。内面篋撫で。胎土砂粒含み焼成堅緻、鈍赤褐色を呈す。(360)は甕胴下半である。外面は斜・縦方位の篋磨き、内面横位の粗い篋磨き。底径7cm。胎土砂粒少なく焼成堅緻、浅黄灰色を呈す。(362)は甕胴部である。上半に波状文、下半は横位篋磨き、内面撫で。(360)と同一個体になろうか。

縄文土器と石器(第102図 PL45-363~372・46)

土器片と石鏃・打製石斧・すり石である。(363)は半竹管沈線を施し、中に篋刻文を刻む中期縄文式に属しよう。

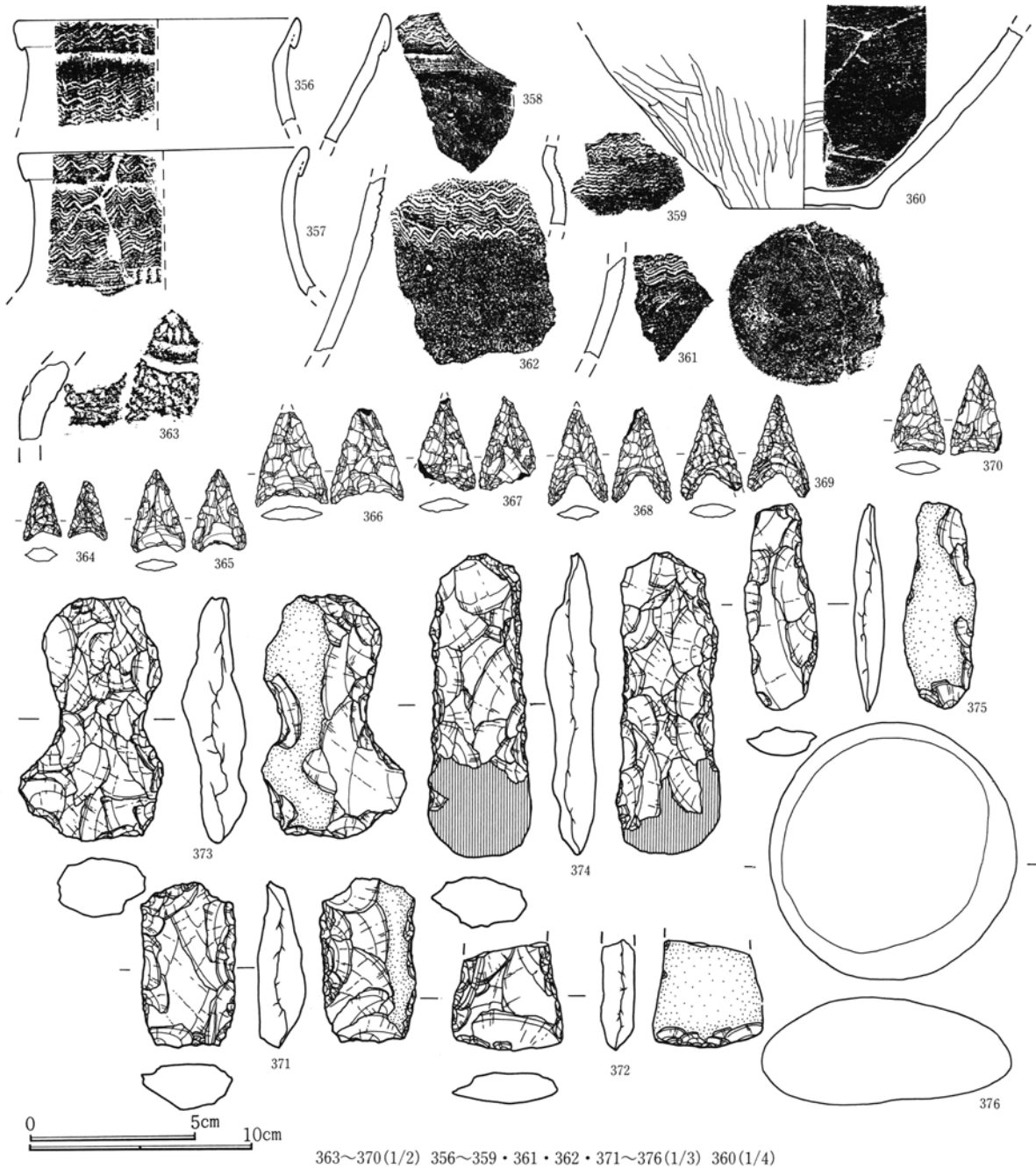
(364)~(370)は無茎鏃で基部の扶入の度合が異なるが、すべて凹基無茎鏃である。(364)はチャート、長1.7cm、幅1.2cm、厚0.35cm、重0.45g。(以下単位同じ)(365)はチャート、長2.5、幅1.6、厚0.35、重1.1。(366)4は珪質頁岩、長2.8+ α 、幅2.2、厚0.45、重2.1、頂部欠く。(367)は黒色安山岩、長2.8+ α 、幅1.7+ α 、厚0.4、重1.5、頂部片基部欠く。(368)はチャート、長2.9+ α 、幅1.8、厚0.4、重1.2、頂部欠く。(369)は黒色安山岩、長3.0、幅2.0+ α 、厚0.35、重1.4、片基部欠く。(370)は黒曜石、長2.7、幅1.5+ α 、厚0.4、重1.3、片基部欠く。



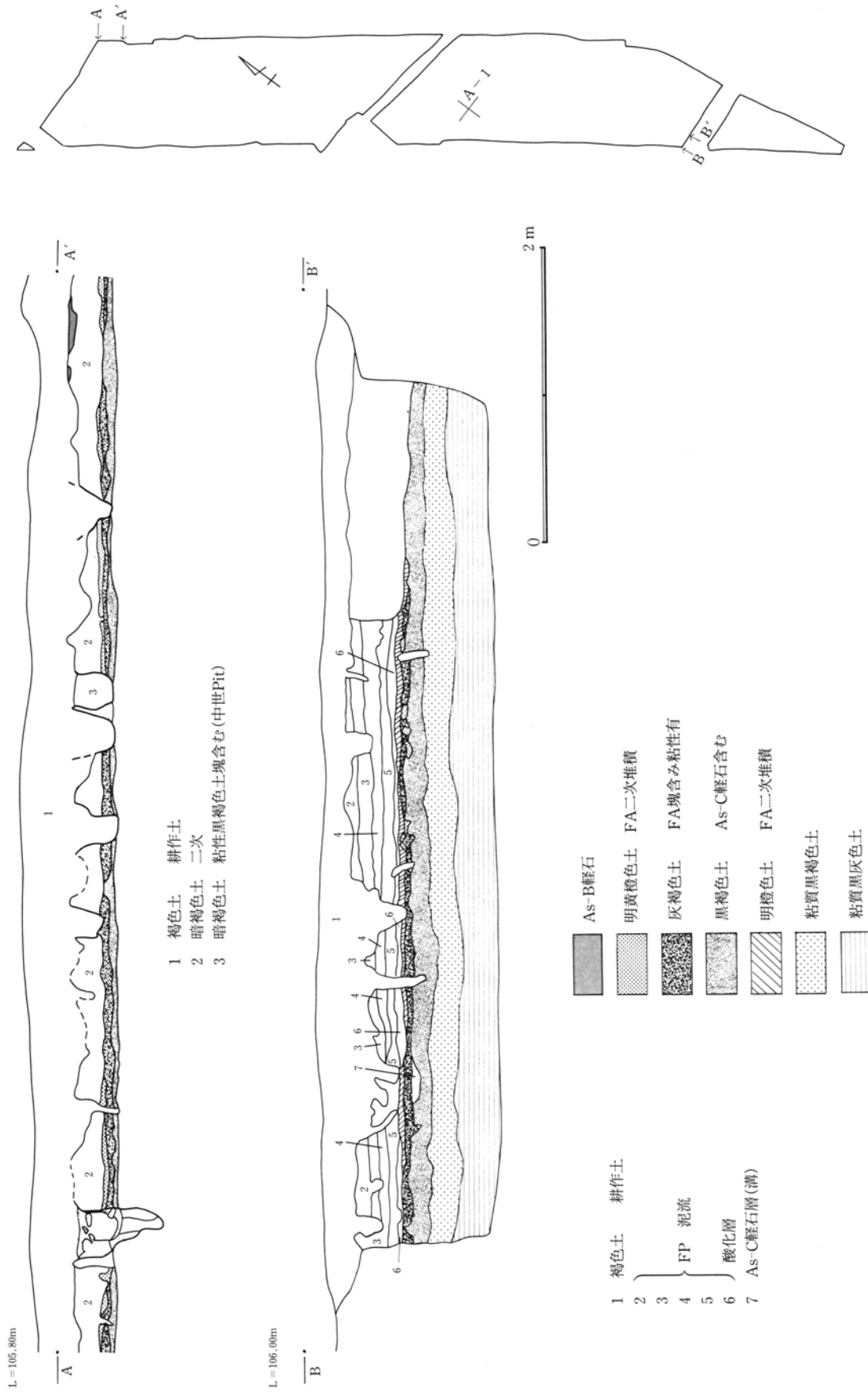
第100図 倒木痕位置図

第3章 遺跡の概要

(371)～(375)は打製石斧である。(373)が分銅型、他は短冊型石斧である。(373)は片面に自然面を残す。長10.3cm、幅6.3cm、厚2.6cm、重170g。(以下単位同じ)砂岩製。(374)は刃部表裏に使用摩滅痕を残す。長13.5、幅4.5、厚2.1、重160。細粒輝石安山岩製。(375)は片面に多く自然面を残す。長9.3、幅3.2、厚1.2、重40、黒色頁岩製。(371)は両端欠損、片面に自然面残す。長7.3+ α 、幅4.2、厚2.0、重80+ α 、黒色頁岩製。(372)は刃部である。片面は自然面多く刃縁のみ小さく打撃。長4.7+ α 、幅5.0、厚1.3、重50、安山岩製。(376)はすり石である。扁平な円礫で両面摩滅する。縁辺は細かな敲打痕がある。径11cm、厚48cm、重820g、粗粒輝石安山岩製。



第101図 弥生・縄文時代遺物



第102図 土層堆積状況

第4章 まとめ

下小鳥神戸遺跡の中世遺構は40棟あまりの掘立柱建物跡を中心に、井戸・竪穴状遺構・土坑群等からなっている。これらの遺構は、南面を区切る1号溝と北には早瀬川ないしは、井野川の旧河道による谷地地形が形成され北限を示している。また東限については上越新幹線建設に伴って調査された融通寺遺跡検出の2区18号溝が当遺跡1号溝と一連のものと考えられ、これに該当する可能性がある。景観的には中世館跡または屋敷的色彩が強い。南限の1号溝及び北限の谷地地形を外郭とする範囲内には内郭の区画機能を有すると思われる6号溝・7号溝・8号溝・57号溝がある。特に前3者による区画には遺構のほとんどが集中し、著しい重複を見せて中心郭となろう。この中心郭をとりまくように北郭・西郭ともいえる区画が想定されるが、遺構の数・種とも極めて少なく休閒地的な様相が窺われる空間となっている。あるいは、耕作地としての痕跡は認められないものの、館址（屋敷）内農地的な利用も考えられる。また外郭南面を画する1号溝の南域にも数棟の掘立柱建物跡が存在する。この地域での建物構造は、調査範囲内に限定すれば全て梁行柱間が一間の建物である。現状では付属施設建物群とすることができよう。

館址（屋敷）内での主要施設となる掘立柱建物跡は、前述したように重複が顕著である。柱穴による新旧については、柱穴の掘形規模が弱小なため切り合い関係を明確な形では認識できなかった。このため、調査時においては、建物間の前後関係を摘出するに至っておらず、建物群の変遷を確定することはできなかった。ここでは、各々の建物の柱間寸法に差がある点に注目して、柱間に用いた寸法によって分類を試みることにする。寸法を用いる理由は報文に記した計測値では、微細ではあるが数値の違いが災いして分類を困難にすると考えたからである。

分類にあたって使用した寸法は7.5尺・7尺・6尺の三種類である。大雑把に過ぎるきらいはあるが、各々の寸法を1/100縮尺でシート方眼を作成して、建物跡の柱間に当てる方法である。使用寸法による柱間寸法は建物の建築年代を推定する重要な指標とされる。（『中宿在家遺跡』「第3節 VI区調査区から検出された建物遺構の検討」石井栄一（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997） また柱間寸法の変遷については、14世紀から16世紀初頭までの建物柱間は8～6.5尺の数値が見られ、時代が下がるとともに柱間が狭まる傾向があるとされる。（『日本住宅史の研究』「間中の出現」太田日博太郎 岩波書店 1984） これらのことから、本稿では7.5尺・7尺・6尺使用という三段階の寸法変遷を想定した。また、各寸法の認定には個々の柱間が該当する例と総体として該当する例、そして桁行・梁行いずれかが該当する例も含めてある。なお、これによる建物の変遷を探る基本的な方法や考え方は全て、東京都世田谷区教育委員会 石井栄一氏の御助言によるものである。しかし、建物の柱間寸法を分類したのは編集者綿貫であり、これによる責任の全ては綿貫に帰するものである。

建物跡の変遷

ここでの建物跡の変遷は、7.5尺使用をI期・7尺をII期・6尺をIII期とする。

I期 相当する建物跡は、1号・5号・8号・16号・20号・24号・33号掘立柱建物跡である。

II期 相当する建物跡は、2号・12号・19号・21号・22号・25A・B・C号・26号・27A・B号・37号掘立柱建物跡である。

Ⅲ期 相当する建物跡は、3号・6号・7号・9号・14号・4号・10号・11号・17号・18号・30号・31号・32号・36号・40号掘立柱建物跡である。

I期の建物構成は、中心郭の4棟、南域の3棟からなる。当期の建物跡には重複関係が見られず、やや閑散とした感がある。20号掘立柱建物跡は建物構造・規模・柱穴掘形などいずれをとっても当館跡（屋敷）での主殿として位置付けられる建物である。構造的には、身舎を中心に南側には広縁を、また北側には玄関のと考えてもよい柱穴が検出されている。広縁・玄関とも、7.5尺には合致しないが、身舎部分については符合する。20号掘立柱建物跡の南側、1号溝との間には広い空間が開け、建物の南部分が広縁とすれば“ハレの場”としての庭が想定できる。広縁・庭の組み合わせに妥当性が見いだせるならば、20号掘立柱建物跡は寢殿造とすることができよう。

南東部に近接する16号掘立柱建物跡は主殿に対して、副屋的存在となろうが、その規模・構造に脆弱さは否めない。また中心的建物跡である20号掘立柱建物跡の構造・規模から見て、当該期の付随施設の少なさが問題となろう。



第103 図 下小鳥神戸遺跡中世建物の変遷

第4章 まとめ

II期の建物配置構成は、中心郭のやや西側に集中し、著しい重複が見られる。単純な重複関係をたどるならば、当該期は4ないしは5の小期に分類される可能性があるが、柱間寸法の認定に再考する余地があろう。主殿としての突出した構造をもつ建物は見いだせず、規模的には27A号や12号掘立柱建物跡が当該期の中心的な家屋と考えられる。また、構造的には25B掘立柱建物跡が特異な存在であるが、梁行の狭小さに日常的な起居生活施設としては、積極的な位置付けをためらわせる。

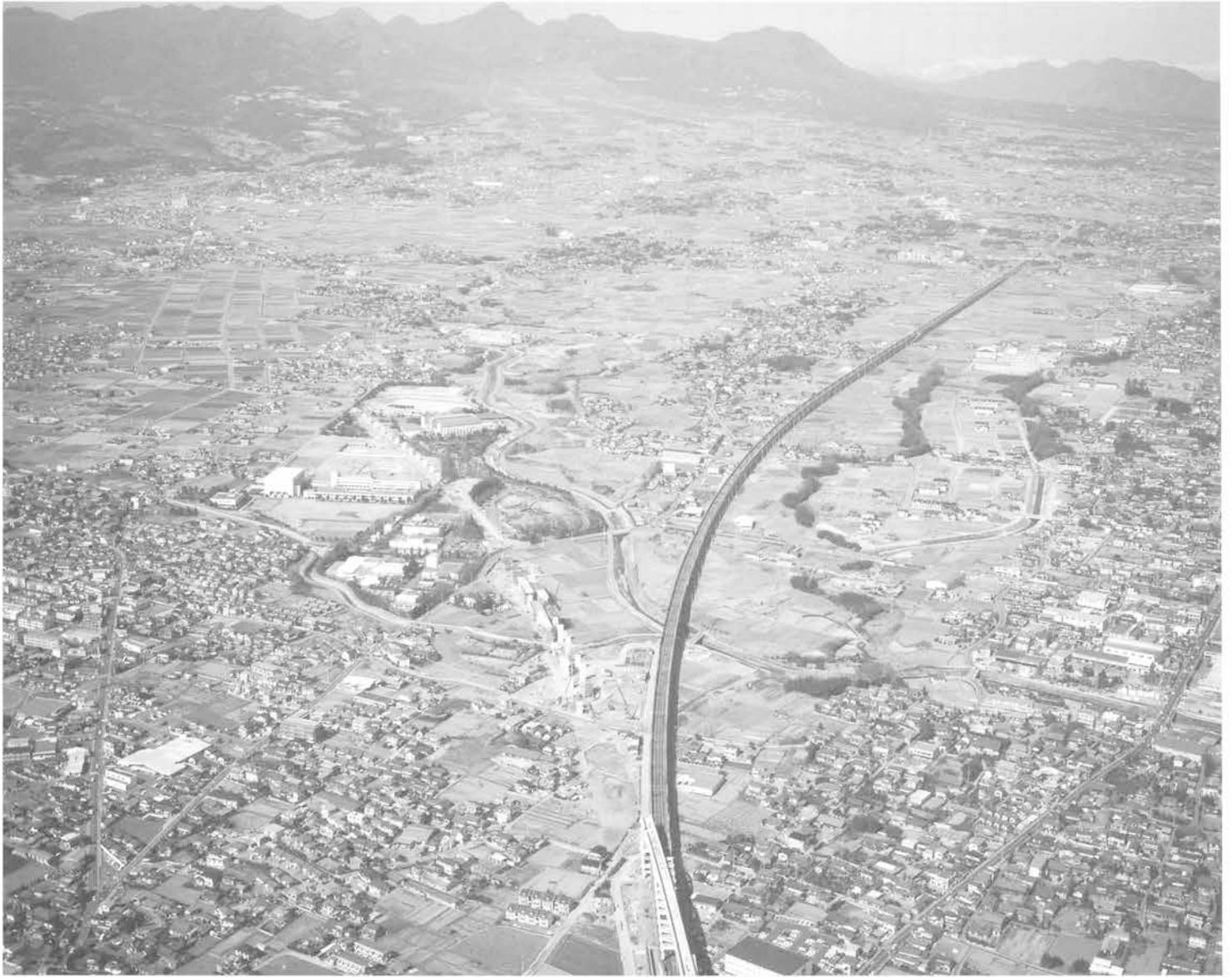
III期に至り、建物の配置はII期に対し拡散傾向が見られる。中心郭北側に重複が著しいが、当期はおよそ3つの小期に分類されよう。II期と同様に主殿的建物の存在は影が薄い。なお、4号掘立柱建物跡はII期の25B号掘立柱建物跡と規模は異なるが、構造的には類似する。

以上各期について概略を述べたが、柱間寸法による期の決定にはある程度の妥当性を認めるものであるが、より精緻な決定作業の必要性を痛感した。また使用した7.5尺・7尺・6尺の柱間寸法のいずれにも該当しない建物も存在する。これらの建物は各柱間寸法へ移行する過渡的なものとして考えられようか。

当遺跡で検出された中世館跡（屋敷）内の建物群変遷過程に対し、歴史的に位置付ける能力は持ち合わせないが、北に接する大八木屋敷遺跡は大きな存在である。大八木屋敷遺跡は「茂木屋敷」と呼ばれ、中世居館跡とされている遺跡である。（『大八木屋敷遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995）によれば、中世関連の遺構検出や年代を示す遺物の希薄さから明確な居館造営・存続年代等の言及を不可能にしている。上越新幹線建設時の調査による板碑の存在から現時点では居館の年代を14～15世紀ぐらいとする。

あえてこの年代を手掛かりに、当遺跡における変遷の歴史的背景を大八木屋敷遺跡との関連で考えてみたい。当遺跡においても年代の根拠を明確に示す遺構・遺物は検出されていない。微量な舶載青磁器から推定すれば、13～15世紀の年代が考えられる。遺跡の存続をそのままこの年代に当てることはできないが、寝殿造空間を形成するI期は、大八木屋敷遺跡造営前と位置付け、防備的な施設の薄い屋敷的居館跡のより居住施設としての性格を想定したい。その後、防備的色彩の強い大八木屋敷遺跡の造営に伴い、II期・III期は付属施設的な機能を持ち、大八木屋敷遺跡を本郭とする南郭的な空間配置へと変化したと考えたい。

写 真 图 版



遺跡周辺航空写真



調査区全景(写真上方倒木痕・下方中世面)



調査区南半(北より)



調査区北半(南より)



調査区南半中世面(北より)



調査区南半中世遺構



1号溝(西より)



7号溝(東より)



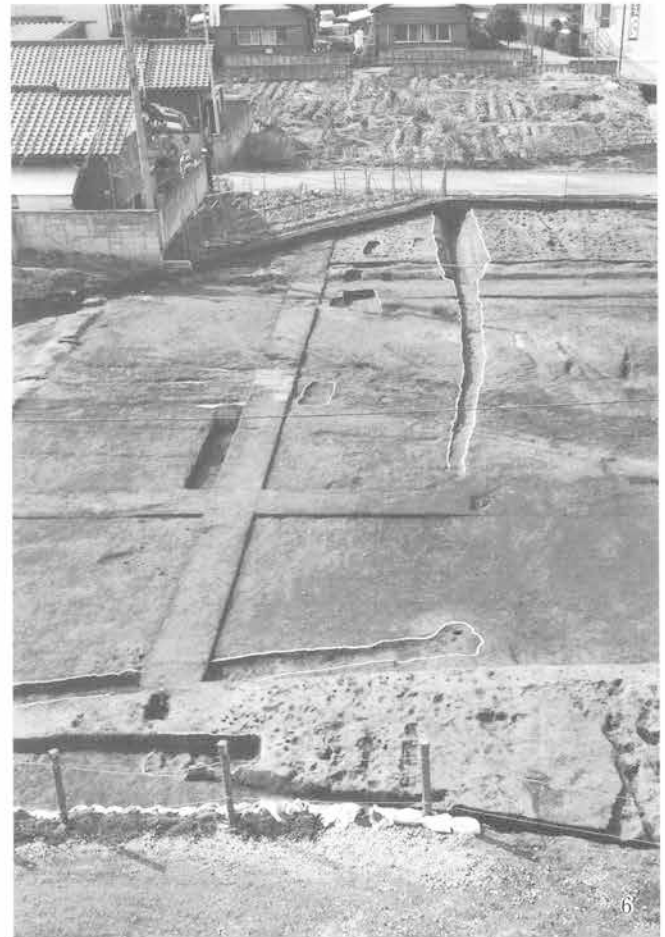
53号溝遺物出土状況(西より)



8号溝・53号溝(南より)



6号溝(南より)



6号溝・57号溝(東より)



2号・3号掘立柱建物跡



5号・6号・7号掘立柱建物跡



8号掘立柱建物跡



9号掘立柱建物跡



4号掘立柱建物跡



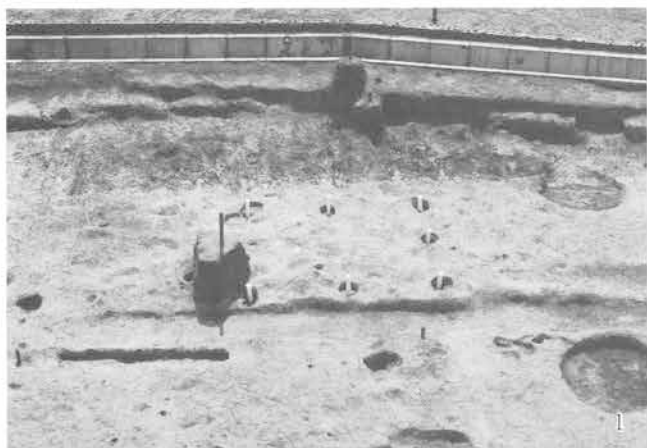
10号掘立柱建物跡



11号掘立柱建物跡



12号掘立柱建物跡



14号掘立柱建物跡



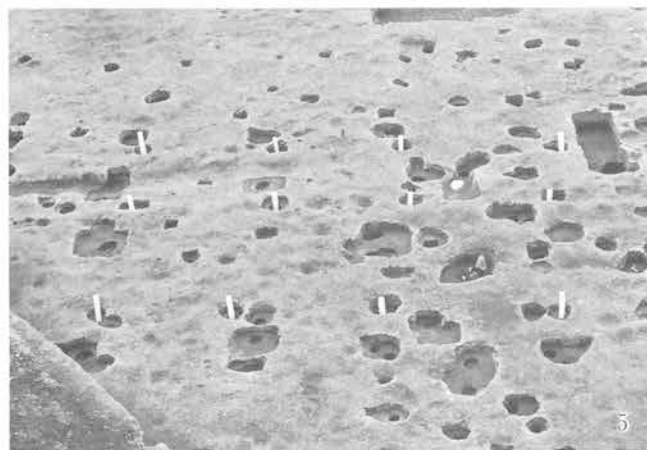
16号掘立柱建物跡



17号掘立柱建物跡



18号掘立柱建物跡



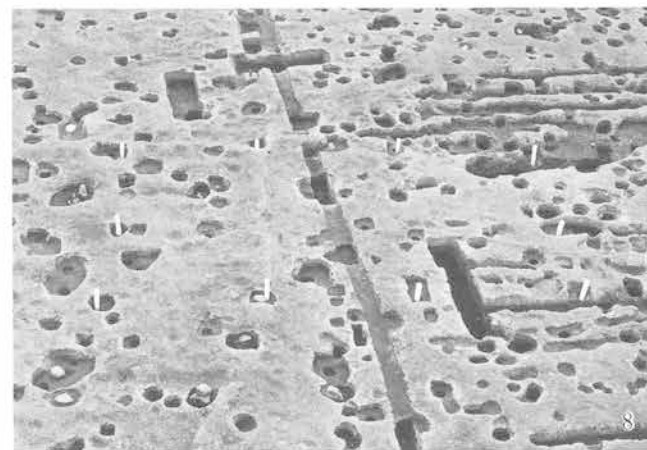
19号掘立柱建物跡



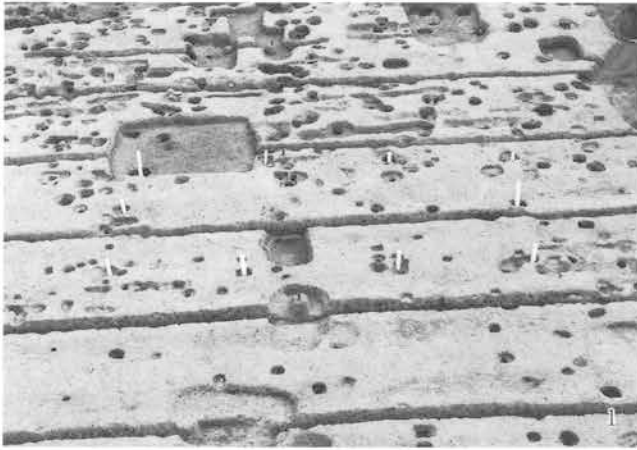
20号掘立柱建物跡



21号掘立柱建物跡



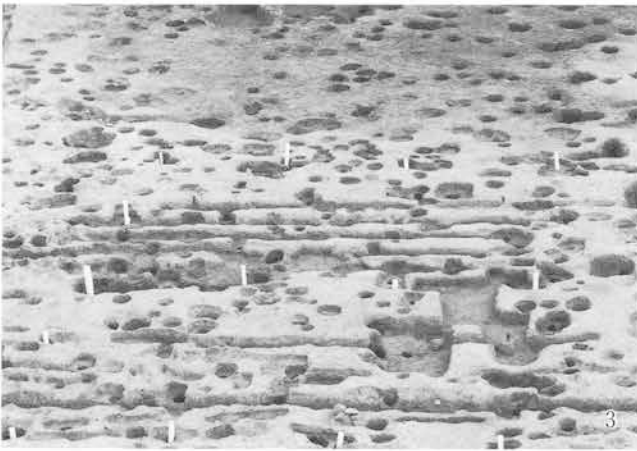
22号掘立柱建物跡



24号掘立柱建物跡



25A・B・C号掘立柱建物跡



26号掘立柱建物跡



27A・B号掘立柱建物跡



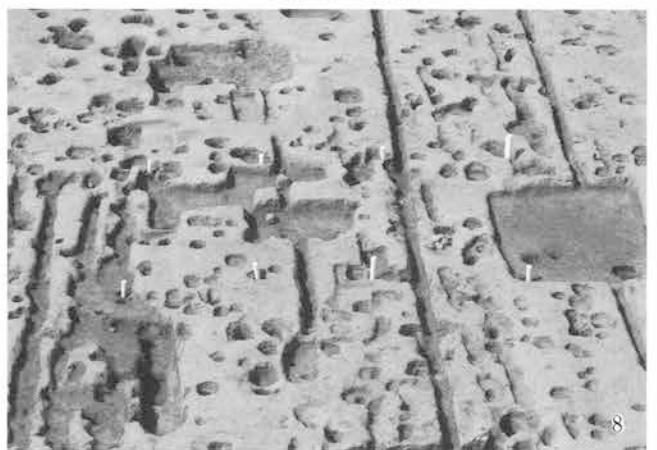
28号掘立柱建物跡



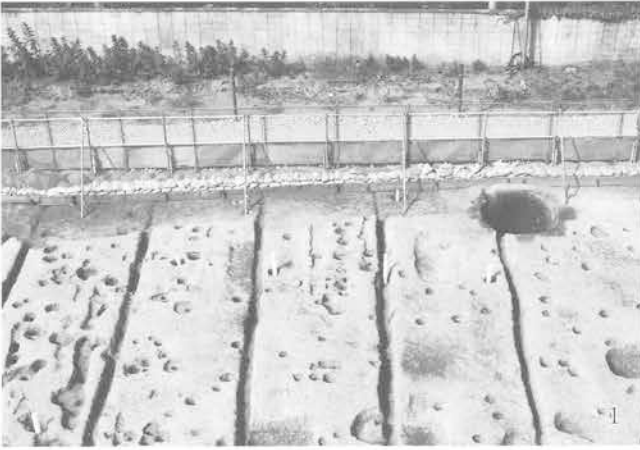
30号掘立柱建物跡



31号掘立柱建物跡



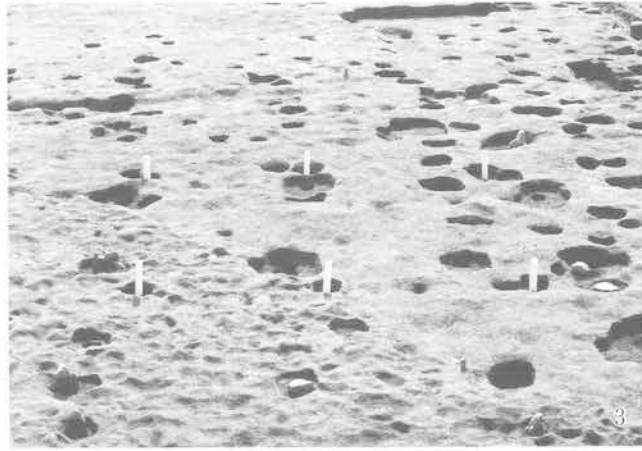
32号掘立柱建物跡



33号掘立柱建物跡



34号掘立柱建物跡



36号掘立柱建物跡



1号竖穴状遺構



4号竖穴状遺構



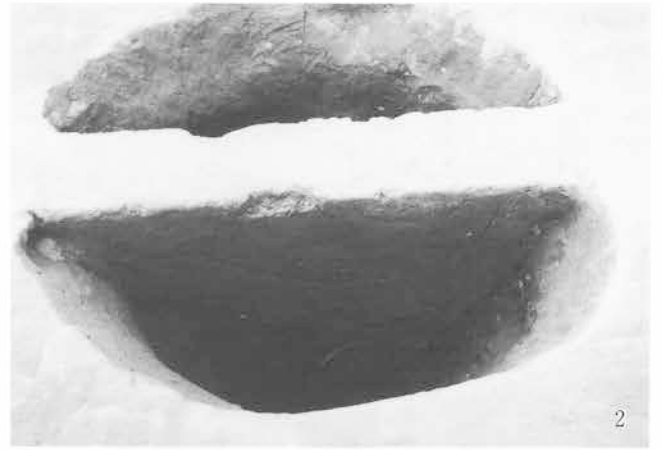
5号竖穴状遺構



7号竖穴状遺構



1号井戸



2号井戸



5号井戸



6号井戸



7号井戸



8号井戸



6号土坑



10号土坑



21号土坑



24号土坑



6号竖穴状遺構



29号土坑



30号土坑



30号土坑遺物出土狀況



31号土坑



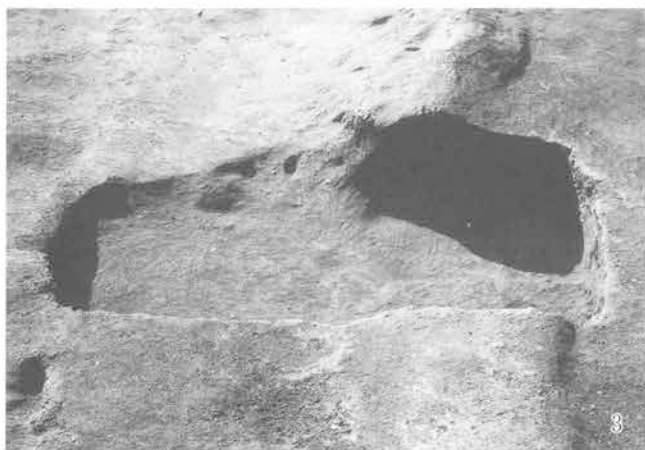
61号土坑



62号土坑



63号土坑



65号土坑



66号土坑



67号土坑



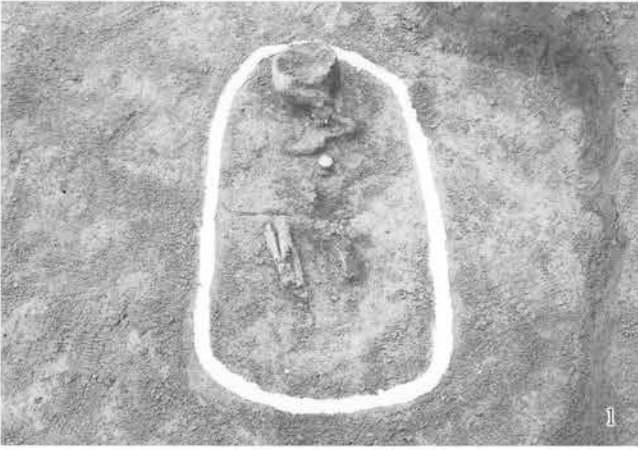
68号土坑



69号土坑



74号土坑



1号土壙墓



2号土壙墓



4号土壙墓



5号土壙墓



6号土壙墓



9号土壙墓



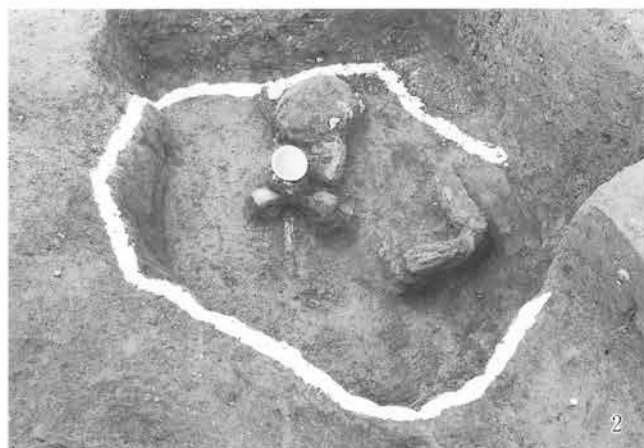
10号土壙墓



11号土壙墓



12号土墳墓



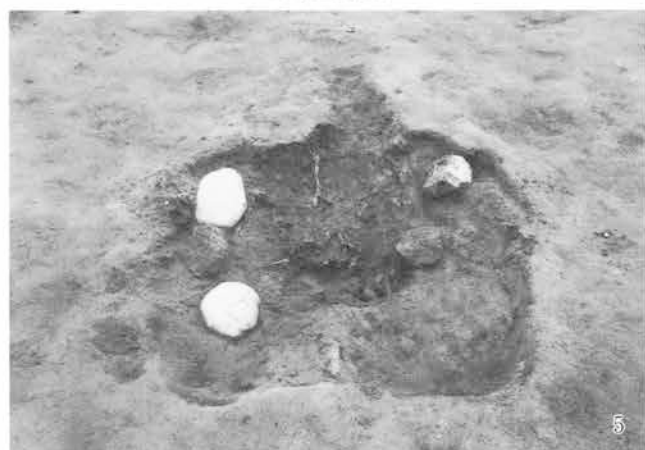
14号土墳墓



15号土墳墓



16号土墳墓



1号火葬跡



1号火葬跡検出状況



1号火葬跡石組状況



2号火葬跡



2号火葬跡石組状況



3号火葬跡



3号火葬跡掘形



中世柱穴群及び歴史時代水田畦畔(68区)



歴史時代水田及び溝群(57区)



3号溝



3号溝埋土堆積状況



歴史時代水田(68区)



歴史時代水田畦畔(68区)



26号溝(北より)



26号溝(南より)



68区古墳時代後期水田・54号・55号溝(北より)



68区古墳時代後期水田



68区古墳時代後期水田(東より)



68区古墳時代後期水田



68区古墳時代後期水田



68区古墳時代後期水田



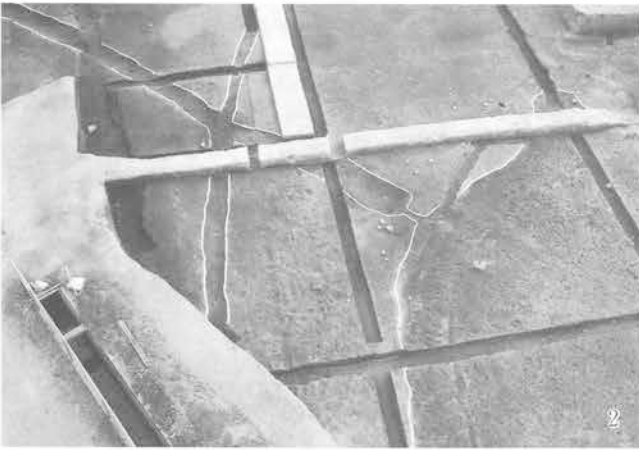
57・67区古墳時代後期水田・水路・畦畔



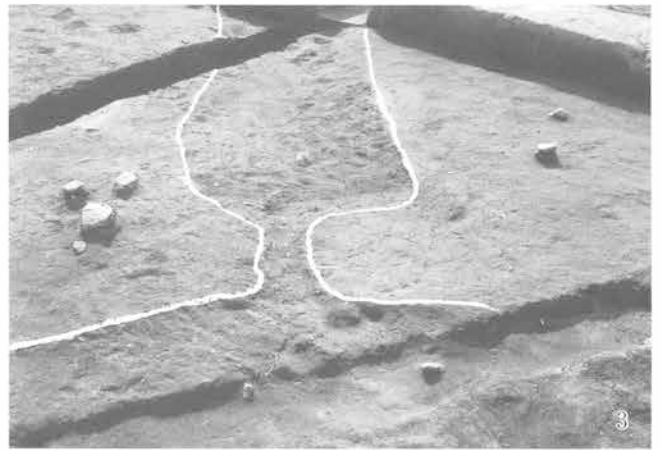
57・67区古墳時代後期水田・水路・畦畔



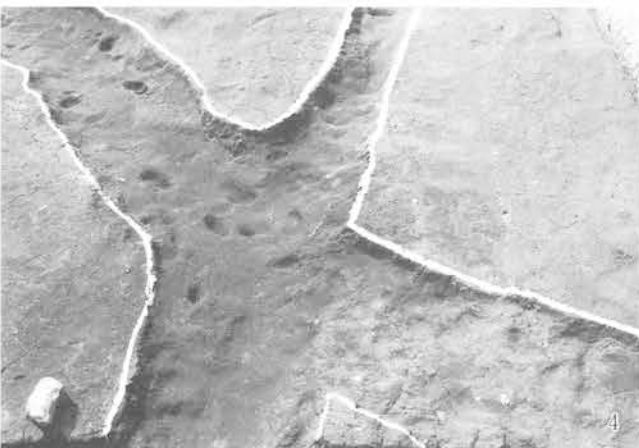
57・67区古墳時代前期水田・水路



57・67区古墳時代前期水田・水路



57・67区古墳時代前期水田・水路(36号溝)



古墳時代前期水路(32・36号溝交差部)



34号溝



56号溝



68区古墳時代前期水田



34号溝



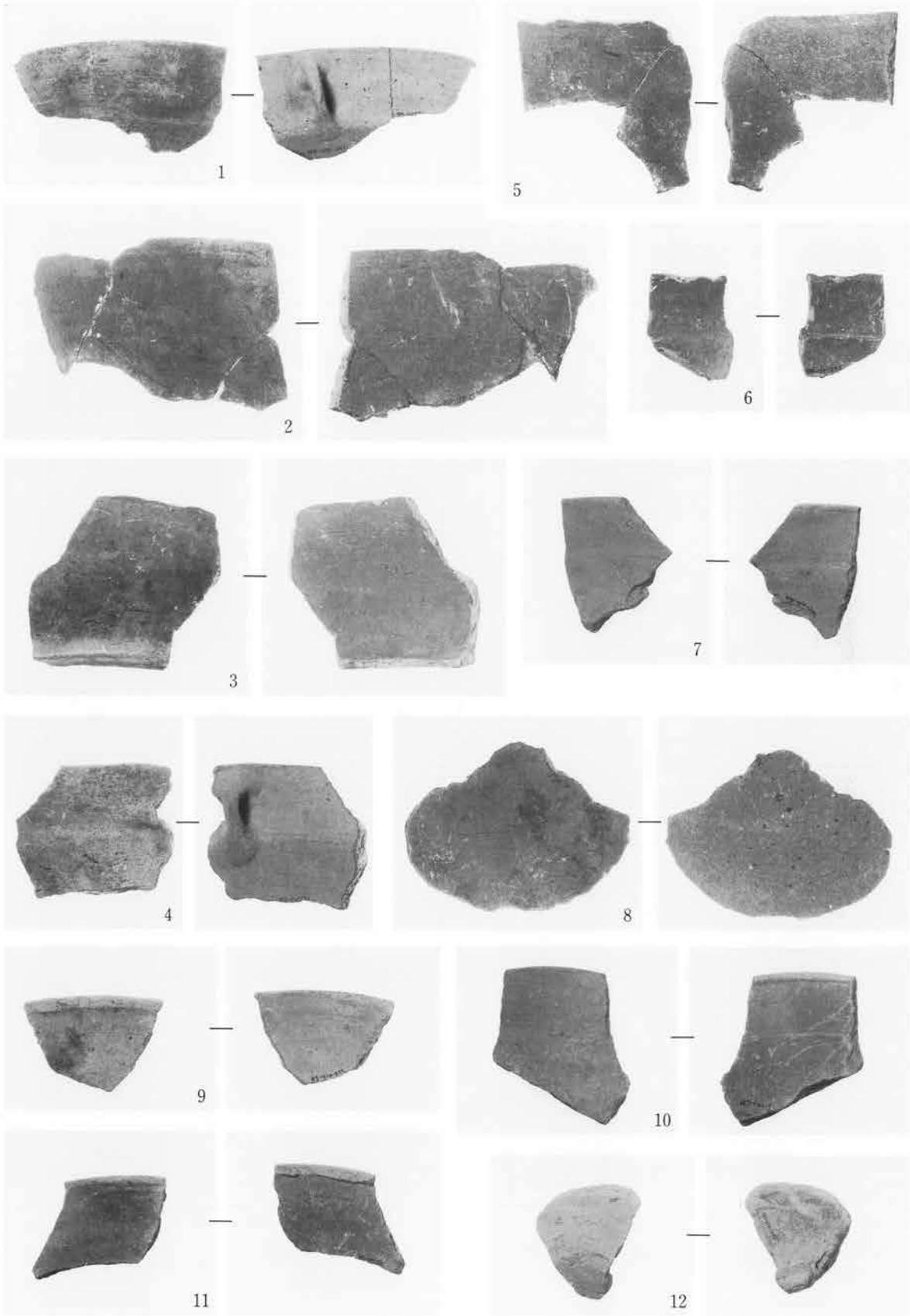
68区古墳時代前期水田



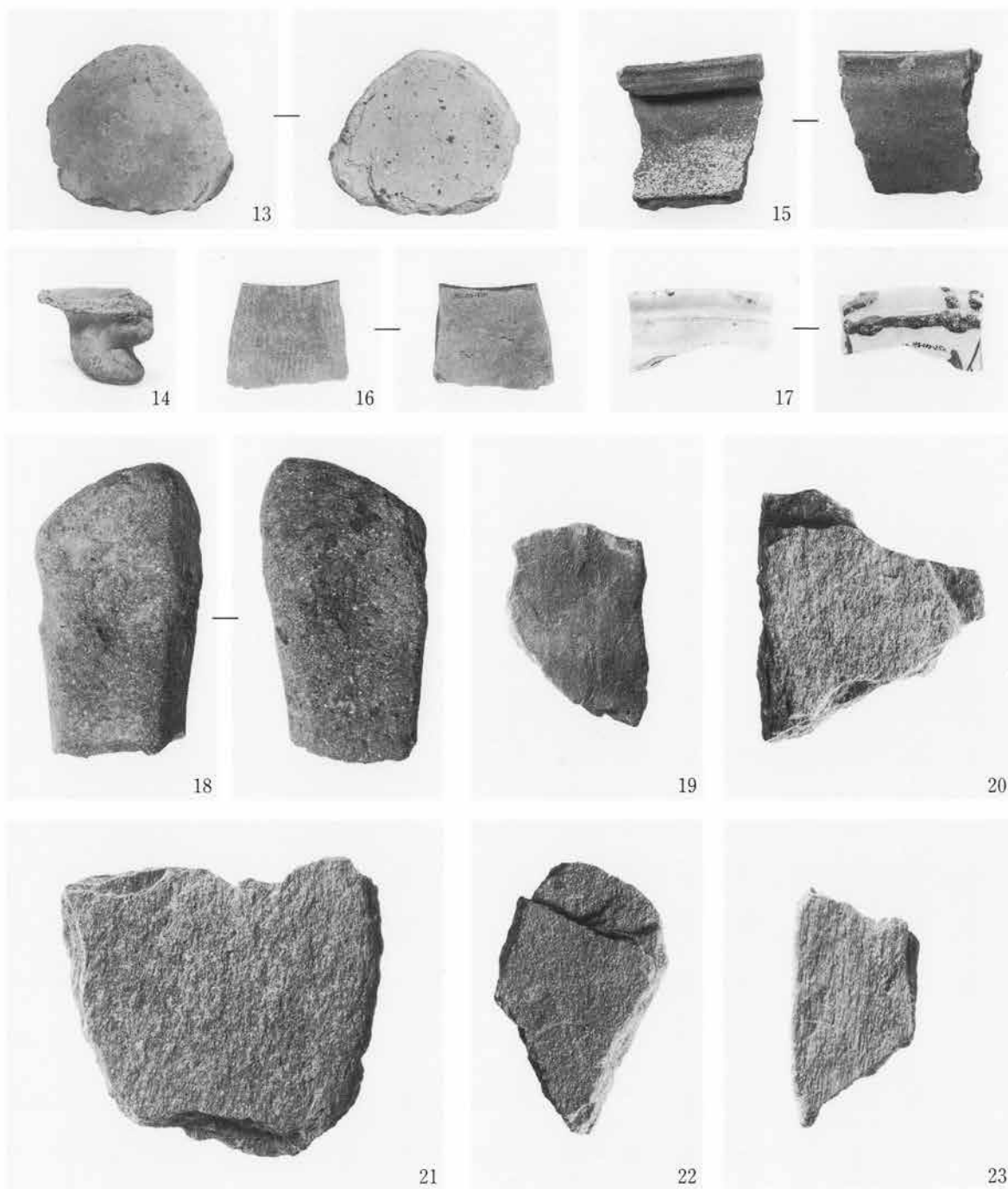
68区古墳時代前期水田



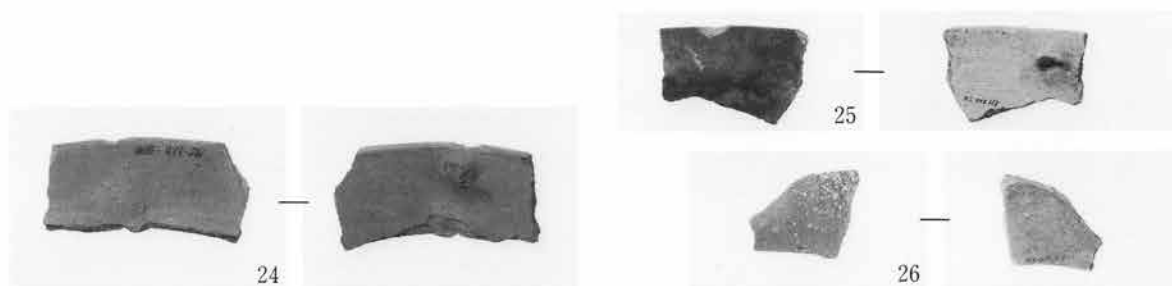
68区古墳時代後期・前期水田土層断面



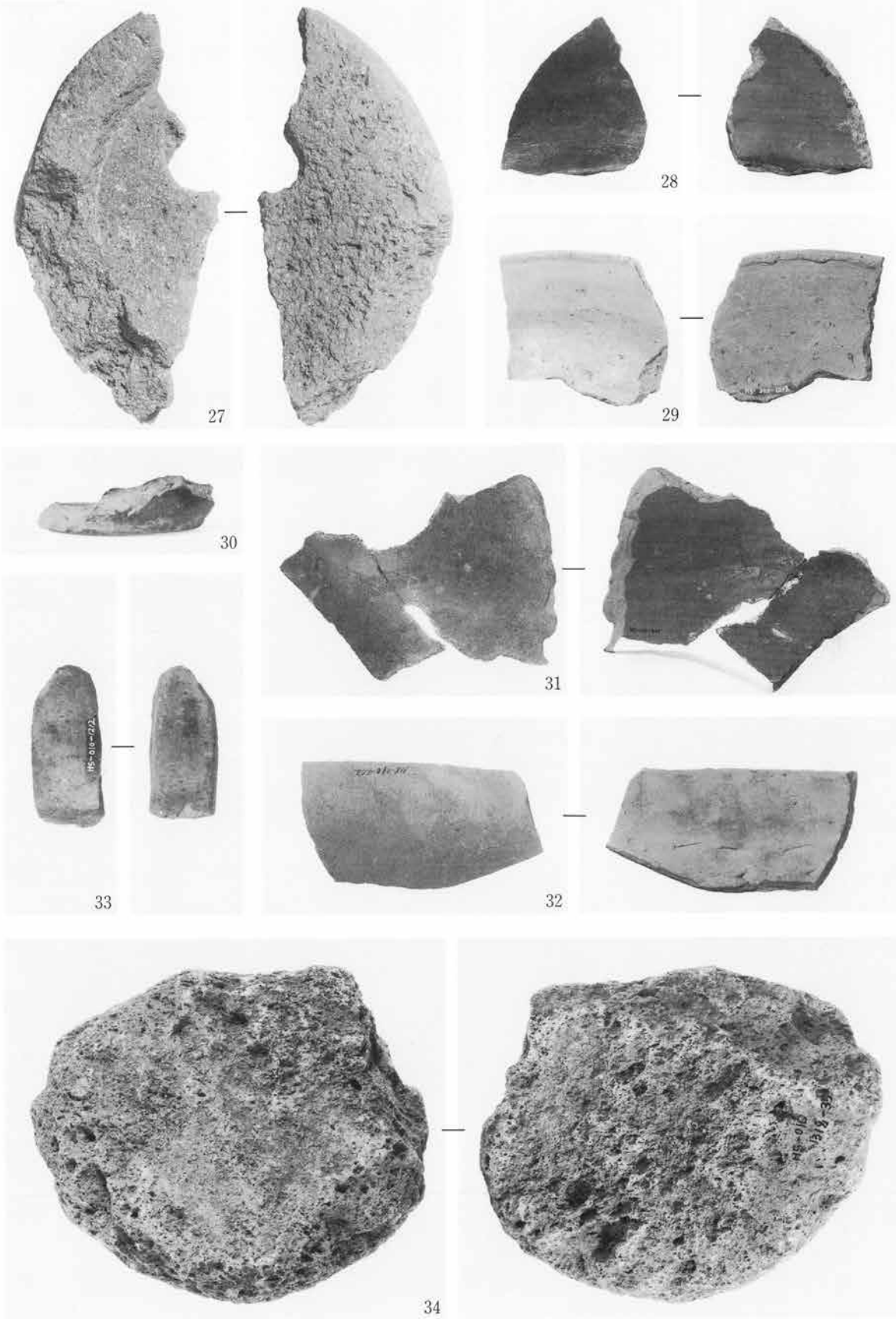
1号溝出土遺物



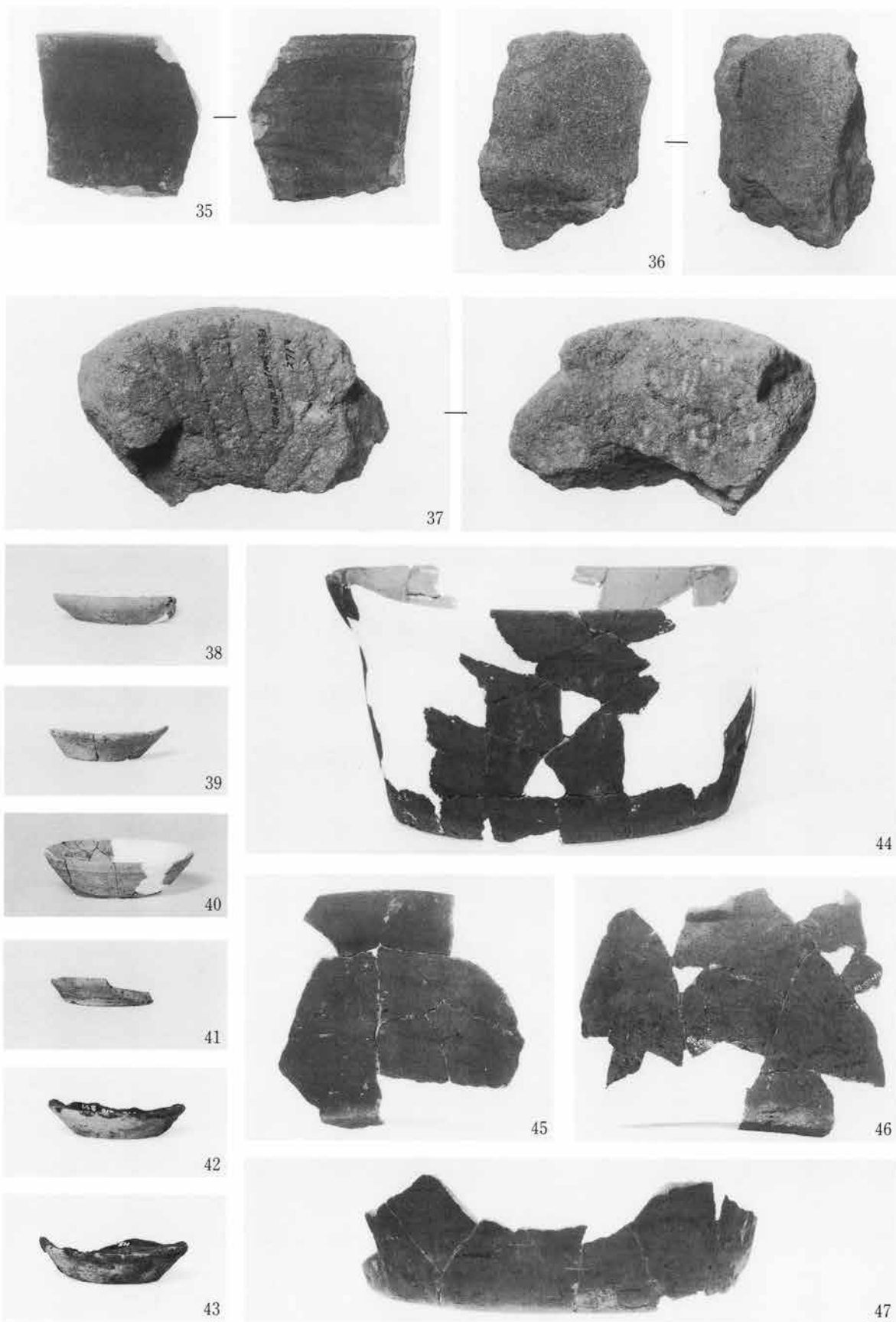
1号溝出土遺物



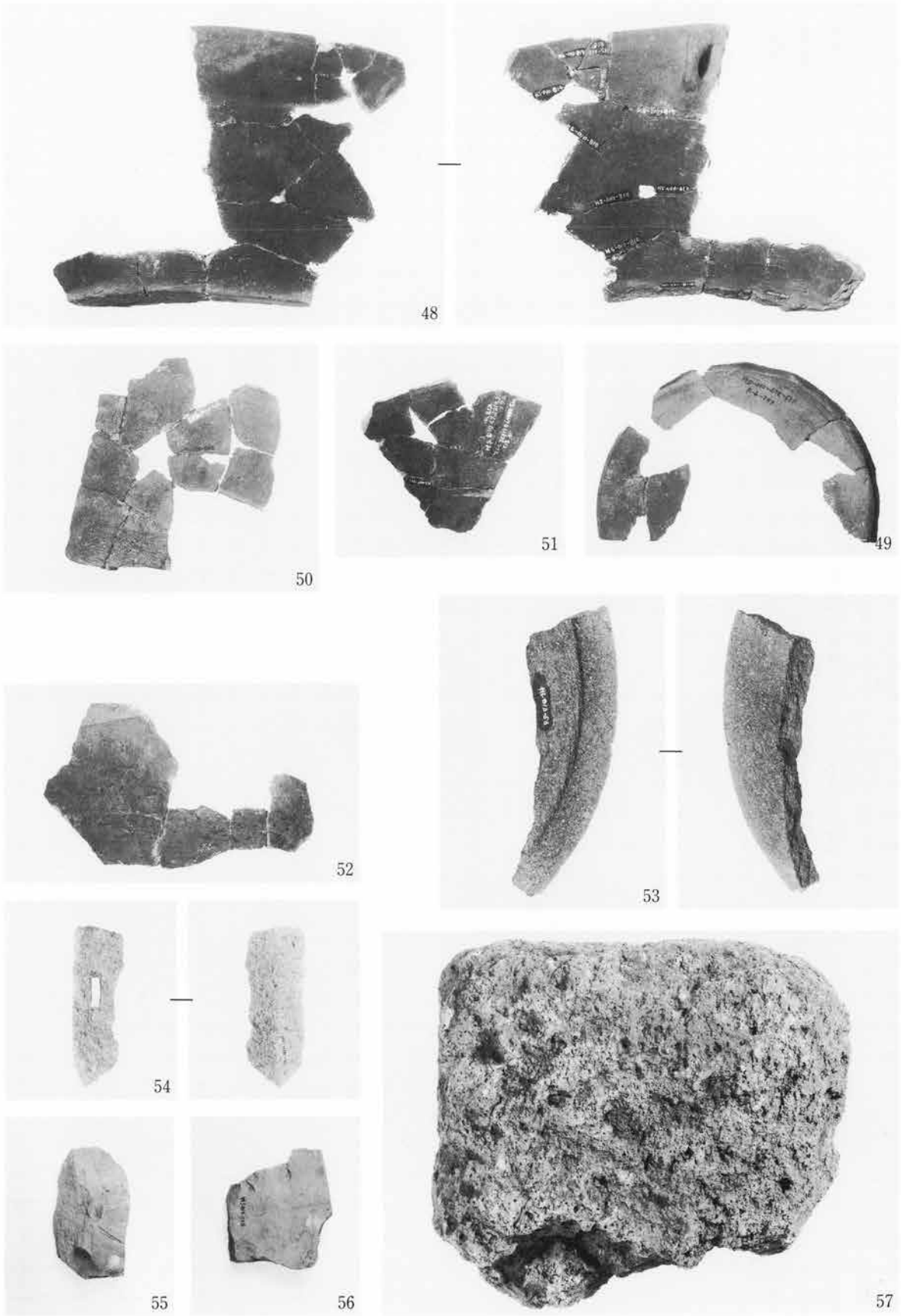
2号溝出土遺物



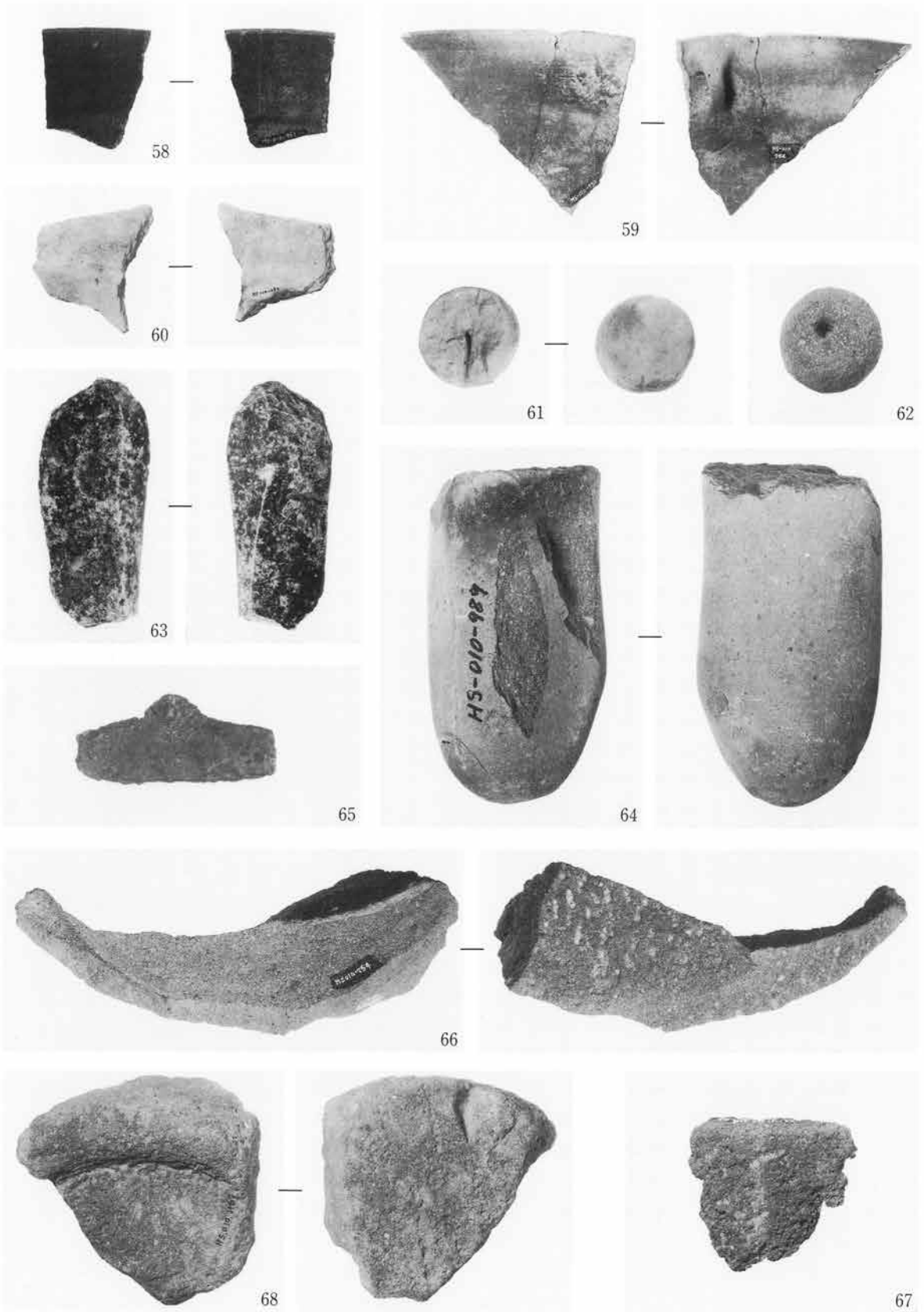
2号溝(27)・6号溝(28~34)出土遺物



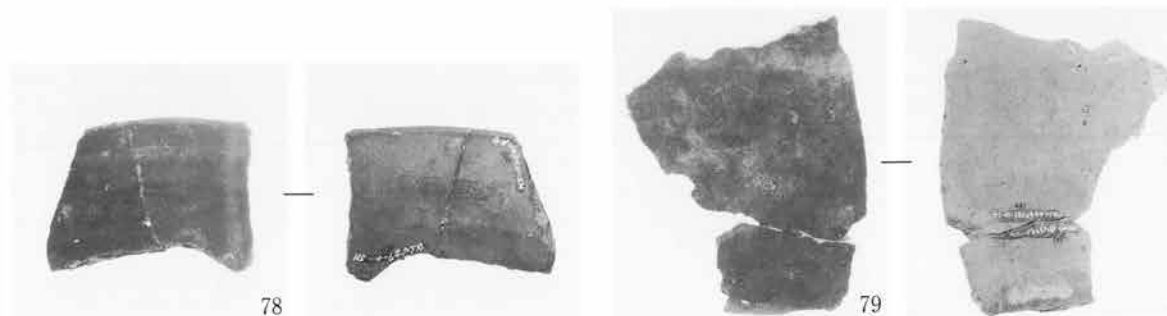
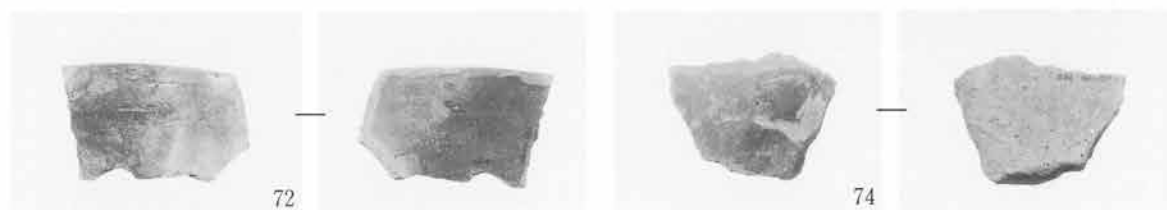
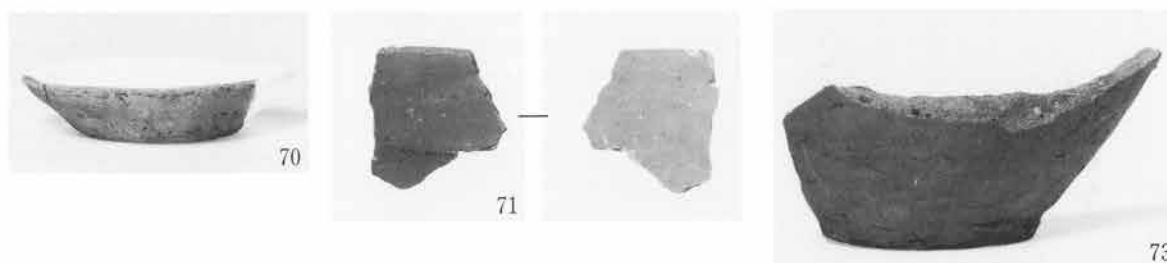
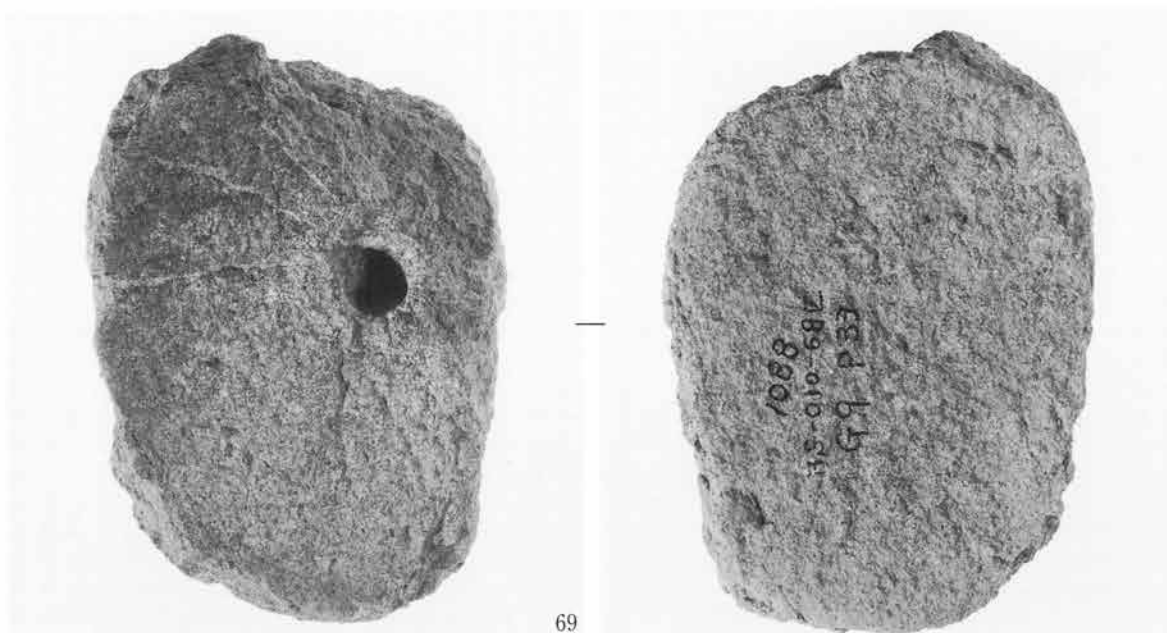
7号溝(35)・8号溝(36・37)・53号溝(38~47)出土遺物



53号溝(48~52)・1号竪穴状遺構(53~57)出土遺物



小穴出土遺物



小穴(69)・1号井戸(70・71)・2号井戸(72~76)・4号井戸(77)・6号井戸(78・79)出土遺物



80



81



82



83



85



84



87



88

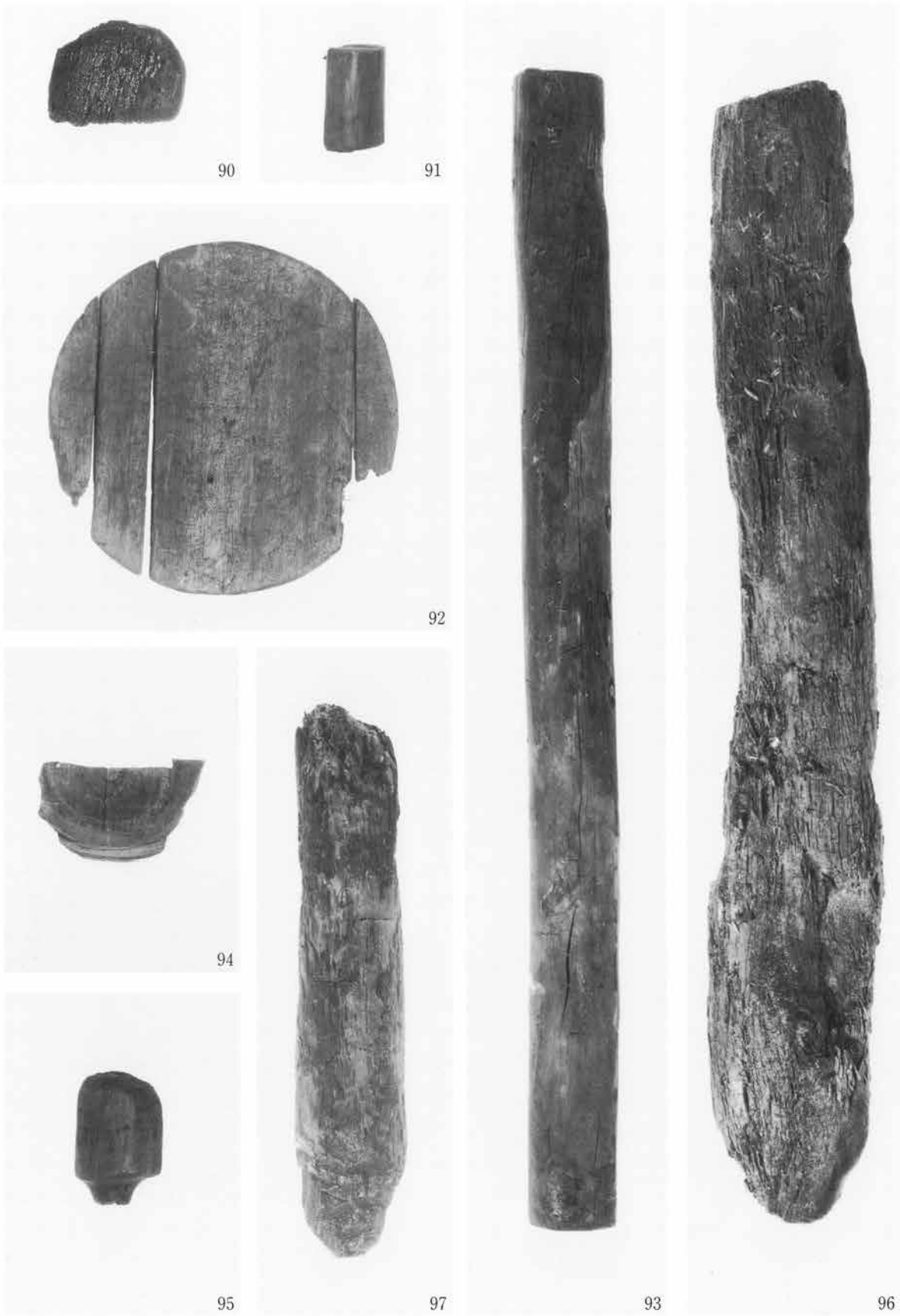


86

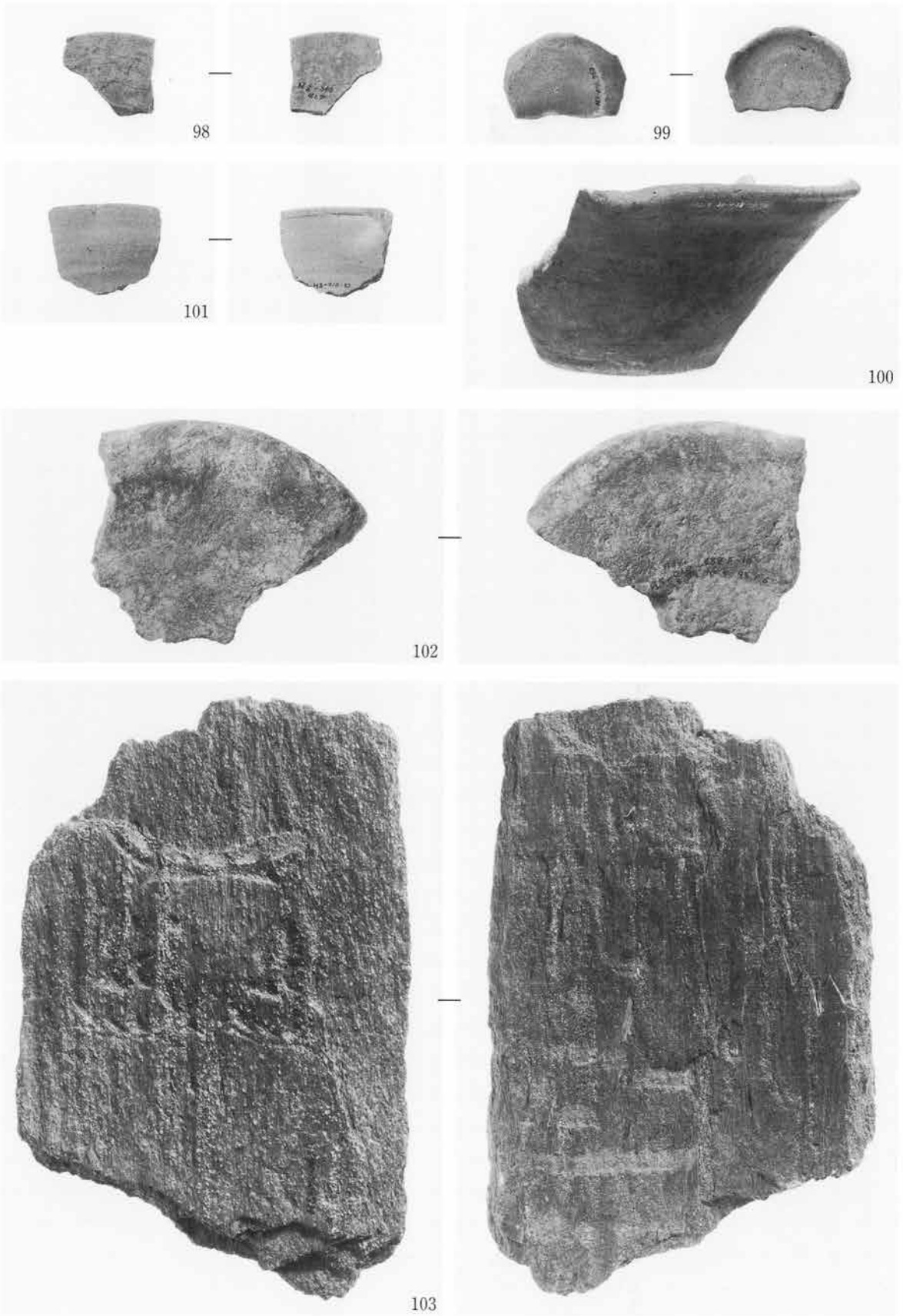


89

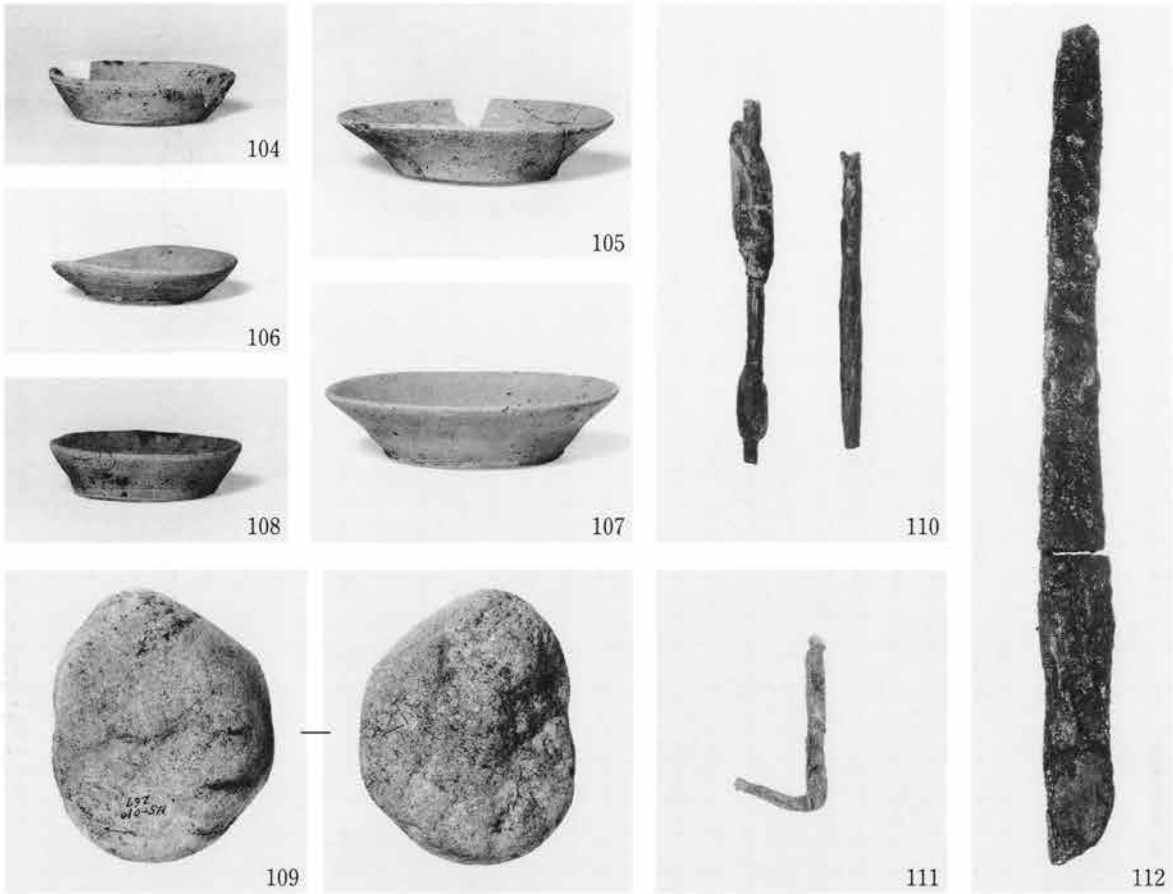
6号井戸(80~88)・7号井戸(89)出土遺物



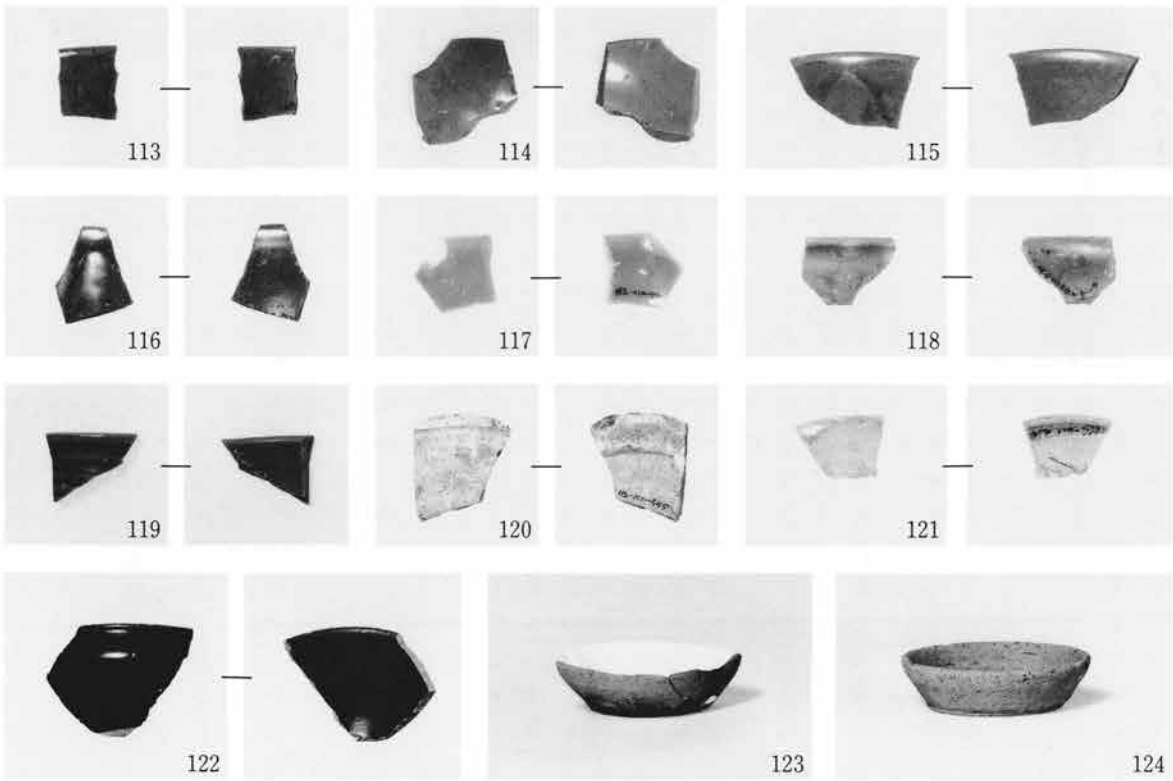
2号井戸(90・91)・6号井戸(92・93)・7号井戸(94~97)出土遺物



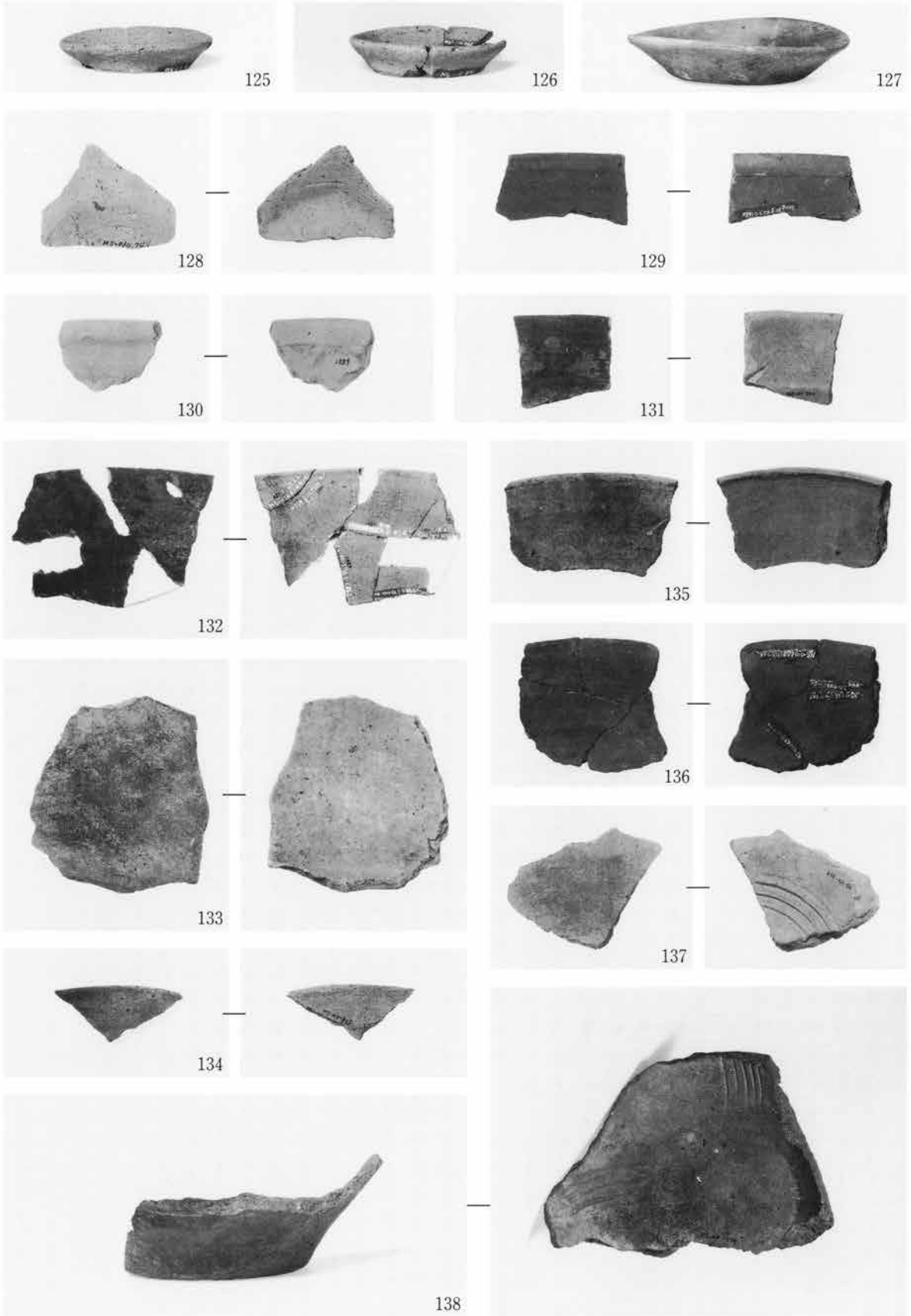
6号土坑(103)·28号土坑(102)·29号土坑(98)·30号土坑(100·101)·56号土坑(99)出土遗物



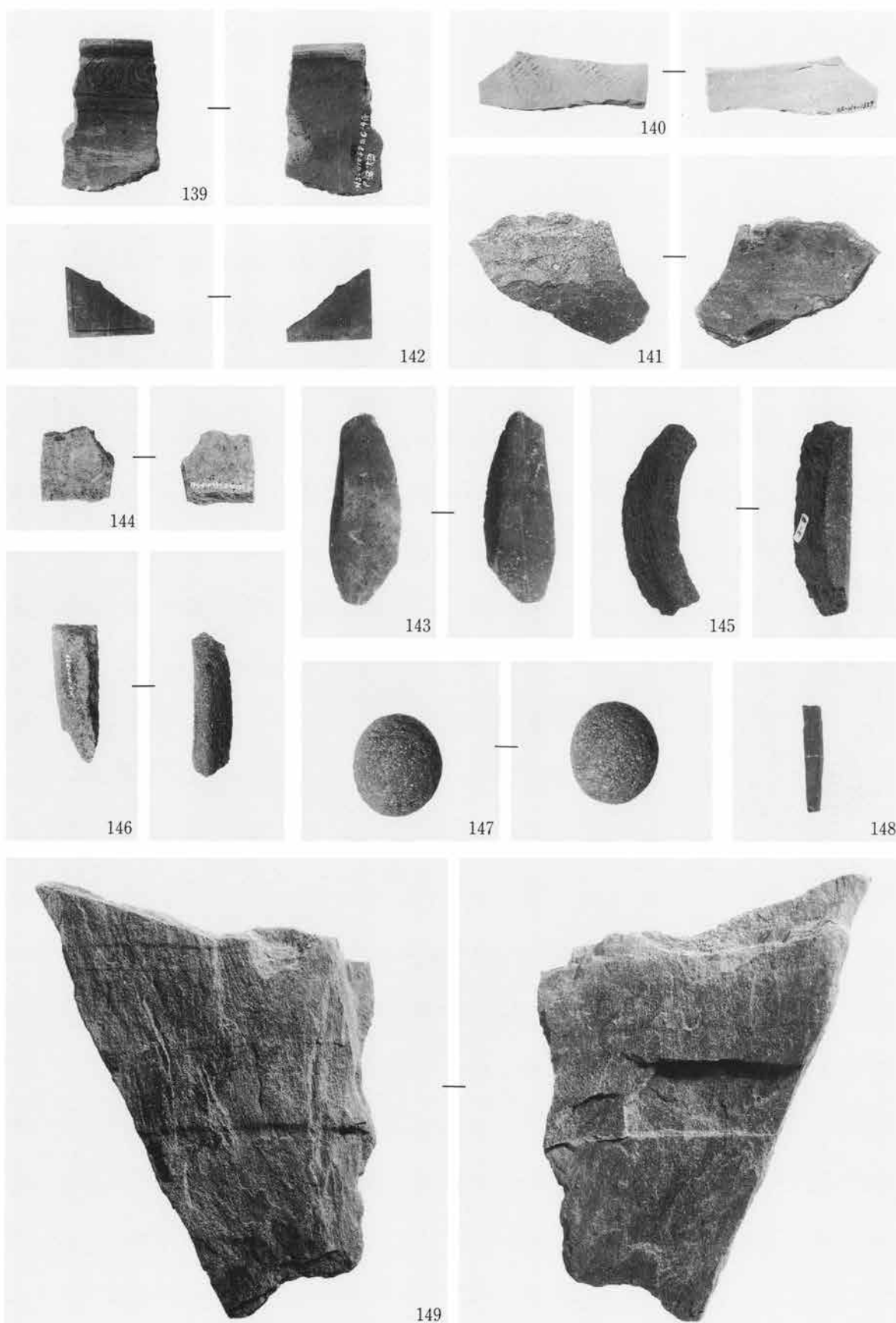
6号(109)・9号(110)・10号(104・105)・11号(106・107)・14号(108・111・112)土墳墓出土遺物



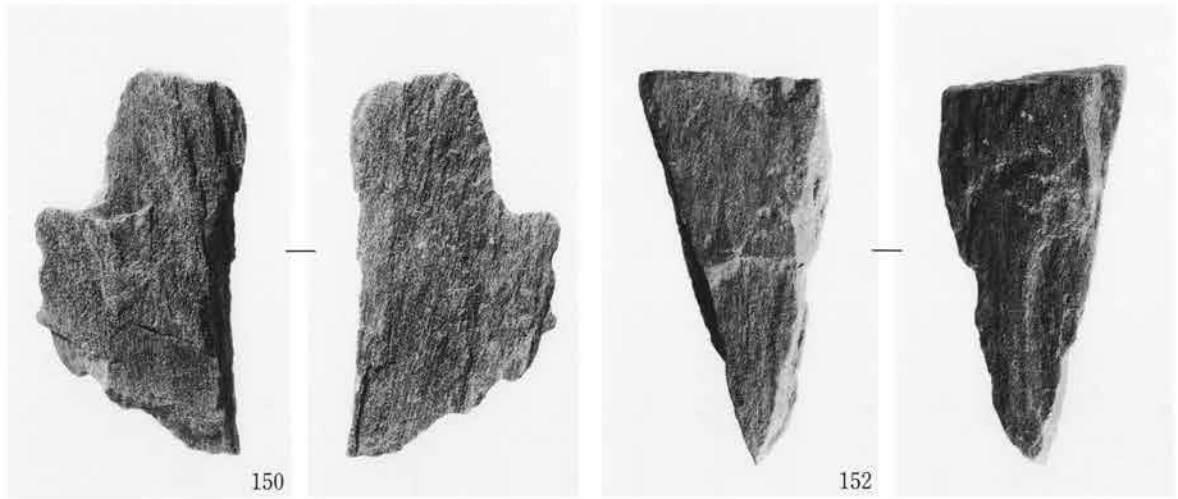
小区出土及び表採遺物(113~124)



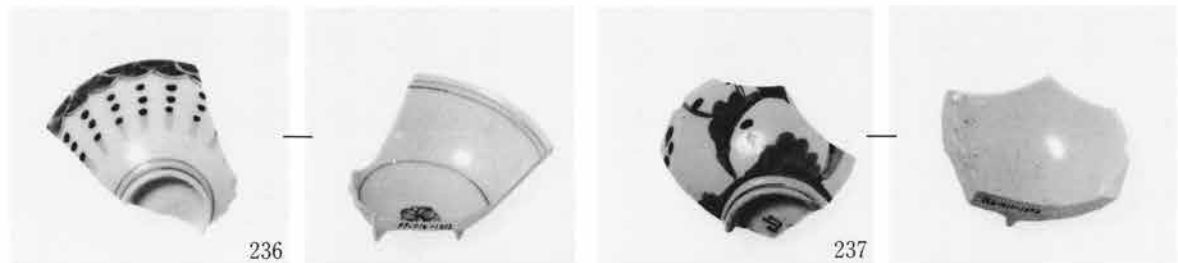
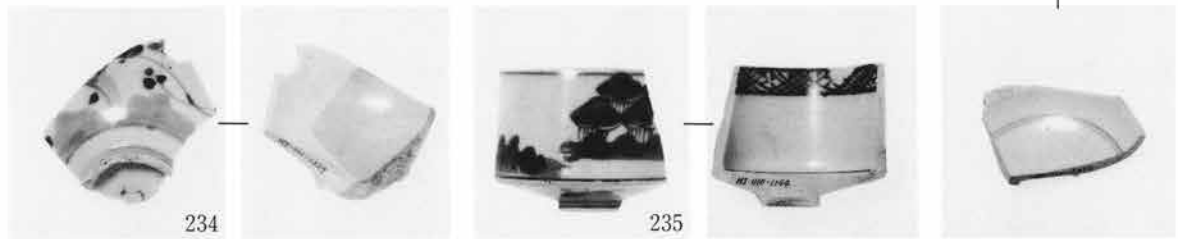
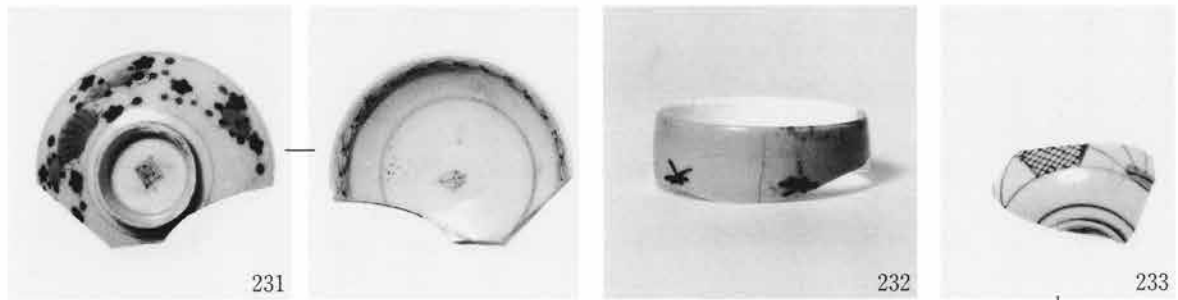
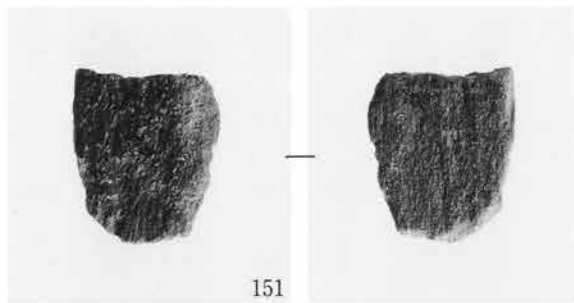
小区出土及び表採遺物(125~138)



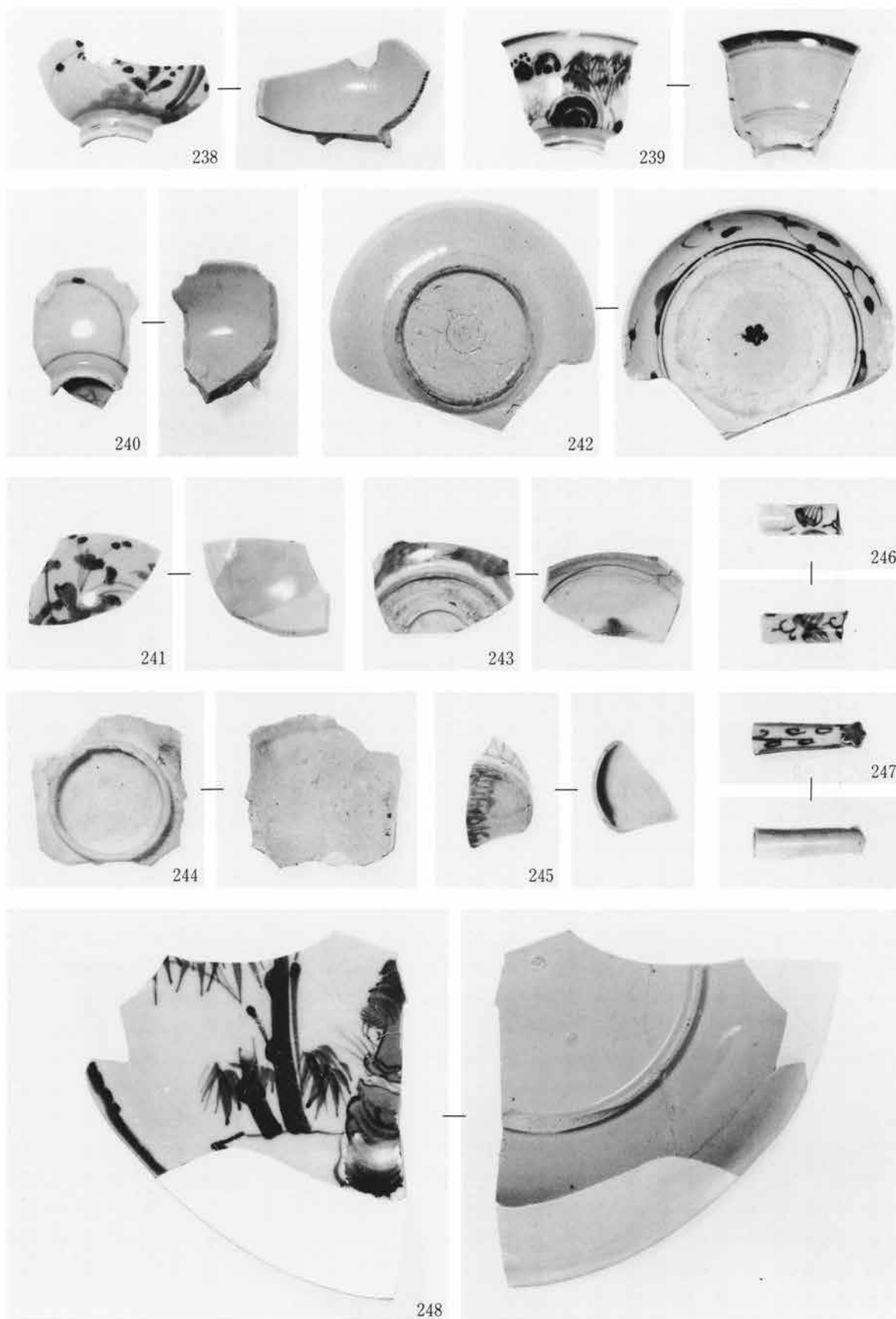
小区出土及び表採遺物(139~149)



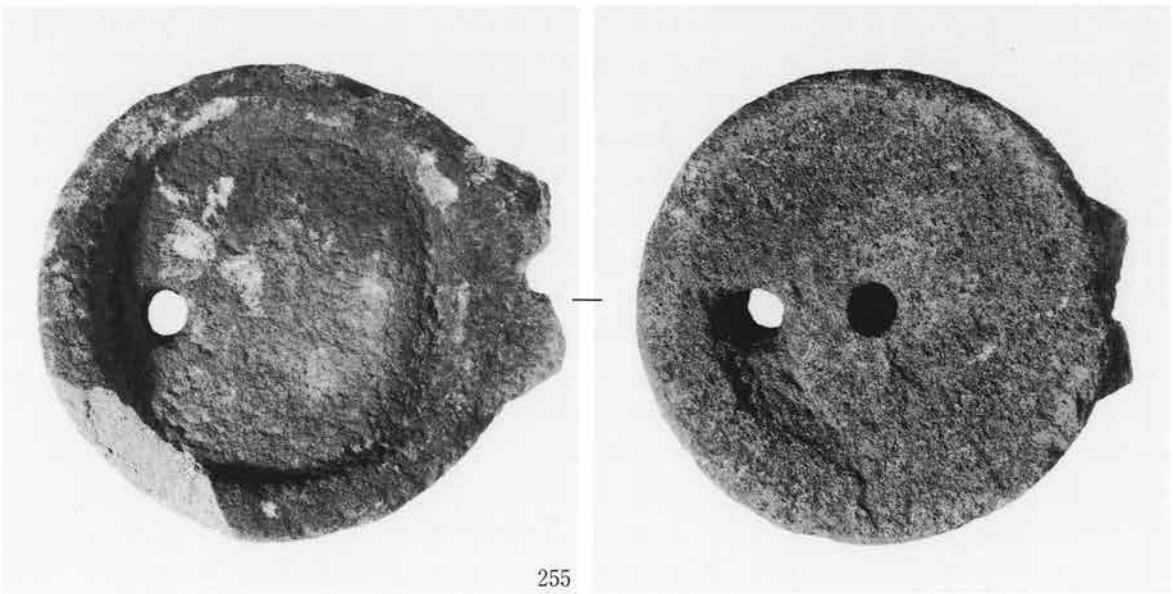
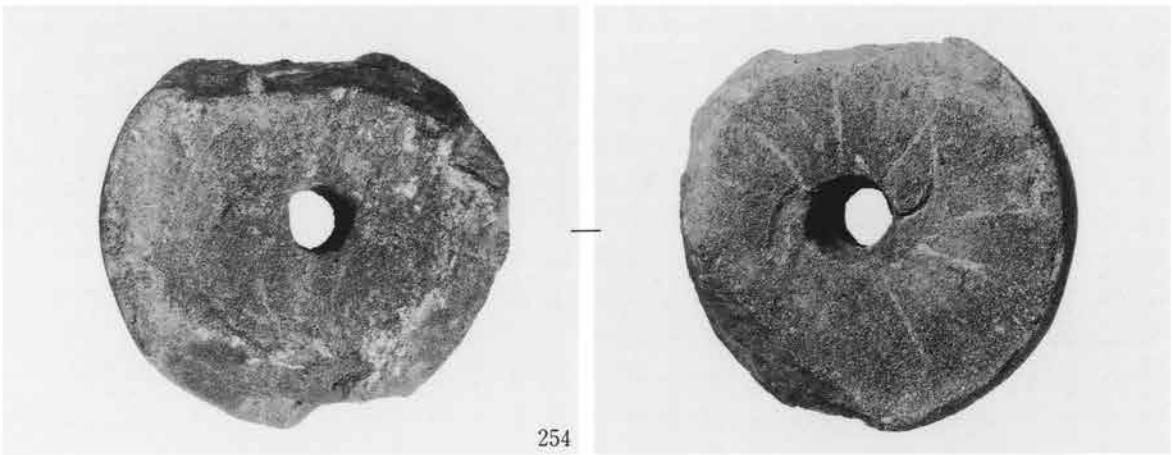
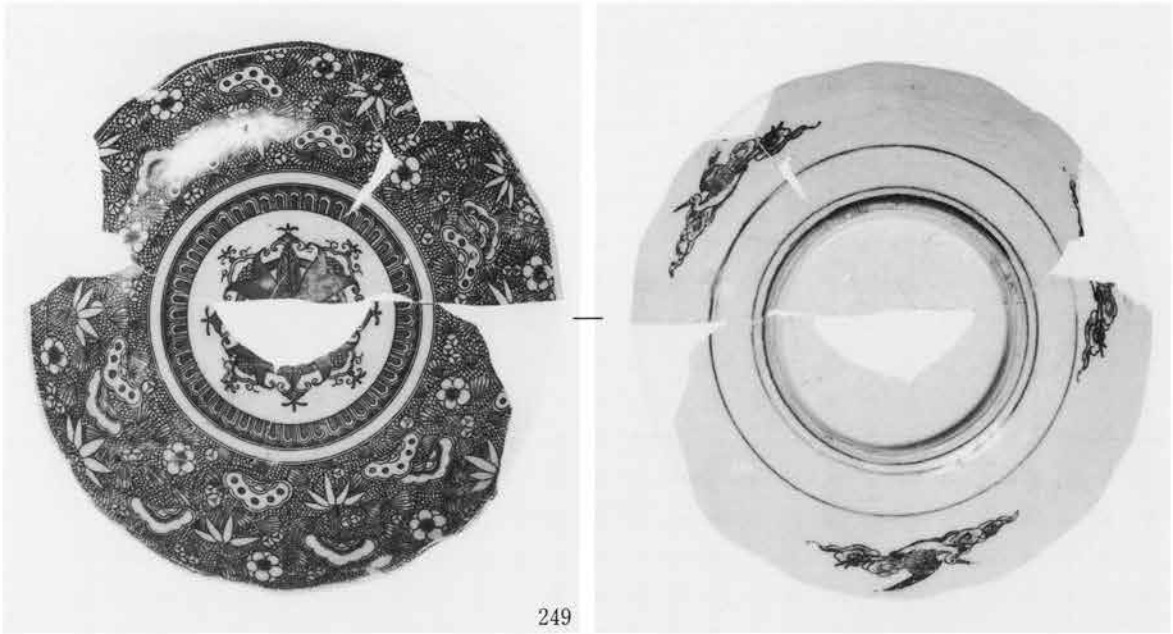
小区出土及び表採(150~152)遺物



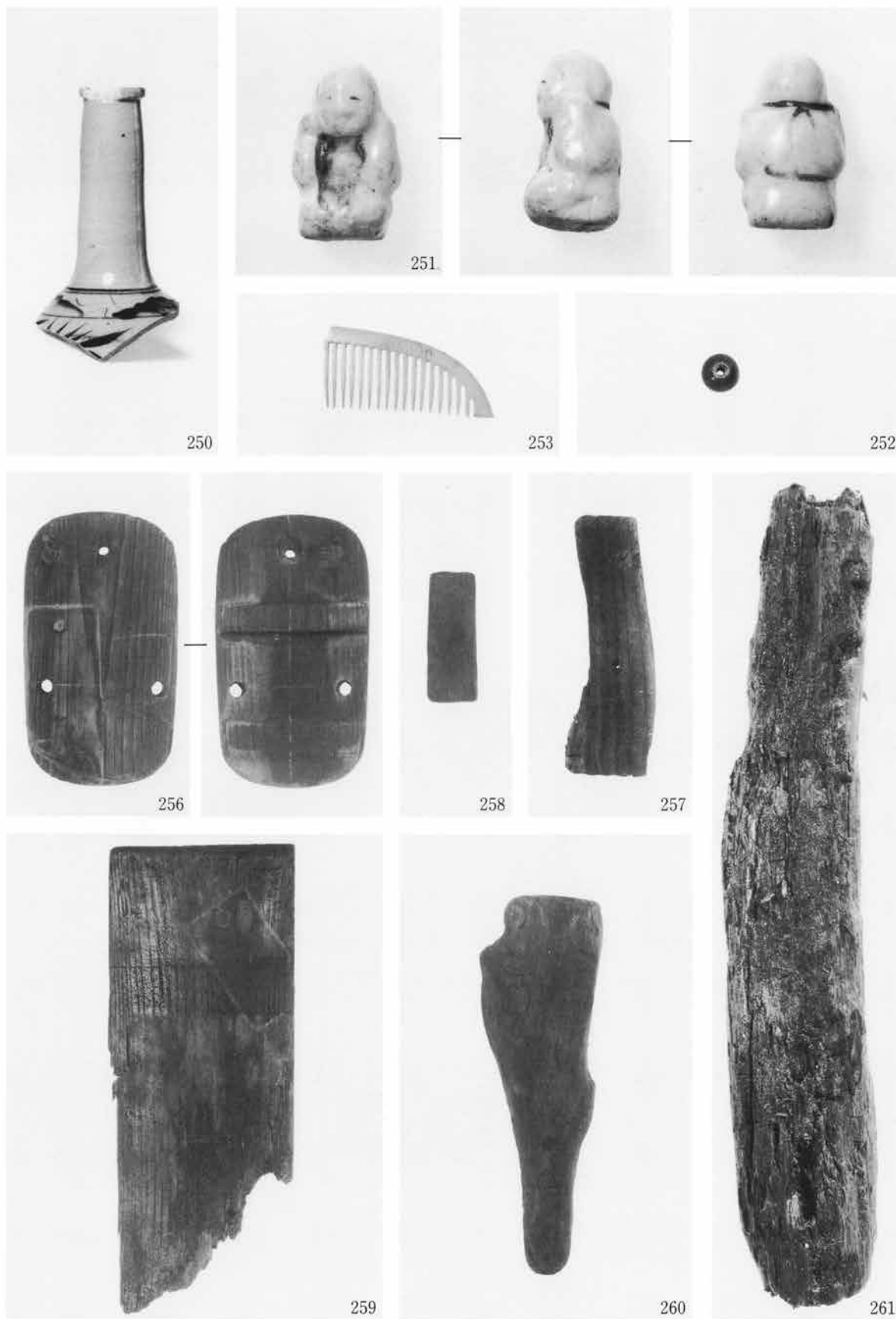
小区出土及び表採(150~152)・移転宅地内出土遺物(231~237)



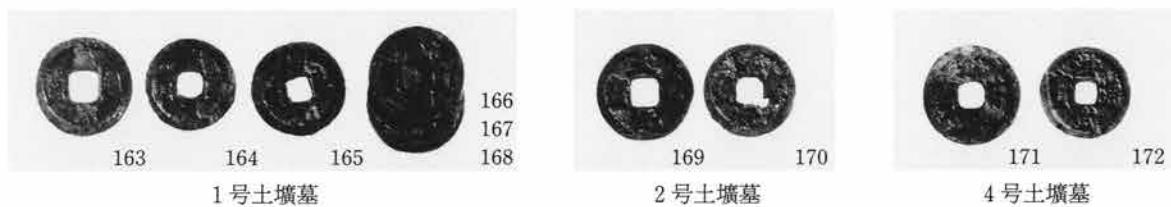
移転宅地内出土遺物(238~248)



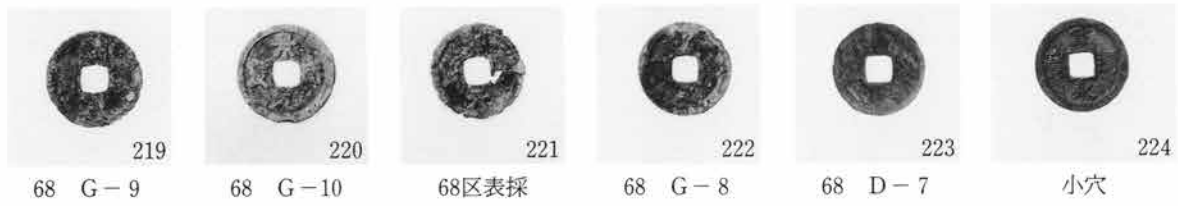
移転宅地内出土遺物(249・254・255)



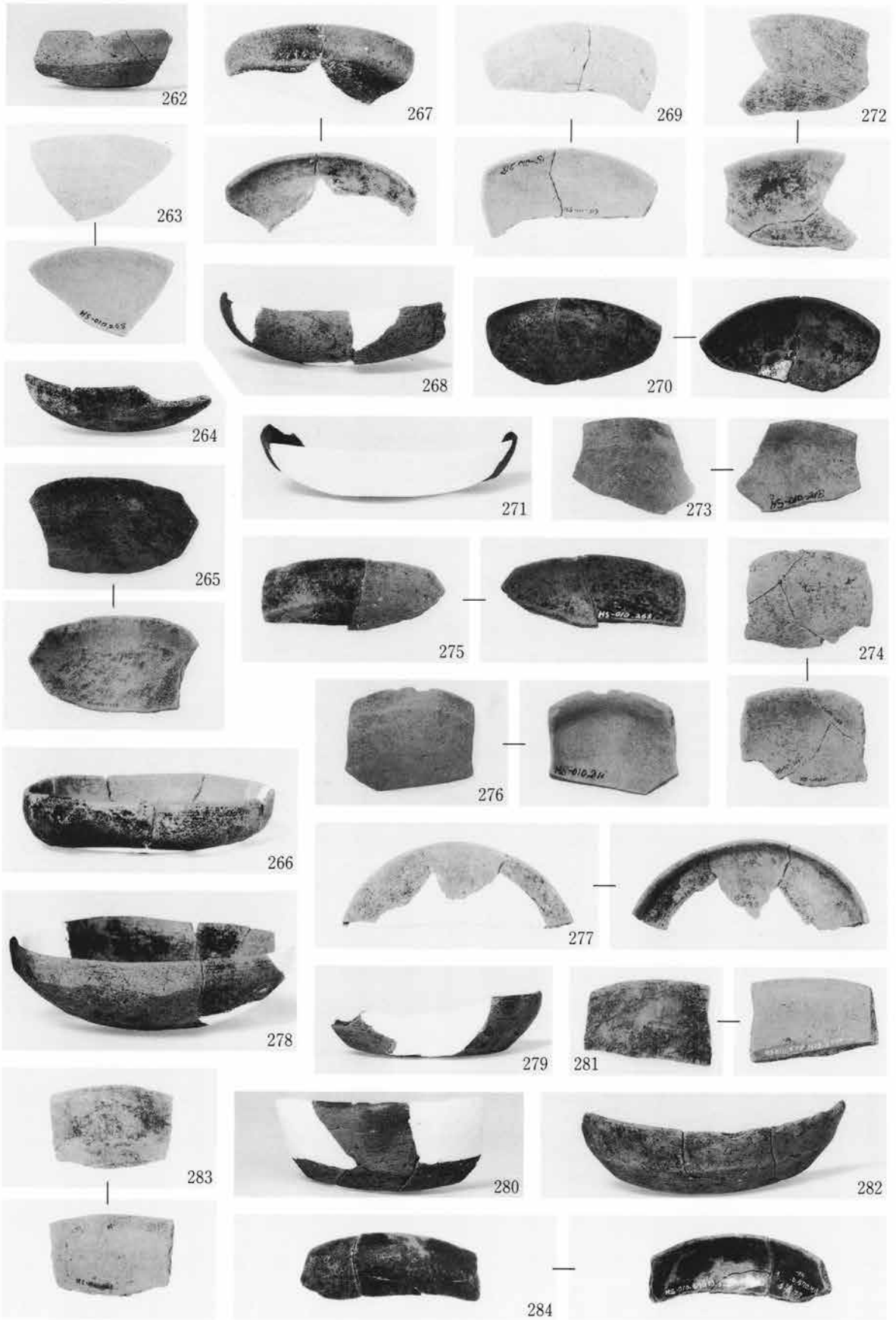
移転宅地内出土遺物(250~253・256~261)



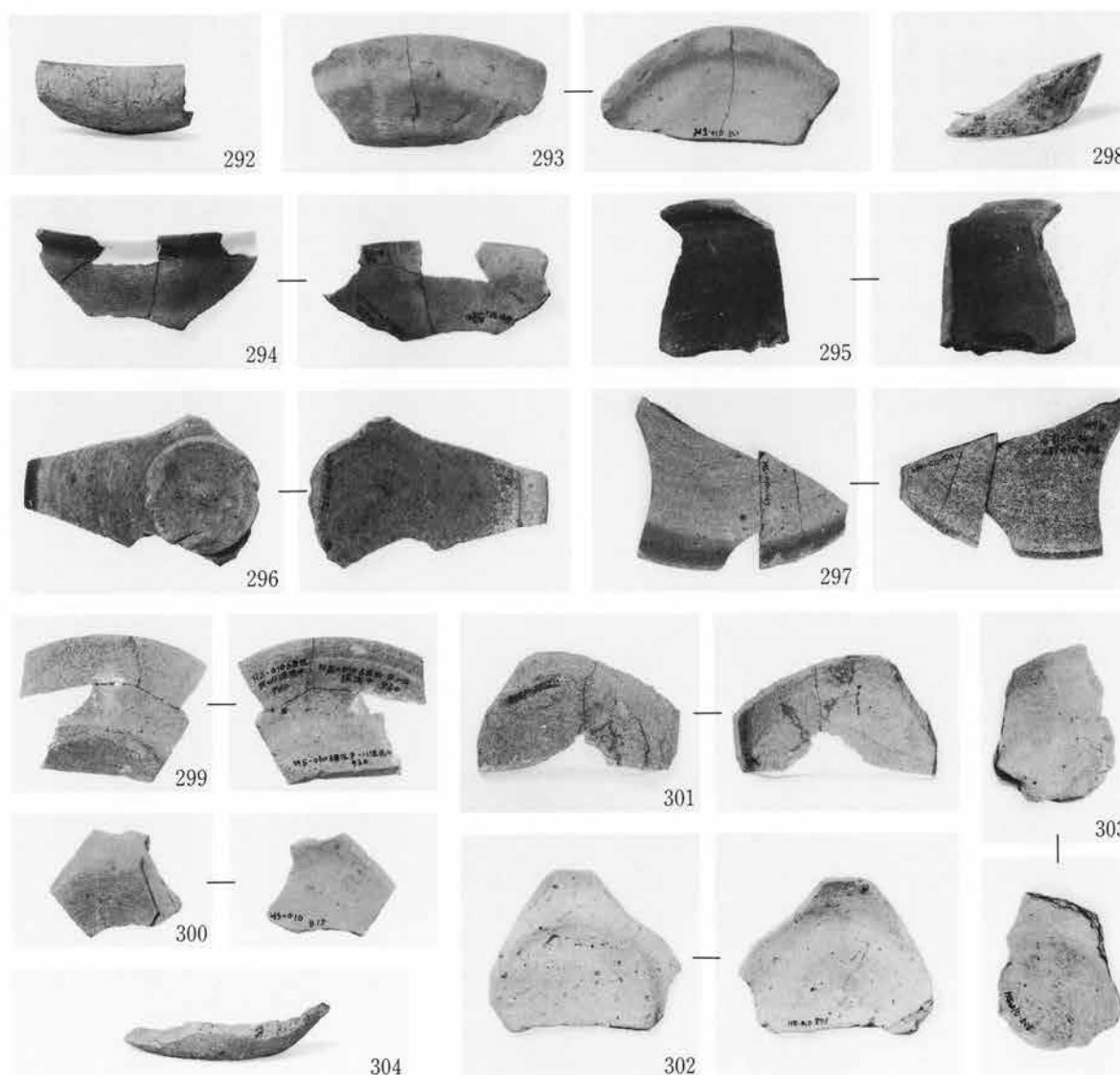
出土古钱



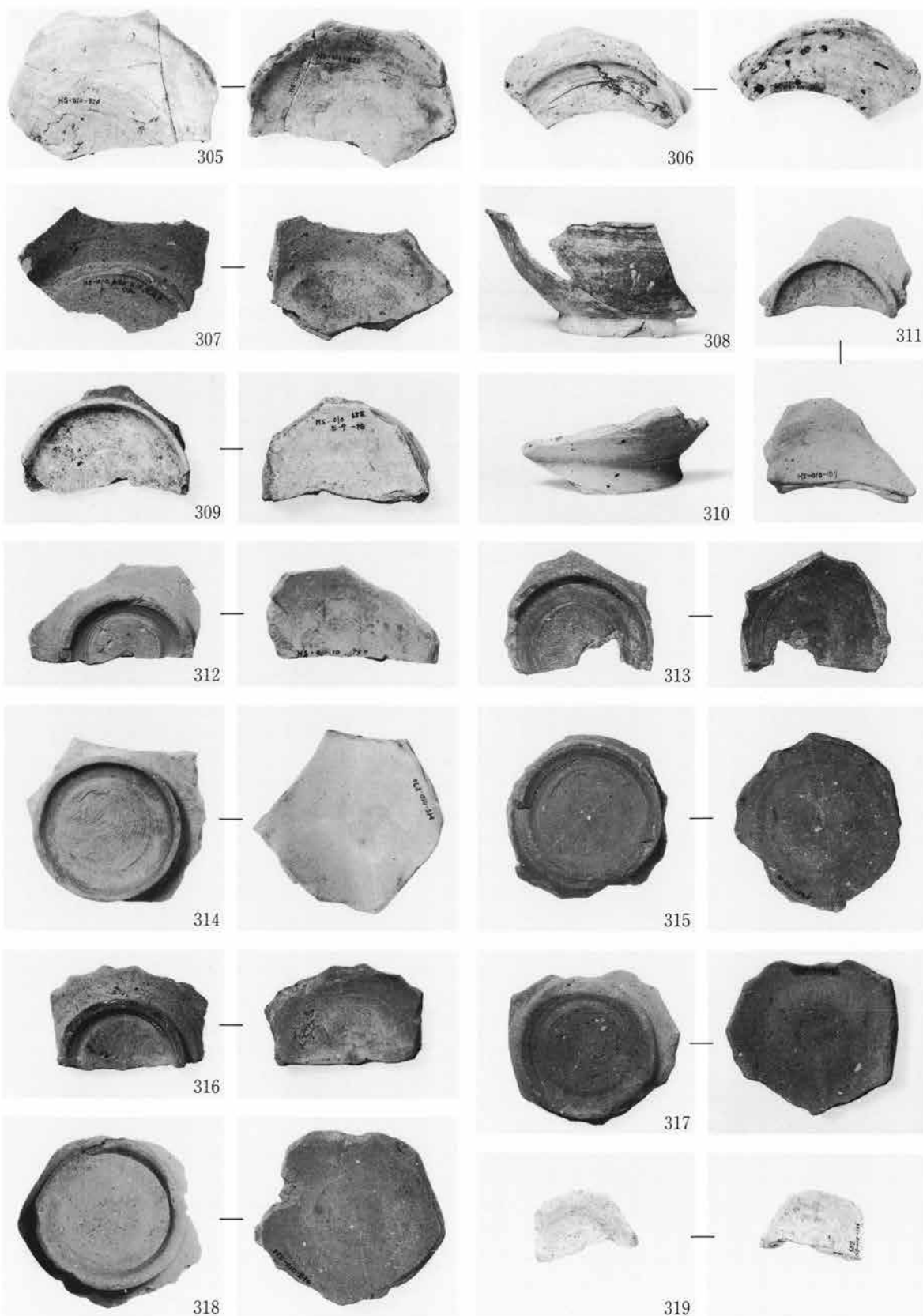
出土古 錢



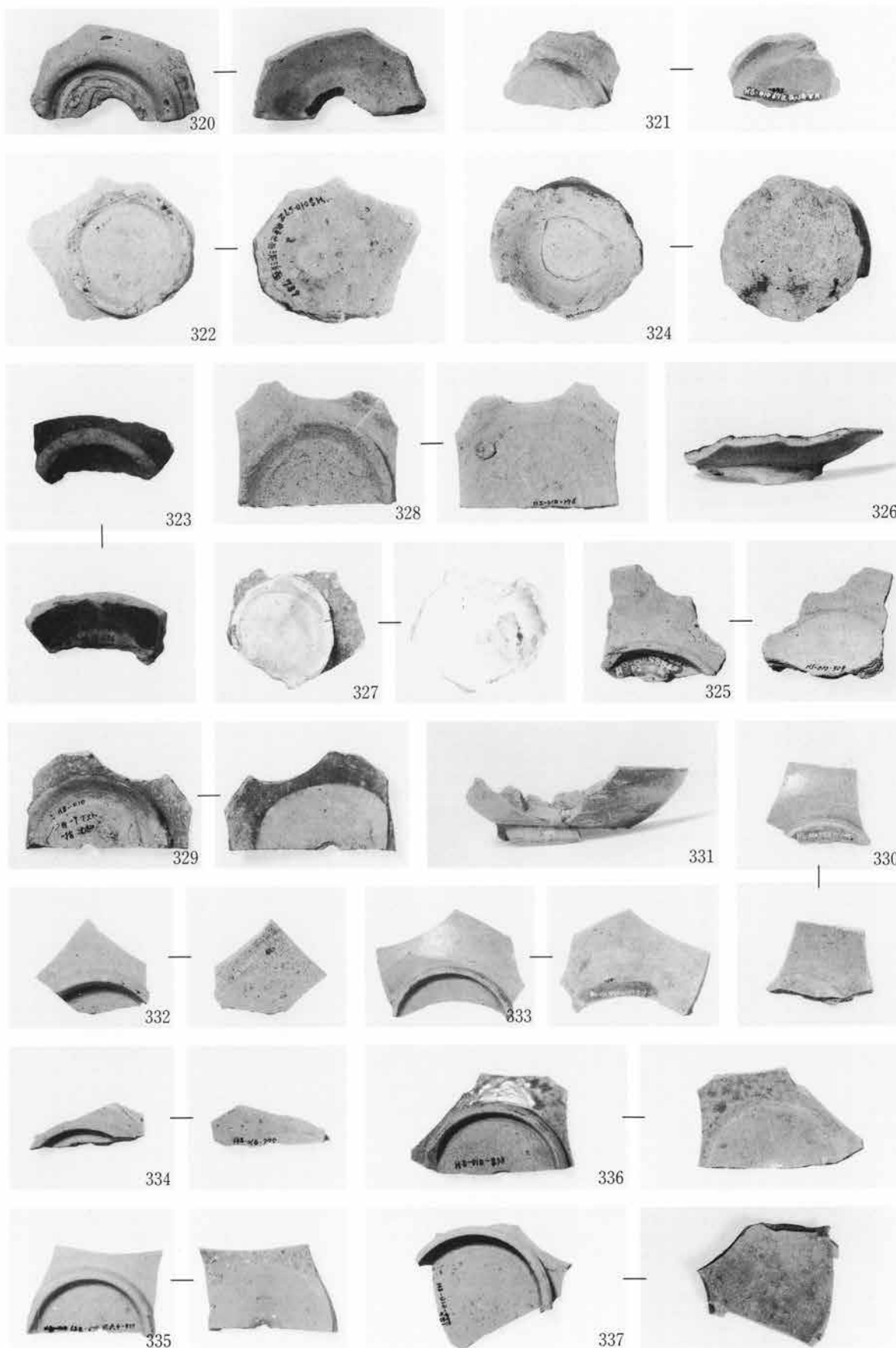
3号溝出土遺物



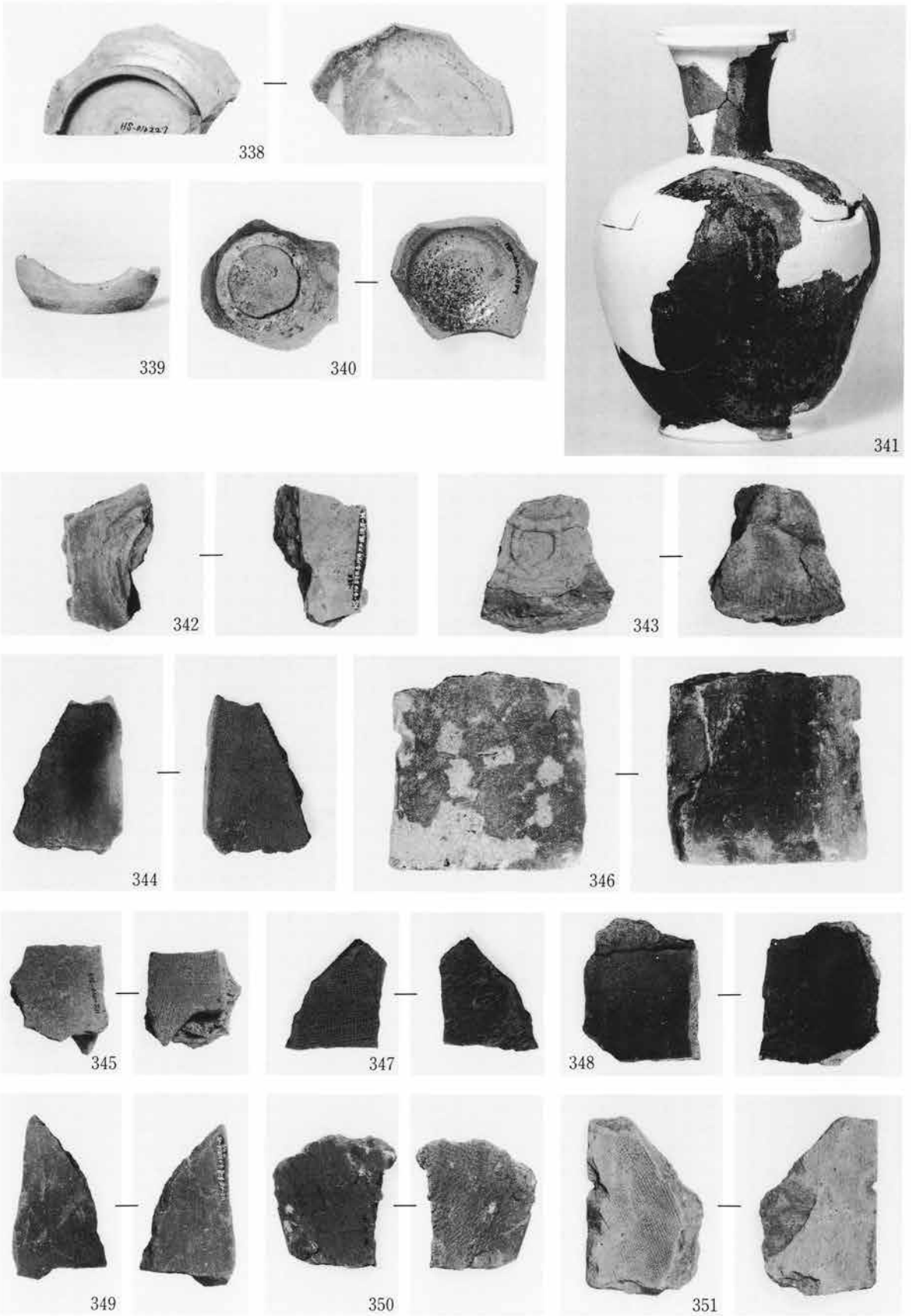
3号溝(285~291)・包含層出土及び表採(292~304)遺物



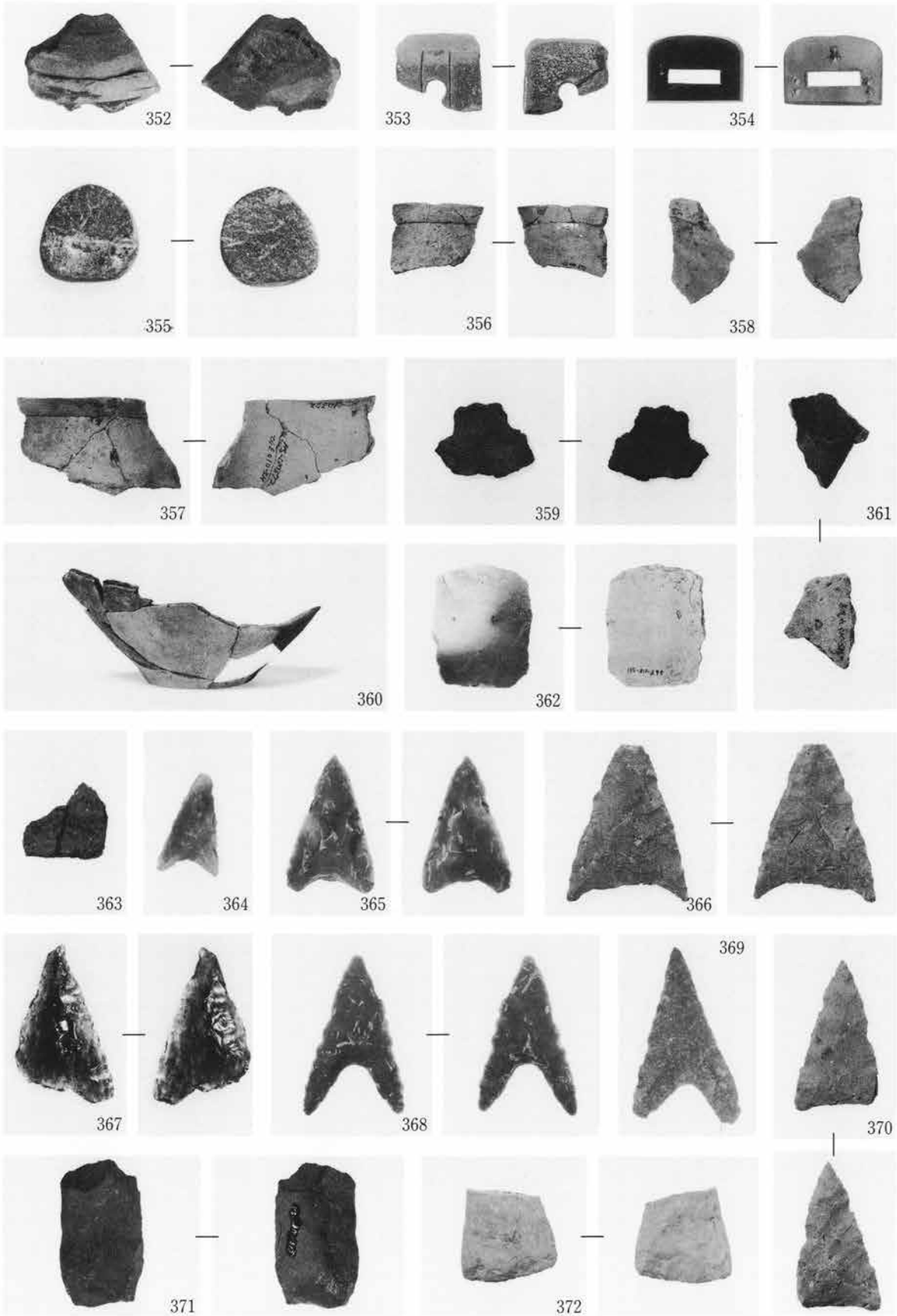
包含層出土及び表採遺物



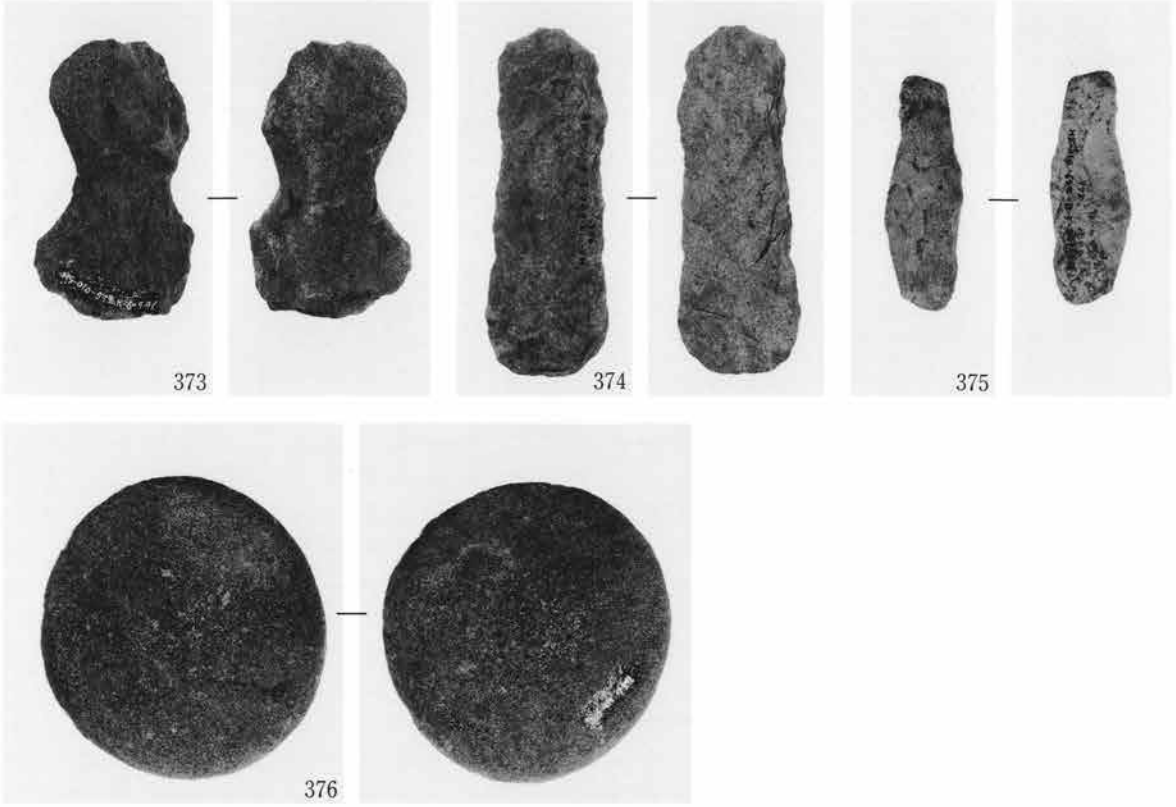
包含層出土及び表採遺物



包含層出土及び表採遺物



包含層出土及び表採遺物(352~354)・古墳(355)・弥生(356~362)・縄文時代(363~372) 遺物



縄文時代遺物

群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第229集

下小鳥神戸遺跡 北陸新幹線地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

平成9年9月17日 印刷

平成9年9月25日 発行

編集・発行／群馬県考古資料普及会

〒377-8555 勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社
